# IS～ほんとはただ寝たいだけ～

真暇　日間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～ほんとはただ寝たいだけ～

【Ｎコード】
Ｎ２８０８Ｕ

【作者名】
真暇　日間

【あらすじ】
眠たがりな割に有能だった主人公が神のミスで死亡。
そのお詫びにチート付きで転生を果たすが、なぜか望んだもの以上が来た。けれどこの状況は全然望んでないんだけどな。
……まあいい、寝るか。お休みなさい。

# プロローグ、あるいは希望

俺は死んだ。いきなりなんだと言われるかもしれないが一応聞いておいてほしい。話半分でも全く構わないしな。

名前は桜道和哉（さくらみちかずや）。高校を卒業したばかりの新大学生だった。ついでに浅く広いオタク知識を持ってはいるが、浅いために回りのオタクたちの話にはついていける気がしない。その程度だ。

で、簡単に死因を言うと、なぜか上空から豆腐が落ちてきて頭に直撃。高所から海に叩き付けられると人の体など簡単に粉々になってしまうことはよく知っていると思う。

つまり、本当に豆腐の角に頭をぶつけて死んだわけだな。

そして死んでいるのに何故こうして考え事ができているのかと言うと、目の前にいる爺さんが原因らしい。まあ、よくあるミスで殺してしまいました、ってやつかね？

「その通りじゃ。本来ならあれで死ぬものなどおらんはずじゃった……と言うか、あれ事態が起きなかったはずのことなんじゃ」

へー。

……で、おわびに転生させてくれるとか？

「うむ、その通りじゃ。チート能力も……まあ、儂程度ではたいした能力は与えられんが、一応用意しよう」

……へー。

たいした能力じゃないチート、ねぇ……結構ムズくね？　別に

いいけど。
幾つまでとか制限はある？

「……最大で五つまで。それいかならばいくつでも構わん」

へー。大抵三つなんだけど、太っ腹。

……じゃあ、ネギま！に出てた、俺の思う千の顔を持つ英雄と、千の顔を持つ英雄を自由自在に操ることができる身体能力。後は……そうだな。リリカルなのはに出てきた戦闘機人の五番目、チンクのＩＳのランブルデトネイターでも貰おうか。後は……幸運Ｂくらいと健康で。

「……欲の無い奴じゃのぉ……普通は無限の剣製とか王の財宝、最近じゃと大嘘憑きなんかを頼む者が多いんじゃが……」

へー。それってチートすぎだろどう考えても。できれば逃げ切る程度の能力とかもあればいいけど、それも使い方ではかなりチートだしなぁ……。

で、これはできるのか？

「楽にの。……困ったのう。用意しておいたスロットの半分も使われてないわい」

へー。なんかそれ困るのか？

「儂はの。……なら、後は儂が適当に関連するものを詰め合わせておくわい。副作用のありそうなものは入れないでおくからの」

へー。そいつはありがたい。

「……最後に、これからお主が転生する世界を選ぼうかの。ほれ、籤を引くがよい」

へー、籤式なんだな。何でもいいけど。

……ああそうだ。悪いんだけど、俺の性別男でお願い。転生で転性なんて洒落にもならん。

「構わんよ。どうせがらがらのスロットの空きがほんの少し埋まるだけじゃしの」

へー。そんだけなんだ。ありがとさん。

……どこに行くのかね？

引いた籤を開いて、そこにかいてある文字を読む。

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉

へー、ＩＳか。……よし、原作に関わらない場所で静かに生きていこう。趣味の昼寝ってか睡眠できるだろうし、俺はＩＳの才能は望んでないから動かせるなんてこともないだろう。ガンダールヴとか選んでたら動かせて大変なことになんだろうけど、俺には関係ないね。

一日十五時間睡眠を目指すぜ！

「……ふむ。成程。……それでは、達者での」

爺さんがそう言うと、急に眠くなってきたのでそれに逆らわず意識を落とした。

……おやすみんさい……。

「……約束じゃし、能力をつけてやらんとの。オンオフスイッチもサービスしてやるとしよう。……む？　ちんくと言うのはどれじゃ？　……ええい、纏めてつけてしまえばよかろ。千の顔を持つ英雄とやらは……これか。たしかあの者の思う千の顔を持つ英雄とは……こうか。で、身体能力じゃったの。……気は身体能力に入るんじゃろうか？　……入れておけば文句はあるまい。使い手のこの男ほどあればいいじゃろ」

こうして桜道和哉は、神の手によってどんどんと魔改造されて行くのだった。

# 転生直後、別名絶望モドキ（前書き）

なんだかネタが湧いてきたので、書き出してみました。
せめて東方を終わらせてからのほうが良かったですね。

# 転生直後、別名絶望モドキ

俺は転生した。転生前の名前は桜道一哉。哉の字が書きにくくて小学生の頃習字の時間に両親に文句を言いまくった。矢とか也でいいじゃん！と叫んだのも五回や十回どころではない。

まあ、そんなことは割とどうでもいい。で、俺はＩＳ世界によく似たところに転生した訳なんだが……。

とりあえず、俺の当初の計画を話そう。
計画といっても簡単だ。何故なら方向と目的位しか決めてないからな。
俺の計画。それは、どうせこの世界の中心は織斑一夏。そして俺はＩＳに乗る才能を欲しいとは思っていなかったし、神にも頼んでいなかった。
よって俺がＩＳを動かせるわけもなく、あとは適当に働いて自堕落に暮らして、最終目的は一日十五時間、惰眠を貪って生きて行くことだ！

どんどんどん、ぱふ～。

……しかし、ここで俺の計画に狂いが生じた。
まず初めの誤算は、あの神があまりにもアバウトに能力をつっこみまくってくれたお陰で、明らかに人類の範疇を越えた身体能力と特殊能力を持ってしまっていること。インヒューレントスキル全部なんざ頼んでねえや。
そしてもう一つは……

「一夏？　どうしたのかしら……？」

……俺が織斑一夏だって事だ。

畜生。ハーレムもモテモテ成分もいらねえから睡眠時間をくれ。

……もういいや。諦めた。こうなったらこのまま寝てやる。目指すは変わらず一日十五時間睡眠だ。ちー姉さんが怖いが、なんとかやりとげて見せるぜ……！

何事もなくこの世界で俺の命が終わることを願って！

結論→無理っぽい。

ちー姉さんがブラコン。これはまあいい。ってか、もういい、諦めた。

母さん達がなんか両親揃って裏の組織の人間っぽい。失踪した理由がわかったような気もしたが、これもまあいい。ぶっちゃけ割とどうでもいい。

……何でちー姉さんはあんな人格破綻者と友人関係になれたのかがわかんない。あの人あれだよ？　俺の事実験動物か何かを見るような目で見てたよ？　超怖いんだけど？　これよくないよ？　全く何もよくないよ。極めつけに、なんか俺、両親が所属していた組織に狙われているっぽい。しかも人質として。これもよくない。確実に睡眠時間が減る。

……で、その追っ手から俺とちー姉さんを逃がすために、両親は『家族全員で』旅行に行って、その先で事故にあって来るそうだ。俺を抱きながらそういう話をするのはマジやめてほしい。夢見が悪くなるから。あとなんか涙が止まんなくなるから。

ついでに、決行は俺が物心がつく五歳になるくらいだそうだ。ちなみにこの事を知っているのは、恐らく俺と両親だけ。ちー姉さんには言えんだろぉ……俺にも言う気は無かったんだろうけど。

何が琴線に触れたのか、あのいかれマッドなクレイジー博士がいきなり俺に優しくなった。原作一夏と違って俺にはたいしたフラグ製造能力は無いはずなんだがなぁ？
ちなみに、この人は確実にしたくない演技はしないしできないタイプなので、本当になぜか俺を気に入ったらしい。なんでかね？

まあ、何でもかまいやしないがね。俺は寝るよ。ちー姉さんに抱かれながら。
最近抱き癖がついたけれど、特に問題はないよな？

桜道和哉改め、織斑一夏だ。ちなみに今年で三歳になったんだが……。

が　や　り　や

た　っ
。

いや、俺の両親が、いきなり手紙残して蒸発したんだよ。いつかはわからんが近いうちにイギリス辺りで電車事故を起こして死ににいくはずだ。年単位で時間は変わるかもしれんが。
確か人を雇って電車を横転させ、事故にしか見えないように多くの人間を巻き込んで云々と言っていたはずだが……巻き込まれる者に、わずかばかり黙祷を捧げよう。

……。
……。
……すかー……↑寝た。

## 小学校時代、もしくは白騎士事件前

織斑一夏……ところで、織斑一夏の織斑って『おりむら』って読み難いよな？　ＩＳ本編で織斑一夏の紹介の時、『へー、これで『おりむら』って読むのか』って感心した覚えがあるぜ俺は。

ちなみに今、俺とちー姉さんの織斑一家は、束姉（たばねえ）さんの家に厄介になっている。ほんと、頭が上がらないよ全く。代わりに寝るけど。

まあ、そんなことは割とどうでもいい。何でこんなことを言い始めたかと言うと、小学校に入学してすぐの自己紹介タイムだからだ。

「大半の方は初めまして、数名はお久し振り、約一名にはやっほー、織斑一夏です。好きなことは寝ること、嫌いなことは騒がれること、特技は特に無し、趣味は寝るのにちょうど良い場所を探すこと、ついでにゲーム。よろしくお願いします、そしてお休みなさい」

ガタンと着席し、同時に寝る体勢に入る。三秒後には夢の世界へ……。

目が覚めると、なぜかののちゃんが腕の中に居た。騒いでいたらしく寝惚けた俺に口を塞がれている。周りでいろんな奴が騒いでいるけども、どうでも良いわな。

「なんだ、お前そいつの事好きなのかよー！」

「好きで悪いのか？　ならお前たちは親の事が好きじゃないのか？」

子供の言うことだと思ってさらりと流す。ののちゃんが腕のなかで暴れようとしているが、とりあえず黙らせて耳元で囁く。

（悪いんだけど、こいつらに調子に乗らせたくないから今だけ付き合ってくれね？　あとでいくらでもボコられるからさ）

そう言ったら、不満そうではあったかおとなしくなってくれた。ものわかりの良い子でよかったよかった。

まだなんか言ってきている餓鬼を適当にあしらいながら、ののちゃんを抱き締めるのを辞めないでいる。俺も子供だからわかりづらいっちゃわかりづらいんだが、やっぱ温かい。それにやわっこくて感触が良い。
結婚しろとか言ってくる餓鬼に

「へー。好きなら結婚するんだ？　じゃあお前お母さんと結婚したら？」

とか言いまくって、ひたすらのらりくらりと避け続ける。

ちなみに授業の時はちゃんと放した。そして俺は授業の時も寝るために、教科書を丸暗記して寝ながら先生の問いに答えたり教科書を読み上げたりしている。先生が熱血じゃなくって助かった。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　箒

一夏は学校でも眠っている。授業中でもお構いなしに眠っている。先生が指してどこかの問題を答えさせようとしても、一夏は眠った

まま答えている。しかも、正解で。

一夏はいつもそうだ。簡単なことなら眠ったままやるし、難しいことでも眠そうにしたまま終わらせる。

私との試合だって、一夏は半分くらい眠ったまま私の竹刀を受け止め、叩き落とし、眠ったまま面を入れられる。

声を出さないから一本を取られたことはないけれど、私が一本を取る時はいつも試合の時間が終わりそうなときだけ。それも、明らかにわざと。

前にその事を抗議しに行ったのだが、一夏はそのときも眠ったまま答えた。

『なら、眠くならないくらい強くなってくれ。期待してる』

……これを聞いて、私は正直に言ってイラッと来た。つまり一夏は、私じゃあ弱すぎてつまらないから眠っていると言っている訳なんだから。

だから私は決めた。絶対に、一夏を越えて見せると。

そして、いつかしっかりと起きたままの一夏の面に、竹刀を叩きつけてやるんだと。

……そんな決意を私にさせた本人は、昼になったから起こそうとした私を抱き締め、逃れようとする私の体を巧みに抑えている。

大声をあげようとしたのだが、それを察知したのか一夏は私の口を片手で完全に塞いでしまっているため、声を出せない。

……まだまだ一夏には遠いらしい。

……って、顔が近いわ馬鹿者っ！

## 小学生時代、そしてちー姉さんの涙

俺は今でもちー姉さんと一緒に寝ている。ちー姉さんは織斑一夏の両親が居なくなってから雰囲気が若干固くなったが、束姉さんのお陰で少しずつ柔らかくなってきている。

しかし、ちー姉さんはあれで意外と繊細であるらしく、少し夜に起きてみたところ、声を殺して泣いていたことがあった。

それ以来、俺は（精神年齢的には一応）年上としてちー姉さんの心のケアをしている。

そうは言っても俺にできることなど、ただ一緒にいて、一緒に眠ることくらいしかないが。

それでも少しは効果があったらしく、ちー姉さんの表情に笑顔の割合が少し増えた。嬉しいことだ。

俺は我儘は言わないようにしているし、自分でできそうなことには挑戦している。ちなみに最近では、一人で洗い物ができるようになった。

それと、気付いているとは思うが、俺は基本的に他の人間をちゃんとした名前では呼ばない。理由は簡単だ。ただ、平仮名、または片仮名に直して三文字以上の名前と名字を覚えられないというだけ。

自分の名前とちー姉さんの名前はなんとかこの七年くらいで覚えたが、いまだにののちゃんと束姉さんの名前も名字も覚えていない。。

……し、し……篠野宮（しののみや）とっつきと、篠野宮タバサだったか？

「違うわ！篠ノ之箒だ！いい加減に覚えろ！誰が実体剣とは名ばかりの高威力パイルバンカーか！」

「うーん、束さんはいつも通り束姉さんで良いよ！でも束さんの名

前は束だからね？　ゆっくりで良いから、いつかちゃんと呼んでね？」

努力します。努力だけは。実らなくても怒らないでね？　怒られても俺は寝るけど。

初めのあれが悪かったのか、俺には男友達がいない。大抵寝ているからと言うのも十分理由になりそうだが、まあ、そのあたりは割とどうでも良い。気の会わない友人を作っても楽しくもなんともないだろうしな。

そしてその割に女友達は多い。これも織斑一夏本人のフラグ構築能力の一端かもしれないが、俺はそういう目では人をあまり見れない。

……良く考えてみてくれ。俺は一応転生済みで、その上毎日ちー姉さんと同じ布団で寝てるんだ。今更小学生相手に妙な感情起こすかっての。

だからと言ってちー姉さんに妙な感情を起こすわけでもない。元々そっち方向のは少ないだけだ。決してホモじゃあないからな！勘違いしたら千の顔を持つ英雄で串刺しだ。

……まあ、するやつなんざいないと思うが。居たとして誰が得をするんだ。女顔でもないし、見ててもつまらんだろ。

《……ふむ……ありじゃな！》

へー、神得か。

……ねえよ！死ねぃ！

まあ、無理だろうけど。

いきなりで申し訳ないんだが、現在絶体絶命だ。俺個人ではなく日本と言う国が。
何せ核ミサイルを含む二千三百四十一本のミサイルが、世界中から日本に向かってきているのだから。
……そう言やぁ、こんなのもあったな。ちー姉さんに任せときゃ平気だとは思うんだが……バレねえように俺もやるか。幸いかどうかは知らねえが、撃ち落とすのに苦労はしねえ能力があるからな。

ＩＳ発動……シルバーカーテン。
ステルスとか超便利。
さて、行くかね。

なぜかバレた。たぶん原因は束姉さん。大天才にして大天災な束姉さんを出し抜くなんて、俺には土台無理だったって訳だ。

「それで、いっくんのそれはなんなの？　束さんは知りたいなぁ？」
「魔法みたいな道具です。ただし俺が武器だと思ったものしか出せない上に俺にしか使えない欠陥品です。どこからか出していたクッションもこれです」
「クッションって武器だっけ？」

使い方を変えれば、窒息させることくらいできるよな？　ほら武器だ。

「まあ、良いじゃないですか。ちなみにステルスも武器ですよね？」
「それはそうだね」

へー、納得するんだ。
……さて、寝るか。

「いっくん、束さんの腕のなかでお眠り～♪」
「……じゃあ、お言葉に甘えて失礼します」

……すかー……。

side　織斑千冬

ミサイルを落とし、軍をのけてから帰ってくると、一夏が束に抱かれて眠っていた。

「た、束！何をしている！」
「しーっ！いっくんが起きちゃうよ？」
「う……」

ま、まさか束にたしなめられる時が来るとは……。
そう思いながら私は眠りっぱなしの一夏に近付く。

「……すかー……」
「……本当にこいつがあの程度で起きるのか？」
「起きないと思うよ？」

そんなことを言った束には、とりあえずアイアンクローを食らわせておいた。

「……ふふふっ♪　ねえ、ちーちゃん。いっくんってすごいね」

急にそんなことを言ってきた束に、何となく違和感を感じる。

……こいつが、他人を凄いと誉める？

「束。悩みがあるなら言えよ？」

「ちーちゃんは私をなんだと思ってるのかな？　私だってたまには誉めることだってあるよ？」

「妄想は夢の中だけにしておけ」

「ちーちゃんひどい！束さんのハートはガラス製なんだよ？」

強化ガラスでＩＳ用銃器の弾丸にも耐えるのだろう？

「……んー……喧嘩は、駄目だよぉ……ちー姉さん……」

一夏が寝言でそう言った。

わ、私か！？　束ではなく私に言うのか！？

見てみると、一夏は束の腹の辺りに抱きついたまま眠っている。しかも笑顔だ。

……束の勝ち誇った顔が癪にさわったので、もう一度アイアンクローで浮かしておいた。

# 小学生日記、実態は愚痴ノート

桜道一哉、ではなく織斑一夏。転生済みの判子が額に押してある…
…何て事はないが転生はした。
まあ、それは置いておこう。今となっては割とどうでもいいことだ。

学年が上がり、二年生になったんだが、五月蝿い奴はやはりまだ五月蝿い。
それも実は割とどうでもいい。本当に愚痴りたいことは他にある。

まずは、神からもらった能力についての話だが、どうやら俺の選んだ能力の他にもいくつか追加されているらしく、今さら、本当に今さら俺の部屋の机の上に能力についての説明書が届いた。原作で織斑一夏がＩＳの説明書を見た時の気持ちが少し理解できた。

……一番裏から見てみたら、なんとページ数八百八十七。よくあるパラパラと流し見るだけで理解できるって言う描写の真似をしたくなるページ数だろう？　まあ、それはやってみたらできたんだが。

内容としては凄まじく簡単。能力でできること、できないことの大まかな場合分けと、頑張って鍛えればその力は上がるということ。
追加した能力についての簡単な説明だった。
それでなぜここまでページ数が多いのかと言うと、神が老眼だから文字がでかくないと読みづらいと言うことで文字が大きいからだった。
……老眼って、神にもあるんだな。別にいいけど。

で、俺に追加された能力は、俺が欲しかったとぼやいた逃げる程度の能力と、黄金率C。逃げる程度の能力はどうやらほとんどのものから逃げることができるようになるためスロットの空きにいい感じに入ったから入れたらしい。

あと黄金率だが、巨万の富が入ってくるほど出はないが、その方面に努力していればかなり裕福な生活ができる程度には金の縁が巡ってくるらしい。

……ああ、道理でよく金を拾うわけだ。五百円玉とか千円札とかばっかりだが。

そして驚いたことに、千の顔を持つ英雄は俺の想像以上にチートだったらしい。

……某人形繰り師が自動人形を壊して回るサーカス漫画のゾナハ虫造れて自在に操れる上、ランブルデトネイターでいつでもどこでも遠隔爆破できるとか……想定外です。

しかもこの世界には生命の水が無く、ゾナハ病を治す方法は俺がゾナハ虫を消す以外に無いときた。

……つまり、ちー姉さんを困らせる馬鹿にはこれをやってやればいいんだよね？　ラッキー手駒増えたー！

……とでも言うと思ったか？　んなことしたら余計に怪しまれるわ。なんか使えればいいんだけどね。

「じゃあ束さんがゾナハ病について広めておいてあげようか？　ＩＳ作ってから発言力も大きくなったから、『誰でも発症の可能性はある』ってことにできるよ？」

へー、流石は束姉さん。目的のために手段は選ばない、そこにちょ

っと痺れる憧れる！

「……で、どこから入っていつから聞いてました？」
「ドアと見せかけて窓から入って、千の顔を持つ英雄って名前が出たあたりから聞いてたよ？」

へー……ならいいか。

「それじゃあ、そのゾナハ病っていうのについて、束姉に教えて？」
「はいよ」

まあ、それが終わったら寝るけどな。

……ああ、白騎士事件だったらもう終わっている。けれども束姉さんもののちゃんもまだ転校していない。
原作では確か小学四年の終わりにののちゃんが転校して、小学五年始めにあのセカンド幼馴染みが転校してきたはずだ。
……まあ、原作キャラとはいえ俺が友人になりたくないと思えばならないだろうし、原作では出てきていないやつでも友人になることもあるだろう。俺は織斑一夏ではあるが、織斑一夏ではないのだから当然だが。

ちなみにちー姉さんに『白騎士かっこいいよね。会ってみたいなぁ』と言ってみたら会わせてくれた。まあ、本人だが。
内緒と言われたので内緒にしているが、初めから誰にも言う気は無い。ちー姉さんがブラコンであるように、俺もまたシスコンなのだから。

それからしばらくして、束姉の発表した論文に世界が震撼した。
最初のＩＳ、白騎士による登場者の身体スキャンでわかった新事実として、人には皆とある病にかかる可能性を持っているという事がわかったらしい。

その病気の名前こそが、ゾナハ病。現在でも世界に数人ほどその患者がいる、不治の病だそうだ。

……束姉さん、騙るの上手いなぁ……。

## ののちゃんの転校、あとゾナハ病発症者一人目

ののちゃんの転校は突然だった。何でも日本政府が関わっているらしく、このままこの場所で暮らしていると守り切れなくなるだのなんだのと言っていた。今までほとんどなにもしてこなかったくせに、こういうときだけはでしゃばってくるんだよな。

ちなみに今までは俺がゾナハ虫で周囲を警戒し、実行部隊の血管の中に小さなゾナハ虫を侵入させて、心臓でドカン。もしくは某武装で錬金な漫画に出てくる蝶々二種で迷わせてからドカン。ラッキーなことに破壊男爵は使わないで済んでいる。と言うかあんなん町中で使えるかっての。

けれども死体を残してやっても日本政府はそれをやって来たやつらに報復どころか抗議もしようとしないので、風船爆弾で身長を吹き飛ばして消滅させてやったこともしばしば。

それだけの事を俺にやらせておいて、今さら出てきて従えだ？　ふざけてんのか頭の中身が無いのか両方か、はたまた俺の予想以外なのか……。

とは言え、もう引っ越し先が決定している状態で何を言っても遅い。と言う訳で、次来たどこかの国のエージェント（仮名）と、そいつに命令をしたド腐れ上司にゾナハ病をプレゼントしたいと思います！

わーわーパフパフドンドンドン！

ちなみに初めから強いものではなく、始めは弱いもので発作もそこまで酷くはないが、徐々に酷くなってきて最後には『ああ』なるよ

うに調節する。基本は体内の虫の量で、最後は『アポリオン』を入れてやるだけで済むのでそれなりに楽だ。
これを繰り返していれば、手を出してくる奴は減るだろう。束姉さんには悪名がついて回るようになるかもしれないが……

「別に構わないよ？　束さんは箒ちゃんとちーちゃんといっくんが居れば満足だからね」
「へー。そうですか。それじゃあよろしくお願いします。あと今回はどちらから？」
「天井裏からだよ！」

そう言って束姉さんはにこにこ笑いながら天井を指差した。

へー、天井裏か。また妙なところから入ってくるな？　別にいいけど。

「ああそうだ。ののちゃんにこれ渡しといてもらえませんか？　画面が空間投影型のテレビ電話なんですけど」
「……いっくんの番号教えてくれたらいいよ？」

……教えなくっても束姉さんなら自力で調べあげられるでしょうに。
まあ、別にいいけど。

「ところでこれってどうやって作ったの？　材料とかは？」
「情報って武器だと思うんですよね」
「うんわかった、あれだね」

理解が早くて助かりますね。
ちなみに俺は自衛と寝るためのクッションとタオルケット以外に千の顔を持つ英雄を使ったことは無い。例外が寝具と言うのは、実に

俺らしいだろう？
これは割と堂々と使っているので、ちー姉さんも知っている。殺害経験有りと言うことは秘密にしてあるが、まあ、正当防衛と言うことで一つ。

あ、来た。どっかの国の者らしいエージェント的な人間。
とりあえずバタフライな武装錬金で方向感覚と距離感を失わせ、その霧に紛れてゾナハ虫をイン・ザ・体内。ぜひぜひやってるそいつの所属を束姉さんに調べてもらい、そいつに命令したのが誰かを教えてもらってその国にゾナハ虫を送る。
他の人間には最低限まで被害を押さえようとしたけれど、そいつの周りに居たド腐れには遠慮なくかかってもらった。気前がいいと思わないか？

……さてと。目標も終わらせたし……寝るか。
ちー姉さんは最近忙しそうにしていて、あまり家に帰ってこないので、仕方無く一人で眠る。腕の中の寂しさはクッションで埋めるが……

……ちくせう。腕の中が寂しいぜ……。

ｓｉｅｄ　篠ノ之　束

「今日ねえ、いっくんに会ってきたよ」

ちーちゃんが暮桜に乗っている時にそう呟いてみると、ちーちゃんはすっごく動揺した。

「あ、知りたい？　最近ちょっと会ってないいっくんのこととか知りたいたいいたいたいよー！」

「やかましい」

ちーちゃんに照れ隠しのアイアンクローをされた。ＩＳ装備のままアイアンクロー何てされたら、束さんの脳みそがつぶれちゃうよ！？

「ふん」

「ぷぎゅ！」

ぽい、と捨てられて、地面に激突する。しかも頭から。

「ちーちゃんの愛がいたいっ！」

「何が愛だ、馬鹿者」

ちーちゃん酷い！でもそんなちーちゃんが好きだよ？

「……で？」

ちーちゃんがそっぽを向きながら私に話しかけてくる。やっぱりちーちゃんはいっくんのことが大好きなんだ～？

「……」

そう思っていたらまたアイアンクローで持ち上げられた。すっごく痛い。ほんとにつぶれちゃったらどうするのさ！

……加減してくれてるのはわかってるけどね。

「いたたた……いっくんのことだね？　ちょっとさみしがってたかな。いっくんって抱き癖があるから、ちーちゃんと一緒に寝てるときが一番幸せそうだよ？」

「……そうか」

……ちーちゃんは気付いてないと思うけど、すっごいにやにやしてる。すっごく嬉しそう。

「まったくちーちゃんは素直じゃないたいいたいいたいよーつぶれちゃうよー」

しばらくちーちゃんは私の頭をギリギリと締め上げてから、ぽいっと投げ捨てる。確かに叩いたり殴ったりするよりはこっちの方が調節しやすいとは思うけど、それでもやっぱりいたい。

# 友人作り、以外と簡単かも

ののちゃんが転校してからすぐに、この学校の俺のクラスに転校生がやって来た。その名前は鳳（ファン）……なんとか。略称がリンだったはずだから……離任？

……絶対違うな。なんだっけか？

……まあいいや。気が向いたら覚えよう。向くかどうかわからんが。

予想では友人なんざ俺にはできないと思っていた。何故なら俺は大抵寝ていて、絡みにくいやつのはずだからだ。前世でも仕事仲間はいたが友人なんざ高校・大学の睡眠愛好会（会長は俺）の会員とバンド組んでた数人程度だ。

……だが、今回はなぜか友人がいる。質が悪い勧誘を（手を掴んで無理やり遊ぼうぜとか言ってる感じの男子に）受けていた女子達に、かつあげされかけていた男子生徒数人。いじめを受けていた奴に喧嘩の場で何故か共闘することになったやつが一人。

……何で俺はこんなにも厄介事に巻き込まれるんだろうな？

そんなもんはいらないから寝かせてくれ。

「よう一夏。なんだやっぱ眠いのか？」

「……弾か。おう、超眠い……鈴居ねえ？　抱き締めて寝たいから」

「……お前いつか刺されるぞ？　あと鈴は居ねえ」

「なんとかなる……居ねえのか……じゃあお前でいいや」

仕方がないので弾を抱き締める。男も女も関係なく、抱き締められればオッケー。

「ちょっ、待て一夏！俺にはそんな趣味はねえ！」
「……やかましい、寝れねえだろうが……すか～」
「寝てんじゃねむぐぅ！？」

……すか～……。

起きたら弾が鈴に変わっていた。何を言っているのかわからないと思うが、俺にはわかる。何てことはない、俺を起こそうとして自爆ったんだろう。顔が真っ赤だ。
ちなみに弾は自分の席に戻っていた。多少睨み付けられたが、アイコンタクトでなんか作ってやると言ったら睨むのをやめた。ちょろ。

……ちょろいと言えば、この作品の中にはちょろいと言われる金髪ツインドリル……名前は……せ、せ……ぜ？　ゼヒュロス・オウビート？　だっけ？　なんか強そうなやつだな……。

「……多分違うと思うわよ？」
「そうか？」
「私の名前、フルネームで」
「鳳鈴震（ファンリンシン）」
「鈴音（リンイン）よ」

へー。そうだったか。すまんな。
とりあえず撫でておく。初めの頃は名前を間違える度に怒鳴り散らされたが、それが自分だけではないと知り、そして略称を呼ぶよう

になってからは大人しくなった。
恐らく、ちー姉さんの名前を覚えるのにすら数年と言う時間をかけたと言う事実に呆れたか、諦めたかしたのだろう。

「諦めたのよ。私は鈴でいいわ」

へー、それじゃあ鈴でいいな。覚える努力も放棄するわ。

……か～……。

side　鳳　鈴音

「……すか～……」
「……はぁ……」

全くこいつは……。

今私を抱き締めながら幸せそうな顔で眠っている男は織斑一夏。この学校で一番に私と友達になり、そして親友になり、私を惚れさせた男だ。

初めは何を考えているか全然わからない気持ち悪いやつ、という印象だったのだが、そいつは何故か私がからかわれているときはいつも助け船を出してくれた。
お礼を言っても自分のためだと言ってあまり受けとることもなかったのだけれど、そのうちにそれが半分くらいは嘘だということに気がついた。

一夏は寝ることが好きだ。それは見ていればすぐにわかる。授業中も大抵寝ているし、休み時間も大抵寝ている。起きているときなんて精々ご飯を食べる時と体育の授業中くらいだ。……いや、たまに体育の授業中すらも寝たまま動いている。
その時に周りで楽しく騒ぐだけならば、一夏は何も言わずに寝続ける。
しかし、何故か誰かを苛めたり、大人数で一人をからかっていたりするといつの間にか起きてきていてそいつらの邪魔をする。

その他にも、例えば喧嘩をしていて相手が多かったりすると力を貸してくれたりもするし（弾情報）、家庭科の授業で困っていると班を越えて助けてくれたりもする（女子の中では有名）。
とにかく一夏は面倒くさがりで眠たがりで、そしてとても優しい男だ。あと妙に女子に人気がある。
その証拠に、一夏に抱き締められている私には、周りの女子からの羨ましそうな視線が突き刺さっている。

「……すか～……」
「……少しは気付いてあげなさいよね……」
「……鈴。そりゃ無理だろ」
「わかってるわよ、言ってみただけ！」

弾が私に呆れたように言ってくるけれど、私だってそのくらいのことはわかってる。
一夏は絶対に気付かないだろうし、万が一、億が一、兆が一気付いても積極的に動くことは無いだろう。

「……だよなぁ」
「……仕方ないわよ、好きになっちゃった方の負けよ」

そんな私の言葉を全く聞かずに、一夏はすやすやと眠り続けている。

「……んー……鈴……♪」

そう言いながらぎゅっと私に巻き付けている腕に力をこめる。私はその腕に自分の手を乗せて、一夏に背中を預けた。

## 卒業、その前に誘拐

第二回モンド・グロッソ。ＩＳの世界大会である。ちなみに第一回の優勝者は当然のことながらちー姉さん。ブレード一本でよくもまあ……。

たまに目で追えない移動とかをやっていたので、ちー姉さんが本当に人間かどうか怪しいと思うようになってきた。

神の説明書が正しいとすると、一応俺の身体能力はネギま公式バグキャラクターのラカンと同等はあるらしいんだが、それでも一瞬視界から外れてみせた。

ＩＳに乗っているとはいえ、本当に人間なのか？

……違っていたとしてもどうこうするつもりはないが、一応知っておきたいと思う。

……あと、やっぱり俺が選んだ能力はＩＳ世界では使い道が暗殺くらいにしかない。ディープダイバーとか確実に要人暗殺用だよな。

……正直に言って同じラノベでも、もっと平和な僕は友○が○ないとかそういうバトルなしの世界に行きたかった。そして千の顔を持つ英雄で黄金を作って換金して自堕落に死んでいきたかった！

……何が言いたいかと言うと、誘拐されかけた。流石にＩＳを使っては来なかったからパピヨンのアレでどっかんと吹き飛ばしたんだが、どうもそれが原因で大会は中止になってしまった。テロかと思われたらしい。ごめんねちー姉さん。

それから俺が吹き飛ばした誰かさんたちをちー姉さんが見つけて俺に聞いてきたから、とりあえず正直に誘拐犯と答えておいた。俺が爆破したとは言ってないけど、束姉さんから防犯装置をもらったことにしておいた。よっぽどテンパっていたらしく疑うことなく信じ

た。なんか少し心が痛い。
それにまたちー姉さんを泣かせたのも精神的にきつい。そんなにごめんって言われてもちー姉さんは悪くないでしょうに。
……とりあえず、おやすみ。できれば俺が起きたときに、そばにいておくれ。
無理ならいいけど。

特に無理ではなかったようで、現在俺はちー姉さんの背中で揺られている。あまり揺らさないようにしてくれているのか、派手な揺れはなく寝心地がいい。あー、やっぱ俺ちー姉さんのこと好きだなぁ……。
……じゃまされたくないんだよね。この生活。ＩＳ学園には入りたくねえ。まあ、ＩＳに触らなければいいだけの話だし、それ自体は恐らく難しくないよな？
……難しくないといいなぁ……。
……すか～……。

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

私の背中で気持ち良さそうに眠っている一夏。両親が私達を捨ててからの、私のたった一人の弟（かぞく）。私の宝物。
けれど一夏は私のせいで誘拐されかけた。束に貰っていたという防犯装置とか言うのが無かったら本当に誘拐されていたかもしれない。
束には感謝しなければ。
あの馬鹿が居なければ、一夏はもしかしたら殺されていたかもしれ

ない。それどころか、もっと酷い目にあっていたかもしれない。

カメラに写っていた記録を見た。一夏が私の試合を見ているときに、何人かの黒い服を着た者達が気付かれないように一夏を拐おうとしていた。

すると一夏の手が光り、そこから黒い蝶が数匹飛び立った。

そしてその蝶は黒服に近付くと、爆発した。爆発の跡を見てみると、一夏の方向には全く衝撃は行っていないようだったが、爆音はちゃんと届いたのか耳と目を塞いでいた。

それを聞き付けてやって来た警備員が一夏に説明を求めているが、先程の爆発でカメラの集音機がいかれたのか何を話しているのか聞こえない。

だがそれでも警備員は黒服達が不審者だと考える程度の頭はあったらしく、黒服達を無力化してから連行していった。

しばらくしてから私が現れて、一夏を抱き締めていた。そこから先は見る必要が無いと感じ、見るのをやめたのだが……束め。いくらなんでも爆発物を一夏に持たせるとはなんだ。しかも会場の警備にばれないようにするとは……。

……ああ、ようやく着いたか。

救護室に入り、他国の選手達と同じように一夏を寝かせる。なぜか寂しそうにしていたので頭を撫でてやると、私の手を取って抱き締めるようにしてから嬉しそうに笑った。

……やれやれ。一夏は眠るのが好きだな。

私は苦笑しながら、一夏のさせたいようにさせていた。

## 食事環境、ちー姉さんはドイツ

鈴。本名は確か鳳鈴神（ファンリンジン）。

「鈴音よ」

……だそうだ。

俺の友人の一人であり、よき理解者であり、原作とは違って何故か異様に精神が大人である。

具体的には、俺が抱き締めたまま寝落ちしても完全スルー。そのまま授業を受けることもしばしば。

その他にも、少し前にちー姉さんがドイツに行ってから料理をするのが面倒臭くなったのでとりあえず生きていければ良いと言うレベルしか食事をしていなかったら実家の食堂に引きずり込んで食事をとらせたり、俺が気力を取り戻せるように、毎日弁当の中身の交換会を開催してくれたり……本当に色々と世話になった。

「別にいいわよ。あたしだってあんたに助けられたんだし、好きでやってるんだしね」

へー、そうかい。まあそれでも礼は言うけどな。

ちなみにちー姉さんがドイツに行くことになった理由は俺のせいだ。やっぱりあの爆発は不味かったらしく、無かったことにしてやるから一年ほど教官やってくれないか？　と言う話があったらしい。ごめんねちー姉さん。

「はいはい、全く一夏はシスコンなんだから」

「そうだな」

自覚はあるよ。ぶっちゃけこの世界に来て三番目の恩人だし。
ちなみに一番二番は文字通り命懸けでちー姉さんと俺を守って見せた両親。ちー姉さんは嫌っているようだけれど俺は別に嫌いじゃない。

「……か……い…か……一夏！」
「……すか～……」
「もう昼なんだから起きなさい！ご飯よ！弾！」
「おうよ！」

俺は二人に引きずられながら屋上まで運ばれたのだった。
……すか～……。

「はい一夏。あーん」
「……あむ。むぐむぐ……うまい」

半ば寝ているが、それでも料理の味くらいはわかる。鈴の弁当も弾の弁当も美味いな。
給食じゃないのかって？　俺に言われても知らんよ。

「……さて一夏。お前昨日の夜何食った？」

何故か俺は弾に詰め寄られている。まあ、とある日からはいつものことになっているのだが、この時だけは俺は弾に勝てる気がしない。

「何って……あれ、食ったっけ……？」

「……じゃあ、朝は何食った」

朝か。それは覚えているぞ。

「水と飯と塩と砂糖と刻んだキャベツ」

いきなり弾と鈴の雰囲気が怖くなった。畜生勝てねえ。別にいいけど。

ずい、と弾が俺に向かって箸を付き出してくる。

「食え」

そして鈴も箸を付き出してくる。

「食べなさい」

怖いので俺は素直に食べる。うん美味い。

結構な量を食べさせられたが、弾と鈴の弁当の中身は初めのおよそ半分にまで減っていた。こいつらは平気なのか？

「少なくとも今の一夏よりは平気よ」

「俺らのことはいいからさっさと食え」

「いや一応自分でも作ってきたからな？　寝てたから持ってきてねえけど」

「「なら今は食え」」

……まあ、いいか。

side　五反田　弾

「……すか～……」

俺達の弁当を食い尽くした後、一夏はいつも通りに眠りについた。
……やれやれ。こいつは本当に自分の事を大切にしない奴だ。
一夏に膝枕をしている鈴も同じように考えているらしく、俺と鈴は揃って溜め息をついた。

「……それじゃ、俺は一夏の弁当持ってくる……食ってもいいよな？」

「良いと思うわよ？　どうせ一夏は私達の分として昼だけ豪勢にしてきてるんだから」

そう。こいつは自分のために美味い料理を作ろうとはしない。そもそもこの眠たがりの面倒臭がりが料理を始めた理由が、姉である千冬さんの負担を減らすためであると言うのだから。
その千冬さんがいなくなってから、この姉馬鹿は料理に力を入れなくなった。

朝は水と塩と砂糖に生卵、昼は無しか水道の水、夜は生野菜とハム一パック。そんなのが普通になっていた時に俺と鈴が遊びに行って、食事環境を知って鈴が一夏をぶん殴ろうとしていつも通りに抱き締められ、それから家の中華料理屋に引きずり込んで事情を話して飯を食わせてからまともな弁当を俺達が食わせることになった。
俺もその事を母さん達に言って弁当を多めに作ってもらうことにして、鈴と一緒に一夏に食わせている。

一夏は食わないでも生きて行けるみたいだったが、食うときは本当に食うらしく、俺達の分まで食っても実はまだたりていないらしい。

一夏は隠しているようだったが、簡単にわかる。
一夏も悪いと思ったのか次の日から弁当を持ってきて一緒に食べるようになったのだが、……これがまた美味い。こんだけ美味いのが味気無く感じるとは、こいつの寂しがりもかなりのものだと鈴と二人で笑いあったこともある。

そんなこんなでなかなか苦労もしているが、俺はこいつらと一緒にいるのが大好きだ。

「……か～……」
「おぅっ!?　一夏、絞まってる！いたいいたいうぉあ～～っ!?」
「……頑張ってね弾」
「助けろよ!?」

……ああ、こういうこともあるが、好きだぞ？

# ちー姉さんの帰還、それに伴うパーティー

ちー姉さんがドイツから帰ってきました。と、言うわけで今日は自宅で豪勢な料理を作ろうと思う。
そのために学校で料理の献立と栄養バランス材料の有無を確認してノートに写していたら、弾と鈴にあり得ないものを見る目で見られた上に早退して病院に行くことを進められた。酷くね？
……第一、病院に行ったとして何科に掛かれば良いんだよ？

……まあ、それは割とどうでもいいな。今はとりあえず買い物だ。少しだけ贅沢するが……これくらいは別にいいよな？
……それにしても一年とちょっとぶりか。ちー姉さんの声だけは電話で聞いてたとはいえ、声は抱き締められないんだよなぁ……。
ちなみに抱き癖はいまだに治っていない。そして治す気もあんまり無かったりする。面倒だし。

……そう言や今さらだけど、弾って原作じゃあ中学からの付き合いのはずなんだが、俺達のとこだと小五の半ばで友人関係になっているんだが……まあ、似たような世界だと言うことで納得しておこう。悪いことじゃないし。

……お、卵が安いな。買っていこう。豚小間肉も少し……いや、ちー姉さんは夜はあまり食べないから、明日の朝の分も買っていこう。となるとあれは夜のうちに仕込みを終わらせて、夜はさっぱり終わらせようか。

……鈴と弾は俺が起きている理由を聞いたら一応納得して見せたが、今の俺を見たらたぶんもう一度びっくりするんだろうな。

「……い……一……夏……？」
「……一夏が……鼻歌……？」

今みたいに。
……確かに俺は鼻歌歌う暇があるなら寝る、飯は寝ながら食う、夢の中でも寝る夢を見て、夢の中の夢でまた眠るような奴だが……そこまで驚かなくても良くないか？

「……いや、驚くわよ。だってありえないもん」
「……だよな。俺達間違ってないよな鈴」
「当然でしょ。一夏が完全に起きたまま鼻歌歌って買い物なんて、明日世界が滅びてもおかしくないわ」
「へー……言いたい放題言ってくれやがって……」
「「事実だし」」

鈴と弾は綺麗にユニゾンしてくれやがった。俺だってはしゃぐことくらい……！

「ど、どうしたの？」
「……ちー姉さんがもうすぐ帰ってくるような気配……晩飯を作り始めないと間に合わねえ！つー訳ですまん、また明日な！」

やばいやばい、つい話し込んじまった。晩飯は軽く、腹持ち良くなく腹に溜まるものを作らねえと……。
風呂の準備もしておいて、ちー姉さんの部屋の掃除は……昨日やったな。毎週やってるけど。
後は……時間があれば明日の朝の下ごしらえもしておいて……マッサージも一応覚えてみたし、準備しておこう。いつでも洗面台の下に色々常備されてるし、道具の手入れもできてるけどな。

それより今は晩飯の準備だな。急いで作らねえと。失敗は許されねえし、許さねえから……気を付けろよ？

……そう言や、弾と鈴は何で一緒にいたんだろうな？　偶然か？

……まあ、割とどうでもいいな。今は料理だ。いつも使ってる前全部を隠すタイプのひよこエプロンにかけて、ちー姉さんの満足する料理を作って見せるぜ！

……ああ、そうだ。確か前に束姉さんに、

「これをつけるとちーちゃんば喜ぶよ！きっと疲れがみんな吹き飛ぶくらいね！天才の束さんが言うんだから間違いないよ？」

と言われてホイホイと貰ってしまったあれがあったはずだ……ちー姉さんも疲れているだろうし……使ってみるか。

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

一年ぶりの日本。ようやく帰ってこれたと一息ついて、それからもう一度気を引き締め直す。

私は、織斑千冬。一夏の前ではかっこいい姉でありたいと思い、そしてそれを実践してきた。

……たまに一夏に慰められたり、家事を任せきってしまったりと言う点ではだらしない所を見せてしまってはいるが、私よりも一夏の作った料理の方が数段美味いので（私の料理は料理ではないらしい。

束すら気絶させ、二日間腹痛を起こさせたと言う事実もあるので否定できない）、こればかりは一夏に頼りきりだ。

気を張り直した私は、一夏の待つ家に向かう。荷物はすべて先に送ってあるし、後は私が手荷物を持って家につけばいい。

私は、一夏の前ではかっこいい姉でありたい。そして一夏を心配させたくない。

――そう。だから……だから――

「ちー姉さん、お帰りなさい！」

ピコピコと動く、とがった犬耳。

嬉しそうに振られる、上向きに反り返った尻尾。

この世の春とばかりの、一夏の笑顔。

――一夏の前では、この愛の放出を我慢しなければ……ッ！

……まあ、無理だったんだがな。食事が終わって気が付いたら布団の中に居たさ。

そして私のとなりにはまだ耳をつけたままの一夏が、私に抱きついたまま眠っていた。

これでもう一度昇天しそうになったが、目尻に浮かんでいる涙を見て抑えきった。
まだ夜の三時だったので、一夏を私からも抱き締めてもう一度眠りについた。

一夏が起きた後、あれをどこで手に入れたのかを聞いてみると、束が私が喜ぶと言って渡してきたらしい。
さすがに命に関わるので使用禁止にしたが、その時に落ち込んだのかとがっている耳も丸まっていた尾も、しゅんと萎れていた。

おもいっきり抱き締めて撫でてやったことは言うまでもない。

## 卒業式、はっちゃけはじめたちー姉さん

卒業式。いつもは騒がしい同級生達も、今日ばかりは静かだ。お陰で……

「……すかー……」

よく寝れる。

……とは言え、しっかりと卒業証書は受け取ったし、歌も歌える。問題ない。服装も、まあ、問題ない。問題があるとすれば……

「ちーちゃんちーちゃん、いっくんがスーツ着てるよ！」

「わかって……おい束、このカメラはどうやって使うんだ？」

……このくらいか。

あとちー姉さん。そのカメラはメイド・イン・束姉さんだから思考操作式でピントもズームも光量調節もブレ補正もシャッターもみんなやってくれるから。現像は束姉さんに頼めば早いよ。

……それにしても、スーツ似合わねえなぁ……ちー姉さんと束姉さんは喜んでるけど。

「いーつのーことーだかー、おもいだしてごーらんーあんなーこーとー、こんなーこーとー、あーったーでしょー♪」

……そうそう、色々あった。

ドイツで誘拐されかけたり、ちー姉さんがいきなり鼻血を噴き出したり、弾の家の定食屋（？）に飯食べにいったり、鈴の家の中華料

理屋に飯食いにいったり、たまに来る誘拐犯を上役と一緒にゾナハらせたり、家庭科の授業の自由作品で先生のプライドをへし折ったり、音楽の授業で歌ったら何故か鈴以外の女子から熱い眼差しを、弾以外の男子からは刺すような視線を向けられたり、急にやって来た束姉さんに抱き締められたまま微睡んでいたら帰ってきたちー姉さんと束姉さんの喧嘩が始まったとか……本当に、色々あった。

……まあ、中々に楽しい小学生生活だった。俺に高校生以上の頭があったというのは関係無く、友人たちと一緒に過ごせたし。

「中学に行ってからもよろしくな～」
「もちろんよ」
「わかってるって」

よかったよかった。さて、寝るか。

起きてみたらちー姉さんと束姉さん、そして鈴が何故か睨みあっていた。俺は現在弾に抱きついている。

「一夏。起きたか？」
「……まあ、一応」

すると三人がぐるんと首だけをねじって俺を見た。何でかわからんが少し怒っているちー姉さんと、少しムッとしている鈴と、その二人に張り合うように気合いを込めている束姉さんは、ちょっと怖い。

「……弾。何があったんだ？」
「……あー……つまり、鈴と千冬さんとあの赤ずきんっぽい服

の人は、一夏のことが大好きだってことだ」

へー。まあ知ってるけども、それが何でにらみ合いになる？

……あれか、嫉妬か？　弟にたかる悪い虫か？　友人を困らせる悪い人か？

「似たようなもんだと思うぞ」

「へー、そうかい。俺はちー姉さんも束姉さんも鈴も大好きだけど」

勿論弾のことも好きだぞ？　筋肉ついてて違った抱き心地があって良いし。

「……お前って奴は本っ当に女心を理解してないな？」

「してるよ？　理解だけは」

「余計に悪いわ」

そうかね？

……とりあえず、あの三人の喧嘩（？）を止めるか。確か鞄の中に束姉さんから貰った例のブツ四号があったはずだ。

ちなみに一号は犬（柴犬）、二号は狼（多分日本狼）、三号は猫（黒）、そして四号は何故かまた犬だ。百八号まであるらしいが、そこまで使うことは無いだろう。

……なお、これら獣耳シリーズにはもれなく思考操作ユニットを積んであり。自動で俺の感情を外に出す仕組みであるらしい。科学力の無駄遣いここに極まれりだな。

……ああ、あったあった。装着、と。

何故か弾に撫でられた。気持ちいいから構わないけどな。

……あ、やばい、意識が落ちる……喧嘩止めねえと……すか～……。

ｓｉｄｅ　五反田　弾

卒業式が終わってすぐ、一夏はいつも通りに寝始めた。鈴が近付いていくと、いつも通り抱き締められる。

「役得だな？」

「そうね」

一年ちょっとの付き合いで、俺達は一夏の事をよく知った。

一夏の事を見たことのあるやつらは揃って一夏をねぼすけだの面倒臭がりだのと言うが、実際は違う。

一夏は睡眠至上主義であり、重度のシスコンであり、そしてとても優しい奴だ。

何を持ってそう断ずるのかと言えば、一夏の行動と話からの推測になるんだが、それだけでもう十分とも言える。

例えば、自分の関係ないことでも揉め事が起きればさりげなく助けに行くし、喧嘩ならともかく苛めは大抵一夏に角がたたないように止められる。

基本的に寝てばかりいるが話は聞いているし、抱き締めるときも本気で嫌がればすぐに放してくれる。

作ってくる弁当も美味いし、頭もいいし、運動神経もいい。

そんな完璧超人が何故か妬まれないのは、こうして駄目なところをよく見せているせいだろう。お陰でこっちも騒がしくなくていいとは思うんだが、あのシスコンっぷりには少し引いた。

……今も、日頃から大好きだと言っている千冬さんと鈴、そして見たことのない人の喧嘩を止めるためとは言え、こんなものを即座に用意しているんだからな。

「……わん」

駄目だ俺やめろ俺鼻血はやめろ俺変態にしか見えないからやめろ俺。つかなんだよこいつ犬耳犬尻尾とかおかしすぎるだろなに考えてんだよ何でそれだけで異様に可愛らしく見えるんだよ何で少し背が縮んだように見えるんだよ何であの顔が中性的に見えるようになるんだよ何で頬の柔らかさが増すんだよ何で睫毛が少し長くなってんだよ何で耳がピクピク動いてんだよ何で細い尻尾がブンブン振られてんだよ何で俺の手は一夏の頭を撫でてんだよ何で一夏も嫌がらねえんだよそして何で俺はあの三人にの内二人に仇のように見られて、鈴に羨ましげな目で見られてんだよ！？

「……えっと……撫でますか？」

そういえた俺はきっと凄いに違いない。

# 入学式、早々大乱闘

中学に入り、また鈴と弾と同じクラスになる。またずいぶんと嬉しい偶然もあったものだ。

「実は偶然じゃなかったりするんじゃないの？」
「……見ろよ弾、あの雲五反田食堂のＣＭやってくれてるぜ？」
「どれどれ……ってマジかよ！？　何で綺麗な楷書体で『五反田食堂をよろしく！』って形してんだよ！？　しかも地図付きで！」
「なに言って……ほんとにそんな形してる！？」

やれやれ、五月蝿い奴らだな。そんな偶然があるのだからこんな偶然くらい普通にあるだろ。
……ところで、あの雲って妙に銀色してると思わないか？　具体的には、まるで小さな機械が集まってるみたいに。

……言わないけどな。

「……おいおい、今度は家の真上で『五反田食堂←』って形になったんだが！？」
「くぅ……弾！どうやったのか教えなさいよ！」
「俺に聞くなよ！？」

……若い奴は元気いいな……すか～……。

帰る時間になったんだが、何故か周りには先輩（笑）達がたむろし

ている。にやにやと笑っているが、俺達が何かしただろうか？

「なあ弾。何で囲まれてるかわかるか？」

「……あ～、昔俺達がボコったあれじゃね？　それのお礼参り」

へー……面倒臭い。何でわざわざ入学式の日に来るんだよ。今日はちー姉さんが一月振りに帰ってくる日なのにさ。

……弾一人じゃ多勢に無勢だし、さっさと潰して終わりにするか。呼吸に合わせてニアデスハピネス体に入れて肺で小爆発させれば気絶するだろ。

……実行～。

「ぶべらっ！？」

「ごぼうぇっ！？」

「ふんぐるいっ！？」

変態は倒れた、と。

「いや待て。明らかにおかしい悲鳴があったろ無視すんなよ」

「……え、なに？　もっかい聞いて確かめたいって？　弾はドSだなまったく」

「ちげえよ！？　俺ドSじゃねえよ！？　悲鳴なんて聞きたくもないからな！？」

へー、そうかい。まあ、割とどうでもいい。

「んじゃ俺はちー姉さんとの晩飯の買い物をしてくるから」

「……おお、またな。……シスコンめ」

「弾？　シスコンで何が悪いんだ？」

「そっち！？」

そりゃそうだろ。シスコンで悪いことなんざ無いしな。
第一、弾もシスコンだし。

家に帰ると何故か束姉さんが居た。何となく予想は出来ていたので材料は多めに買ったが、どうやら正解だったようだ。

「プリンでも食べて待っててくださいな。俺のですけど」
「いただきまーす♪」

スプーンを使ってぱくぱくとプリンを頬張っている束姉さんは、服装もあいまって年齢以上に若く見える。八歳年上で今は確か……二十歳？　どう見ても十四～五だよな。行動だけ見ると四歳児。

「ん～♪　美味しいよー♪」
「そうですか。ののちゃんのお土産にも持っていってあげてくれます？　俺のですけど」

ちなみにちー姉さんのはコーヒーゼリー。甘すぎるのは嫌いだと言っていたのでブラックで。
プリンもちー姉さんの分はノンシュガーで素材の甘さを生かしている。なかなか好評。
やっぱりちー姉さんが美味しそうに食べてくれると、作った甲斐があったっていうことだよな。実に嬉しい。

……最近、こうして笑うとちー姉さんが顔を背けるようになって少し寂しいけど。

「……はあはあ……いっくんかわいい……はあはあ」

……そして今、割と本気で貞操の危機。多分全力で逃げても追い付かれる。ＩＳなんて大嫌いだ。そしてギャグ補正を今ほど憎んだことも無い。

……ギャグ補正？　すると……

「いっくーん！」

束姉さんが飛びかかってきた瞬間に、思いきり息を吸って叫ぶ。

「ちー姉さーーん！助けてーーーっ！！」

「　束　」

冷たい声が響いて、束姉さんの動きが完全に止まる。まるで凍りついてしまったかのようだ。

「……ち……ちーちゃん……あと二時間は帰ってこれないはずなのに……」

束姉さんのその言葉に、ちー姉さんは鼻で笑うことで答えた。

「そんなもの、一夏を守るためならどうとでもなる。……さあ、束。お前はたった一つ間違いを犯した」

……似たような言葉をどこかで聞いたことがあるような気がしたけれど、気にしないことにした。

……それにしても、ちー姉さんはかっこいいな。

……あっと。晩飯作らないと。

俺は立ち上がり、炊事場の方に歩き出す。

後ろの方では色々と破壊音とか

「……貴様は私を怒らせた！！」

「うひぃぃぃっ！！」

といった声が聞こえてくるが、それも気にしないことにした。

……よし。朝に炊き始めた炊き込みご飯は上手くできてるな。よかったよかった。

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

仕事をしていたら、急に一夏に助けを求められた気がしたので急いで帰ってみると（所要時間０．２２秒）、束が一夏に襲いかかろうとしていた。

とりあえずぼこぼこにしておいたが、気が済んだ頃には周りがぼろぼろになってしまっていた。

「大丈夫だよ、ちー姉さん」

いつの間にか私の後ろにいた一夏は、新しい机と椅子をどこかから用意していた。

そして机の上を台拭きで綺麗に拭いてから、作ったばかりと見える料理を並べる。

「それじゃあ……いただきます」

「いただきます」

……やはり美味いな。

そう思いながら食べていると、ふと一夏が目に入る。

あの日から見ることはなくなったが、このときだけは何故か嬉しそうに尻尾を降っているように見えてしまう。

また気絶するわけにもいかないので目を逸らすが、その度に一夏にくっついて見える耳と尻尾が元気をなくしてぺたりと伏せられる。

今日は狐か……。

「……く……」

ぱんっ、と鼻を抑える。まずい、鉄の匂いがし始めた。

「ちー姉さん？　どうしたんだ？」

きょとん、と首をかしげて私を見つめる一夏を直視することができない。そして鼻を押さえている手から力を抜くこともできない。

――私は、織斑千冬。一夏の、かっこいい姉だ。

まあ、いつものように愛の噴出は避けられなかったんだが、それでも慣れたのか気絶はしないですんだ。

一夏が心配そうに私を見つめている。

……その頭の上に、恐らく束の悪戯の結果であろう狐耳。背中を見てみると、尻尾も見えた。

……とりあえず、風呂に入ってから寝よう。一夏と一緒にな。

## 授業中、トラブルに巻き込まれる俺。（前書き）

ちょっくら不意打ち更新してみる

## 授業中、トラブルに巻き込まれる俺。

……お早う。ちー姉さんはいない。なぜなら恐らくもうＩＳ学園に教師として行っているから。

……フウの作ったゾナハ虫のような監視用機械は良いな。まずバレないように俺に情報を与えてくれる。やっぱり千の顔を持つ英雄は汎用性が凄まじい。

とはいえそれはラカンが使っていた時に、帝国九七式破城鎚型魔導手甲なんていう明らかに造りをわかっていなさそうな物まで出てたからわかりきってたことなんだが。

……ちなみに、俺もちー姉さんも居ない時には家の中に武装で錬金なチャフを張り巡らせているため、今まで泥棒も盗聴機も仕掛けられたことがないし、仕掛けようとした相手を逃がしたこともない。

……俺が帰った時には大抵発狂してたけど。一度弾と鈴が遊びに来たときにピンポイントでこられたときには焦った。すぐさまフェイタルアトラクションで押し潰したけど。

ちなみにヴィクター化はできないが、突撃槍を旧型新型使い分けることもできるようになった。一番酷いのは破壊男爵＋衛星３０＋銀の膜＋激戦のコンボだと思うが。

……三十人に増えた超防御能力装備の男爵様に高速自動修復付きとか手に終えない。ほんとに。しかもリバースにすれば相手は動けないし。

……絶対使わねえ。相当の事が無い限り使わねえ。例えばちー姉さんを馬鹿にしたとか。

「……超個人的じゃないかな？」
「束姉さんには言われたくない。あと近寄らないで下さい変態」
……何で束姉さんは頬を赤らめて体を震わせているんだろうか？
……まあ、割とどうでもいいな。
学校行くか。そして寝よう。

流石に中学に入ってからは鈴を抱き締めたまま授業というのはしていない。後々面倒だし、このクラスにも馬鹿な親の元で育った馬鹿が居るようだし。

……一応言っておくと、俺は割と友達思いだ。だから、鈴が

「リンリンってパンダの名前みたいだよな。笹食えよ笹」

何て言われているところを見ると、ついやっちゃうんだ（嘲笑）

「なあなあ、ゾナハ病って知ってるか？」
「は？　なんだよいきなり？」

確かにいきなりだな。まあ気にすんなって。
……どうせこの後何も気にならなくなるんだし。

「まあ聞けって。で、そのゾナハ病ってのは基本的に人間であればどんな奴でも発症する可能性があるわけだが……俺が指を鳴らした瞬間に発症するって可能性もあるよな？　超低いけど」
「……まあ、そうだな」

鈴を苛めていたそいつが、訳がわからないと言う風に答えを返す。

「じゃあもちろん、俺がお前に『今日の夜にお前はゾナハ病を発症する』って言ったとして、それが当たる可能性もあるよな？」

「……だからなんだよ？」

そこで俺は、にっこりと笑って言ってやった。

「明日、午前六時半ごろ。発症するだろうから気を付けろよ？」

……正確には発症するのではなく、発症させるんだが。

「……んなわけないだろ」

「だといいな？」

……さて、寝るか。

ｓｉｄｅ　鳳　鈴音

一夏がそんなことを言った次の日、言われたそいつは学校を急に休んだ。

先生は何もいっていなかったけれど、クラスの全員が一夏の事を疑った。

「……一夏。もしかしてあんた……」

「……やってねえよ。ちー姉さんにかけてもいい。俺は知らん。風

邪じゃないのか？」

一夏はそういったけれど、私も弾もそれを信じることはできなかった。

「あー、昨日から休んでいた○○だが、昨日骨を折って入院中だそうだ」

次の日に、担任教師にそう聞かされるまでは。

……えっ……と……。

弾と顔を見合わせる。どうやら一夏は本当に何もしていなかったらしい。

一夏の方を見ると、私達にだけわかるように少し顔をあげて、口元だけでニヤリと笑っていた。

――俺は、知らないと言ったはずだが？

そんな声が聞こえてきそうな表情で、一夏は笑っていた。

「……すか～……」

……そして、すぐに眠った。

「……で、一夏。釈明は？」

「それでも俺はやってない……ああ、ちなみに俺今日は飯持ってきてないから」

「「はぁ？」」

……そう言えば、一夏は千冬さんがいないとすっごい家事が大雑把になるんだった。それも、生きてく上では一番大切な食事が。

……で、今は千冬さんは家に居ないらしいし、よく私の家の中華料理屋に来て食事をしていっている。

……そっか。つまりまたお弁当をしっかりつくってもらわなきゃ……

「って違う！話を逸らすな！」

「お、バレた」

あぶないあぶない、また話をうやむやにされちゃうところだった。

「まあ、きっと偶然だよ、偶然」

一夏はそう言った。私の目を見ながら、いつもと全く同じように。

「……そう。じゃあいいわ。食べましょう」

「……まあ、鈴がいいって言うなら良いけどよ……」

私が引くと、弾も一緒に引き下がる。一夏はそれを確認すると、近くにいた弾を抱き枕にして寝始めた。

「だから飯だっての。……ダメだこいつ。起きる気配すらねえや」

「しょうがないわよ。一夏なんだし」

「……それもそうだな」

弾は諦めて腰に抱きついたままの一夏の頭を撫でて、それから食事を始めた。

## バンド結成、四人組

昔もやっていたので軽くバンドを組んでみることにした。ちなみに今居るのは俺と鈴と弾とカズの四人だ。

「ちなみに本名は御手洗数馬だ」

「……え？　御手洗（おてあら）いどこか？」

「一夏。お前の間違い方は悪意にまみれてるよな？」

へー、悪意にまみれてんのか。そりゃ大変だ。

まあ、バンドでやる予定の音楽が全部ボカロのパクりだって所には悪意が満載かもしれないけど。

「仕方ないだろ数馬。こいつは一夏なんだから。……一夏俺の名前、フルネームで」

「だだんだん」

「俺はバイキンマンの作ったロボじゃないからな？」

へー。まあ、知ってるけど。違うだろうと思いながら言った。後悔はしない。後悔する暇があるなら寝る。

「……これが一夏だ。お前も早めに諦めとけ」

「……そうするよ」

弾とカズは揃ってため息をついた。

……まあ、しばらくは暇だしゆっくり上達していくとするか。目標は……そうだな、『初音ミクの消失－Ｄｅａｄ　ｅｎｄ』を中学三

年までにマスターすること。たぶんできるだろ。

「バンド名はどうするの？」

「そんなん後回しだ。今は上手くなることだけ考えて、上手くなったらまた考えよう」

それがいいよな？　多分。

学校の設備を借りられなかったので、千の顔を持つ英雄を使って楽器やら何やらを作った。ほら、音波って突き詰めていけば衝撃波で、アンプやスピーカーはそれを大きくするものだろ？　武器だ武器。平和に使うと楽器だけど。

それで練習していったところ、なぜか全員妙に上達が早い。もしやこれが原作キャラ補正なのかもしれないと思ったが、困ることではないのでスルー。むしろ嬉しい。

お陰で弾はドラム系統打楽器専門、カズはどれも平均的にこなせるキーボード、鈴がギター系統弦楽器とボーカルの特化、で、俺がベースかボーカル、というか全部それなり以上にできるという、奇妙なバンドができてしまった。

「勝算は考えない♪　絶対なんか有り得ない♪　君の言葉が聞きたい♪」

鈴も弾もカズもノリノリで演奏したり歌ったりしている。ってか上達速すぎだろどう考えても。

……いや、まあ、問題はないんだが。

「そう言えば、一夏ってちゃんと起きてるときはなんか凛々しくなるわよね？」

「あ、それ俺も思った。いつもは可愛い系の顔してんのに、喧嘩とかシリアスな時とかはかっこいい系の顔になるよな。何でだ？」

……へー……そんな風になってたのか。そりゃ驚きだ。

だけど俺に言われても知らねえものは知らねえんだよな。

「あー、あれじゃね？　体質」

「「「どんな体質だ」」」

だから知るかっての。

「もしくはあれじゃないか？　日頃の行い」

「日頃の行いでそんな変化があるわけないでしょ」

だから知らんと。

……あ～……眠……。最近ちー姉さんが帰ってこないからちー姉さん分が不足しがちなんだよなぁ……まあ、代わりに鈴とか弾に頼んでるんだが、鈴は暑くなってくると抱きつかせてくれないしなぁ……。

……悲しいけどこれ、現実なのよね。

今度体を冷やす方法考えないとな。性能（スペック）だけならラカンと同格だし、気合いとノリと勢いでなんとかなるだろ。

ただ、気を大っぴらに使うわけにはいかないから、色々考えねえと。

……それにしても眠い。

「あ、ほら縮んだ。何で着てる服も一緒に縮むのかしら」
「知らねえよ。もう『一夏だから』でよくないか？　一夏だったら身長が十五センチ伸び縮みしても仕方ねえって考えようぜ？」
「そうそう、あんまり気にしてると禿げるぞ？」
「禿げないわよ！」

鈴が殴ろうとしてきた。ちょっと痛そうだったので回避。腕を押さえてオンザ俺の膝。

「そう言やぁ、そうやって鈴を抱いてるときも高いままだよな」
「ちっちゃいのはこうした方が抱き締めやすくて良いからな。あとは気合いだ。人生気合いと勢いとノリである程度はなんとかなる」

基本はな。

……すか～……。

ｓｉｄｅ　だだんだん

「鈴、ちょっと待っててくれるか？」
「あーはいはい。早めに終わらせなさいよ？」
「わーってるって」

……おい作者。ふざけんなっての。リテイク求む。

side　五反田　弾

……よし、オッケーだな。

「それにしても一夏は色々と非常識だよな」
「今弾が言ったばかりじゃない。一夏なんだから仕方無いわよ一夏ならきっといつか生身でＩＳを圧倒してくれるわ」
「いくらなんでもねーよ」
「さすがにそれはねーよ」
「じゃあ弾とカズはいつか俺が生身でＩＳに勝ったら飯おごれよ」
「「「起きてた！？」」」

なん……だと……？　一夏がこの時点で起きてるとは……。

「「天変地異の前触れか！？」」
「体内から爆破するぞてめえら」
「まあまあ。一夏だってこういうときはあるわよ」

鈴はそう言いながら自分を後ろから抱き締めている一夏の頭を撫でる。

……背と位置が逆だったらどう見ても母と息子の休日の一幕なんだけどな。

……練習すっか。

## 約束、対する返答

織斑一夏だ。ちなみに偽名と言うかハンドルネーム等では前世の桜道を使っていたりする。
……普通にどうでもいいな。うん。

「はい一夏。食べなさい」
「……あむ……うまい」

うん、最近鈴の料理の腕の上がり方が尋常じゃないな。父親に教えてもらっているのか？

「そうでしょ。……でも、まだ酢豚しか作れないのよね」

鈴は少し威張ったように胸を張り、それからなぜかしゅんと沈んだ。
理由は知らんが、悲しげな顔は嫌いだ。

「まあまあ。他のも少しずつうまくなっていけばいいだろ。人に食わせて問題ないくらいうまくなったら、味見させてくれ」
「……なんなら、毎日酢豚をつくってあげようかしら？」
「栄養偏りそうだから却下。レパートリー増やしてからもう一度来い」

そう言うと少し不機嫌になったが、俺に弁当を食わせる箸の動きは止まらない。

「……一夏よぉ……。お前はもう少し女心を理解して行動に移せよ」
「うっせ……あ～……むぐむぐ……」

……やっぱ美味いな。

バンドの練習を終わらせ、弾と鈴と三人で帰る。

「じゃあな、一夏。鈴。また明日」
「そうだな……ふぁ……」
「全くもう……また明日ね。弾」
「いいっていいって。どうせ一夏だし、聞きゃしねえよ」
「……それもそうね」

そう言って、弾と俺達は別れることになる。
これはいつものことなんだが、毎回毎回なんとなく妙に悲しくなってしまう。何でだろうな？
……まあ、割とどうでもいいけど。

そして鈴としばらく歩き、また分かれ道に差し掛かる。

……この場面、なんか『夕日坂』の歌詞にあったような気がするな。
今度はそれでも楽譜にするか。

「ねえ、一夏」

そんなことを考えていると、急に鈴に話しかけられた。いつもよりシリアスな空気である気がするので、俺もしっかり起きる。

「……ちゃんと聞こうとしてくれてありがと。……一夏は、私の料理のレパートリーが増えたら、毎日私の作った料理を食べてくれる

？」

鈴はいつになく真剣だ。目には冗談の色が……ほとんど無い。

……まあ、それでも俺の答えは変わらないんだが。

「俺より上手く作れるようになったらな」

……まあ、原作から考えると中々難しいとは思うが、できなくはないだろう。頑張っていれば。

「言ったわね？　絶対一夏を越えてやるんだから！」

ビシッと俺を指差す鈴に、僅かに苦笑が漏れる。もう辺りの空気はいつもの物に戻っている。

「期待しとくよ」

それだけ言って、俺は鈴と別れて歩き出した。

ｓｉｄｅ　鳳　鈴音

「父さん。私に料理を教えて！」

一夏と別れ、家に帰ってすぐ。私は父さんに思いっきり頭を下げた。

この家で一番料理が上手なのは父さんだ。一番下手なのは私だ。だから私は父さんに頭を下げる。

父さんは最初、何がなんだかわからないみたいだったけれど、私の説明を聞いてすぐに頷いてくれた。

私が言ったのは、好きな相手がいること。それがよく家に来る一夏だと言うこと。一夏に告白紛いのことをして、自分よりも料理が上手くなったらと答えられたこと。だいたいその三つ。

そのうち二つは父さんと母さんに知られていたけれど、三つ目のことはさすがに知らなかったみたいだ。

……まあ、知っていたらどこの一夏か聞きたくなってくるけれど。

それから私は毎朝早くに起きて、父さんが仕込みをしているところを見たり教えて貰ったりして料理を習う。もちろん朝だけじゃなく、毎日家に帰ってからも父さんが料理を作っているところを覗いた。

父さんは料理をしているときは無口であまり教えてくれなかったけれど、店が終わって時間ができると私に丁寧に教えてくれた。

酢豚もこうして教えてもらったので、包丁の使い方や料理の基本はある程度わかっている。

当然だけれど、やっぱり父さんは私よりずっとずっと上手い。私が教えてもらえることだってまだまだたくさんある。

頑張って、一夏に追い付くんだ。

## いつものこと、いつものこと

今日は暇な日曜日。いつもの通りに寝続けて、十二時ごろに目を覚ます。
昨日寝たのが九時だったから、十五時間睡眠達成。よしよし。

昼を食べて風呂に入り、一応体を起こす。するとなぜか俺の体は大きくなる。
眠いときは百四十八センチで、起きると百五十七センチになるが、理由は知らない。
……まあ、特に問題はないから構わないが。

……ああ、そういえば石鹸がもう無いな。やっぱり頭も体も石鹸だと減りが早い。
ちなみに髪を何で洗っているかと言う質問に石鹸で適当にと答えたら回りの反応が怖かった。鈴も

「石鹸……石鹸でこんな……さらさら……」

とぶつぶつと繰り返していて怖かった。俺の髪を撫でている手がずっと優しいままだったのが救いと言えば救いだった。

そして同じように体を洗うのも顔を洗うのも同じ石鹸だと答えたら、銘柄を聞かれた。ちなみに鈴は今度は俺の肌を撫でていた。

「……すべすべ……さらさらで……しっとりプニプニ……」

……おお怖い。

石鹸も千の顔を持つ英雄で作っている（滑らせて罠にしたり、普通に投げつけたり、後は食べさせたりすればいい。ほら武器だ）が、いくらなんでもこれをわざわざ言ってやれるはずもなく、仕方無く自作と答えたところ、さらに周りが騒がしくなった。
具体的にはその石鹸超欲しいといった内容だが、やらんと答えておいた。

とりあえず新しい石鹸を出しておいて、食料品の買い物に行く。うどんは自分で作った方が美味いんだ。

と、言うことで買うものは強力粉。本来は中力粉で作るのが普通なんだが、コシは強い方が好みだからこっちで作る。食べることは寝ることの次の次に好きなことだ。作ることも同列に入るが。

……で、ここからが織斑一夏（小説の主人公）の『いつものこと』。

歩いてみれば無理矢理なナンパを見付け、それを止める。喧嘩になることもあるが、さっさと黙らせて逃げる。

逃げる途中で五月蝿い連中がたむろしていたので、ＩＳのライアーズマスクで顔を変えて粛清してから公衆電話で警察に電話。そして逃げる。

スーパーに着けば平和になるかと思いきや、何故か運良く（？）セールの放送が入った時にその棚の前に居て確保したは良いものの、子供が泣きそうになっているのを見て仕方無く手に入れたばかりのセール品を手放すはめに。

帰り道では何もないことが多いが、たまーにお礼参りに来るやつが

いるので撃退。ニアデスハピネスは本当に便利だ。

その他にも買い物袋が急に破れて落としてしまった物を拾うのを手伝ったり、お使いの途中だったらしいクラスメイト（名前は知らない。間違っていたら言えるが）が俺の目の前で落とした財布を届けたりと、小さいが妙に頻度の高い事件が起こる。

……あーやだやだ。俺はのんびり寝てられれば幸せだってのに。隣にちー姉さんが居れば完璧だ。

家に戻ってうどんを作る。まずは濃い塩水と小麦粉を混ぜて捏ね、一つの塊になるまで捏ねる。
それをいつもは伸ばして畳んで切って茹でるんだが、今回は時間もあるので切らずに全部手で伸ばして茹でる。
初めのうちは難しいが、慣れればどうと言うことはない。一人前程度なら五分あればできる。ちなみに切る方なら一分半だ。

そうしてできた麺を茹でて食べる。卵を落として月見うどん。ところろを入れても美味い。うどんはまず間違えないから安心できるよな。

……よし、次はピザを作ってみよう。運のいいことに窯を置けそうな場所が近くにあるし、それで焼けばいいだろう。
窯はもちろん千の顔を持つ英雄で作り、火は武装な錬金の栄光の火焔でいける。五千百度まで温度を上げる必要は無いから、楽なもんだ。

……そうだな。ちー姉さんが帰ってきた時にやろう。獣耳シリーズ九号、九尾の狐（金色に近い狐色）で！

……ちなみに、五号は普通の狐、六号が兎（白）、七号が馬（恐ら

く）、八号が羊（耳だけでなく小さな角付き）だ。十号はネズミ。

ちー姉さんは、喜んでくれるかね？

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

息を大きく吸い込んで、吐く。それを五回繰り返してから、ゆっくりとドアのノブに手を伸ばす。

最近の一夏は、私が帰るときは確実に獣耳をしていた。

時には犬、時には猫、時には羊、時には狐、時には兎と種類は様々だったが、それらは毎回私の愛の奔流を呼び起こしてきた。

故に私は深呼吸をして、今までの一夏の姿を思い浮かべる。

……よし。愛の噴出は無い。これで私はまだ戦える！

「あ！お帰りちー姉さん！」

……そう思っていた頃が、私にもあった。

窓から差し込む夕焼けの光を反射して、黄金色に輝くとがった耳。

ゆらゆらと大きく揺れながら、キラキラとした光を反射している九本の尻尾。

そしていつものことながら、実に嬉しそうな一夏の微笑み。

それに良く見てみると、今回はなんと頬には片側三本ずつの長い髭のオプション付き。

「……ちー姉さん？」

その言葉を聞き終わった後、私は三十秒も持たずに意識を飛ばされた。

……く……これも禁止せねば……っ！

その事を伝えた時、耳と九本の尻尾が一斉にしゅんとしたのを見てまた撫で回したことは、当然言うまでもない。

# 修行中、覗くべからず（前書き）

そろそろ本編と言うか原作開始まで行こうかなぁ……

## 修行中、覗くべからず

修行の内容。それは、ラカンの身体能力の中に含まれている『気』の使い方に関してだ。
原作でラカンは気を使って様々な事をしてきた。例えばＩＳのシールドバリアーを抜いて絶対防御を発動させられそうな斬魔剣弐の太刀や、気を圧縮して撃ち出すラカン・インパクト。瞬動もそれに入るだろうし、何より肉体強化だ。

外見はともかく、中身のスペックは同じ俺だができないことはある。
それは恐らく、今までに気を使っての修行をしてこなかったからだと思い、こうして修行することにしたわけだ。

……訳なんだが……本当に気合いとノリと勢いと根性で大体の事はできるのなこの体。びっくりだ。
しかも最低限だからどんだけ寝ててもそれ以下にはならないし。

ちなみに一番驚いたのは、気合いで心臓止めたままでも五時間くらいなら普通に行動できたこと。これなら夏場に鈴を抱いて寝れるな。鈴暑いの嫌いだけどこれなら暑くないし。
……心臓止めると体が勝手に冷えてくのな。呼吸も止まるし。それも五時間くらいまでなら無理なくいける。無理すれば多分半日いける。夏場にはほんと重宝することになりそうだ。

……なんて言っても周りからはただ寝ているようにしか見えないだろうが。

「いっくん？　……なんだまた寝てるのか」

ちょうど今の束姉さん見たいに。

……一応、ドアに張り紙しといたんだけどな。入るべからずって。

……束姉さんだし、仕方無いか。

「……あれ？　いっくんなんかちっちゃくなってない？」

ああ、なってる。基本は前に言った辺りなんだが、ある程度調節できるらしい。すごいなこの体。

ちなみに現在百二十。鈴よりちょっと低いくらいだ。

束姉さんはそんな俺に嬉々として膝枕をする。見えないが多分膝枕。

とりあえず近付いてきてくれたので抱き締める。

……束姉さんって運動してないわりには腰回りとか細いよなぁ……

今の縮んだ俺でも楽に腕が一周するぞ。

……あ～、眠い……すか～……。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　束

いっくんが寝ているところにお邪魔する。寝ているときは、起こそうとしなければ大体の事をいっくんはさせてくれる。

例えばちっちゃくなったいっくんのほっぺをぷにぷにしたり、さらさらの髪を撫でたり、いたずらでお化粧させてみたり（凄く似合っ

てた）、獣耳十一号の竜の角を装着してみたり、十二号の白猫（首輪と鈴と肉球付き）を装着させてみたり……おっといけない愛（ラヴ）が溢れちゃうところだった。

ちなみに白にゃんこの時に頭を撫でてみたら、ほっぺを私の手にすりすりと擦り付けてきて、

「……ぅにゃ……」

……っと、思い出し愛（ラヴ）が。まったくいっくんの可愛さは犯罪だよ犯罪。こうなったらもうお持ち帰りしちゃうしか……

「たばね？」

ぎっくーん！

side　織斑　千冬

一夏を起こさないように束を粛清したあと、私は一夏に抱きつかれたままソファに座っていた。

前に五反田相手にやっているのを見た、抱きつきながら膝枕をされている状況なんだが……これはまた威力が高い。

だが、修行に修行を重ね、耐性をつけた私はこの一夏が相手でも問題は

「……ぅに……」

とりあえず私は額を殴った。落ち着け私、一夏は確かに可愛いが、まだ見ていたいだろう？　我慢だ私。

深呼吸をする。手は勝手に一夏の頭を撫でていて、こりこりとした耳の感触があったり、頭の真ん中に乗せると左右の耳が私の手を挟み込むように動いたりするが、落ち着け。これくらいならまだ大丈夫だ。

そう、大丈夫だ。問題な

しゅるり、と頭を撫でていない方の私の手に一夏の長い尾が絡み付いてきた。

一夏の尾は私の手のひらの中を通り抜け、腕に絡み付く。

……落ち着け、このような修羅場などいくらでも潜り抜けて来ただろう。

思い出すのは白騎士を駆り、束のハッキングによって発射されたミサイルを撃ち落としたあの日の事。あれに比べればこれは

「……んぅ……」

一夏が私の膝に頬をすりすりと擦り付ける。

……五反田は、良くこれに耐えたものだ。

私には……無理だ。

……しかし、一夏に血をつけるわけにはいくまい。

私は近くにあった袋に穴が開いていないかを確認する。……穴はないか。よし。

愛が噴出した。

## 文化祭、ゲリラライブだ！

以外と好評でした、まる。

……駄目か？

「駄目よ。ちゃんとしなさい」

「……しかたねえなぁ……」

そう言いながら鈴に抱き着いてみる。心臓止めてるから暑くはないはずだ。

……さて、それじゃあ文化祭のところから話すか。

……眠いから夢の中でな。

……すか～……。

「よし、上手くなったし文化祭でライブをやろう。たしか屋上はなにもなかったはずだから、そこで」

「いきなりね。」

「一夏だから仕方ない」

「そうね。一夏だもの」

「一夏だしな。仕方ない」

随分な言いぐさだなまったく。別に問題は無いから構わないが。

それから全員の空き時間を合わせて、放送機材をジャックする。やり方は秘密と言うことで。
演奏する曲の楽譜を用意して、全員で一度流してみて問題がないことを確認。こういうのは準備段階がちゃんとしてないとつまらないからな。

バレないようにするには五曲程度が限界だから、その程度に。扉は向こうからは開かないようにしたし、問題ない。観客は俺達が始めた時に偶然そこにいた客と、文化祭に来ていた客。というか学校にいる全員だ。

「……うっわぁ……無茶するわねぇ……」
「ふふふ……でも、その方が楽しいだろ？」
「……否定はしないわ、ってなに撫でてんのよ」
「ん？　鈴は素直でかわいいなって思ってつい。好きだよ？」
「私も一夏が好きよ？」
「……おーい、いい雰囲気なのはわかったからクラスの方の準備もしにいこうぜー……」

弾に呼ばれて仕方無く移動する。耳はついてないがまた小さくなって。

「……何で小さくなんだろうな？」
「……すか～……」
「歩きながら寝るのはあぶねえぞ……」

弾が背を貸してくれたのでありがたく乗る。
……おお、いい感じの揺れだ。眠気がさらに増して……すか～……
……。

起きたら何故か頭に十三号の狸耳、腰には尻尾がくっついていて、周囲が真っ赤に染まっていた。

とある女子生徒は壁に頭をガンガンとぶつけながらなにかを呟き続けていたし、男子生徒は二割ぐらいが姿を消し、五割くらいが血塗れで倒れ伏し、三割ほどが鼻を抑えてうずくまっていた。

「……わぅ？」
「ぐべらっ！？」

なんとなく口をついた言葉が響いたら、何故かうずくまっていた男子生徒の殆どと女子生徒の七割が真っ赤になり、幸せそうな顔で血を噴き出した。

「……なぁ、何でこうなったんだ？」
「……つまり、お前は可愛いってことだよ、一夏」

へー……あんま嬉しくねえなそれ。

そう考えていると、弾と鈴の二人に撫でられる。

「……尻尾は……優しくな……？」
「お、おう、すまん」

……はふぅ……。

……すか～……。

side　五反田　蘭

今日はお兄の学校の文化祭。日曜で暇だったから行ってみた。
なんの期待もしてなかったんだけど、そこで私は、運命とも思える出会いをした。

お兄がバンドをやっていたのは知っていた。ある時お兄が楽しそうに話していたのを聞いたから。
でも、あのお兄がこんなに上手にドラムを叩いているなんて信じられなかった。

けれど、何より信じられないのは……一人だけ使う楽器をころころ変えているお兄と同じくらいの男の人を見たときに起きた。

その人を見ると、いきなり心臓が跳ね上がったような衝撃が私を貫いた。
そしてその衝撃が薄れてくると、今度は何かがぎゅうっと胸を締め付けてくるような感覚が私を襲う。

私は今まで、一目惚れという物を信じてこなかった。それどころか、『そんな物があるわけ無いじゃん』と馬鹿にしていた。

……そのときの私は、今思うと凄く馬鹿だった。
なぜなら、今、私はそれを体験しているから。無いとあの時断言した、一目惚れを、体験しているから。

その人は、お兄の所に行ったり鈴さんの所に行ったりしながら、楽しそうに歌い、嬉しそうにベースを弾き、そしてきれいな笑顔で私

を見つめていた。

その日は眠れぬ夜を過ごした。目を閉じるとあの人の笑顔が浮かび上がってきて、どうしても眠れないのだ。

どきどきといつもより騒がしい胸を抑え、私はこれからのことを考える。

まずは、お兄にできるだけ詳しくあの人のことを聞こう。名前や歳、好きな食べ物嫌いな食べ物、生年月日などなど、聞きたいことはたくさんある。

そして願わくば、未来であの人の隣に私が立っていますように。

……その場面を想像しただけで、頭が沸騰しそうになった。

## 絶好の昼寝日和、故に寝る

獣耳第十六号、ヤマネを着けるといつも以上に眠くなる。
ちなみに十四号はリス、十五号は鼬。どれも大きな尻尾に包まれ、丸くなって眠るのがいい。ヤマネの尾は少し細いが、それでも人間サイズともなれば十分に掛け布団くらいには使える。

鈴や弾にはよく尻尾を撫でられたりいつもとは逆に抱き締められたりしているが、他人の感触があると気持ちよく眠れていいよな。二人とも最近は撫で方が上手になってきて……はふぅ……。

「ッ……一夏？　そんな顔したら襲われちゃうわよ？」
「……んー……鈴と弾なら別にいいぞー……」
「いや俺は襲わねえぞ？」

へー……。まあ、それならそれで一向に構わないけど、鈴はなんか割と本気で考え込んでるぞ。

「……そんなこと言うと……ほんとに襲うわよ？」
「鈴、待つんだ鈴。ここ俺んちだからな？　俺の部屋だからな？やらせねえからな！？」

なぜか鈴が怖くなったので、尻尾にくるまりながら転がって離れる。

「……っ！」

鈴が鼻を抑えてうずくまった。ぶつぶつと落ち着け落ち着けと唱えているように聞こえる。

「……何やってんだよ鈴……」
「……五月蝿いわね。あんたには見えてなかったからそんなことが言えるのよ……」
……何が見えてたんだろうな？　……おっと、シャツの裾がめくれて臍が出てた。風邪引きたくないし、しまっとこう。↑原因
「……ああ、なるほど。あれか」
「……わかってくれたみたいね」
ごそごそと服を弄っていたら、弾と鈴に何らかの相互理解が生まれたらしい。詳しくは知らないが、別にいいよな？
「いいと思うわよー。だからはい、こっちに来る」
「おーい鈴ー。わかってるだろうがそこ俺のベッドだからなー？一夏に抱かれて寝るだけだったらともかく、それ以外には貸さねえぞー」
「じゃあ大丈夫よ。私は抱きついてくる一夏を撫でて悦に浸るだけだから。ちょっと血で汚れるかもだけど」
「汚すなよ」
「……すか～……んぅ……」
「……無理かも♪」
「使うな起きろ」

side　鳳　鈴音

一夏の長くてふさふさな尻尾を布団がわりに私と一夏は寝ている。
弾には悪いけど、最近一夏は弾に抱きついていることが多かったから我慢してもらう。

「いや、構わねえよ。鈴が一夏のこと好きだってのはよく知ってるからな」
「ありがと弾。友人としてだけど、弾のことも好きよ？」
「俺もだよ、鈴」

……あれ、確かこんなの一夏ともやったわね。と言うか一夏は私や弾以外にも言ってるわね。千冬さんとかクラスの友達とか。

……なんだかちょっと胸が痛いわね。嫉妬？

そう考えていたら一夏の尻尾が私の体を引き寄せて、ぎゅっと一夏に密着させた。
もふもふとした感触と、一夏の腕に包まれると……なんだか私まで眠くなってくる。

「眠くなったなら寝ちまえ。一夏が起きたら起こしてやる」
弾がそう言ってくれたので、私は安心して意識を手放した。

ｓｉｄｅ　五反田　弾

鈴が一夏と一緒に俺のベッドで寝始めてから少し。俺は寝ている二人（基本は一夏）の頭を撫でていた。

一夏曰くの十六号、ヤマネの尻尾は鈴によって抱き締められ、一夏自身はその鈴を正面から抱き締めて、幸せそうな顔をして眠っている。

……とりあえず写真を撮ろう。そして後で鈴に携帯で送ろう。千冬さんにも送っておいた方が良いか。

手に持った携帯電話のカメラを起動し、上からの全体、一夏と鈴のバストアップ（ツーショット）、一人ずつの顔のアップなど、五種類ほど撮ってから保存して携帯を閉じた。

……なんと言うか、こいつら絵になるよな。

写真を撮り終わってからまた撫でる。丸い耳が掌の中でくにりと潰れ、その度に一夏は潰されていない方の耳をピクピクと動かす。

……ビデオ撮るか。ハンディカメラどこにやったか……

ああ、あった。

中身のテープを確認。中身なし。よし、録画開始。

一夏を撫でる。ヤマネの耳がピクリと跳ねて、一夏がくすぐったそうな顔をする。

それだけでは飽きるので（とか言いつつ十五分以上それだけを続けていたんだが）、髪を撫でながらゆっくりと手を下に滑らせて行く。

ヤマネの耳から一夏本来の耳へ……っかしいな……俺は耳フェチじゃあないはずなんだが……何でこんなにも一夏の耳に心引かれるんだ……？　……とにかく移動する。指先に耳たぶの柔らかさが伝わり、一夏の喉から甘ったるい喘ぎ声に似た何かが……落ち着け俺。

……落ち着いた。深呼吸の力は偉大だな。流石深呼吸だ。

一夏を撫でるのを再開する。耳の縁をなぞり、耳たぶを優しく撫でる。
気が済んだのでまた少し下へ。頬を撫で、顎先に向けて指を滑らせる。

「……ん……っう……くぅん……」

鼻にかかったような一夏の鳴き声（合ってるのか？）の直後、一夏の顎先を撫でていた俺の指が一夏にくわえられていた。

……おい俺。なんで別に嫌じゃねえんだよなんでアリだなとか思ってんだよ考え直せよ俺。確かに一夏は可愛いが、男だぞ？　バンドの時のこいつを思い出せ、あんなにかっこいいじゃないか。確かに今は可愛いし、愛らしいし、守ってやりたい気分にさせられるがってよし待て俺、なんでいつの間にか意見が肯定の方に進んでいってるんだよ。だから一夏は男で俺も男で非生産的なこ

「……ん……ちゅむ……はぷ……」

……。

ここから先の記憶は無い。ただひたすら壁に頭をぶつけ続け、蘭にまで心配されたという記憶はあるが、それ以外のことは覚えていない。

ちなみにこの日、一夏と鈴は帰るのが遅くなり、半ば事後承諾で泊めることになった。
そして鈴が帰った後、携帯で例の写真を送ってやったんだが返事がなかった。学校で会ったときに聞いたら、愛情が溢れてしまったら

しい。

# 一人の夜、夢見る俺（前書き）

新キャラ登場

## 一人の夜、夢見る俺

ちー姉さんが帰ってこない日は基本一人寝をするんだが、やっぱり寂しいんだよな。
どのくらいかと言うと、

「やっほーいっくん！床下からプリティーチャーミーな束さんだよ！」

そう言って床下から現れた束姉さんを

ガシッ！（束姉さんの襟首を掴む）

ズルズル。（引きずってベッドへ）

どさっ。（ベッドに放る）

ぎゅっ。（抱き締める）

……そしてこのまま寝るくらい。
いつもだったらもう少し文句なりなんなり言うんだが、俺は自分の想像以上に寂しがりらしいな。前世じゃそんなことなかったはずなんだが……まあ、どうでもいいな。おやすみ。

しかし、もちろんこうならないときもある。束姉さんはちー姉さん以上にここには来ないし、他に来るやつも居ない。鈴や弾は泊まる

ことはまず無いし、カズはカズで来ない。他のやつは呼ぼうとも思わない。

仕方無く抱き枕やクッションを抱いて寝るが、どうにも味気ない。

まあ、それでも寝るんだが。

ｓｉｄｅ　一夏、夢の中

俺がいる。もう慣れてしまった織斑一夏の姿の俺だ。懐かしき桜道一哉の姿の俺はいない。

……まあ、別にいいけどな。

そう思ったら、いつの間にか織斑一夏の姿が増えた。俺も不思議そうな顔をしているだろうが、向こうの織斑一夏も負けず劣らず不思議そうな顔をしている。

なんとなく手に持った三毛猫耳をつけてやったら、その一夏《俺》はニコニコと笑い始めた。

その後ろにはなぜかまた一夏《俺》。まるで順番待ちをしているかのようだ。

俺は三毛猫耳をつけた一夏の頭を三秒撫でてから、一夏へ向き直る。またもやなぜか俺の手の中にあったとがった犬（これは多分コヨーテ。なんつーマニアックな）耳を付けて、撫でてやる。

するとコヨーテ一夏はぴくぴくと耳を動かしながら俺の手に押し付けるように頭をぐりぐりと動かした。

しかし次の一夏が待っていたので俺はコヨーテ一夏の頭から手を離

す。元気よく振られていた尻尾ととがっていた耳がしゅんと萎れたが、俺はコヨーテ一夏を三毛猫一夏の方に行かせて次の一夏に顔を向けた。
コヨーテ一夏は少しの間俺を見上げていたが、やがて諦めたのか三毛猫一夏に抱きついて眠り始めた。

そして俺はまた手に持っていた……ライオン（？）耳を一夏につけてやる。細長く、先だけがふさふさな尻尾がいつの間にか装着され、俺の足に絡み付いている。
そんなライオン一夏を撫でて、また次の一夏へ。……全く、俺にしては妙なことをしているな。

こうして次から次に出てくる一夏に耳を装着し続けていたんだが、百七人の一夏に耳をつけたところで一夏が出てこなくなった。
しかし俺の手にはまだ耳が一つ残っている。……これは多分、犬（ボルゾイ）だな。
一応、自分につけてみる。するともう手に獣耳は出てこない。

俺は先に行かせた一夏達の所に行く。すると一夏達はそれぞれいくつかに固まって眠っていた。人気があるのはヤマネ一夏とリス一夏、鼬一夏、熊（北極熊）一夏、犬（恐らく黒ラブ）一夏などの暖かく柔らかな毛を持っている一夏だった。
そこに俺が行くと、ふっと目を醒ました何人かの一夏達が俺の所に寄ってきた。

俺は寄ってきた一夏達を抱き締めて眠った。いつの間にか俺を中心に円形の一塊になっていたが、暖かいので問題ない。
俺の腕の中で、チワワ一夏が鼻をぴすぴすと鳴らしていたり、背中

にハムスター一夏がぴったりとくっついてぷるりと震えることもあったが、俺を含めた一夏達は一人も起きることはなかった。

目が覚めると、朝だった。一人寝だったはずなのに、なぜか腕の中だけではなく背中も暖かい。

目を開けると、身長三十五から四十五センチの俺がいた。周りを見渡してみると、どうやら三人居るようだ。全員に獣耳が生えていて、それぞれ秋田犬一夏、白猫一夏、黒兎一夏のようだった。

……へー、束姉さんの獣耳は凄いな。まさか体を持つようになるなんて。

とりあえず俺は起き上がり、朝の飯を作る。間単にだが、それで問題は無いだろう。

小さな一夏達を起こして飯を食わせ、それから面倒だけど学校へ。

秋田犬一夏は俺の腕の中、黒兎一夏と白猫一夏は留守番をしている。

……どうなることやら。割とどうでもいいけど、少し気になる。

ｓｉｄｅ　鳳　鈴音

学校で一夏に会った。いつも通りに挨拶しようとして……そこから記憶がない。ただ、犬耳（秋田犬）をつけた一夏が小さな一夏、略してぷちかを抱き締めていたのは覚えている。

弾がぷちかを撫でたら、ぷちかが弾に甘えるように指をなめて、一

夏が弾に寂しそうな顔を向けて撫でてもらっているのも見た……気がする。ちなみに周りは血塗れの地獄絵図（鼻血）、誰もが一夏とぷちかの魅力にやられていた。先生？　ぶっ倒れてたわよ？　確か。

それから私は一夏にぷちかを抱かせてもらって、ぷちかを撫でていたらぷちかが私の指をぱくっと……。起きたら保健室だったわ。隣にいた一夏を見る限り、弾もきっとやられたわね。

ｓｉｄｅ　五反田　弾

ぷちか（鈴命名、既に広まっている）を鈴に預けた一夏は、今は俺の膝の上で座ったまま寝ている。

ぷちかの三倍程度しかない（また少し小さくなってないか？）一夏の頭を撫でると、一夏はくすぐったそうに身をよじる。

ぱたぱたと尻尾が俺の腹を撫でて少しくすぐったいが、それ以上に一夏が可愛くて仕方がない。

「……くぅん……♪」

……もう俺変態でいいや。一夏が可愛過ぎるのが悪い。

いつもは抱き締められてばかりの一夏の腕を押さえて、代わりに俺が一夏の体に腕を回す。

男としてはかなり華奢な体を抱き締めると、一夏はもぞもぞと動いて俺の体に一番フィットするところを探して移動する。これがフィッティングか。なるほどなるほど。

しばらくして納得の行く位置を見つけたのか一夏は動きを止め、俺の体に体重を完全に預けた。

「……だぁ…ん……♪」

一夏はそう言って、首もとにあった俺の手に頬を擦り寄せた。

……ぐがふっ!?

起きたら保健室に居た。隣にいるぷちかを見る限り、鈴もやられたらしい。

# 一夏が可愛すぎて、生きるのが辛い人達

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

家に帰ると、いつも通りに一夏が出迎えてくれる。……今回は山猫か。
犬のように尾をブンブンと振られる事はないが、これはこれで私の脳髄を直撃してくる。

それは例えば食事中。猫系統の耳をつけている一夏はなぜか本当に猫舌になるらしい。しかしいつもは普通に食べているため、食べてから目を白黒させる。
そのすぐ後に涙目になって熱いスープにふーふーと息を吹き掛けて冷ましている一夏は、実に可愛らしい。

その他にも、例えば食事も洗い物も終わり、暇になった時間。一夏は大抵私の膝の上に頭を乗せて丸くなる。その際にしなやかな尻尾を私の腕に絡めてくることがある。
その尾を撫でてやればくすぐったそうに鳴き（これが一番正しい表現だろう）、頭を撫でる手に頬を擦り寄せる。
少し尾に爪を立ててみるなどの悪戯をしてやると、ぞわっと尻尾の毛を逆立ててから泣きそうな目で

「……ゃ……やぁ……」

と懇願してくるのだ。

この時の一夏はなんと言うか、守ってやりたいと思うと同時に、も

っと苛めてやりたくなってしまう。
しかし、あまりやりすぎると拗ねて自分の部屋に閉じ籠ってしまうので注意が必要だ。その拗ねた姿もまた可愛いのだが。

猫一夏は何故か猫舌になると言ったが、それ以上に大きな違いがある。それは、猫一夏の舌は本物の猫のようにざらざらとしているのだ。

それに気がついたのはしばらく前のこと。白猫一夏を膝にのせて顎先を撫でていた時に、少し手元が狂って一夏の唇に触れてしまった事があった。

その時にぺろりと指先を舐められ、そして私は一夏の舌がざらついていることに気が付いた。

ちなみに犬の時の一夏の舌はざらつきが少ないが、妙に熱い。だが私はそれらに関係なく、一夏への愛情を滴らせるのだった。

……まったく、可愛い奴め。

ｓｉｄｅ　鳳　鈴音

「これより、ＩＩＩ《いっぱいいっぱい一夏》の月例会議を行うわ。欠席者は？」
「赤崎が一夏の寝顔写真（ぷちかと一緒）を秘密裏に所有していましたので粛清しましたが、他には」
「そう。わかったわ」

まったく。一夏の寝顔写真の不法所持ですって？　そんなことをしたら粛清されるとわかりきっているのに、どうしてそんなことをするのかしらね？

「今回の議題は、新たに現れたぷちかについてよ」

周囲からざわざわとした声がした。それが止むまで無言を貫くけれど、それは数秒で必要なくなった。

「協力感謝するわ。それでぷちかの話だけど、今までに一夏が学校に連れてきた七種の他に、少なくとも三種が居ることが一夏の言葉から判明したわ」

『なっ！？』

流石のみんなもこの報告には驚いたらしく、十秒過ぎた今でもざわざわが収まらない。

「そんな馬鹿な！それでは我々の体が持たないぞ！？」

「いや、それ以前の問題だ！存在を知っているのにその姿も何も知ることができないと言うのは由々しき問題だろう！」

「静かになさい」

私が呟くと、一斉に静かになった。一夏と一緒にやった発声訓練はこういうときにも使える。

「種類とおよその生体については調べがついているわ――弾」

「おう」

ざわっ！と動揺が広がりかけるが、弾が持っている写真を見た途端

に全員が鼻を押さえた。

「……見てわかると思うけど、垂れ耳わんこなぷちか達よ」

ちなみに私は直視はしていない。一夏の前だったらともかく、一夏のいないところでこれをみたらどうなるかわからないから。その点、弾はすごいと思う。あの一夏を見てもその愛の全てを体の中に押し止めることができるなんて、あの千冬さんでも無理なことをやってみせる。

……最近はなんとなく一夏の父親になった気分だからと言っていたけれど、それでも可愛さに発狂しかけることもあるそうだ。

魔性の男ね。一夏。

## さよなら、またいつか

……さて、今日は残念なお知らせがあるぞ、俺。
なんと、ベスト抱き枕トップスリーの一角、鈴が中国に行ってしまうらしい。実に悲しい。
ちなみに一位はちー姉さん、三位は弾。それ以降は秘密だ。
秘密にした理由？　それも秘密。

とりあえずその事を聞いてすぐにお別れ会を開いてみた。ちなみに主催は俺。会場は俺の家。メンバーはバンド仲間と蘭ちゃん。鈴と仲の良いやつばかりを集めたつもりなんだが、実際のところもう少し居てもよかったのかもしれない。

鈴は中国まで行かなければいけない理由を話したがらないので、俺は聞かない。
それは面倒だからって事もあるが、聞いたところでなにも変わらないし、それ以前に一応知っているから。原作は七巻までしっかり読んでたからな。アニメは見てないけど。

しばらく会えなくなるわけだし、無理矢理でも涙よりも笑顔の方が良いだろ。

「……ありがとね。一夏」
「気にすんな。たぶんまた会えると思うしな」

俺が原作通りに動けば。
……仕方無い。動くか。束姉さんの手の上で踊るとか怖すぎるけど。

「それっていつもの『なんとなく』かしら？」
「そうだな。『なんとなく』だ」

……いつもの勘とは違って、今回のはなんとなくと言う名前の原作知識だが。
それでもまあ、鈴が笑ってくれるんだったら言った甲斐があったかね。まだ半分泣いてるけど。

「……そう。それじゃあきっと、また会えるわね」
「信用してくれて嬉しいよ」
「信用じゃなくって信頼よ」

騒ぎながらもぽつぽつと話は続く。

「弾とはまた会えるかな？」
「さてな。会おうと思えば会えるんじゃないか？」

原作には無かったからな。わからん。それに俺が織斑一夏になってるせいでその原作からも外れてるだろうし、そもそも俺がＩＳを動かせるかどうかもわからない。
……動かせなかったら動かせなかったで別に良いけども。それだけトラブルには巻き込まれなくなるだろうし。

ただその場合は次にいつ鈴に会えるかわからなくなる。やれやれ困ったな。

「ああそうそう、はいこれ餞別」
「え？　なにこれ？」
「お？　なんだもう渡したのか？」

「開けろ開けろ」

その中身を知っている弾とカズがにやにやと笑いながら鈴に渡したばかりのそれを開けとせかす。

鈴は少し慌てたように指を動かしてその包みを開けた。

「……これって……」

驚きの声を漏らした鈴に種明かし。

「今までに俺達が演奏してきた曲のＣＤ。特別編として蘭ちゃんの『トエト』も入っている世界に五枚だけのＣＤだ。大切にな？」

ちなみに弾が歌ってるのも俺が歌ってるのもカズが歌ってるのも鈴が歌ってるのも複数で歌ってるのも入った特製。中身は九十七分十二秒。

それを見て鈴は、ぽろぽろと涙を流し始めた。

「向こう行っても俺たちのこと忘れんなよ？　会長さん」

弾がにやりと笑いながら鈴の肩を叩いて言った。鈴はコクコクと頷いたが、声がでないようだった。

「また俺達のバンドで歌ってくれよな、副リーダー」

「うん……うん……っ」

カズは肩を叩いたりはしなかったが、鈴と視線を合わせて言った。

鈴はまたコクコクと頷き、そして涙声を隠すこと無く返事をする。

「鈴さん。これだけは言っておきます。……早く帰ってこないと、一夏さんを取っちゃいますよ。……だから、それが嫌なら……早めに一夏さんに顔を見せに来てください」
「……ふん。蘭のくせに……生意気ね。わかってるわよ」
「……ならいいんです。……お元気で」
「……あんたもね」

蘭ちゃんは目を擦って涙を払い、それから鈴に宣戦布告。ただ、なんか原作と比べて鈴だけじゃなく蘭まで大人になっている気がする。

……それでも俺はスルーするんだが。

「……言いたいことは大体言われちまったんだが……また会う時まで元気でな。鈴」
「もちろんよ。……絶対また、会いに来るから」

もう涙の浮かんでいない目を会わせると、そこにはいつもの大人で勝ち気な鈴の姿があった。
ごつっ、と拳を合わせて、それからまた弾達と騒ぎ始める。
俺はいつもよりちょっと手のかかった料理を鈴達に振る舞い、俺を含んだ五人はいつもよりハイテンションで夜を明かした。ちなみに全員徹夜で次の日ふらふらになっていたが、誰一人として後悔はしていなかった。

もちろん飛行場にも行く予定（学校はサボり。蘭ちゃんを除いた三人だけ）ではあるんだが、飛行場ではこういう宴会のような事はできないし、周りに迷惑になるので自重した。

そして飛行機に乗るためにトランクを引っ張って行く鈴は――

「一夏！弾！数馬！」

俺達に振り向いて、一呼吸。

「またねっ！」

――――とても綺麗な笑顔をしていた。

「……行っちまったな」

「……ああ。そうだな」

鈴の乗っているだろう飛行機を見上げながら弾が呟くと、数馬が少しだけ寂しそうに返す。

「まあ、またすぐ会えるさ。具体的には一年半もしないうちに」

「……それは……いつもの勘か？」

鈴と同じことを聞いてきた弾に、俺はニヤリと笑って返す。

「いや。いつも以上に当たる気がする勘だ」

……さて、帰るとするか。学校には休みの連絡を入れてあるし、問題ないだろ。

## 受験受験、そして原作までもう少し

鈴が中国まで行ってしまってからもう一年。学校がつまらなくなってしまったが、そろそろ中学卒業だ。
弾はさっさと推薦を取っていったので受験勉強には縁が無かったが、俺には普通に縁がある。

原作で『織斑一夏』が行こうとしていた藍越学園を受験することにしているが、恐らく束姉さんが何か介入してくるんだろうと思ってもいる。
……まあ、介入があったらあったで原作通り、無ければ無いで睡眠時間が美味しいことになるから別に良いけど。

……それにしても迷惑な話だ。カンニング防止のためってのはわかるが、わざわざ四駅も乗らなくっちゃ行けねえんだよ。カンニングした奴もげろ。男か女かも知らないが色々もげろ。
あ～～、めんどくさい。

そして結局、俺はＩＳ学園の試験会場でＩＳを動かし、かなりの有名人になってしまった。

……買い物に行くときにはライアーズマスク装備、家の周囲には常時チャフ、帰る時にはシルバーカーテンを使って姿を消す。まるで犯罪者が身を隠しているかのようだ。

ちなみにチャフだが、武装な錬金の原作では水滴をあらかじめくっつけておいたから霧になったと書いてあったので、水をつけずに散らしている。俺の家に勝手に入ってくる奴は居ないし、ちー姉さん

は帰ってくる日には連絡を入れてくれるため問題ない。
それでもテレビ局やどこぞの科学者が連日押し掛けてくるのでカメラを壊したりマイクを壊したり銃の装填されていない弾の雷管部分でチャフを爆破したりするなどと利用法はまだまだある。

……さて、やれることはやっておくか。

電話を掛ける。相手は束姉さん。確か原作の『織斑一夏』のＩＳは束姉さんの手が入っていたはずなので、今から色々とネタを仕込んでおいてもらうことにした。

「もしもし束姉さん？」
『いっくん！久し振りだね！元気かな？』
「……知ってるでしょうに。束姉さんのお陰で色々大変ですが、まあ元気ですよ」
『あ、わかっちゃった？』
「まあ一応」

……とは言え、原作を知らなかったら偶然だと思ってただろうけど。

「それで、多分日本政府から専用機が来ることになると思うんですけど、改造してもらえませんか？」
『いいよ。元々やる気だったしねー』

軽っ！

……まあ、束姉さんだし仕方無いか。俺の身長が伸び縮みするのと同じようにしょうがない。

『どんな風に改造してほしい？』

「ちょっと長くなりますけど、良いですか？」
『時間はいっぱいあるから大丈夫だよー。束姉さんにまかせなさい！』
やれやれ。いつまでたっても滅茶苦茶な人だな。俺が言える台詞じゃ無いが。
機体のコンセプトは、当たったらほぼ負けだから当たらないように頑張れ。つまりは機動力と反応速度の特化。ついでに原作に登場したとある武器を魔改造した物を標準装備。ただし防御は紙。耐久も紙。
『うふふふ、いっくん。この私が作る物がそんな不細工なものだと思うのかな？　私は完璧にして十全な篠ノ之束だよ？　そんな欠点なんて残すわけないじゃない』
「……えーと……コアの容量の方は？」
『小さいやつを直列で四つ、並列で五つの計二十個のコアをひとつに繋げてやれば大丈夫さっ！』
……いやまあ確かにそうすれば容量は大丈夫だろうが……良いのかそれ？　てかその前にそんなことできるのか？
……できるんだろうなぁ……束姉さんだし。
良くなかったら良くなかったで無視してやるんだろうなぁ……束姉さんだし。
「……流石は大天才にして大天災。ちょっと真似はできないや」
『私もいっくんのあれは真似できないよ？　自信を持って！』
「ぐらぐらぐら」
『わー揺れるー』

束姉さんはノリノリで返してくれた。

「あれ以外の武器はこっちの方で何とかしますので、よろしく頼みます」

『おっけぃ！泥舟に乗ったつもりで待っててねぇ？』

「沈みますよそれ」

それで電話は終わり。後は……

ちらりと分厚い参考書（原作だと資源ごみに出されたあれ）を見る。

……読むか。仕方無い。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　束

久し振りにいっくんからかかってきた電話。やっぱりいっくんはとっても鋭かった。いつもはあんなに可愛いのにねぇ？

いっくんは私のやったことに何となくで気付いて見せた。なにか隠しているような気もするけど、そのへんはいいや。

いまはいっくんに頼まれたＩＳをつくる。それが大事。

何て言ったっていっくんのお願いなんて久し振りだからね！束さんは頑張るよ？

コアを新しく作るところから始めて、それを既存のコアと組み合わせるから一週間はかかっちゃうけど、時間がかかる分いいのを作ってあげるからね。期待して待っててね。

ぱらりろぱらりらぺろ～♪

むむっ！この着信音はぁ！ちーちゃん！

## 原作開始、つまりは入学

入学式の前に荷物を用意しておく。主に着替えと洗面用具。あと鈴達の曲の入ったＣＤとＣＤプレーヤー。他の物は千の顔を持つ英雄でなんとかなるので置いていく。獣耳？　着替えの中に入っているが？

使い慣れた包丁も持っていこうかと思ったが、それは流石に不味いと思って自重した。武器だとか言われちゃ面倒臭いしな。

……原作ではラ……ラ……眼帯黒兎（名前を思い出すのを諦めた）が軍用のナイフを持ち込んでいたが、別にどうしても必要と言うわけではない。出せるし。

……さてと。そろそろ出発するかね。ＩＳ学園に。

……ふぁ……ねむ……。

現在の俺の身長は百三十八センチ。テレビや新聞に出ていた俺の写真は普通に起きていたので百八十一センチほど。明らかに違うんだが、本人だと言う証拠もあるし信じるしかないわな。俺はなんでも構わないけども。

そして入学式では立ちっぱなしで寝ていた。生徒会長がなにか言っていなかったような（言っていなかった、で正解）気がするが、どうでもいいわぁ……ついでに一組、一番前のど真ん中、原作通り。

背は小さいけどな！寝てるけどな！周りとか完っ全に無視してクッ

ション（千の顔を持つ英雄）を枕にしてるけどな！
ちなみに話は聞いている。副担任の……や……や……八坂真耶先生。お、これ当ってんじゃね？

……いや、無いな。名前の方は二文字だから覚えたけど、名字の方は確実に間違ってるな。断言できる。自慢はできないけどな。

「織斑くん。織斑くんの番ですよ？」

……ああ、自己紹介ね。了解。

ゆっくりと体を起こし、欠伸を一つ。小さくなっているときの欠伸はまるで小動物のようだと弾に言われていたが、何でもいいね。ちなみに声も高くなるため、歌を歌う時の音をとるのが楽で良い。
……あ、ののちゃんみっけ。

「……ふぁ……はぷ……」

こしこしと優しく目を擦る。痛いのは嫌だからな。

「……ぐっ……」
「かはっ……！」

数人鼻血を出し始めたが……平気かね？　平気だな？　よし平気。

「あ、あの、起こしちゃってごめんね？　でも、自己紹介で『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だから、自己紹介……してくれるかな？」

……おお。原作よりちょっとしっかりしてる。これは俺が子供みた

いな顔と背をしてるから意識してないせいだろうと思う。
そんな……真耶先生に頷きを返し、立ち上がって後ろを振り向く。
……眠い。

「……大半の方には始めまして。約一名にはお久し振り。織斑一夏です。……好きなことは寝ること……嫌いなことは騒がれること……特技は……炊事。趣味は寝ることと、寝るのにいい場所を探すこと……以上、お休みなさい……」

くるりと回って椅子に座って、またさっきまでと同じように寝ようとして……なんとなく気配のようなものを感じた。この体って本当にハイスペック。
……この気配は……ちー姉さんだ！
寝るのをやめて扉の方に顔を向ける。するとすぐに入ってきたのは……やっぱりちー姉さんだった。
……学校だし、織斑先生の方が良いよな。多分。

「……ん、やっぱり」
「なんだ、驚かんのか？」
「ヒント、束姉さん」
「……あいつめ……」

ごめんね束姉さん。きっとまた何かあるよ。でも半分くらいは事実だし、構わんよね？

……あ、周りが五月蝿くなる気がする。ちー姉さんは人気あるからなぁ……。

## side　篠ノ之　箒

久し振りに見た一夏は、本当になにも変わっていなかった。態度も、声も、なにもかも。
ただ少し身長は伸びたようだが、それでも私よりずっと低いように見える。

今も教室にいるほとんど全員の視線を平然と無視して千冬さんに眠そうだが七割ほどは起きている視線を向けている一夏に、私も視線を向ける。

……ふと、ついさっき聞いたばかりの一夏の自己紹介を思い出す。

……約一名とは……私だよな？　ぐるりと見回しただけで、私だということをわかってくれたのだよな？

そう考えると、なぜか妙に嬉しくなる。

六年。それだけあれば人間は変わる。私もテレビで一夏を見たときは誰だかわからなかった。一夏は私の前でああしてきりっとした顔を見せたことがないというのも原因の一つだが、普通はわからないはずだ。

それなのに一夏は私だと一目でわかってくれた。それはまるで当然のことであるかのように、確認するまでもないと言うかのように。

……私は一夏に覚えていてもらった。小さい頃には何度も一夏につっかかって行っては軽くあしらわれていた私でも、一夏は覚えてい

てくれた。

……ほぅ、と溜め息をついて、私は一夏に視線を向ける。

……次の休み時間に、一夏に確認しよう。私のことが、本当に誰だかわかっているのかを。

## ののちゃんと再会、金髪に絡まれる

授業について行くことはできている。一応必要そうな単語とその意味、どうやって使い、どんなものなのか。そういった基本だけは叩き込んだ。

なので、後はそうして覚えた基本を……真耶先生（名字は忘れた）の言葉に当て嵌めていけば普通にわかる。わからなかったらその時はその時で質問すればいいし、今のところ必要無いようだし。

頭が四割寝ているままでも理解できているので、まあ、大丈夫だろう。

そうこうしているうちに一時間目が終わり、俺は次の時間まで夢の中で復習をするべく服の中で千の顔を持つ英雄でクッションを作り、それに頭をのせて寝る体勢に入る。周りではクッションがどこから出てきたのかとかそういったことで少々騒がしいが、このくらいなら無視できる。

……それじゃあ、お休みなさ

「ちょっといいか」

……おや。この声と雰囲気は……。

顔を上げると、そこには懐かしい顔があった。

「ののちゃん？　久し振りだなぁ……抱きついていい？」

「なっ！？　く……貴様は本当に変わっていないようだな……」

そりゃそうだ。一応転生済みで自分としての在り方を確立させてる

んだからな。早々変わるかっての。

「それに比べてののちゃんは変わったな。ちょっと強くなった？インターミドル優勝してたみたいだし」

新聞は見てないけどそのくらいは覚えている。原作知識は便利だが便利じゃないな。確認しなけりゃ使えないよ。今回はしたけど。確認先は束姉さん。

「な……何で知ってるんだっ！」

「いいから寝ようよののちゃん。ほらこっち」

「よさんか人前で！いくらお前でもやって良いことと悪いことと言うものがだな！」

キーンコーンカーンコーン……♪

あ、チャイムだ。俺としたことが全然寝れなかったな。まあいい、次の休み時間はよっぽどの事がない限り寝よう。

「早く席につかないとまずくないか？　織斑先生の出席簿は硬いぞ？」

「うっ……」

俺がそう言ったらののちゃんはひきつったような笑いを浮かべた。想像してしまったらしい。

……痛そうだよなぁ……。

授業はつつがなく進んでいく。や……（カンペを見ながら）山田先生の説明はわかりやすくていいな。教科書もこのくらいわかり

やすければ……いや、そんなにわかりやすい教科書があったら教師の仕事上がったりだから……これで良いのか？

……あと、束姉さんから貰った獣耳なんだが、アレも一応ＩＳに分類されるらしい。俺は今まで当然のように使っていたんだが……平気なのか？　兵器ではある。

……またつまらんギャグを思い付いてしまった。

まあ、ＩＳの産みの親からの許可（どんどん使っちゃってよいっくん！）があるから平気なんだろう。きっと。

「あ、織斑くんは大丈夫かな？　どこかわからないところとかはある？」

……なんか俺完全に小さい子供みたいな扱いをされてないか？　これでも十六なんだけど。……今は小さいけど。

「大丈夫ですよ？」

とりあえず笑いながら言ってみる。どうやら真耶先生は右隣の誰かさんのようにいきなり鼻血を噴出して倒れることは無いようだ。

「そうですか！織斑くんはすごいですね～」

そう言って真耶先生は俺の頭を撫でてくる。……あ、やばい気持ちが良い……眠気……が……

……すか～……。

「……むらくん。織斑くん！」
「……ふぁ……んぅ……」

意識が飛んだと思ったら割とすぐ起こされた。どうやら真耶先生が体を揺らしているらしい。

「もう。いきなり寝ちゃダメですよ？」
「……はい……大丈夫です……」
「わかってくれればいいんです」

原因の一つは真耶先生の手ですけどね。
あと、俺が顔を向けていた側の前の方の生徒が凄い良い顔で永眠しそうなんですが。

「はい、それでは授業を……きゃぁぁっ！？」

おや、気付いてなかっただけですか。そしてちー姉さん。仕方無いって顔をしながら頷かないで。

まあ、中学時代にもよくこういうのは出たし平気だとは思うけど。
今まで死人は出たことないし。気絶したことはあったけど、重いことにはなってない。
……それにしても眠い。休み時間になったらさっさと寝よう。

……さてと。今度こそ寝ようか。お休みな

「ちょっと、よろしくて？」

……お休みなさい。

……すか～……。

## 金髪に絡まれる、凄く絡まれる

ちょろそうな金髪を無視して寝る。

「……こほん。ちょっと、よろしくて？」

……寝続ける。完全に無視して寝る。

「――ッ！起きなさい！私に話しかけられていると言うのに寝続けるとは、無礼ですわよ！」

……五月蝿い金髪だな、まったく。

体をゆさゆさと揺さぶられるが、それでも無視を続ける。寝れない訳じゃ無いしな。

「起きなさいと言っているのがわからないのかしら？」

寝てるからな。聞こえてるし反応もできるけど。

……やれやれ。さっさと諦めてくれんかね。そろそろ鬱陶しくなってきた。原作キャラかも知れないが、俺の睡眠を邪魔する者は敵だ。

「いい加減に起きなさい！男の分際で私を無視するなど千年早いですわよ！」

……本当に五月蝿い奴だな。さっさと終わらせるか。

「……ふぁ……豚が耳元で叫んでる夢を見た」

ビッキィ！とよくアニメで青筋が浮いたときのような音が響いた…
…気がした。
……気のせいだな。

そして金髪ツインドリル――本名は忘れた。セルロースだっけ？――が叫ぼうとした瞬間に、まさに今気づいたかのように話しかける。

「……誰？　ってか騒ぐなよ周りに迷惑だろ。そのくらいの気遣いすらできないような奴は淑女とは言えないぞ？」
「な……か……くっ……！」

おやおや悔しそうな顔をさせてまあ。一応俺も三十年以上精神的には生きてるんだし、こうして相手の出鼻を挫いてやることくらいはできる。
セルロース……なんか違うな？……は落ち着こうと深呼吸を繰り返しているが、俺はわざわざ落ち着かせるようなお優しい神経は持ち合わせていない。

「なにやってるんだ？　あんまり荒い息をついていると変態にしか見えないぞ？」
「やかましいですわっ！」
「……今のあんたに言われてもなぁ……ってか質問には答えろよ。誰だあんた。寝ていい？」
「わたくしはセシリア・オルコット！寝るのは許しませんわ！」
「あんたに許可を求めなくちゃ寝てはいけないなんて法は無い。お休み」

そして寝ようとするが、せ……セッティエーム？　に後ろ襟を掴まれて無理矢理起こされてしまった。短気だなこいつ。

「わたくしに質問に答えさせたのですから、今度はわたくしの質問にあなたが答えなさい！」
「え、なんで？　別にいいけどさっさとして消えて？」
「可愛い顔して辛辣だ！？」
周りがいきなり叫び出したが、まあ、どうでもいいな。可愛いって言われても欠片も嬉しくないけど。
「……黙ってる暇があるならさっさとしろって。俺はお前なんかのことより早く寝たいんだ。もうすぐ休み時間も終わるし」
「あ、あなたねえ！」
キーンコーンカーンコーン……♪
……あらら、鳴っちゃった。まったくこのセルシオのせいで全然眠れなかった。疫病神め。
「チャイムが鳴ったぞ？　席についたら？」
ギリギリと歯を軋ませているセルビオを無視して俺は自分の席に座る。それでも赤痢菌（ああ、これは絶対違うな）は顔を真っ赤にしたまま俺のことを横から睨み付けている。
……どうなっても知らんぞ俺は。
そしてやはり怒りのあまりチャイムも俺の声も届いていなかったセイクリッドは。
ズパムッ！
「オルコット。席に着け」

ちー姉さんの出席簿クラッシュにやられてしまいましたとさ。
……それにしても妙な音だったな。そしてあまりにもでかい音だった。相当痛いに違いない。

side　篠ノ之　箒

一夏は変わっていないと言ったが、撤回しよう。相当変わっていた。
まあ、昔は一夏をあのような方法で強引に起こそうとする者など一人もいなかったから本当に変わったのかはわからないが、少なくとも私が起こそうとした時は抱き締められて無力化されるだけだった。
だが今の一夏は無理矢理起こそうとしたオルコットを当然のように罵倒し、相手の罵倒を受け流し、そして出鼻を挫いて勢いを止めて自分の得意な場所に引きずり込んだ。

……いや、恐らく途中からの寝た体勢も一夏の策の一つだろう。
相手の言う言葉を初めの言葉で全て消し飛ばし、眼中に無かったを通り越してなにもなかったかのように扱い、プライドに一撃を与える。
そしてオルコットが何かを叫び出す前にオルコットの大切にしているだろうプライドを引き合いに出して黙らせる。
そして挑発を繰り返し、オルコットが激昂した所でそこからは無視。
確かにオルコットの許可がなくとも眠れるし、オルコットから始まったものなので少しは外に出ることはなく我慢することに……いや、あれは怒りのあまりに行動が止まっただけか。

ここで最初の寝たふりが効いてくる。
あれは恐らく時間調整のためだ。自分の言いたいことを言い切り、それでいてかつオルコットがなにも言えない状況を作り出すための、その時点では誰もが騙されるほどの『寝たふり』。

そしてそれは成功し、オルコットは千冬さんに叩かれて（威力が凄まじいことを簡単に予想させるような音だった）強制的に席に戻らされている。

……恐るべき策士になったな……一夏！

……ただ、その頭をもう少し私の思いを感じ取ることに使ってくれてもいいと思うのだがな？

## まだ絡んでくる、暇なんだな

ちー姉さんが教壇に立っている。うん、やっぱりちー姉さんはかっこいいね。実践で使用する各種装備についての説明か……七割くらい頭を起こして聞くことにしよう。

ちなみに九割起きていても一割が寝ていれば小さいまま、もしくはそこからさらに身長をある程度操作できる。今は面倒だから変えてないけど。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦の代表者を決めないといけないな」

……うっわ、なんだか凄まじく嫌な予感がする。困ったねぇ……。

「はい！織斑くんを推薦します！」

……ほーら来た。面倒臭いなぁ……。さっさと立って反論しろよセブルス（うん、これも絶対違うな）。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

……ようやくか。遅かったな。そんなんだからちょろいとか言われるんだ。

ぅに～……と小さく欠伸をして、それからまたクッションを召喚。

さて、セサミの話が終わるまで寝てるとしよう。

……お休みな

もふんっ！

「寝ようとするな」

ちー姉さんに出席簿ハンマーを食らった。クッションで防いだけど頭を机にぶつけて少し痛い。コットンガード！ってやるには下にも必要だったみたいだな。

「すみません織斑先生。ところで織斑先生と呼ぶ度に少し悲しそうな顔をするのはなぜでしょうか？」

「気にするな」

ういっす。

ちなみにこの前にセシウムが話をしていたが俺もちー姉さんも完全に無視。いや、ちー姉さんは意識的に無視しているようだった。具体的にどこでわかるかと言うと、手。強く握りすぎて白くなっている。もう少し手爪で手を切ってしまいそうだ。

ちー姉さんの手は大好きなので、とりあえずせ……せ……ぜ？

ゼムクリップ？　を黙らせようと思う。ゾナハらせるのが一番楽なんだが、それをやると色々怒られそうな気がするから却下。

……まったく。人気者は辛いね。けっ。

「……くっ……何度も何度もあなたはっ……わたくしの話を聞きなさいっ！」

「え？　聞いてるよ？　左から入って右から出てるような状況、つまり聞き流してるけど」

「それは聞いていないと言うのです！だいたいあなたは何ですか！唯一ＩＳを動かせる男と聞いてましたから少しくらい、そう、少し

くらいは知的さを感じさせるかと思っていましたら全くの期待外れ！人の話は聞きませんしわたくしのことも知らないほど無知！挙げ句の果てには極東の猿の分際でわたくしの事を馬鹿にする始末！！って聞いてらっしゃるの！？」

「……え、なに？　ごめん極東の猿だから言葉わかんない、猿語でお願いできる？」

『ぷっ！』

『くすくすくす……！』

周囲の何人かが笑い、セロテープ（これも違うな）の額に異様にはっきりとした青筋が現れた。怒ってるね。

ちー姉さんの方を見てみると……ちょっと笑ってるし、手も握りは弱くなっている。少し機嫌は直ってきてるかな。よしよし。

「……わたくしを馬鹿にしていますの？」

「何でわざわざ……」

わざわざ言ってやる義理もない。ちー姉さんのことがなかったら無視してるよ。面倒だし。

「……まあ、クラス代表になりたいんだったらどうぞ。俺はやる気ないし好きにしたら？」

あー、眠い。

のらりくらりと矛先をそらし続けていたら、いつの間にか決闘することになっていた。めんどくせえなぁ……。俺にメリット一つもねえ……。

決闘をする↓睡眠時間が減る。
決闘を受けない↓ずっと五月蝿い↓睡眠時間が減る。
決闘に勝つ↓クラス代表になる↓睡眠時間が減る。
決闘に負ける↓奴隷だ何だと騒がしくなる↓睡眠時間が減る。

……はぁ……眠い。今日はぷちかを抱いて寝よう。ストレスが……。

side　篠ノ之　箒

一夏……さすがにそれはやりすぎだろう……。千冬さんも止めようとする気配が全くと言って良いほど無かったし……似た者姉弟と言うことか。

私は先程まで行われていた舌戦（一方的）に、少しだけオルコットが可哀想になってしまった。
姉にも弟にもさらりと無視され、流され、怒っても叫んでも正論と詭弁を混ぜ合わせた言葉でいかにも当たり前の事を告げるかのように論破される。
というかそもそも一夏の視界にオルコットは入っていなかったのだろう。一夏は私の知る限り嫌われることも嫌うことも少なかったのでよくは知らないが、もしかしたら元々嫌いなものにはあのような態度なのかもしれない。

……その態度と一方的な言動は、私達以外の人間に接する時の姉さんによく似ている気がする。
じっと一夏を見つめていると、一夏がすっと私に視線を向けてくる。

私はその視線から逃げるように目をそらすが、一夏の視線はしばらく私に固定されたままだった。

お陰で授業に集中できず、気が付いたら時間が過ぎていたが。

一日目が終わり、さっさと帰ろうと立ち上がる。さっさと寝よう。腹は減っているが、朝は食べたし死にはしないだろう。

「……一夏。もしや昼は食べていないのか？」

「ん？　そうだけど？」

そう答えるとののちゃんに肩を掴まれて購買まで引き摺るように運ばれた。

「奢ってやるから食べろ」

「え……朝は食べたし大丈夫だと思」

「食・べ・ろ」

ののちゃんが怖くなった。これは弾や鈴と同じ雰囲気……っ！ちなみにちー姉さんにバレた時にはものすっごい怒られた。怖かった。

「……じゃあ、いただきます」

「ああ、たくさん食べろ」

なんでののちゃんといい鈴といい、幼馴染み達は原作とこうも違うかな。なんか妙に丸いよな。別にいいけど。

「あっ！ここにいましたか！やっと見つけました！」

おや真耶先生。何の用だろうか？

「もくもく……ごくん」
「っ……！っ……！！」
「ぐふぅっ！」
「な、何て威力……これが唯一の男性ＩＳ操縦者の実力だと言うの……！？」

周りが騒がしいな。何があったんだ？

「ののちゃん。何があったんだ？」
「一夏は気にするな。お前はお前の思うままにな」

……よくわからないが、とりあえず食べればいいのか？

「……それで、山田先生はどのような御用事で？」
「あ、えっとですね、織斑くんの寮の部屋が決まりました……あれ？　どうして篠ノ之さんが返事をするんですか？」

なんでだろうな。……ああ、結構美味しいや。

「……ああ、拐われないようにってことですか」
「そういうことです。……あ、ちょっと……はい、取れました」

おや、口の端に食べ滓がくっついてたか。どうも。
荷物は全部あるし、原作みたいに困ることは無い。

「織斑くんの部屋は１０２５号室ですね。これが鍵です、なくさないように気を付けてね？」
「はーい」

やれやれ、原作だとののちゃんと一緒の部屋のはずなんだが、どうなのかね。

一緒でした。

食べ終わってすぐにののちゃんと途中まで一緒に行こうと歩いていたところ、最後まで一緒だったという（ののちゃんにとっては）驚きの結果になった。

「……とりあえず、お前が私の同居人と言うことはわかった。私も山田先生の言葉を聞いていたからな」

山田先生？　誰だっ……ああ、真耶先生ね。

「はぁ……お前はまだ名前を覚えられないのだな」

「おう。努力はしてるけど無理だな」

そう言うとののちゃんはがっくりと肩を落とす。

「……まあいい。とりあえず、二人で暮らす上での決まりを作ろう。風呂の時間や着替えについてもな」

「風呂は俺は夜早くに入るから」

夜早く↓午前三時から四時。抱きつくものがないと眠りが浅くなるからこの程度の時間に起きてしまうため。もちろん二度寝するが。

「そうか。着替えは……私が脱衣所でしよう。それでいいか？」

「いいよ。じゃあお休みー」

俺は適当に出入り口に近い方のベッドに倒れ込むようにして入る。

……ああ、やっと眠れるな。

ｓｉｄｅ　織斑一夏

薄ぼんやりと夢を見る。原作のだと思う一夏がののちゃんに竹刀でひっぱたかれている。
俺には痛みはないが、見ているだけで痛々しい。

そこで俺が立ち上がると、さっきまで薄ぼんやりとしていた一夏とののちゃんが急にはっきりと俺の事を見てきた。

ちょいちょいと手招きをすると、怪訝な顔をしながらも二人は俺の方にやって来て、そして俺の前で立ち止まると不思議そうに首をかしげた。

俺はいつも通りとなった小さな姿のまま、大きいままの一夏に抱きついてみた。
すると一夏は驚いた顔をして、それから不器用に俺の頭を撫でた。
意外と気持ちがいい。

そこで、どことなくメカニカルな気配のするとがった犬耳をつけてみる。俺と違って縮むことはなかったが、何となく凛々しさが増したような気がする。

一度一夏から離れ、今度はののちゃんの方に。抱き着いてみたが、抱きつきにくい。主に一部分が邪魔だ。
膝枕をしてもらうと、こっちはちょうどよかったのでしばらくして

もらう。
そしてののちゃんにも同じくどことなくメカニカルな犬耳をつける。
こちらも大きいままだったが、それでも可愛らしく見える。

最後に俺が自分でお揃いの犬耳をつけて、にっこりと笑う。
一夏もののちゃんも、俺に合わせてかどうかは知らないが笑ってくれた。

そのまましばらく俺は一夏とののちゃんに撫でられ、可愛がられながら遊び、そして最後に二人に挟まれて眠りについた。
二人は仲良く手を繋いで、俺をゆっくりと撫でていた。

「……わぅ……」

目が覚めると、目の前には死屍累々。見覚えのある姿から全く見覚えの無い姿まで、実に四十人は居るだろう少女たち（精神年齢的にはこっちが上）が幸せそうに鼻から血を流して気絶していた。

ののちゃんはすでに寝ているので、どうやらこの人たちは勝手に入り込んだようだ。

……とりあえず、携帯電話をポケットから出し、近くで寝ていた白狼ぷちかを片手で抱き締めながら、ある人に電話をかける。

「……もしもし、ちー姉さん？　なんだか人がいっぱい気絶してるんだけど……」

ぷつん、と電話は切られ、そしてその二秒後。真夜中の学園寮に怒

号が響いた。

# 二日目、ののちゃんＶＳ俺（前書き）

すごいことになってます

## 二日目、ののちゃんＶＳ俺

部屋で気絶していた誰かさん達がちー姉さんに叩き起こされていなくなった後、朝食は適当に取る

「行くぞ一夏。朝はしっかり食べろ」

……つもりだったんだが、なぜかののちゃんに連れられて食堂に来ていた。
逃げようとすると怖いので逃げないが、まあ、悪いことじゃないから別に構わない。

ただ、ののちゃんに手を引かれている俺を見て鼻血を出している誰かさん達はもう駄目だな。色々と。

「……（ギリッ！）」

あとちー姉さん。ののちゃんは俺の事が心配なだけだから！そんなに歯を軋ませて憎々しげに睨まない。

「今回は奢らんぞ」
「いいよ別に。お姉さんこれお願いね」
「おや、嬉しいこと言ってくれるじゃないか」

そう言ってお姉さんは俺から食券を受けとる。なんだかすごい量になる気がする。ちなみに焼き魚定食。

「はいおまちどう。サービスしといたからね」

早いな。って多くね？
そう思っても外には出さないで、笑顔で受け答えをする。

「ありがとうございます」
「いいんだよ。たくさん食べて大きくなりな」

……いや、実際はもう少し大きいんだがな。具体的には四十センチくらい。

「……ずいぶん多いな……」
「だよな」

ののちゃんが呆れたように口にする。まあ、仕方無いね。
通常魚（鮭）は一尾のはずが三尾だし、ご飯もまるで仏さんに御供えするようなこんもりとした山になっている。おひたしも小さな皿に山になっているし、頼んでないプリンも着いてきた。
……どう考えてもサービス過剰だと思う。周りの奴も唖然としてるし。
理由はわかるけど。俺今身長百四十位だし、そんな奴がこんな量食べるのを見たら、そりゃ目立つわな。

「て……手伝いはいるか？」
「いや、大丈夫。夜食べてないからこのくらいは普通に入る」

そう、普通にな。

「……本当に入るものなのだな」

「まあな。でも実はもう少し入るぞ」

食い過ぎると気持ち悪くなるから腹一杯までは食べないようにしてるけど。

……さて、もうすぐ授業だな。いつも通りでいいか。決闘もまだまだ先の話だし、確か二日目はたいした描写は……ああ、ののちゃんに剣道場に連れ去られるんだっけ。めんどくさいな。

「一夏」

「ん？　なんだいののちゃん」

「放課後、剣道場に来い」

「……んー、三本中二本先取で一回だけね」

ののちゃんは約束は守るから、言っておけば大丈夫だろ。

ｓｉｄｅ篠ノ之　箒

パァン！と弾けるような音がして、私の握る竹刀の軌道が変わる。

一夏の面を捉えるはずだったそれは、肩をかすって下へ。

その隙に一夏は無言で私に片手面を食らわせ、離れる。

それと似たようなことがもう二十以上も繰り返され、私は肩で大きく息をつきながら半身で竹刀を私に向けている一夏を睨む。

昔は構えさせることすらできなかったが、今ではこうして一夏に構えさせることができている。

小さな体からは想像もできないほど重い衝撃を繰り出す一夏に、少しでも近付くことができている。

それが嬉しくて、私はまた竹刀を振るう。一夏が自分から攻めてくることはほぼ無いと言っても良いので、今の私に繰り出せる最高の一撃を。

しかし一夏は私の最高の一閃も片手に持ったままの竹刀で捌き、私に小手を打ち込む。

「……ん、ちょっと強くなったね、ののちゃん」

ほにゃ、と眠そうな笑みを浮かべる一夏。だがやはりそれはまだ四割近く眠っているようだ。

「昔は七割くらい眠っててもなんともなかったのに……ほんと、強くなったな」

……。

ゴスッ！と竹刀の柄を面に叩きつける。この程度で喜んでいてどうするのだ。私の目標はまだまだ先だろう！

そう考えても私の頬の緩みは直らない。直れ直れと念じても、ゴスゴスと衝撃を与えても、全く直る気配すらない。

……ええい、ならば笑ったままで構わん！このまま一夏と打ち合ってくれるわ！

「はぁあっ！」

今度は乱撃。一撃にかけても一夏はそれをかわしてしまう。ならば、かわせないほどに高速の連撃を！

連続した軽い快音が剣道場に響く。私は一本をとれるところ全てを散らしながら連撃を打ち込んで行く。
面頬に、胴に、小手に、喉に、ひたすら竹刀を振り、突き、薙いだ。
しかしそれすらも一夏は避け、または竹刀で払い、受け止める。
……ああ、なんて楽しいのだろうか！例え一夏が本気ではなかったとしても、一夏とのこの闘い／遊びは私の心を踊らせる。
更に速度を上げ続け、一夏を攻め続ける。
もう周りの音は聞こえない。見えるは一夏と、私と、私達のいるこの四角い場だけ。聞こえるものは私の呼吸音と、心音。竹刀が風を切り、ぶつかり合う快音。そして一夏の呼吸音。
激しい私のそれとは対局に、一夏の呼吸はゆっくりとしたものだった。
さらに私の剣は速度を上げる。
すると、今まで見えてこなかった‘何か’が見えてきた。
それは、間合い。私と一夏の、相手を殺せる距離。
私は今まで一夏のそれに無防備に入り込んでいた。
しかし、結局私にできることはこれしかない。
近付いて、剣を振るう。ただそれだけだ。
するとまた何かが見えるようになった。一夏から何かが私の肩に向かって伸びている。
それに嫌な予感がした私は、それを打ち落とそうと剣を振るおうと

して、……私からも同じものが出るのがわかった。

私から出たそれは一夏から出たそれとぶつかって消えた。それに一夏は少しだけ驚いたような顔をして、

「面」

私の面頬をひっぱたいていった。

「……ののちゃん、よくあれが見えるようになったね？」

「……いや、もう見えない。あれはなんだったのだ？」

一夏にそれを尋ねるが、一夏はいつも以上に眠そうな笑顔を浮かべているだけで答えてはくれなかった。

ただ、わかることがある。

それは、一夏もあの世界に身をおいているということだ。それも、恐らく六年以上前から。

「……追い付いてきたぞ。一夏」

私は笑い、一夏の後ろ姿に掌を向けた。

……やっと、一夏の背中が見えてきた。

「すごーい！織斑くん凄い！」

「インターミドルをあんなに簡単に倒しちゃうなんて！」
「の、ののちゃ～ん、助けて～」
……はぁ……。やれやれ、仕方の無い奴だ。

## 入学後、初休日

明日は休日。そこで俺はドーベルマンぷちか（垂れ耳わんこ）を抱いて昼遅く（午後四時くらい）に布団に入った。ののちゃんには俺のことを起こさないようにってメールもしたから多分平気。さあ、寝まくろう。

きゅ、とぷちかを抱いている腕に力を込めると、ドーベルマンぷちかが俺の胸に顔を埋めてくぅんと鳴いた。

……うん、お休み。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　箒

一夏に起こさないでというメールをもらったので、恐らく今日の夕食は私だけで食べることになるだろう。

そう思いつつ私は一夏との戦い／遊びの最中のあの感覚を思い出していた。

今では最後の最後に出てきたあれはまだ見えてこないが、その一つ前の‘間合い’はわかるようになった。

相手の意識が向いている方向が。相手の意識の届いていない場所が。相手の武器の届く距離が手に取るようにわかる。まるで高性能のレーダーかハイパーセンサーでも使っているかのようだ。

今も、私と向き合っている相手の攻撃範囲の半歩外に居る私に相手

がじりじりと近付いてきているのがわかる。
私はゆっくりと相手の隙を伺い、視界としての死角ではなく意識としての死角を探し出す。

……見付けた。

その瞬間相手は私の間合いに入り込みながら私を間合いに納め、鋭く竹刀を降り下ろす。

それを察知していた私はなんなくかわし、そして意識の死角である逆胴に竹刀を叩きつける。
加減はしたし、大して痛くもないだろうと思って打ったそれは、見事逆胴に吸いこまれるかのように命中した。

「一本！それまで！」

部長のその声を聞いて、私は残心を解く。集中を解くと膝から崩れ落ちてしまいそうなほど疲れているのがわかる。
……私もまだまだ修行が足りんな。

部屋に戻って汗を流す。その時に一夏がベッドで寝ているのを見かけたが、起こさないでくれというメールの内容を思い出したのでなにもせずにシャワー室に向かう。
明後日はオルコットとの決闘の日だと言うのに寝ていていいのかと思うが、知識は十分、そして体を動かすことでは勝てず、さらに訓練用の機体も借りることができないとなればできることはなにもない。

だからと言って夕食すらも抜いて眠るのはどうかと思うのだが、一夏を起こして布団に引きずり込まれてはたまらないので放置することにした。せめて私が夕食と歯磨きを終わらせてからならば……いやいや、私は何を言っているのだ。

「ねえねえ篠ノ之くん。今日は織斑くんは一緒じゃないのかい？」

剣道部の主将にそう聞かれるが、私が返せる言葉は一つしかない。

「寮の部屋で寝ていますよ。死にたくなければ近寄らないことをおすすめします」

本当にな。

部屋に戻ると一夏はまだ眠っていた。歯を磨き終わった私は眠り続けている一夏の髪を撫でる。

「……いい夢を見ろよ、一夏。……お休み」

そうして私も布団にはいる。一夏の腕の中に小さい一夏が居たような気もするが、ここはあえて流すとしよう。

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

私の朝は一夏とぷちかの写真を眺めることから始まる。

これは一夏が中学生だった頃に、同級生の鳳　鈴音という一夏の友

人から譲られたものだ。

何でも学校で一夏に手を出そうとしたり、独占しようとしたもの達を粛清し、そして一夏に健やかな睡眠を与えようとしていたと聞くが、その間に鳳自身も一夏に惹かれてしまったのだとか。
そして学校でしか見られない一夏とぷちかのお昼寝ショットを私に堂々‘賄賂’として渡してきた強者でもある。

……実によくわかっているじゃないか。一夏は私の物だ。そうだろう？

……話がそれたな。とにかく私の朝は一夏とぷちかの写真を見ることから始まる。
そして溢れそうになる愛を抑えきると、私の体には一夏への愛がたっぷりとつまり、脳が、体が活性化する。
ここでようやく私の体は行動できるようになる。

……昔はこんな写真ではなく、一夏が私の腕の中に居てくれて…
…私はそれを見て一夏分を補充していたのだがな……一夏も私のところに潜り込んで来れば良いものを。

……おっと。朝食をとらねば会議に遅れてしまうな。生徒達の見本となるべき教師がそんなことではまずい。一夏に嫌われでもしたら私は確実に自殺してしまうだろう。

私の昼は、一夏の昼寝姿を鑑賞するところから始まる。ＩＳ学園に一夏が来て、唯一と言ってもいい良かったことだ。
一夏は基本的に自分の机に突っ伏すようにして眠っているが、たまにぷちかを抱いて椅子に寄りかかるように眠っていることもある。

しかし休日である今日は、一夏はあてがわれた寮の自室で眠っている。

……篠ノ之は一夏に手を出さないだろうな？　確かに篠ノ之は一夏のことを知っている分手を出す可能性が低いと見たのは私だが、それでも一夏はあれほど可愛らしいのだ。篠ノ之がつい手を出してしまうことも十分考えられ

《ちー姉さん、メールだよ？》

一夏からのメールか。どれどれ……。

本文：俺はぷちかとのんびり寝ています。心配しなくても大丈夫。

……全く一夏め。……む？　添付ファイルだと？

開いてみると、すやすやとあどけなく眠る一夏と、寄り添うようにして頬を擦り付けているぷちかの写真が。

……くっ……挟まれたい！一夏とぷちかに挟まれたい！むしろ埋もれてしまいたい！！

私の夜は、一夏の写真にお休みと告げることで幕を閉じる。すやすやと眠る一夏の写真を見ながら、夢のなかで一夏に出会えることを祈りながら眠りにつく。

明日も一夏が幸せであるように。

## 白式、束姉さん印の魔改造済み

決闘当日。そろそろ始まってもおかしくないはずなんだが、まだ束姉さんからＩＳは届かない。

……やれやれ、困ったねぇ……ちー姉さんからも多分話が行ってるんだろうし、雪片との併用が難しいのもわかるけども……いくらなんでも遅すぎると思うんだが。

まあ、束姉さんのいつものノリだろうと思えば理解はできるし諦めもつく。

……ちなみに、ＩＳの代わりにぷちかサイズ束姉さん人形（兎耳付き）なら送られてきた。ぷちかたちのお気に入りになってよく抱き枕になっている。

……抱きつかれるとにへらっと笑うのは気のせいだと思いたかった。俺が抱き締めたら鼻から血を噴き出したあたりで諦めたが。

「……まだかねぇ……俺のＩＳは……」

名前はなんだったっけね？　……とりあえず白かったような気がするし、勝手にシロと呼んでおこう。たとえ来たやつが黒くてもシロだ。はい決定。

「織斑くん、織斑くんのＩＳが届きましたよ！」

……ああ、丁度か。

「はい、真耶先生」

「もう。山田先生ですよ」

「すみません、名字も名前もそれぞれ二文字以上だと覚えられないもので」

そう言いながらそれが来るのを待つ。ちー姉さんは俺の臍出しルックを正面から見た瞬間に頭を壁に叩きつけ始め、今はピットにあったベンチで横になっている。

……今度使う時は千の顔を持つ英雄で全身を覆うタイプのを作ろう。ちー姉さんのためにも、俺の精神安定のためにも。

よくこんな恥ずかしい格好をしていられるよなほんと。俺には無理だ。かなりきっつい。

そしてピットの搬入口から現れたのは、前情報（原作知識）通りの『白』だった。良かったな白で。白じゃなかったら色と名前とがちぐはぐになっていたところだった。

ちぐはぐでもシロって呼ぶことは決定してたんだけどな。例え名前が黄天だろうが紫電だろうが関係無くな！

……さてと。それじゃあさっさと蒸着……じゃなかった、装着しよう。

背中を預けるようにしてシロに乗り込む。するとシロの方から俺に合わせて装甲が閉じる。小さいままの状態でぴったりだが、今までの経験から言って大きくなってもぴったりになるんだろうな。きっと。

「……さて、一夏。気分は悪くないか？」

復活したちー姉さんが僅かに心配そうに聞いてくる。名前で呼んでくれているし、今だけは教師としてではなく、織斑一夏の姉の織斑

千冬として話しているんだろう。

「大丈夫だよちー姉さん。なんにも問題ない」

「そうか」

ちー姉さんは俺の答えにほっと安堵の息を吐いた。多分真耶先生にはわかってないだろう。少し得した気分だ。

「……それじゃあ、ちー姉さん」

この時だけしっかりと起きて、

「行ってきます」

俺はゆっくりとアリーナの中に飛んでいった。

ついでにシロのスペックデータを確認して、束姉さんがどんな風に作ってくれたのかを確認……

……化物じゃねえか、このＩＳ。まだ一次形態移行すら終わってないのにこれってなんだ。

それとお願いしていなかった武器が一つ。名称未設定の近接ブレードが一本。武装自体は千の顔を持つ英雄でどうとでもなるから頼んでなかったから……きっとこれはちー姉さんのリクエストだろう。

……まったくもう。ちー姉さんは心配症なんだから。そんなちー姉さんも大好きだけど。

ちなみに、ピットでの騒ぎは努めてスルーした。真耶先生が失言をしてちー姉さんに締め上げられてるようなギヂギヂという音と悲痛な悲鳴が聞こえた気のせいだった。そう気のせいさあっはっは。

……今度プリンでも作って行ってあげよう。

side　篠ノ之　箒

一夏の決闘当日、私はステージと観客席を隔てるシールドのすぐそばに陣取っていた。とはいえ他のものの邪魔にはなっていないし、問題はないだろう。

……一夏は昨日一日中寝ていたが、今日の朝に見た笑顔はいつもの小動物のような笑顔とはまるで違い、明らかに狩られる側ではなく狩る側のする笑い顔だった。

……それにどうやら一夏はオルコットの事をひたすら虚仮にするつもりらしく、あんまり派手な戦闘は期待するなと言われてしまった。

……その言葉で私は、一夏がなにをするつもりなのかがおおよそ理解できた。

そう考えているとピットから一夏が現れてオルコットの前に浮く。やる気はほとんど見えず、六割ほど眠っているようにも見える。

だが、今の私にはどうしても一夏が本気でオルコットを叩き潰す気

でいるようにしか見えなかった。

私はつい最近、戦闘状態にある相手の間合いがわかるようななった。相手を捉えることができるだけの一足一刀の間合いと、相手を殺すことのできる間合い。その二つ。

いつもは剣道場で見ているそれが、一夏からも見えている。

ＩＳを展開しなくともただでさえ広かったその殺せる間合い。中間距離の射撃型であるオルコットのそれは、おおよそ五十メートルほど。

しかし一夏のそれはさらに広く、ステージ全てを覆い尽くし、観客席までも飲み込んでいた。

そう、私も。

そこで気付く。一夏の顔は確かにいつも以上に眠そうだが、その瞳には今まで見たことが無いほど剣呑な光が湛えられている。

……だが、一夏は決闘で派手な戦いは期待するなと言った。ならばオルコットが殺されるようなことはないだろう。

……よっぽどのことがなければ。

試合開始の鐘が響き、オルコットは余裕を見せながら一夏に話しかける。

「最後のチャンスをあげ」

「あ、すいません真耶先生、棄権します」

……。

「は？」

## 金髪に絡み付かれる、……計画通り

ｓｉｄｅ　篠ノ之　箒

開始の合図から十秒もしないで行われた、一夏の突然のギブアップ発言。私達が固まっている間にそれは受理されて、決着を告げるブザーが虚しく響き渡った。

「……さてと、決闘も終わったし、寮に戻って寝るか」

「ッ！お待ちなさいっ！」

何でもないかのように平然とピットに戻ろうとする一夏に向かってオルコットの怒声がぶつけられた。

「何だよ五月蝿いな。お前があんまりにも五月蝿くて我儘で鬱陶しくて餓鬼臭くて放っておけば何時までも騒ぎ続けて迷惑だからお情けで決闘を受けてやったんだぞ？　決着ついたんだし帰らせろよ」

一夏。一の言葉に十のカウンターを返すのは流石に酷いと思うぞ。確かにそのような感じだったが。

しかしオルコットはその言葉に逆上し、オープン・チャネルでアリーナ中に響き渡るほどの大声で一夏にくってかかる。

「わたくしは言いましたわよね！わざと負けるようなことがあればあなたを奴隷にすると！」

「え、なに？　今の時代に奴隷？　法律的に駄目だろ常識的に考えて。第一それはお前が勝手に叫んで騒いでいただけで俺は了承して

ないし。妄想もいい加減にしろよ海賊王国人。お前みたいのがいるからイギリスの国の品位が下がるんだ」

いや、だからな一夏。一の言葉に十返すのは辞めろと。

「第一決闘って言っても原因はお前が日本を極東の島国で文化的に劣ってる下らないその上そこに住む黄色い猿が珍しいからという理由で自分より目立っているのが気に食わないって騒いだせいだしな。そんな劣るはずの黄色猿に決闘を挑むなんて、つまりわざわざ高尚な人間様から黄色猿と同じ所まで落ちてきたってわけだろご苦労さん。そうして威張ってられる原因のＩＳを作ったのはお前の言うところの極東の島国に住む黄色い猿だってことも忘れてんだろ。そんなこと言うんだったらその極東の島国に住む黄色猿なんかでも作れるＩＳを作ることができなかったお前達は文化的に劣っている極東の島国に住む黄色猿にも劣る豚だろう？　喧しいからその薄汚い口を塞いで屠殺場に行ってろ西洋の飯の不味い島国の白豚が」

……ああ、もうこれは止まらんな。そして一夏が決闘では派手な闘いを期待するなと言った正しい理由もわかった。

つまり一夏はクラス代表になりたくなかったからオルコットに決闘を勝たせてすぐさま叩き潰すつもりだったと言うことか。

……ちなみに私が想像していた理由は、一瞬で終わらせるから派手にはけしてならないと言う理由だった。見事に外れたな。

「ん？　どうしたんだそんな顔を真っ赤にして。一応言っておくと先に侮辱してきたのはお前だからな？　自分のことを棚に上げて他のところを責めて優位に立ったつもりになりたいのか？　そんなんだから駄目なんだよ。なに怒ってるの？　怒ってるのはこっちの方だよドリル擬きが。俺だけだったらともかく日本人全て、ちー姉さ

んも束姉さんもののちゃんも弾もカズも蘭ちゃんも会ったこともないのに馬鹿にした塵屑未満が。オキシフルで全身余すところなく消毒されてから出直してこい。まあ黴菌（ばいきん）が消毒されて生きてるかどうかは微妙なところだけど」

……よくもまあそこまで舌が回るな。回りの者達はにこにこ笑いながらそう言っているお前を見てドン引きだぞ？

「……言いたい放題言ってくれましたわね……っ！！」

「先に言ったのはお前だって何回言えばいいんだ？　それとも塵屑に記憶力を求めた俺のミスか？　……ああ、決闘だったら仕方無いから受けてやっても良いぞ？　今回はまともにな。ただ、これで勝とうが負けようがお前がクラス代表をやってくれるんだったらだけど」

そこで一夏は数秒間を開けて、それから呟いた。

「返事は無いか。……ああ、もしかして……俺に負けて、お前が豚だって証明されることが怖い？　ならしょうがないな、豚にしては懸命な判断じゃないか？」

……恐らく幻聴だろうが、太い綱が一気に引き千切られるような音が聞こえた気がした。

「……ふ……ふふふ……ふふふふふふ……」

それはまるで地獄から響いてくるような笑い声だった。怒りを煮詰め、憎悪を煮詰め、殺意を煮詰めて混ぜ合わせ、さらに濃縮して凝縮して作り上げた負の感情の結晶のような笑い声が、アリーナに響く。

それは小さな笑い声だったが、妙によく通り、それを聞く全ての者達に恐怖を与えるような響きだった。

しかし、恐らくこの場には最低でも三人、この声に恐怖を感じていないものが居る。

一人は当然一夏。いつも通りに見える笑顔を浮かべたまま、笑い続けているオルコットを見詰めている。

そしてもう一人は恐らくだが千冬さん。あの人はこの程度で恐れることはないだろう。

そして最後の一人はこの私だ。

……正確には怖いと思っているのかもしれないが、わからない。

なぜなら、開始からずっと強まり続けている一夏の怒気の方がよほど恐ろしく、オルコット程度のことに割いている感情のキャパシティが存在しないからだ。

「……ふふふふ……いいでしょう。その条件を飲みますわ……変わりに、今回あなたが私に負けたら、強制的に奴隷ですわよ？」

「……なんだ、お前程度の腕でも誰かに勝てるのか。驚きだな」

「……試して差し上げましょうか？」

「試させて欲しいのか？」

一夏とオルコットの間の空間に火花が散ったように見える。

「……いいだろう。その条件、飲んでやる。……真耶先生！申し訳ありませんがもう一度試合開始の合図を！」

一夏が叫んだすぐ後に開始の鐘が鳴り響き、もう一度強固にバリアが張り直される。

「さあ、踊りなさい！わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる葬送曲で！」

「自分のためのか？　用意が良いな」

そうしてようやく試合が始まり、私はＩＳ学園で初めて一夏が完全に起きているときの姿を見ることになる。

## 金髪に絡み付かれる、……計画通り（後書き）

ちなみに、葬送曲にレクイエムとルビをふるのは誤りです。レクイエムは鎮魂歌で、死人の魂を慰める曲です。
間違ってもレクイエムを流しながら人殺しなんていう罰当たりなことは辞めましょう。

## 試合開始、正確には私刑（前書き）

……もっと正確に言うと……処刑？

## 試合開始、正確には私刑

開始の合図が鳴ってすぐ、俺はさっきぶりに完全に起きて動き始めた。

色々と話をしていたお陰で既に初期化は終わっている。後は最適化なんだが、これは動きながらじゃないとなかなか進まないのであまり進んでいない。

……が、そんなことは関係無い。ちー姉さんと束姉さん、俺のこの世界で出来た友人達を馬鹿にしたんだから。とりあえずボコす。ちなみに俺は優しいから、試合中にアポリオンをばらまいてゾナハらせてからボコすとかイギリス全土にアポリオンばらまいてゾナハらせてから原因をでっち上げてこのドリルを社会的に殺したりとかはしない。優しいだろう？

最初に武装な錬金のチャフ、アリス・イン・ワンダーランドを大量に（具体的には核金十個分にちょっと色をつけたくらい）散布して光を強制的に乱反射させる空間を作り上げた。この中では十メートル離れたらドリルが持っているレーザーライフルでも虫すら殺せなくなるだろう。

それと同時にハイパーセンサーを殺し、さらにロックオンや名前の元になったブルー・ティアーズの思考操作、そして通信すらも届かないようにする。

それに気付かない金髪はただただ無為にエネルギーを消費し続けている。

今となっては全く怖くないレーザーライフルを乱射し、動かせない

第三世代兵器を躍起になって動かそうとし、唯一の実体弾であるミサイルもただまっすぐ撃つことすらできずにぐにゃぐにゃと進路を曲げてアリーナの遮断シールドにぶつかって爆散した。

「くぅっ！なぜ！なぜ動かないんですの！？」

「こっちで邪魔してるからだけどなにか？」

金髪の神経を逆撫でするようにヘラヘラと笑い、無駄弾を撃たせる。そろそろエネルギーは二割ほど使ってしまっているだろう。

冷静になれば簡単に気が付くだろうことにも気が付かず、金髪はただ俺にライフルを向けてレーザーを撃つ。

「だから効かないっての。と言うかこれは対ＢＴ兵器使用ＩＳ用の第三世代兵器なんだから当然だろう。実弾系と接近戦だったら効果はあるけど……できるか？　中距離射撃型」

さらに挑発して鼻で笑う。卑怯とか言われても、相手のことを調べて対策をたてるのは当然だと思うんだがな。

数秒間動きを止めた金髪は、今度は近距離用の武器……インターセプターを取り出して向かってきたが、俺は向かってくるのに合わせてボクシングのヒットマンスタイルに構える。一歩を踏み出すボクシング漫画の死神と尾張の竜の技は好きだ。

フリッカーを連続して金髪に叩き込む。俺を目指していても別の方向に行こうとしてしまうので、隙はいくらでもある。

ちなみにこれ、金髪との距離を十メートルより短くしたりはしない。なにが原因で逆転されるかわからないから。

どうやっているかと言えば、俺が束姉さんに頼んでつけてもらった武装の一つである、衝撃砲で。

基本的にボクシングと同じように左は低威力の高速連射用で、右が高威力の単発。

大したことがないと思うかも知れない。しかし、俺としてはそう相手が思ってくれたほうが都合がいい。

しかしこれは束姉さん特製で、鉄甲、拡散、熱核拡散と即座に種類を帰る事ができ、さらには回転を加えて貫通力を増したり、出力を一部変えて軌道を曲げることまでできる。もちろん左右別々に。

それをひたすら撃ちながら金髪を追い詰める。途中で落ちていた移動砲台に衝撃砲を撃ち込んで破壊し、抵抗が激しくなってもどうとでもなるようにした。拾って戻せば多分エネルギーの補給ができるしな。

……俺ってやっぱり優しいよな。こんだけアリス・イン・ワンダーランドを使ってるのに集束させて発狂させたりしてないし、シールドの中で爆破とかしてないし、気で衝撃砲やＩＳそのものの強化もしてないんだ。優しすぎると思うんだが。

「……それじゃあ。そろそろ終わりにするぞ。眠くなってきたんでな」

右の衝撃砲を構え、左の衝撃砲で動きを止める。

「じゃあな」

ズドンッ！

試合終了のブザーが鳴り、俺の勝利をアナウンスが告げた。

……寮に戻って寝るか。アベアット。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　箒

……一方的だった。それくらいしか言えない試合だったと思う。多くの者達の予想に反して一夏はオルコットに勝ってみせた。それも、完全に封殺したような形で。

私しか見えていなかったと思うが……いや、千冬さんなら見えていたかもしれないな。とにかく一夏の間合いの取り方は尋常じゃなく上手かった。

オルコットの間合い（見たところＩＳに効果がありそうだったのは銃口から三メートル程か？）に入らないように、そしてオルコットが間合いに入れられないように動き、そして動きを制限するように攻撃し、相手の攻撃手段を削ぎ、そして予定調和のように勝って見せた。

右拳を突き出し、残心を忘れずにしていたその姿は、実に格好よかった。

……ところで、明らかに身長が違っていることには誰一人として突っ込まないのか？　気にしている私がおかしいのか？　初めの話が終わってからの一夏の身長とそれまでの一夏の身長が……はぁ。誰も何も言わないのだな。

ならば私も気にすることをやめよう。一夏は一夏だ。それで問題あるまい。

あと、一夏は怒らせないようにしよう。千冬さんが怒ったところは見たことがあるが、今回の一夏の方がよっぽど怖かった。

相手を封殺して動きを止め手段を奪い、最後に一思いにぷちっと潰す。

それはまるで無邪気な子供が生きている羽虫の羽を一枚一枚もぎ取り、足を一本一本引き千切り、動くことができなくなったそれを捨てて、踏み潰すようなこと。

ふと、誰かが一夏をもう一度本気で怒らせたところを想像した。

……二度と一夏を怒らせることはすまい。

# クラス代表、俺じゃないよ？

金髪をボロクソにした次の日。俺はいつもの通りに起きて、いつもの通りにののちゃんと話をして、いつもの通りの一日を過ごして

「御主人様！」

「帰れ」

全くこの金髪はいつまでたっても五月蝿いな。

「……一夏。まずは御主人様発言に突っ込みを入れよう。な？」

「理由は知ってるから。どうでもいいけど」

簡単に言うと、ボコる→新しい世界の扉（具体的にはマゾの扉）が開く→開いたのは俺→御主人様。

当然無視したが、変態は基本元気で仕方ない。面倒だな。

ちなみに束姉さんはちー姉さんになら何されてもオッケーらしい。

聞いてもないのに勝手に教えてくれた。十分変態だな。そして元気すぎるな。

「……（そろそろ）」

「触んないで」

金髪が俺の頭を撫でようとして来たので振り払う。冷たくしても拒否しても放置しても優しくしても喜ぶ奴の相手なんて本当に勘弁だ。

今も払われた手を胸元に持って行ってぞくぞくしてるし、相手したくない。そしてさっさと寝たい。

……寝ようとするとそろそろと近付いてきて抱き締めようとするから気を張りっぱなしになる。ああやだ。ほんとやだ。

「……はぁはぁ……御主人様ぁ……」

「ちー姉さーーん！助けてーーっ！」

変態は嫌だ。特に俺に襲いかかってくる変態は嫌だ！

「オルコット。一夏は私のものだ」

ちー姉さんはそう言いながら金髪の頭を片手で掴み、ぎしぎしという音が聞こえてくるほど締め上げている。

「……無事だったか？　一夏」

「大丈夫。ちー姉さんのお陰で助かった……」

ちー姉さんは俺の頭をよしよしと撫でる。……ああ、やっぱ気持ちいいな……。

「……くぅ……♪」

……気が付いたら食堂が血まみれになっていた。ちー姉さんもかなりふらついていたが、大丈夫だと言っていたのできっと大丈夫なんだろう。

そういうことにしておいて、俺は教室への道を歩く。ののちゃんと手を繋ぎながら、尻尾をぱたぱたと左右に振って。

……待て、いつの間に俺は獣耳一号、柴犬を装着した？　覚えがないぞ？　まさか、遠隔で装着したのか？

……凄いな、束姉さん。無駄なところにその技術を使いすぎているような気がしないでもないけど、すごいものはすごいよな。

……とりあえず吠えておこう。

「わぅ！」

周囲に血の海が出来た。さっきまではなんともなく手を繋いでいたののちゃんも、そっぽを向いて鼻を抑えた。

「……一夏」

「わぅ？」

「ぐふっ……ああいや、何でもない。だっこしても良いか？」

願ってもないことだったので即座にお願いした。お腹が一杯だったせいか、奇妙に眠い。

「……ふふふ。まったく一夏は。いいから寝てしまえ。必要になったら起こしてやる」

……それは、ありがたいことだな。

……それじゃあ……お休み……ののちゃん……。

「……ああ、お休み、一夏」

……くぅん。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　箒

「……篠ノ之。なぜ織斑がお前の膝で眠っている」
「一夏が眠そうにしていたので打診したらこうなりました」
千冬さんに明らかな嫉妬の視線を向けられるが、私はそれを受け流す。六年ほど会っていなかったのだし、このくらいは良いだろう。
……それに、一夏はシスコンで、千冬さんもブラコンだからな。ここで離したらすぐさま千冬さんは一夏を拐って行くに違いない。せめて授業開始まではこうしていよう。

約束通り、一年一組のクラス代表は一夏ではなくオルコットになった。不満は少し出たようだが、一夏の最後の攻撃の威力を思い出して不満を取り下げた。
ちなみにあの攻撃はオルコットのシールドエネルギーを全て削り取り、アリーナの床に直撃して巨大なクレーターを作り上げていた。そんなものを食らっては操縦者の生命が保証できないし、一夏がＩＳを使う度にアリーナを修理していてはいくら金があっても間に合わないと千冬さんと山田先生からも言われていたので、一夏のクラス代表の話はなくなった。

……ここまで考えてやっていたのだとすると、一夏は随分と策士になったものだ。
まだまだ偶然に頼るところも多いが、一夏の狙い通りにクラス代表はオルコットになったし、誰もがそれを肯定している。……理由とやり方はともかくとして、私も。
そんなことをしておいても、今こうして私の膝の上で眠っている一夏はとても可愛らしい。決闘の時はむしろ格好よくて、どうしてもこの一夏とあの一夏が同一人物に見えない。

……雰囲気だけではなく、身長まで変わっているのだから当然か。

「……ん……」

……うむ、可愛らしい。

ところで、一夏の鞄からこっそりと私と一夏を覗き見ている小さな一夏（犬耳付き）はなんなのだ？　拾っていいのか？　お待ち帰りしていいのか？

キーンコーンカーンコーン……♪

む、授業開始か。もう少し抱いていたかったのだが……周りの視線と千冬さんの視線が痛いし、無理だな。

「一夏。授業の時間だぞ。起きろ」

「……はぁ……い……」

私の言葉に反応してゆっくりと一夏が動き出す。ぺたりと伏せられていた耳がピクリと跳ね、眠そうな目を右手で擦りながら顔を上げる。

「……っ、ぐふっ！」

「かはっ！？」

「……っ！？」

……被害は甚大だ。かくいう私も必死になって愛情の暴走を止めているわけだしな。

自分の席に戻った一夏は、どうやって入っていたのかは知らないが四十センチほどの小さな一夏（お揃いらしい茶色い耳と尻尾付き）を鞄から出して、抱き締めて目を閉じた。
小さな一夏もまんざらでも無いらしく、一夏の手に頬を擦り付けて鼻をぴすぴすとならして甘えている。

「……きゅぅ……」
「……くぅ…ん……♪」

……今思い出しても私は凄いと思う。よく耐えたな、私。
ただ、この時私の頭の中では

『箒。君は頑張った。よく頑張った』
『でも、もう我慢なんてしなくていいんだよ？』
『自分に素直になろうよ。我慢は体によくないよ？』
『見てごらん？　周りだってああなってるんだ。仕方ないことなんだよ』
『だって、一夏が可愛いんだから』
『……君も、そう思うでしょ？』

……といった悪魔の囁きがぐるぐると思考の大半を占拠していたが、なんとか振り切った。

……その声の主が頭の上に天使の輪を浮かべて純白の羽を生やした小さな一夏と、尖った尻尾と黒い蝙蝠のような羽を持っていた小さな一夏だった理由がわからないが、恐らくそれは永遠にわかる日は来ないだろう。

……ああ、一夏は可愛いなぁ……。

## ＩＳ調整、一次移行マダー？

やほ。最近クラスののほほんとした娘におりむーと呼ばれ始めた俺だ。名前は当然、織斑一夏。昔の名前は桜道一哉。哉の字がムズい。ちなみに俺からその娘は『のほほん』と呼んでいる。渾名とか偽名とかは何でか覚えられるんだよな。

理由は知らん。

そんな俺だが、今はＩＳ整備室に来ている。黒猫耳と白猫ぷちか装備で。

……途中で色々あって拐われそうになったり寮の部屋に連れ込まれそうになったりしたけど、スタンガンってのは便利だな。スイッチ入れるとバチバチじゃなくってガギギギって致命的な音がするけど。

……まあ、それはどうでもいいことだ。今はもっと大切なことがある。

実は、シロがまだ一次移行をしないのだ。原作ではもうしているはず……と言うか、金髪との決闘中にするはずなんだが……まあ、相当魔改造されてるからおかしくはないんだが。

そこで原因を調べるべく、整備室で色々と見ておこうとしているわけだ。

機材を借りて適当に繋ぎ、シロの中身を覗く。

……ああ、理由が何となくわかった。

つまり、性格の違うコアを直列並列関係無しに繋ぎあわせたおかげ

で、全体ならともかく一つ一つのコアに対する時間が足りていないわけだ。
ちなみに足りているのは左の衝撃砲と恐らく反応速度を上げているところ。右の衝撃砲は後少し。機動はまだまだでブースターもまだ。ハイパーセンサーは……まあまあか。
……やれやれ、これじゃあ一次移行はしばらく先になりそうだ。クラス代表が俺じゃないから特にな。

……もし、鈴がＩＳ学園に来て金髪と戦うことになったときに束姉さんからＩＳが送り込まれてきたら、どうしようかねぇ……。
フィッティングが終わらないとアクセサリーみたいに待機してくれないんだが……やれやれ、困ったねぇ……乱入もできないな。

ｓｉｄｅ　更識　簪

視界の端で、黒い尻尾が揺れ動く。
それは私のとなりに座っている、織斑一夏のものだ。
なぜそんなものをつけているのかはわからないけれど……かわいいとは思う。
小さい白い猫耳の織斑くんが、その尻尾を追いかけ回している所なんて、ついつい手を休めて見入ってしまうほどだ。

何があったのかはわからないけど、織斑くんは難しそうな顔をしていたと思う。
それからため息をついて、専用機をどこかに運んでいった。
……何で待機状態にしないの？

ちょっとだけ気になって織斑くんが残していったデータを見てみると、理由がわかった。

……まだ、フィッティングが終わってないんだ。あんなに乗ってたのに、まだ。

聞いた話だと、織斑くんは一週間に一度ＩＳに乗って訓練をしているらしい。かなりの好成績を出していたって聞いたのだけれど……噂が間違っていたのか、それとも初期設定のＩＳで結果を出した織斑くんが凄いのか……。

「……なにやってるの？」

「きゃっ……！」

振り向くとそこにはちっちゃい織斑くんを抱えた織斑くんがいた。

……私は今、何をしていた？　見ればわかる。織斑くんのＩＳのデータを覗き見していた。

……もしも私が打鉄二式のデータを勝手に見られたら？　そのときにならなくってまわかる。すごく怒るだろう。

……それじゃあ、織斑くんが私のやっていることを見て、怒らない可能性は？　――そんなもの、どこにもない。

噂では、織斑くんは怒ると織斑先生より怖くなるらしい。ＩＳ初心者で、起動時間が一時間も無いのに代表候補生を一方的に倒してしまったという噂だ。

そして織斑先生も、怒った織斑くんには手がつけられないのだとか。

……正確に言うと止められないことはないのだが、その後に怒らせた相手に対する報復が激しくなるとも言っていたらしい。

そんな織斑くんが、今、私の前に立っている。

「……ああ、シロのデータ見てたのね」

「あ、あの……ごめんなさい……」

「いいよ別に。フィッティングすら終わってない状態のスペックを見られたところで痛くもなんともないし」

……あれ、意外と……怖くない……？

のんびりとした口調。ゆったりとした空気。眠たげな表情。それらがなんとなく、小さな頃から知っている私の友達を思い出させる。

「……ああ、って言うかむしろ手伝ってくれない？　このままだとほんとに一次移行に半年とかかかりそうでさ」

「え……いいけど……」

……って、なんで私は良いよって言ってるの！？

そう思ったけど、織斑くんの嬉しそうな顔を見ると断る気が失せてしまう。……もう。

「ありがと。それじゃあとりあえず俺は乗るから、フィッティングの手伝い頼める？」

……えっと……調整とか整備だったらともかく、フィッティングのやり方はちょっと……。

「……使ってれば勝手にしてくれると思うけど……？」

「八時間くらい乗ったんだけど、どうも遅くてな。二割くらいしか終わってないんだよ」

……どんなＩＳを使ってるの？

## 鈴、来る

らららコッペバン♪　らららコッペバン♪　いつも変わらない味♪

……なんとなく出てきたので歌ってみた。若干舌っ足らず風に歌うのがコツと言えばコツかもしれない。

だからと言って本当に舌っ足らずにするわけではなく、あくまでも舌っ足らず『風』なだけだ。幼子風とも言う。

それとシロの事だが、驚きの事実が発覚した。

なんとシロは、フィッティングが完全でなくとも待機状態になれたらしい。かんちゃん（本名は忘れたが整備室に居た度の入っていない眼鏡をかけた娘）が言ってくれなかったらずっとわからなかったかもしれない。わかってよかった。

あと待機時の形態はなぜか武骨な手甲だった。きっとフィッティングが終わっていないせいだと思いたい。

とりあえずかんちゃんの助けを得てフィッティングを三割まで終わらせた。そう何度も手伝ってもらうのは悪い気がしたんだが、かんちゃんはどうやらシロの中のどこかのプログラムを参考にしたいらしく、もう少し手伝ってくれるらしい。

……優しい娘だな。

ちなみに俺はかんちゃんの名前も盛大に間違えた。

「サワッディー・神凪（かんなぎ）だっけ？」

「……全然違う」

このあとまた教えてくれたんだが、その度に間違えた。俺の体質（日本語に直して平仮名三文字以上の名前は覚えるのに五年以上かかる）の事を教えたら、苦笑いしていた。
ちなみに人の名前だけじゃなくってＩＳの名前も覚えられないことを言った時も苦笑いしていた。

すまん。

ＩＳの実践授業で基本的な飛行操縦をすることになった。ＩＳスーツは臍出ししない全身型のを千の顔を持つ英雄で出して使っているので誰かさん達が倒れることはないだろう。
……なぜかうなじとか尻とかに後ろから視線が集中してるような気もするけど、きっと気のせい。

「……ああ、かわいいうなじ……」
「背中とか撫ったら、どんな声をあげるのかな……？」
「……（はぁはぁ）」

……畜生。変態ばっかりか。全力で逃げたい。
ちょっと涙目になってしまったが、いくらなんでもちー姉さんの前でそういうことはしてこないだろうと思いたい。

ゴスッ！ゴスッ！ドゴスッ！！

「私語は慎め。かわりに元気の有り余っている貴様らにはグラウンド五十周をくれてやる。嬉しいだろう？」

……ＩＳ学園のグラウンドは一周五キロあるそうだ。それを五

十周……フルマラソンおよそ六回分か。
……まあ、俺ならなんとかなるだろう。ライドインパルスと気の強化を使って全速力でやれば……多分ラカンは秒速十キロくらいは出せるだろうから、二倍と考えて十五秒かからない。
曲がることを考えればもう少し遅くなるだろうが、それでも一分程度だろう。

……久し振りにまともにチートか凄いと感じたな。いつぶりだ？

……まあ、なんでもいいか。がんばれ。
こっちはこっちでＩＳ展開しないとな。とりあえずだらんと力を抜いて、シロという鎧をつける感覚で。

（シロ）

反応速度特化型のＩＳであるためか、展開開始から終了までが０．０２秒という明らかに頭がおかしい速度になっているが、悪いことではないので気にしない。
それとついでに、シロの機体名がいつの間にかシロになっていた。
元は違ったと思うが、呼びやすいから無問題。

「ＩＳの展開は終わったようだな。飛べ」

そういわれてすぐ飛び上がる。機動力特化だがそんなに速度は出さない。面倒だし、まだ慣れてないから自信がない。
百零停止と零百加速はできたけど、やっぱり飛び慣れてないからな。

「ご主人様？」
「ご主人は嫌だ。黙ってくれ」

……ああ、まあ、なんとかなるかね。

ちなみにこのＩＳは急加速や急減速の時のＧの軽減用としてかなり性能のいいＰＩＣを積んでいるらしい。そうじゃなかったら百零停止で死んでるな。

……いや、この程度じゃあ死なないか。

この後の武装の展開は楽に終わった。いつも千の顔を持つ英雄を使っているので想像が簡単だったからと言うのもあるだろうな。記録は０．０３秒。展開より０．０１秒遅いが、まあ早い方だよな？

「武装……あったんですの？」

「あるから展開したんだけどな」

……さて、今日の授業も何事もなく終わっ

――――っ！

懐かしい気配を見付けた。すぐさま監視用のゾナハ虫（無害）をそちらに放つ。

すると空港にほど近いタクシーの中でその気配の主を見付けた。

――やっぱり来たか。鈴。

ちー姉さんの授業の時と同じくらい起きて、買い物に行く。久し振りの親友との再会なんだし、手の込んだ料理で迎えるべきだろう。

ちー姉さんも鈴のことは嫌いではなかったはずだし、一緒に飯にしよう。ののちゃんも呼んで、かんちゃんは……忙しいって断られるだろうけど一応呼んどくか。

後ろで俺が起きたことに驚いている奴等はしばらくほっとこう。

## 歓迎会、お出迎え

俺は料理の材料を買い込み、鈴が好きそうな料理を作っていた。主に酢豚や青椒肉絲等の中華料理だが、和食も少し入っている。

ちなみに一番手をかけているのはミニラーメンだ。鈴はラーメンが好きだったと記憶しているので、小麦粉を捏ねて麺を切らずに手で伸ばし、スープもチャーシューもメンマも自作してみた。

途中で見知らぬ誰かが勝手につまみ食いしていたので、とりあえずちー姉さんの真似をしてアイアンクローで浮かしておいた。泡を吹いていたような気がしなくもないけど、きっと気のせいだと思うことにしておいた。

ちなみに俺は、片手で固定されてない西瓜の皮を掴んで抉ることができる。そのくらい簡単だけど、人間相手にはちゃんと手加減している。俺って優しい♪

それと、鈴の迎えにはぷちか達四体を行かせた。あいつらはあんななりでもＩＳだし、ＩＳなのに小さいシロ、略してミニシロを使うので問題ないだろう。一次移行終わってないけど。

ちなみにミニシロはしっかり衝撃砲も近接ブレード（まだ名無し）をもっているし、機動力も反応速度もシロとほとんど同等と言う驚きのスペックを誇る。

さらに奥の手も存在するので、まあ、拐われることはないだろう。

心配するべき所は、鈴に会う前にはしゃぎすぎて眠ってしまわないかと言うところだが……まあ、なんとかなるだろう。

……なんとかなるよな？

ｓｉｄｅ　ぷちか四十六号

白狼ぷちかこと、ぷちか四十六号です。名前はこれで固定されました、変更はききません。

おれたちは今、ごしゅじんさまにお願いされて、中学の頃の同級生、鳳　鈴銀（リンイン）こと鈴を迎えに行くと言う責任重大な任務を受けています。

そのためにおれが任されたのが、三体の同族達。

黒ラブぷちかこと、ぷちか二十三号。
ボルゾイぷちかこと、ぷちか三十三号。
そしてチワワぷちかこと、ぷちか四十一号。
それに俺を合わせた四体での任務になる。

……報酬はなんと、おにくをいっぱいたべられるのだ。そして、高確率で鈴さんにだっこしてもらった後、たかいたかいまでしてもらえることがあると。
……受けるしかないだろこれは！

「わぅ！」
「わぅ！」
「わぅ！わぅわぅ！」
「……くぅ……わぅ」

ボルゾイぷちかが大きく吠えすぎたせいで、チワワぷちかが怖がって半泣きになった。とりあえずボルゾイぷちかを『めっ！』してからチワワぷちかを慰める。

……背は同じくらいだから、押されるところころ転がっていっちゃうけどね。

それとさっきからハイパーセンサーで周りの様子を見ていると、ころころ転がったりとてとてと歩き回るおれたちを見て、なぜか血まみれで笑顔を浮かべながら倒れてしまう。

そんなになってもずりずりとおれたちにはいよってくるから、ちょっと怖い。

「くぅ……」

気の弱いチワワぷちかなんて、尻尾を足の間に挟みながら俺にくっついてくるほど怖がっている。

「わぅわぅ！」
「わぅ！」
「わぅ！」
「くぅん……わぅ！」

すぐにこの場を離れて鈴さんを迎えに行く事を提案すると、即答で色好い返事が帰ってきた。

それじゃあ、行こう！鈴さんを迎えに！

「わぅわぅわぅ♪」
「わぅ、わわぅ♪」
「くぅ～、わぅ♪」

「わぅ～～♪」

尻尾をふりふり、耳をぴくぴく、四体揃って元気に歩く。

鈴さんの居場所はすぐにわかる。ハイパーセンサーと風に乗った匂いで。

まだＩＳ学園の敷地内には入ってきてないようなので、外と中を繋ぐモノレールの駅で鈴さんを待つ。もうちょっと時間がかかるみたいだ。

暇な時間を潰すための遊び道具は持ってきた。トランプだけど。ちなみに絵柄はスペードがわんこ属性ぷちか、クローバーがにゃんこ属性ぷちか、ダイヤが鳥属性ぷちか（エンジェルぷちかもここ）、ハートがそれ以外の属性のぷちかと絵柄分けされている。

やるのは大貧民。ジョーカー一枚の特殊ルール革命以外一切なし。ついでにジョーカーの柄はミニシロ。

「わぅ！」
「ふっ……わぅ」
「わぅっ！」
「わ～ぅ～」
「わぅわぅ！」
「わぅ」

なぜかチワワぷちかはこういうのが妙に強い。どのくらい強いかと言うと、物理・特殊受けラッキーレベル１００しんかのきせき持ちカウンターたまごうみつきくらい？　勝てないことはないけどきつい。

「わぅ！」

革命！？　こんなときに革命だって！？

弱い札から切っていってあらかた出尽くしたところでこれは……っ！

……ん？　この匂いは……。

くるりと後ろを振り返ってみると、そこには鈴さんが立っていた。

懐かしい匂いだ。

急いでトランプを片付けて、鈴さんをお出迎えする。くるくると鈴さんの周りを回っているだけだけど。

「……ふふふっ。久し振りね、ぷちか」

「わぅ！」

「わわぅ！」

「わぅわぅ！」

「わぅ！」

「あははっ！元気ねぇ。一夏は元気？」

ごしゅじんさまは元気だよ。ずっとね。

そういう思いを込めてこくこくと頷くと、鈴さんは嬉しそうににっこりと笑ってくれました。

……それじゃあ、ごしゅじんさまの所に行きましょう！

「あ、私ちょっと先に手続きしないとＩＳ学園に入れないんだけど……場所わかる？」

わかりますよ？

頷いてからその場所に行こうとすると、チワワぷちかが鈴さんに抱き上げられた。

「それじゃあ、案内よろしくね？」

「「「わぅ！」」」

# 外伝、予知夢？　セシリア編（前書き）

リクエストがあったので書いてみました。

## 外伝、予知夢？　セシリア編

先に言っておくが、これは少し未来の俺が思い出している話だ。だから金髪の事を金髪と呼んでいない。
しかし本編ではまだしばらく金髪呼びをするから、それが嫌なら読み飛ばしてくれ。

このくらい開けとけば良いか。

金髪……わかりづらいしそろそろ名前で呼んでやるかな。シアとセリとせっしーとどれがいいと思う？　オル子も候補には入ってるんだが。
渾名とかだったらなんでか覚えられるから三文字以上でも構わない

んだが……セシリーで良いか。

セシリーを優しくたしなめた次の日の夜。俺はまた薄ぼんやりとした夢を見た。原作の一夏とセシリーが、ＩＳを使って訓練をしている。

俺は邪魔をしないように観客席でそれを見ていたら、一夏が俺に気が付いたらしくこっちの方を見つめていた。それにつられて、セシリーも。

俺はひょいと立ち上がってステージに入る。バリアは張られていなかった。

てこてこと歩いて一夏とセシリーに近付いていくと、一夏はセシリーに一言二言言ってからＩＳを解除して俺の頭を撫でてきた。

……いい撫でテクを持ってるじゃないか。

しばらく一夏の撫でテクを堪能してから、前回と同じように獣耳を取り出す。前回の尖った犬耳とは少し趣向を変えて、今回は垂れ犬耳。ただしどこかメカニカルな気配がする。

一夏は俺が持ったそれを見ると、苦笑しながら頭を下げてきてくれた。うん、つけやすくていいね。

つけてみると、今回は凛々しいと言うよりはどこか愛らしさが増したような気がする。

……うん。いいんじゃないか？

そう思いつつ振り返ってみると、セシリーが俺と一夏をガン見していた。その目には驚愕一色。あまりにもそっくりな俺と一夏に驚いているんだろうか。何でもいいけどね。

こっちのセシリーは俺のところのセシリーと違って変態ではないことを祈りつつ近付いていくと、なぜか撫でられた。このぎこちなさは寝ている俺を撫で始めたばかりのちー姉さんにも匹敵するな。まあ、一夏が俺の事を撫でてたから撫でたんだろうが……もう少し撫でようがあると思うんだよな。いいけど。

しばらく撫でさせてると一夏がまた苦笑して、セシリーに撫で方を教えていた。手取り足取り……いや足はとってないけど、それだけでも格段に撫でテクが良くなった。やっぱり他人に物を教えるときは実際にやってからやらせるのが一番だよな。

……ん、及第点かな？

と言うことでセシリーにも一夏と同じ垂れ犬耳をつける。こっちはなぜかちょくちょく動いている。

そして俺も同じように垂れ犬耳をつけて、にこにこしながら二人の手を取る。これは夢なんだし、遊んで笑って仲良くして、それからみんなで寝ようじゃないか。

ｓｉｄｅ　一夏Ａｎｏｔｈｅｒ

小さい俺によく似た子供が眠った後、俺とセシリアは手を繋いで横になっていた。

その間にはもちろんその子供が居て、まるで本当の子犬のように俺に擦り寄ってきていた。

……前に見たときは相手は箒だったんだが……あの時は一緒に寝

た夢（しかも俺似の子供も一緒で仲のいい家族みたいな状態で）を見たせいで、しばらく顔を合わせる度反らしてたんだよなぁ……。

……不思議なことに、箒も俺と同じ夢を見ていたらしく、その事を伝えたらものすごく驚いていた。

「……くぅ……」

きゅ、と俺の服（いつの間にかＩＳスーツじゃなくなって制服になっていた）を両手でつかんで、顔を俺の胸に擦り付けている。

「……わたくしは。なんであまり好かれていないのでしょうか？」

それを見たセシリアは少し不機嫌そうに、かつ悲しそうに言うんだが、俺に言われても知らない。箒の時は普通に箒にも甘えてたんだがなぁ……。

そう思いながら子供の頭を撫でる。……そう言えば箒とこの子供はなんなのかという話をして、未来の俺の子供じゃないかって言う話になったんだっけ。

……そう言や相手は誰なんだろうな？　箒かも、って言ったら箒は顔を真っ赤にして怒ってきたから違うとして……セシリア？

……まさかな。

そんなことを考えているうちに夢の中の俺は眠っていて、ふっと起きると寮の俺の部屋だった。

あの夢は確かに夢のはずなのに、なぜか本当にあったような気がしてならない。

その上忘れる気配もなく、いつまでも鮮明に覚えている。

……ふと、頭に手をやってみると、なにかに触れた。
……夢のなかであの子供につけられた、垂れ犬耳だった。
……気付いてよかったぜ。このまま教室に行ってたら大恥かくところだった。
……いやいやいや、そうじゃない。それは重要じゃない。なんでこれがここにあるんだ!?
俺は軽くパニックになった。

## 歓迎会、主催者は俺

食堂を借りきって準備をする。ちなみにかんちゃんはやっぱり来ないらしい。ちょっと残念。

ののちゃんとちー姉さんは結構乗り気だった。それから俺が準備をしているのを見て途中参加したいと言ってきたクラスメイト（例によって名前は覚えていない）達も手伝ってくれているのではかどっている。

……ちょっと料理が足りないかと思ったので追加を作ることにする。

鈴には悪いけどちょっとの間ぷちかハーレムで我慢してもらおう。

料理の追加を作っていると、ぷちかたちと一緒に鈴が姿を表した。

ちー姉さんやクラスメイトがいいな～という目で見ていたが、ぷちか達は久し振りに会った鈴から離れたがらなかった。

……まったく。

「鈴」

「あ、一夏」

俺が姿を見せると、ぷちか達は俺に向かって走ってくる。てててっと言う擬音がとても良く似合う走り方だ。

「……久し振り。料理できてるから、座って」

「……それじゃあ、お言葉に甘えるとしましょうか」

鈴はそう言って、膝にチワワぷちかを乗せて座った。

……変わらないな。鈴は。

料理をするのは俺、料理を運ぶのはぷちか達と言う歓迎会は、凄まじい勢いで脱落者を量産していった。

とある少女はぷちかにご飯を食べさせた時の反応に脳髄を直撃されて鼻血を噴き出し、とある少女はぱたぱたと左右に振られる狐ぷちかの尻尾に視線を奪われてただじっと見つめ続け、催眠術にかかったかのように倒れる。

またある少女はぷちかをおもちかえりしようとしてちー姉さんのアイアンクローに浮かされ、頭蓋骨を軋ませながら気絶し、そのちー姉さんも白蛇ぷちかと白虎ぷちか、小さな翼が背中についている鳩ぷちかに囲まれて気絶。残ったのはのほほんとののちゃんと鈴の三人だけ。

ちなみに金髪は開始二十秒で左腕を虎ぷちかに尻尾で擽られて気絶。幸せそうな顔をしていた。

「……なんか、ぷちかもずいぶん増えたわね」

「最初からぷちかは１０８いるって言っといた方が良かった？」

「……そんなに一気にぷちかを見たら、出血多量で死んじゃうわよ」

そう言っている間にも片付けの手は止まらない。俺も鈴もののちゃんめある程度家事はできるし、このくらいのことは簡単だ。

ちなみにぷちか達は落ちた少女達（ちー姉さん含む）をそれぞれの部屋におくりとどけさせている。ぷちかだけじゃあ確かに難しいだろうが、ミニシロがいるし平気だろう。

ばれたら不味い気もするが、ばれないように武装で錬金なチャフを撒いてカメラや発信器などを無効化してあるので……大丈夫なはず。

「……あーあ。料理の修行もしてこれなら一夏にも負けないって思ってたら、もっと上手くなってるなんて……」

「しかたなかろう。それが一夏なのだから」

「……そうね。……はぁ……」

「うむ。……そう言えば、自己紹介がまだだったな。私は篠ノ之箒だ。箒でいい」

「鳳　鈴音よ。じゃあ私も鈴でいいわ。仲良くしましょ」

ののちゃんと鈴はこの短い時間でわかりあったらしく、こつんと拳を軽くぶつけ合っていた。仲が良いってのは良いことだ。

「あ、でも一夏を一人占めはさせないわよ？　私も混ぜて」

「なんの話をしている……と、昔ならば言っていたのだろうが……安心しろ」

じゃあ俺が言うわ。なんの話だなんの。

「そうだ、私達の部屋に泊まるか？　一夏の睡眠を邪魔しないのならば許すぞ？」

「はっ。誰に言ってるのよ。私はＩＩＩ（いっぱいいっぱい一夏）の会長よ？　一夏の健やかな睡眠を見守ることを誉れとする私達が、そんなことをするわけないじゃない」

……まあ、いいか。寝るのの邪魔をする訳じゃないみたいだし、問題ないな。

仕事を終わらせて帰ってきたぷちか達の数を数える。全員いるな。

拐われたりはしてないな。

「……じゃあ、歯磨きして寝るか」
「わぅ！」
「にゃう！」
「「がふっ！！」」

どささっ！と五十キロ程度の肉が床に落ちたような音がした。その方向を見てみると、鈴とののちゃんが床に倒れていた。床が真っ赤に染まっている。

「く……い、いきなりそれは、反則よ……っ！」
「くぅ……っ！」

どうやら元気なようだ。
それじゃあ、部屋に戻るか。なんか盗聴機が山のように仕掛けられてるような気がするけど。

……俺、一人部屋になったら自分の部屋にチャフ撒くんだ……。今はののちゃんが居るから使うとののちゃんが発狂しちゃうから使わないけど、一人になったら絶対使うんだ……。

まあ、部屋に着く前にまた全部ぶっ壊したけど。電波障害って地球が磁気を帯びている限り、どんなところでも起きる可能性はあるらしいな。それと同じく磁気嵐も。

……偶然ほど怖いものは無いよな？

## 原作崩壊、今更だけど

一組のクラス代表は金髪。確か名前は……せ……せ……セリヌンティウス・オルゴデミーラ。
……絶対違うな。

「それはそうだろう。メロスの友人とゲームの魔王の名だぞそれは。オルコットだ。セシリア・オルコット」

そうだったか。人の名前は覚えられなくてな。
あと、二組のクラス代表も覚えていない。鈴はクラス代表にはなっていないみたいだし、あまり覚える気も無い。

……原作崩壊が凄まじいな。このままだと原作ではあった束姉さんの作った無人ＩＳの襲撃がなくなるんじゃないか？
……なくなっても何ら問題は無いか。あったらあったで一次移行の糧にさせてもらうつもりだけど。
それに、なんとなくある気がするんだよな。襲撃。

ついでに一次移行についてだが、かんちゃんのおかげで少しずつ進んでいる。フラグメントマップが凄いことになってるらしいけど、知らん。現在進行率三割五分くらい。

……さてと。昼休みになったし、寝るか。

「一夏、迎えに来たわよ」
「良く来てくれたな鈴」
「あ、箒じゃない。昨日はありがとね。……で、やっぱり一夏は昼

食べてないの？」
「私が引きずって食堂まで連れていかなければ昼どころか朝も夜も食べようとしないのだ」
ののちゃんの話を聞いた鈴に睨まれた。怖い怖い。
「一夏。また作ってきてあげたから、屋上で食べるわよ」
「え。俺は作ってないぞ？」
「んなことはわかってんのよ。いいから来なさい。箒も一緒にどう？」
「……ふむ。ならばご一緒させてもらうとしようか」
いつの間にか勝手に話が進んでいた。俺はどうやら屋上で弁当を食べることになったらしい。
……まあ、いいか。
「はい一夏。あーん」
「……はむ。もきゅもきゅ……」
「……いいものだな」
「……いいものでしょ？」
なぜか俺はののちゃんと鈴に優しい目で見つめられている。
……それはどうでもいいけど、鈴のやつ随分腕上げたなぁ……俺もうかうかしてらんないな。
「ふふふっ♪　美味しいでしょ？　一夏に追い付けるように頑張ったんだから」

「ん。美味い」
「……そうだな。明日は私も作ってくることにしよう。構わないか？」
ん？　ののちゃんの料理？　……確か、結構上手に作れたはず。
「お願いします」
「一夏は私達の分ね。私も一夏の分作ってくるから」
「……ああそうか。普通の量では足りないのだったな。だから二人分か。わかった」

一瞬抗議の声を上げようとしたののちゃんも、俺の食う量を思い出したのかすぐに静かになった。
……うん、人に料理を作ってあげるのって、いいよね。
それに感想をもらって、笑顔と一緒に『美味しい』って言ってもらえると、次も頑張る気になる。

……最近、ちー姉さんにご飯作ってあげてないなぁ……ちー姉さんの分も一緒に作ろうかな。ちなみに、前に一回ものすっごく可愛いお弁当（たこさんウインナー、だし巻き玉子はハート型。ご飯の上にはまたハートで、デザートは当然うささんリンゴ）を作って持たせたら、次会ったときにグリグリされた。痛かった。
何でも周りの人にすっごいからかわれたんだとか。
しかもかなり美味しくて悔しかったらしい。
ごめんねちー姉さん。

ｓｉｄｅ　鳳　鈴音

「はい一夏。あーん」
「あー……はむ」

一夏のために作ってきた酢豚をバランス良く摘まみ、一夏の口許に運ぶ。すると一夏は躊躇なくぱくりと食いついてくる。

「もきゅもきゅもきゅ……」

……うん、可愛い。

「……な、なあ、鈴」
「どうしたの？」

急に話しかけてきた箒に視線を向けると、箒は僅かに顔を赤らめながら私にお願いをして来た。

「こんなことを頼むのは変だとわかっているんだが……私も、一夏に食べさせてやっても構わないだろうか？」
「あ、良いわよ？」

あまりに軽い私の答えに、箒の体から力が抜けた。

「……い……良いのか？」
「良いわよ別に。でも、ちゃんと栄養や味の濃さとかも考えて食べさせてあげてね」

ちなみにこれ、結構難しい。どのくらい難しいかを簡単に言うと、他人に最適化されたＩＳを動かすのと同じくらい難しい。
なぜならそれは、一夏の味覚のことをよく知って、そして料理の材料やその味のことをわかっていて、その上で一夏の口の大きさやな

にやらかにやらをわかってやんないといけないけれど……まあ、一夏だったら大体のことは簡単に無視して食べるでしょ。どうしても嫌なら口出しくらいすると思うし。

「……ふぅ……一夏。あーん、だ」

「……あー……ん」

……うん。初々しくて良いわねぇ……。

# クラス対抗戦、見所皆無

金髪の独壇場でした。終わり。

さてと。それじゃあクラス対抗戦の前にあったちょっとした事件のことでも話そうか。

「……一夏？　オルコットが頬を染めて身悶えしてるんだが……」

「気にしない気にしない。」

気にしたところで扱いは変わりゃしないんだから。

「……お前はそこまでオルコットが嫌いか？」

「ん？　別にもう大して嫌いじゃないけど？」

「……じゃあ、なぜそこまできつい態度をとるんだ？」

「本人にそういう態度でいてほしいって言われたからだな」

「……原因はオルコット自身か……」

ののちゃんはそう呟いて頭を抱えた。

まあ、いつものことだな。

このことは話すのが面倒だから、夢の中の回想で勝手に見てくれ。

ｓｉｄｅ　織斑　一夏

鈴が転入してからしばらくして、鈴から模擬戦のお誘いを受けた。

ちなみにこれは睡眠時間を削ろうとしているわけではなく、シロの一次移行の手助けをしたいからしい。

なんでも一次移行をする前とした後では機動力や馴染み方が全く違うらしいので、さっさとやっておかないと困ったときに大変だからと聞いた。

週に一回のアリーナの訓練と週に一回の整備室での整備ではデータが足りないらしく、こっちも望むところとＯＫサインを出した。

その時に金髪がその相手に立候補してきたが、遠距離武器系統のデータの方は足りているので断っておいた。

……普通のＩＳは一つ一つではなく全体で一気に変わるものだと思ってたんだが……まあ、これも束姉さんが作ったコアを複数使った初めての機体だからこれが仕様なんだと納得しておくことにした。

そういう機体だって無いとは言えないよな！

「さて、それじゃあ始めましょうか。」

「そうしよう」

俺と鈴はアリーナでＩＳを装着したまま浮いている。アリーナは借りきったので、ステージには俺と鈴以外は誰もいない。

……ところで、俺がアリーナを使うときにはなぜか毎回観客席がいっぱいになるんだが、理由は知らないか？

「一夏はもてるからじゃないかしら？」

「まさか」

原作一夏だったらともかく、俺だぞ？　無い無い。

「……ああ、そうだ。一夏の戦闘記録見たんだけど……手加減してね♪」
「それなりにね♪」
……さてと。それじゃあ始めようかね。それなりに手加減するけど。
とりあえず今回は近接ブレード（名前はまだ無い）を展開する。右手の衝撃砲の最大威力……というか、アリーナのバリアをぶち抜ける以上の威力を出すのは禁止されたから、右手に。
「あれ？　そんな武器あったの？」
「あったよ？　使ってなかったけど」
「へぇ……それじゃ、始めましょうか」
弾と鈴と一緒に行った喧嘩では、面白がってこんなことをやっていた。
腰を落とし、下げるようにして開いた左膝に左手を置き、右手は広げたまま鈴に差し出す。ブレードはなぜか腰元で浮いている。鞘に入ってないのにな。
「お控えなすって。手前、生まれも育ちも日の本の国。無限の空の生国で、一人の姉と共に生き、その生の大半を睡眠に費やして来やしたが、何の因果か空を動かし、こうしてこの学園にて、生を繋ぐために力をつけるために空を舞っておりやす」
ここで一度切って、息継ぎをする。
「名は、『世界最強の弟』何て呼ばれちゃいますが、血でその者の

全てが決まるはずも無し……凰　鈴音が友、織斑一夏と言う者でござんす。……失礼ながら、お手前は？」

ちなみに鈴の名前の所で少し止まった訳は、シロのハイパーセンサーで出てきた鈴の本名を参考にしていたから。

それを知らない鈴は少し驚いた顔をしたが、すぐにくすりと笑って俺と同じポーズをとった。

「あたしは生まれは中華の国、凰家食房が娘。想い人に毎日の糧を作れるように修行の日々を送っております。両親の思いやりを胸に、想い人に再会いたしました……織斑一夏が友人、凰　鈴音と申します」

……いきなりなのによく会わせられるな。驚きだよ。多分俺もできるけど。

「……って、行きなり言われてあたしが気付かなかったらあんたただの痛い人よ？」

「鈴だったら気付くと思って。実際気付いたし」

「まあ、そうなんだけどね」

お互いに笑い合う。けらけらと。くすくすと。

そして全く同じ時に笑いを止めて。

「――――いざ！」

俺が吠える。

「――――尋常に！」

鈴が叫ぶ。

「「――――勝負！！」」

……そして、お互いの武器がぶつかりあった。

# 外伝、予知夢？　鈴編（前書き）

外伝の時間軸の前後は飾りです。気にしないであげてください。

## 外伝、予知夢？　鈴編

原作では鈴と仲直りをした日のこと。つまりクラス対抗戦の日のことだ。
その日の夜、三度俺は薄ぼんやりした夢を見た。

俺の視線の先には原作一夏と鈴の姿。保険室で鈴が一夏の手当てをしているように見える。

俺は座っていたベッドから降り、半分だけ閉まっていた白いカーテンを開ける。すると薄ぼんやりとしていた一夏と鈴の象が急にはっきりとして、その二人が俺の方に顔を向ける。
鈴はやはり驚いているようで、俺のことを穴が開くほど見つめている。しかし一夏の方はもう慣れたらしく、俺の姿を確認した途端に苦笑して、そして手招きして呼び寄せた。

当然俺はその誘いに乗ってほいほいと近寄っていく。一夏って、なんか安心する匂いがするんだよな。俺からはそれと同じ匂いがしてるのかどうかわからないけど。

きゅっと抱き着いて、それからまた撫でてもらう。身長はさらに縮めて百二十ほど。座っている一夏の頭よりちょっと高い程度だ。

「……やっぱり撫で心地良いよな」
「……はふぅ……♪」

こうして俺と一夏がのんびりしていると、鈴がようやく再起動したらしく、急に一夏に近付いて一夏の襟首を掴んで揺さぶった。

「一夏ぁ！この子誰よ！どこの誰の子よ誰との子よ！？」
「知らねえよ！何で俺にそっくりなのかもわかんねえよ！ついでに俺にそういう相手はいないから！」
……とりあえず、止めるか。
一夏の腰に抱き付いて、少し涙目になる。そして一言。
「……喧嘩はダメ」
俺達のところの鈴だったらこれで止まったんだけど……こっちの鈴にも効くかどうか……と思っていたら抱き締められた。どうやら効果はあったらしい。
「そんなに気になるんだったらその子に直接聞いてみろよ」
一夏はけほけほと咳き込みながらそう言うが、俺はその事について話すことはしない。絶対。
だってそれじゃあつまらないからな。
「……秘密」
聞かれる前ににっこり笑って言う。
「何でよ？」
「教えちゃダメって言われたから」
俺が、俺に。まあ、何にしろ言わないけどな。
「だってさ。とりあえず撫でとこうぜ。この子撫で心地良いんだ」

「……あ、ほんとね。なんか撫でてて落ち着くわ」

一夏と鈴はそう言いながら俺を撫でる。セシリーはあんまり上手じゃなかったけど、鈴は上手いな。

「……そう言えば、この子、名前は？」

「……そう言えば聞いてないな」

うん、言ってないからな。聞かれてもないから教えるタイミングが無かったとも言うけれど。

「……えっと……名前を教えてくれないか？」

「大天災さんが『秘密にしといた方が面白いから教えちゃダメだよー』って言ってたから、ダメ」

……っていう言い訳を考えた。鈴の方は納得してなかったみたいだけど、一夏の方はすぐに誰だかわかったみたいで頭を抱えている。まあ、気持ちはわかるけどね。

「……ああ、うん、わかった、教えなくっていい」

「ありがとパパ」

「「……は？」」

……おっと、つい面白くなりそうだから言っちゃった。

そこで話をそらすついでにいつも通り獣耳を取り出して一夏につけた。今回は灰色の猫。やっぱりどこかメカニカル。

「な、なあパパってどういう」

「ふぁ……眠くなってきた……寝よ？」

俺ははぐらかすを使った。一夏はおとなしくなった。

おとなしくなった一夏を保健室のベッドに連れ込む。そして、じーっと鈴を見つめると一夏が鈴を呼んでくれた。

「鈴。どうせ夢なんだし、一緒に寝ようぜ」

「なっ！ばっ……！……そ、そうね。夢だもんね。夢のなかだったら……うん」

そう言って鈴は、一夏と自分で俺を挟むようにベッドに入ってきた。

……おやすみ。

side　一夏Another

……今回で三回目の夢の中の子供との出会い。今までに一緒に出会った箒とセシリアとの話し合いのときに出てきたこの子供の正体について。

……三回目にして、俺の子供の確率が高くなった。それもめちゃくちゃ。

普通だったらあり得ない。そう、あり得ないが……俺と鈴の間ですやすやと眠るこの子供が言うには、この事には束さんが関わっているそうだ。

大天才（少し違う気もするが、あってるだろ）と言えば束さん。束さんだったらなにをやってもおかしくない。

例えば、未来から俺の夢の中に未来の俺の子供の意識を放り込むとかは朝飯前だろう。

……やばい。なにがやばいって、束さんだったら本当にあり得るからやばい。

そう考えた途端に眠くなった。そしてあっという間に意識が落ちる。まるで誰かが頭の中を弄ったみたいに――――

起きると朝だった。夢のことは、あの子供が眠ったところを最後に途切れている。

前回は頭に耳が残っていたので手をやってみると、今回も頭に猫耳がついていた。多分鈴のところにもいってるだろう。

そう思って枕元に目をやると……箒の時につけた尖った犬耳が置いてあった。

……まあ、束さんが関わってるんだったら何でもありだな。

# 想像以上、鈴ｖｓ俺

……ふぁ……ん。

……ん？　なんだ、まだ見終わってないのか。仕方無いな……もう一眠りするかね……。

……すか～……。

ｓｉｄｅ　織斑　一夏

アリーナの中央で武器をぶつけ合った俺と鈴は、その場ですぐさま次の攻撃に移った。鈴は片手で持った大刀を枯れ枝のように振り回し、俺は右手の名無しのブレードで正面から斬り返す。

「さっすが一夏！やるじゃない！」

「鈴こそ凄いな。まだなんか隠してるだろ」

「もちろん！今から出すから――食らいなさい！」

そうして鈴の肩部分のアーマーが開く。そこにあった球体から、拳にある衝撃砲と同じ空間の歪みが現れる。

それに合わせてこちらも左の拳を鈴の肩に向けて衝撃砲を撃ち出す。

バギンッ！と空間が弾け、お互いに撃った衝撃砲がかき消える。

「まだまだいくわよ！」

「こっちもだよ！」

斬り合いながら拳を振るい、衝撃砲を撃ち合いながら武器をぶつけ合う。鈴の場合は勘で間合いや攻撃を読んでくるからやりづらいところがある。

こういった近距離ではフリッカーは使いづらいので、某一歩を踏み出すボクシング漫画の尾張の竜のスクリューブローを真似る。これもまた連射が利いてその上貫通力があるので、衝撃砲同士をぶつけても多少の威力差なら引っくり返せる。

当然直接ぶつけても威力があり、拳自体も結構な威力を持っている。普通こんだけ反応速度と速さを持たせたら他のなにかが落ちる所なんだが……束姉さんマジで凄い。

ガギィンッ！と音をたてて鈴の使う両刃の大刀が分かれ、それぞれが上下左右から襲いかかって来る。まあ、後ろからは来ないのが救いと言えば救いだな。

それでも俺は追い付いて切り払う。速度特化舐めんなってな。

「よく片手ずつで衝撃砲と剣撃を全部落とせるわね。いろんな意味で、一夏って人間？」

「多分」

「そこは断言してよ怖いじゃない。『初恋の相手が人外とか……』…あれ？　一夏だったら問題ないのかしら？』」

初恋カミングアウト。びっくりした。ついでに途中からオープン・チャネルからプライベート・チャネルになってた。流石に聞かれたくはないよな。わかるわかる。

ピロリン♪

『メールだよ！らぶりぃ束姉さんからメールだよ！早く、あ・け・て♪』

……。

「……一夏？　どうしたの？」

「あーうん、ちょっと驚愕すべき厄介事。メール入ったからちょっと待っててくれ」

「……ＩＳってメール着信機能なんてあった？」

「普通は無いと思うよ。俺のが確実に普通じゃないだけで」

……さてと。どんなメールかね？

開いてみると、いきなり目の前に束姉さん（〜ヘンゼル＋グレーテル〜÷２）が現れた。

『やっほー♪　プリティーチャーミー束さんだよ、いっくんは元気してるかな？　してるよね？　してなかったら言ってねすぐ行くから（真剣）。まあいいや。これからそっちに練習台送るから活用してね！生きてるのが相手だと手加減しちゃうと思ったから無人ＩＳだよ！安心した？　安心したらやってくるそれを倒しちゃおう！それと、防御がすっごく固いから左手じゃあダメージほとんど無いよ。ブレードと右手で頑張ってね！右手を使うとビームで相殺するようになってるけど』

そこまで読んだところでアリーナの遮断シールドがぶち抜かれて、何かが――訂正、束姉さん作の無人ＩＳが落ちてきた。

そちらに意識を向けながらも、メールの最後まで目を通す。

『相殺するようになってるけど、頑張ってね！ちなみにこのメールはいっくんが読み終わったら勝手に消えちゃいます。履歴とかも残らないから安心しちゃっていいよ？　じゃあまたね～♪』

……そしてヘンゼルとグレーテルを足して2で割ったような格好をしている束姉さんが消え、メールが届いた痕跡が全部まとめて消え去った。

……だから、その科学力をもう少し別のところに使いなさいと。

……無駄だとは思うけど。

……さて、と。折角の束姉さんからの好意（多分それ以外もあるけど）だし、戦うとしようか。わりかし本気（ＩＳのみだけど）で。

束姉さんに俺が頼んだ装備は三種。一つは既に使っている衝撃砲。これについてはよく知っているだろうが、普通は直線軌道のみのはずなんだが、出力調整で曲げ撃ちができる。

二つ目は空間固定兵器とそれの応用。俺の考えた使い方は、物理的なものに対する盾だったり空中に作る足場だったり、固定する空間を細い細い糸状にして相手が突っ込んできた時に首を飛ばすとかその程度だ。

三つ目は……秘密。どうせまだ使えないし。

そこに恐らくちー姉さんのリクエストの雪片弐型（原作知識）と零落白夜が追加され、悪夢の兵器（高速で接近してきて一撃食らうと

死亡、その上動くとなぜか切られるため動くに動けず銃を撃っても防がれ、光学兵器はチャフで封殺）が完成する。マジ外道。

ちなみに空間固定兵器だが、ラ……ラ……銀髪眼帯黒兎の使うＡＩＣとは別物だ。

あっちは慣性を打ち消すが、こっちのは簡単に言えば『空間を動かない物質に変える』もの。だから相手が突撃してきた時に顔の前に出してやれば顔をぶつけるし、相手の出したエネルギーに応じて消費するエネルギーが変わるＡＩＣと違ってこちらは一定だ。

どちらが便利かははっきりとは言えないが、使い勝手だったらこっちが上だ。

……ただ、たまにＡＩＣもほしくなるけど。慣性を打ち消して良いときと悪いときがあるし。

「鈴。あれは俺のだ」

「……本気？　相手はアリーナのシールドを軽くぶち抜くＩＳよ？　衝撃砲だって効くかどうかわからないし、エネルギーも減ってるでしょ？」

……まあ、その通り。確かにエネルギーは三割ほど削られてるし、シールドバリアも満タンとはいえあれが相手じゃ心細い。

……それでも、やるけどな。

「……はぁ……なに言っても無駄みたいね。この続きはまたいつかやるわよ」

そう言って鈴は下がってくれた。ありがと。

……やるか。

# 予想外、俺ｖｓ無人ＩＳ

名乗っても返事は帰ってこないだろうと思うので名乗らない。ただ剣を左に持ち替えて、構える。

すると目の前の無人ＩＳがどこかで見たことのあるポーズを取って、機械音声で流暢に話し始めた。

「お控えなすって。手前、生まれも育ちも月の南極。真空の中で生まれ、道具として生き、漸く死に場を見付けた老兵でござんす」

よし待とうか束姉さん。なんで束姉さんがこれを知ってるんだよ。見てたの？

……まあ、いいや。とりあえず名乗りの間は攻撃しないのが決まり事だし、このくらいのことなら乗ってやろう。

「呼び名は色々ありやすが、今の名前はゴーレム？と申すものでござんす……失礼ながら、お手前は？」

……仕方がないので俺も乗る。始めたのは俺だし、ここでやらなかったら空気の読めないやつだし。↑今更。

「俺は生まれは日の本の国、織斑家が末弟、睡眠時間の延長を夢見る男でござんす。凛々しき姉に見守られ、この場所まで来ることになりやした……『人外筆頭』、織斑一夏と申す者でござんす」

ちなみに一部プライベート・チャネル。ちー姉さんや鈴に聞かれると割とマズイ。特にちー姉さんには本気で怒られる。

「……それではすぐに参りましょう。この老兵の、屍を越えて先に行けぃ！」
「一応言っとくと……歳は俺のが上だ若僧が！」
真面目にやるかね！

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

……わーお。これは確かに色々無理ね。一夏とゴーレムと名乗ったＩＳの戦闘を見てそう思う。
なんで無理だって言い切れるかというと……見えないんだもの。一夏が。

ゴーレムって名乗ったＩＳに切りつける瞬間に影だけ見えるような速度で移動して、あとは大概見えない。ただかなり直線的に移動をしているみたいで、アリーナの遮断シールドや床や壁には衝突した時の足跡が残っている（遮断シールドはそこに衝突したという名残がある）。
けれど移動の途中に軌道を曲げたり曲げなかったりして、相手になかなか捉えさせない。あの速度で曲がって無事でいられるって……一夏の体の作りが本当に気になる。

……まあ、一夏だししょうがないわね。きっとなんでもありなのよ。
そう思いながらハイパーセンサーを高速戦闘用の超高感度ハイパーセンサーに切り替える。すると今まで全く見えなかった一夏の軌道が残像だけ――それでも残像だけ――見ることができるようになっ

た。

近接ブレードを振り、ゴーレムの体にしっかり当てながら削るようにブレードを滑らせる。明らかにシールドエネルギーを削ろうとしている動きだ。

その度にゴーレムは高速で回転しながらビームを撃つが、回転を始めた時には一夏は既に射程外にいる。

……うん、ちょっとこれは手を出せないわね。失敗したら一夏に当たっちゃいそうだし。というか一夏本当にすっごい手加減してくれてたのね。あたしと釣り合うくらいに。

「……まだまだ一夏には遠いかぁ……」

あーあ。結構頑張ったんだけどな……。

side　山田　真耶

「……あの、織斑先生。それは塩です」

「……なぜ塩があるんだ」

「いえそれは知りませんけど……って織斑先生。それコーヒーじゃありません、醤油です」

「……なぜ醤油があるんだ」

「いえそれも知りませんけど……ってだから織斑先生。それはコップじゃなくて砂糖壺で……ああ、お砂糖がみんなダメに……」

「……なぜ砂糖壺がこんなところにあるんだ」

「……あの……織斑先生、落ち着いてください、ってそれさっきの塩入り醤油ですから飲んじゃダメですって落ち着いてください」

「……なぜこれがこんなところに」
「織斑先生がさっき作ったからですよってだからコーヒー入り砂糖を飲もうとしないで下さい体に悪いですから！」
ああもう織斑先生も織斑くんが心配なのはわかりますけどもう少し落ち着いて
「だからコーヒーを醤油で作らないでください！塩分過多で死にますよ！？」
織斑くーんっ！はやくなんとかしてぇぇっ！

ｓｉｄｅ　織斑　一夏

なんか真耶先生に助けを求められた気がした。ちー姉さんが何かしたのかな？　具体的にはコーヒーと間違えてインクを飲もうとしたりとか。
そう思いながらもゴーレムを切りつける。めちゃくちゃ硬い堅い固い三つ揃った非常識な硬さだ。
ちなみに名前を呼べてる理由はハイパーセンサーに出てるから。
それでも少しずつ削り続けているんだが、だんだんゴーレムもこっちの機動を読み始めている。
まあ、読まれたらパターン変えるだけだから別にいいけど。
『やっほういっくんさっきぶり！』
『いきなりこられてビックリしました、後でごめんです』

『いっくんのでこぴんは痛いんだよ？　頭が割れちゃいそうなくらい痛いんだよ？』

大丈夫。割れない割れない。

……多分、きっと、恐らく、パーハップス。

『それで、いっくんが予想以上に強かったから束さんも参戦するよ！ゴーレム操るから頑張ってね！』

その次の瞬間、ゴーレムは急激にその動きを変えた。

……マジで勘弁してくれや。

## 想定外、俺ｖｓ束姉さん

『いっくよぉー！』

そう言って束姉さんは、先程までは巨大な一発を撃つだけだった両腕の砲口からまるでショットガンかガトリングのように小さなエネルギー弾をばらまき始めた。

俺はブレードを右手に持ち替えて左の連射（貫通型）で応戦する。しかしそれでも落とせない弾はブレードで切り落とし、それでも駄目なら局所的な空間固定で凌ぐ。止める空間が小さければ小さいほど使うエネルギーは少なくて済む。

『まだまだーっ！どーんっ！』

そう言われて出てきたのはワイヤーブレードが十二本。エネルギーを纏ったままこっちに向かってくる。こっちくんな。

それでも俺のやることは変わらず、ただその攻撃を避け、防ぎ、そしてできるなら一撃をぶちこむ。防御が硬すぎてたいしたダメージを与えられていないのが現状だが、なんとか削ることは出来ている。……まったく。厄介すぎるぞ。たまに被弾するようになってきたし。

お互いにシールドエネルギーを削り合う。束姉さんはほとんど無駄弾は撃たなかったし、撃ったエネルギー弾を空中で方向転換させると言うどこかの光学兵器の真似事とも言える荒業をやって来もしたが、段々弾幕が薄くなってきたのを見ると無尽蔵にエネルギーを持

っていると言うわけでは無さそうだ。

とは言え、こっちもこっちで割と限界が近い。シロに大した破損はないが、シールドエネルギーがそろそろ不味い。

これじゃあもし零落白夜が出たとしても、一発食らわせられるかどうか。

……なんか忘れてるような気が……あ。そうだそうだ、丁度相手は無人機だし、確かめてみようか。

斬魔剣・弐の太刀が、シールドバリアを無視することができるか否か！

狙う場所はあの厄介極まる腕。シールドバリアを抜いて攻撃できれば、使えなくなること請け合いだ。

……確かラカンもこれをやるときはイメージトレーニングをしてたし、俺もそれに肖ろう。

……剣を振って、気を飛ばして、バリアをすり抜けてどーん。

……なんか失敗するイメージが浮かばないんだが、何でだろうな？まあ、成功するのは良いことだし、構わないけど。

「よいせっと」

名無しの近接ブレードを振ると、本当に何か出た。
出てきた何かは束姉さんの操るゴーレムに当たり、その右腕を縦に切り裂いた。

……なあ、あれってもしかしてシールドバリアどころか絶対防御すら発動させずにダメージ与えてないか？

『わっ！？　いっくん今のってなに？　確かに当たって斬られたのに、シールドエネルギーがまったく減ってないんだけど』

……人間相手じゃ使えないな。今度は絶対防御だけに当たるように調節してやってみるかね。

斬魔剣・弐の太刀、百花繚乱！

次からは避けられると思ったので、斬撃を薄くしてハイパーセンサー無しだと見えないようにしつつ全体攻撃。観客の皆さんには当たらないように考慮してアリーナの遮断シールドで消滅するように頑張った。

……失敗したらごめんね？

そこでようやくフィッティングが終わったようで、その事を伝えるメッセージと確認ボタンが現れた。

……まあ、これについては後で一人の時に押すとしよう。確かまた何かあったはずだし、その時に不意をつく的な意味でもその方がいいだろう。多分。

面制圧の斬撃が飛び、ゴーレムのシールドを抜いて腕とワイヤーを切り落とす。

……こんだけ撃ってるのに腕以外は擦らせるだけで済ましている束姉さんの操縦技術にちょっとキレそう。一体束姉さんはどこまで天

才で天災なんだろうか。

頭のなかで、束姉さんがにこにこ笑いながら言った。

「どこまでもだよ、いっくん！」

……納得できるのがまた嫌だ。

……まあ、一次移行もできるようになったことだし、さっさと終わらせようか。卑怯だけど。

空間固定で、ゴーレムのコアだけを固定する。高速機動中にそんなことをすれば、当然コアが機体からべぎりといや～な音を立てて剥がれ落ちる。

「『ありがとね、束姉さん』」

「『いいよいいよ。かわいいいっくんのためだからね！今度また抱き締めにいくから覚悟しておいてね！』」

そう言ってゴーレムの機体は自爆した。最後の最後まで悪の科学者風だったな。

自爆は科学者のロマンだと聞いたけど、わざわざＩＳでそれをやることはないと思うんだけど。

……やっぱり、天才とかそういうのは置いておいても束姉さんの考えることはわかんないな。

……あー、疲れた。眠いや。

「……鈴」

「？　なに一夏。どうしたの？」

近付いてきた鈴に笑顔を向けて。

「……あとよろしく」

シロを解除して落ちる。すぐに抱き止められたけど、しばらく起きないから。

悪いね、鈴。

## いつも以上、保健室にて

……意識がゆらりと浮き上がる。特に体に悪いところはないが、どうやら随分と寝ていたらしい。腹が減った。

目を開けると、すぐ近くにちー姉さんの顔があった。どうもかなり心配そうだ。

「一夏。気が付いたか」

ちー姉さんが話しかけてくる。……くんくん……襟元から醤油の臭いがする。インクじゃなくって醤油とコーヒーを間違えたのかな。……理由はわかるけど、ちー姉さんはやっぱり俺の事になると慌てやすいな。

「痛いところはないか？」

「……ん、大丈夫。ちょっと腹減ったけど……」

これから食べに行くから大丈夫、と言おうとしたのだが、いつのまにか現れた鈴がその手に丼を持っていた。中身はどうやら卵粥らしい。

「はい千冬さん。熱いので冷ましてから食べさせてあげてください」

「ああ、わかっている。……すまないな、凰」

「いえ。一夏の事が好きですし、一夏のためだと思えば何でもないです」

鈴はそう言ってから俺に視線を向けて、にっこりと笑ってから保健

室を出ていった。

……そう言えば、初恋カミングアウトされたんだっけね。いつも普通に好きだなんだと言ってたから忘れてたけど。

「……ふぅ……ほら一夏、口を開けろ」

「ん……あー……はむ」

……ん、美味しい。

ちょうどよく冷まされた卵粥が喉を通り、じんわりと胃に広がっていく。

「っ……、一夏」

「ん……あー……あむ」

また次の一口。そしてまた一口。うん、美味しい。

……まだまだって言ってたけど、腕を上げたな、鈴。

……ちー姉さんももう少し料理ができるようにならないと、お嫁の貰い手が居なくなるよ？　せめて食べても害の無いものを作れるようになろうよ。もう遅いかもしれないけど。

食べ終わって一息つくと、なんだかまた眠たくなってきた。さっきまで寝てたのに。

……まあ、いつもの事だ。普通普通。

「……それじゃちー姉さん。お休み……」

「ああ。お休み、一夏」

眠りに落ちる寸前、何かに頭を撫でられたような気がした。

……この不器用な撫で方は、きっとちー姉さんだろうな。

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

すやすやと眠っている一夏の頭を撫でる。
額を撫でれば頬を緩め、頬を撫でれば撫でた手に頬を擦り付け、顎先を撫でれば甘く鳴き、唇を撫でると熱い舌が私の指をざらりと舐める。

……っ！危ないところだった。一夏を血で汚すわけにはいかないからな。
……さて、お持ち帰りするか。

一夏を横抱きにして保健室を出る。やはりと言うかなんと言うか、一夏はかなり軽い。五十キロどころか四十キロあるかどうかといったところか。

珍しく途中で誰かと出会うことなく寮長室に到着する。騒がれて一夏が起きるということにならないので別に問題はないが、少し奇妙に感じた。

扉を開け、一夏をベッドに寝かせる。すやすやと眠っている一夏に背を向けて、私はスーツが皺にならないようにたたんでからジャージに着替える。
それを終えて、私は一夏の眠っているベッドによこになる。すると一夏が私の腕を控えめに抱き締めて――――花が開いたような笑顔を見せた。

……落ち着け織斑千冬。深呼吸だ。前に五反田が言っていただろう、落ち着かなければならないときには深呼吸をしろと。深く息を吸って、それから長く吐く。もう一度吸って……一夏の匂いが脳髄を直撃する。

くっ……五反田め。使えないではないか！今度あった時は覚えてくれ。

「……くぅ……」

一夏が私の腕にすりすりと頬を擦り付ける。一夏はそんなに襲われたいのか？

そう考えていると、ぼんやりとまではいかないが懐中電灯を遠くから見たような光が一夏の頭に集まり、昔に見た垂れた犬耳とぷちかが現れた。

「……わぅ」

ぷちかは小さく鳴くと、もぞもぞと一夏とは反対側の私の腕にしがみついて目を閉じた。

すぐに聞こえ始める柔らかな寝息。両側を一夏とぷちかに挟まれ、私はそこで頭が沸騰してしまったらしく、なにも思い出せない。ただ、久し振りに朝の一夏成分補給が普段の十分の一の時間で済んだことは確かだ。

# 外伝、予知夢？　千冬編

束姉さんの操るＩＳを相手にした日の夜。俺はまたもや薄ぼんやりとした夢を見た。
怪我をしているらしい原作一夏と、枕元で周りから見ても明らかにわかるほど心配そうにしているちー姉さんがいる。
……多分、原作で無人ＩＳを一夏が墜として、一夏がボロボロになった時かな。この夢は。

それにしても、原作だとここまで心配そうにしてるのは珍しいよな、と思いつつ俺はちー姉さん達と俺を分けているぼんやりとした霧を抜けた。

するとちー姉さんは俺に気付いたらしく、俺の方に振り向いて……固まった。
それから一夏を見て、また俺を見て、鋭く睨み付けてきた。

……怖いなぁ。ちー姉さんのこんな顔はあんまり見ないから……。

ちょうどそこで一夏が目を覚まし、ゆっくりと体を起こした。
そして俺のことを確認すると、また夢だと理解したらしく俺を手招きして呼び寄せた。

「……一夏？」
「大丈夫だよ千冬姉。この子は……束さんが未来から送ってきた俺の子供らしいから」
「……あの……馬鹿者が……」

ちー姉さんは頭を抱えてしまった。まあまあ、と落ち着かせるつもりで頭を撫でてみると、意外にも普通に受け入れられた。

「……それで、名前は？」

「大天災さんは、教えると俺が消えるかもって言ってたから、内緒♪」

「前は言わない方が楽しそうだからって言ってなかったか？」

「前は前、今は今だよ。パパ」

俺の一夏へのパパ発言を聞いたちー姉さんは、しばらくきょとんとしてから、それはもう盛大に噴き出した。

「……ぷっ！ははははは！パパ？　一夏がパパ！？　くっ、ははははは！はーっはっはっはっはっは！！」

「……笑いすぎだよ千冬姉」

一夏はちー姉さんの事をじとっとした目で見ているが、ちー姉さんはそんなことを気にしないで大笑いしている。

……いや、俺のことじゃないけど笑いすぎだと思う。確かに笑ってると元気になるし老けないって聞くけどさ。

……ここでちー姉さんをママって呼んだらどんな反応が返ってくるのかね？　やらないけど。

とりあえず、座ったまま俺の頭を撫でている一夏に狼耳を装着。似合ってるよーかっこいいよー。

……でも、ちー姉さんにどうやってやれば装着できるか……うーん……。

「……それが千冬姉の分か？」

俺が一夏とお揃いのどこかメカニカルな気配のする狼耳を持ったまま唸っていると、何をしたいのかわかったのか、話を進めてくれた。ちー姉さんはなんの話をしているのかわからなかったようできょとんとしているが、俺と一夏の頭についた狼耳と俺が手に持っている狼耳を見比べて……苦笑してそれを自分の頭につけた。

「……どうだ。似合うか？」

ちー姉さんは冗談めかして言っているが、すっごい似合ってる。束姉さんがこの姿を見たら、それこそ鼻血を噴き出しながら恍惚とした顔で七転八倒してしまうだろうと簡単に予想がつくくらいだ。

……さてと。一夏達に狼耳も装着したし……寝るか。

一夏寝ていたベッドに潜り込む。少し狭かったので千の顔を持つ英雄で新しくベッドを隣に出して並べた。意外に使えて驚きだ。今さらだけど。

一夏にくっつきながらちー姉さんの事を上目遣いでじーっと見つめていたら、仕方なさそうに添い寝をしてくれた。

一夏隣に一緒に寝れるせいか尻尾が激しく振られてて隠せてなかったけどね。丸分かりだったけどね。

……やっぱり原作でもちー姉さんはブラコンだった。証明終わり。

……すか～……。

## side　一夏Another

すか～、と眠る俺そっくりの小さな子供。最近よく夢の中に出てきては、こうしてのんびりと誰かと眠ることになる。

……そう言えば、千冬姉と一緒の布団で寝るなんて、何年ぶりだろうか。昔は結構な頻度で一緒に寝てたと思うが、今じゃあそんなことはまずないからな。

「……一夏」

「……なに、千冬姉」

急に話しかけられて驚いたが、なんとか平静を装って返事をする。

「――好きな女はできたか？」

「ぶほっ！？」

しかしその平静は、千冬姉のお陰であっという間に壊された。

「な……な、なんの話をしてるんだよ千冬姉！」

「なに、と言われてもな？　姉としてお前の結婚相手には興味がある」

丁度ここにこいつがいるわけだしな、と千冬姉は言う。

……確かに俺も誰と結婚してるかは少し気になるけど、だからって今気になってる相手は――

――尖った犬耳をつけて、恥ずかしそうにしながらも俺の手を握ったまま寝ようとしている箒の顔が浮かぶ――

――灰色の猫耳をつけながら、小さな俺似の子供を撫でている鈴の顔が思い浮かぶ――

――垂れた犬耳をピコピコと動かしながら、拗ねたような顔をしているセシリアの姿が思い浮かぶ――

……あー、なんとなく決まってるような気がするのは何でだ？

そう考えていると、千冬姉から笑みの気配が強まった。……バレたか？

「バレバレだ。少しは隠す努力をしたらどうだ？」

まず読まないでくれよ、という俺の心の突っ込みは完全にスルーしたらしく、千冬姉はにやにやとした笑いを返してくる。

「……それで、どうなんだ？」

千冬姉の問いから逃げるように、俺は小さい俺似の子供を撫でながら目を閉じた。

朝起きて、まずは頭に手をやる。すると予想通り俺の頭の上には狼耳がついていて、なかなか恥ずかしい格好になっている。

……多分千冬姉もこうなってるはずだし、俺は気付かなかったということにして千冬姉の狼耳を見てにやにやしよう。周りから意外とお茶目な先生だったと認識されてしまうがいいわ！

……まあ、あれでもかっこいいと言うのが千冬姉のすごいところなんだが。普通はかっこ悪くなるか可愛らしくなるよな？

※にやにやはしたけど途中で気付かれてフルボッコにされた。出席簿の五十連撃は痛すぎる……っ！

# お引っ越しです、ののちゃんが

朝。目が覚めるとそこにはちー姉さん。少し驚きつつ抱き締め直して二度寝を敢行する。今日は休日だし、平気だろう。多分。なんでちー姉さんと一緒に寝てるのか疑問ではあるけども……たまにあることだし、別にいいか。

もう一度目が覚めると、既に太陽は空高く昇っていた。昨日寝たのが六時頃で、今は確実に十時は過ぎている。

「……寝過ごした……ふぁ……」

……ああ、そうだ。シロの一次移行が確認ボタン押してないだけでできてるんだった。さっさと移行させてスペックの確認とか出力調整とかしないと……。

原作だとこのあとも更に厄介なことに巻き込まれてた筈だし、一日十五時間睡眠を破らない程度にできることはやっとかないと。

……それにしても腹減ったな。十八時間近く飯食ってないんだから当たり前だけど。

くぅくぅと騒ぐ腹を宥めながら食事にいく。頭には四号の犬耳が付きっぱなしで、後ろにぷちか四号がついてきてるけどその辺りはスルー。

「あ、一夏じゃない。体はもう平気なの？」

「平気と言うかあの程度で壊れるようなヤワな体してない」

文字通り反則（チート）な体をしてるんでね。その体を持ってても寝るんだけど。

「そう。まあ、元気ならいいわ。……一緒にご飯食べない？　箒もいるけど」

「それじゃあ御一緒しようかな」

鈴に手を引かれて食堂に行く。ここを使うのも久し振りかもしれない。なんでかそんな気はあまりしないんだけど。どうしてかね？

……まあ、いいや。よくあることだよくあること。束姉さんが騒ぎを起こすのと同じくらいよくある。

「箒、一夏連れてきたわよー」

「む、そうか。まあ、座れ。頼まれたものはもう来ているぞ」

そう言われて机の上を見てみると、なぜか俺の分まであった。こうなることを予想していたのか？

「そうよ。いいから座りなさい、また私達が食べさせてあげるから」

「え、起きたばっかりだし自分で食べられるけど？」

「食べさせてあげるから」

「食べさせてやるから」

……ああ、そう言えば告白されたんだっけ。いつも普通に好きだと言い合ってたからまた忘れてた。

俺はよく理解できないんだが、好きな相手に手ずから食べさせてあげるのは、また食べさせてもらうのは嬉しいことなんだとか。

……俺は寝てる方が良いけどねぇ。

「いただきます」
「いただきます」
「ところで、さっきからずっとドアの影から一夏を見てる金髪はなに？」

……ああ、セリエスか。

「あの金髪はセメント・オムニバス。喧嘩を売ってきたから買ってボコしたらそのせいで新しい世界の扉を開けた変態だ」
「箒、名前だけ教えて」
「セシリア・オルコット。あとは一夏が言った通りだ。戦闘のデータは見ただろう？」
「……ああ、あの可哀想なのね。……度々悪いんだけど、なんであれは頬を染めてゾクゾク体を震わせてるの？」
「変態だから」
「……ああ、また目覚めさせたのね」
「待ってくれ。『また』？」

おっとののちゃん、そこは気にしちゃいけない所だよ。
いいじゃないか、中学時代に弾の事を馬鹿にした奴（他の学校の奴だった）の精神の支柱を根こそぎ全部へし折ってやったら被虐趣味に目覚めた事とか、小学校の時にちー姉さんの悪口を言った男性教師を縛り上げて目隠しをして知り合いの漢女に引き渡して次見たときには薄く化粧をするようになってた事とか、どうでもいいじゃないか。

「他にもあるけど、聞く？」
「……いや、辞めておこう」
「あたしもそれがいいと思うわ……はい、あーん」
「……あむ」

……ん、うまい。

「……あれ？　ぷちかも欲しいの？　しょうがないわねぇ……はい、あーん」

「わぅ……はぅむ……」

膝の上に乗っている犬ぷちか（ダックスフンド）が鈴におねだりしたらしく、鈴は手のかかる幼子を見る母親のような目で見ながらぷちかに合わせた大きさの肉をあげていた。

周りは微笑ましげな目をしたお姉様方と、嫉妬のあまり呪詛を吐きながら壁に頭を叩きつけていたり、恍惚とした表情のままだくだくと血を流し続ける少女たちで溢れている。掃除が大変そうだ。

……まあ、いいか。今は。

「……（ギリリッ！）」

だからちー姉さん。そんなにするくらいだったらこっちおいでって。

……来ないなら来ないでいいけどね。

食事も終わって部屋に戻る。すると、部屋からののちゃんの荷物がきれいさっぱり無くなっていた。

……そう言えば、この時期だったな。ののちゃんの引っ越し。忘れてたよ。

……今日から一人寝か。ぷちかがいなかったら毎晩枕を抱いて

たかちー姉さんの部屋に突撃かけてたかもね。
一人になったから常にここにチャフを撒いとこう。またいくつか盗聴機やカメラが増えてるからね。

## 一次移行、協力感謝

武骨な手甲だったシロは、一次移行を終わらせると白い腕輪に変化した。前のとずいぶん違って見えるが実のところ大して違いはないらしく、妙にと言うか奇妙にと言うか……非常に硬い。九ミリ拳銃弾くらいならゼロ距離で受けても全く問題無さそうだ。

もちろん変わったのは外見だけじゃなく、その性能も変わっている。元々の性能もあるだろうが、意思疎通がさらに高速円滑に行われるようになったような感じだ。

加速も減速も今まで以上にうまく行うことができ、衝撃砲も空間固定もさらに安定して応用することができるようになった。

例えば衝撃砲の曲げ撃ちで曲げることができる角度が大幅にきつくなったり、空間固定を視界外でも座標に合わせて確実に出すことができるようになった。

……まったく。恐ろしい性能だなシロは。

そして原作通り、ワンオフ・アビリティーとして零落白夜が使用可能に。使ったことはないが、原作を読んでいる限り、接近戦の切り札的存在になるだろうことが予想される。

……三つ目の追加武装はまだ秘密。武装と言うか、正確には能力のようなものなのだが……まあ、できることならあまり使いたくはない。確実にちー姉さんに怒られるから。

「……それにしても、シロは凄い」

「あ、やっぱりかんちゃんもそう思う？」
「……」
俺が聞くとかんちゃんは普段通りの顔で頷いた。
確かにシロは凄い。衝撃砲の即時切り替えは、ある意味では第四世代の先駆けと言っても良いし、零落白夜の展開装甲は束姉さん式の第四世代の解答とも言える技術だと言うことは明白だ。
欠点らしい欠点と言えばエネルギーの消費がかなり早く、動けば動くだけガリガリ削られると言うことと、武装が少ないと言うこと。
二十ものコアを組み合わせて作っているためか空き容量はそれなりどころではなくあるのだが、シロはその空き容量の中に中々物を入れようとはしない。使うだけなら問題ないから別にいいんだけどね。
……頑固なのかどうなのかは知らないけど、ちょっとちー姉さんに似てる気がするんだよな。シロ。
確かちー姉さんの使っていたＩＳの……‘くー’は、完全にブレードオンリー機体であり、異常とも言える機動力と本人の類い希なる反射神経によって、かつて世界一の座に輝いていた。
そのちー姉さんと同じように、シロもなんとなく一つの事を極めるべく他のものを受け付けていないような気がする。
……なんでそんな気がするのかは、知ったことじゃない。なんとなくだ。
……とにかく、その欠点を埋めるべく俺はかんちゃんと一緒にシロの出力調整をしていた。
かんちゃんの専用機の……なんだっけ？　撃鉄弐式？
「……打鉄弐式」

そうそう、それ。それのスラスターの方に、シロほどじゃないにしろ速度が欲しいらしくて、手伝ってもらう代わりにデータの一部を参考として見ていっている訳だ。

……ただ、かんちゃんは自分の事を凡人だのなんだのと言っているんだが、信用できない。

……とりあえず言わせてもらうと……凡人は、両手両足で、八つの、キーボードを、同時に、かつ、完璧に、操作することは、できない。……それもかなりの早さでな。常人には無理だって。

その事を理解していないかんちゃんは、自分を凡人だと思い込むことで努力の源としてきたのかもしれないが、まずはＩＳ学園に入れたと言うだけでも相当優秀だと気付いて欲しい。

……頭の方は凡人な俺が落ち込む前に、是非とも。

……まあ、そう思ってもなにも言わないのが俺なんだけど。

他人の事に口出しはしない。それは面倒だからと言うこともあるけど、前世からの俺の処世術でもある。

俺自身、そういう自分の欠点に口出しされるのは嬉しくない。それがたとえ自分一人の思い込みでも、そう言うもんだ。

自分の信じていたことを、正面から間違っていると言われて腹の立たない奴はそうそういないだろう。

特に、コンプレックスが酷い奴には。

「……さてと。今回はこれで終わりにするか。もうすぐ晩飯だし」

「……わかった。それじゃ」

かんちゃんはそう言うと、自分のＩＳに向き直ってなにやら弄り始めた。どうやらまたインスピレーションが湧いてきたらしい。

「……出来たら教えてね。かんちゃん」

俺の言葉に対してかんちゃんから言葉は帰ってこなかったが、僅かに頷いてくれたのがわかった。

――頑張れ、とは言わない。頑張っているかんちゃんに、それは酷な言葉だから。

――信じてる、とも言わない。原作では確か、先輩達の助けがあったにしろ完成させていたから。

だから、俺は何も言わない。手伝いはするし、溜まってた不満や愚痴を聞いてあげたりはするけれど、向こうからなにかを言って来なければなにもしない。

きっかけはある。一歩を踏み出せるかどうかは、かんちゃん次第。

――頑張れ、とは言わない。信じてる、とも言わない。

――でも、楽しみにはしてるよ？

俺はくすりと笑って、かんちゃんのいる整備室から姿を消した。

## 久し振り、遊びに来たよ

久し振りに弾の家に遊びに行く。電話で確認とったから大丈夫。
ちなみにＩＳ学園を出る時に使ったものはディープダイバーとモーターギアのマリンダイバーモード。特に意味は無いけれどバレないように外出してみた。こっちも許可はとってあるから大丈夫。

ある程度ＩＳ学園から離れたら人目の無いところで地上に上がり、ライアーズマスクで変装しながら弾の家を目指して歩く。有名人（かなり本気で）なので、色々と面倒くさ

「ちょっとそこの。コンビニで水買ってきて」

……。アリス・イン・ワンダーランド、収束。
洗脳してやるから、黙って壁に頭をぶつけてろ。

……面倒臭いな。やれやれ。

弾の家の前でライアーズマスクを解除。いつも通りの顔で弾と対面。

「お、来たか。久し振りだな一夏。ちゃんと飯食ってるか？」
「鈴とののちゃんに言われて食べてる。大丈夫」
「そうか。……っと、立ち話もアレだな。入れ入れ」
「お邪魔しまーす」

言ってみただけ。こう言うときには大切らしい。

弾の部屋に入って落ち着くと、弾の方から話しかけてきた。例えば、ちゃんと寝てるか、とか、なんか新しい曲でも作ったか、とか、そう言った最近のことだ。

……まるで父親だな。

ちなみに新曲（とは名ばかりのボカロのパクリ）をいくつか楽譜にして渡しておく。それなりに長い間楽器に触れてきた弾は、楽譜を見ればどんな曲かがすぐに理解できるようになっている。

「……お～、すげえなこれ。どうしてこうぽんぽんと曲が出てくるんだ？」

「絶対に世に出ない既存の曲をパクっただけ」

絶対と言う理由は、この世界にボカロは無くて、そして俺も作る気がないから。

……さてと。久々の弾の家だし……寝るか。

「おーい一夏。人ん家来ていきなり寝るってのはどう言うことだよ」

「……俺だから仕方ないことじゃね……？」

「……一瞬無条件で納得しかけたぞおい」

そのまま納得しとけって。その方が楽だぞ？

……すか～……。

side　五反田　弾

久し振りに一夏と会ったんだが、やっぱ一夏は全然変わってねえ。
……いやまあ確かにそんな簡単に一夏が変わったらビビるが。

一夏はいつも通り勝手に俺のベッドに入る。そんな無防備晒して、襲われても知らねえぞ？　俺は襲わねえけどその分愛でる。

ベッドにもぐり込んだ一夏の頬をつつく。相変わらず指先に吸い付いてくるような肌をしているなこいつ。ほんとに男か？

そう思いながら頭を撫でて、額を撫でて……あっれ、なんか一夏の額が妙に眩しく見えるんだが……俺、また目覚めたか？
今までに目覚めたのは……髪、うなじ、耳、二の腕、唇、ほっぺた（これが一番正しい言い方だと思ってる）、睫毛、指、太股、ふくらはぎ、脇、腹、背中、臍……その他。
……俺も随分変態臭くなったもんだ。

でも、仕方ないだろ？　撫でるとさらさらと指を通す癖のつかない髪とか、切るのが面倒だからと言って少し長めの髪から覗く真っ白なうなじと髪のコントラストとか、桜色で柔らかな唇とか、寝ているときにぴったりと体に引き付けられた二の腕とか、優しく摘まんだり撫でたりするといい感触を返してくる耳とか、指でつつくと吸い付くような感触のほっぺたとか、なにかをする度にピクリと動く睫毛とか、抱きしめられている腕から出ようとすると控えめに服の端を摘まんでくる指とか、丸くなって眠っているときの太股とふくらはぎとか、起きて伸びをしたときにちらりと服の下から覗く腹とか脇とか、つぅっと指先で下から上に擽るとぞくぞくぅっと体を震わせてからちょっと睨み付けてくる背中とか（それでも視線で抗議するだけで逃げない）、寝返りを打つと時々服が捲れて見える臍と

か……。
これはもうしょうがないだろ？

……さてと。愛でるか。呼ばないと後々怖いし、蘭も呼んでおこう。
一夏を愛でることに関しては俺の方がずっと上手いし慣れてるから、教えてやることもできる。

……とりあえず寝てる一夏を着崩して、喉元を開けて服の裾を出して腹チラさせて、腕はこうで……よし、パシャリと。
後は蘭にメールを打って、今撮った写真を添付して送る。これでよし。

ちなみにメールの内容は、一夏が俺の部屋に来てる。愛でたければ静かに俺の部屋に来い。
多分来るだろ。多分。

案の定来た。珍しくかなり気合いをいれたお洒落をして、顔を真っ赤にしながら。どうやら蘭にはあの一夏はレベルが高すぎたらしい。

「わ、わわ……わぁ……」

顔を真っ赤にしながらも、蘭は一夏を恐る恐ると撫でている。あんまりそうしてると一夏に腕を掴まれ引き寄せられて抱き締められるぞ。言わねえけど。

……あ、やられたな。

「あうあうあう……」
「……まあ、役得だな。俺は店の方に行ってる。昼飯できたら呼ん

でやるから……健全な付き合いの範囲内で、ごゆっくり」

それだけ言い残して俺は部屋を出る。あの慌てようだと聞こえてたかどうかもわからないが、まあ、良いだろ。

蘭はあれでヘタレだから、一夏に手を出そうとしても出せないだろうし。

……一夏が弟か。まあ、悪かないな。

## 久し振り、遊びに来たよ（後書き）

寝て起きたら外伝の弾編と蘭編を投稿します。

# 外伝、予知夢？　弾編

ＩＳ学園に入ってから、久し振りに弾と遊んだ日に、薄ぼんやりとした夢を見た。どうやらこのぼんやりとした夢は異世界（原作）との会合地点らしい。毎回毎回原作の誰かが出てくればいい加減わかる。

……まあ、面白いし害はないし睡眠時間も減らないし、悪いことではないから良いんだが。

今回は原作一夏が弾の部屋でゲームをして遊んでいる。俺の場合ゲームではなく昼寝になるから、こうしたゲームってのはあんまり経験がないんだよな。

そう思いながら近付くと、勝負の決着がついて一旦暗くなったテレビ画面に俺の姿が映り、そのお陰で俺に気付いた一夏がくるりと振り向いた。

「……あー、またか。おいで」

「ん？　って一夏ぁ！？　でも小さい！？」

「うるせえ奴だな。ちょっと知り合いの大天才の手で未来からやって来たらしい俺の子供だとさ」

「なにぃぃぃっ！？　ってかなんでお前はそんなおちついてんだよ！？　もっと驚けよ！？」

「驚いたぞ？　最初は。でも慣れてきてなぁ……俺の子かわいくね？」

「ダメだこいつ、早くなんとかしねえと……」

弾はぶつぶつと呟いていたが、ふとあることに気付いて顔を上げた。

「……この子の母親って……誰だ？」
「さあ？　聞いても教えてくれないから知らない」
一夏は俺を抱えて頭を撫でながらそんなことを言う。弾は爆発しそうだったが、なんとか押さえ込んでいるようだ。
「……てめえ蘭に手を出したらぶっ殺すぞ……？」
「なんでそんな話になるんだよ？　俺が好かれてもいない相手に無理矢理迫るような奴に見えるのか？」
出さないだろうな。むしろ焦れた相手の方から襲われそうだ。原作の鈴とかだったら襲ってもおかしくないだろうし。
……まあ、原作一夏が誰と付き合って誰と結婚して誰と子供作っても別にいいけど。
「おかーさんは、『パパはヘタレで中々手を出してくれなかったからこっちから襲った』って言ってたよ？」
「俺襲われんの!?　誰に!?」
「おかーさんとママ達」
「てめえ一夏重婚とはいい度胸じゃねえか死ねぇぇ！」
にっこり笑って言ってみたら、弾が一夏にマジギレして襲いかかっていった。
「……って言うと面白いから言えって大天災さんが言ってた」
「束さんはなに考えてんだよ!?」
「おかーさんは、あれが考えていることがわかるようになったら人間おしまいだって」
……俺中々酷いこと言ってるな。間違いだとは思わないけど。

とりあえず騒ぎ疲れたらしい二人に獣耳を装着。草食な気がしたので羊耳をつけてみることに。驚いたことに意外と似合う。

……さてと。そろそろ寝ようかね。

side　一夏Another

「……なあ一夏」

「？　なんだよ」

弾がやや疲れたような顔で話しかけてきた。一体なんだろうな？

「……なんで俺達は一緒の布団で寝てんだ？」

「この子に連れ込まれたからだろ。涙目上目使いは反則だよな」

「……そうだな」

弾はそう呟くと、ふかーく溜め息をついた。

「……嫌じゃねえの？　男と同じ布団って」

「別に？　貞操狙ってくるんだったら今からでも蹴り落とすけど？」

「狙わねえよ……一夏は俺をなんだと思ってんだよ……」

「親友だと思ってるぞ」

「……ありがとよ」

……弾はなぜか疲れたように俺に礼を言ってきた。俺と弾が親友だってのは、少なくとも俺には当然の事なんだが。

「……とりあえず、撫でてみな。落ち着くから」

そう言って俺は、俺にくっついて眠っていた俺似の子供を弾に抱かせた。

弾は疲れたような表情を変えることはなかったが、とりあえず腕は俺似の子供を離さないとばかりに抱き締めながら撫でていた。

「……ああ、確かにこいつは落ち着くわ」

「だろ？」

弾が子供を撫でているのを見てから目を閉じると、急速に眠気が襲ってきた。

……あー、眠い……。

目が覚めると、ＩＳ学園の寮の部屋だった。どうやらぐっすりと眠っていたらしく、いつ布団に入ったかも覚えていない。

だけど、いつもの通りその夢の事はしっかりと覚えているし、頭には弾の頭にもくっついていた羊耳が。

……多分弾にもくっついてんだろうな。電話しといてやるか。蘭にバレたら可哀想だし。

# 外伝、予知夢？　蘭編

原作弾と原作一夏と一緒に寝た次の日。まさかの連続での薄ぼんやりとした夢に少し驚いた。今回は誰だ？
周りを見渡してみると、そこは誰もいない五反田食堂だった。
そこに一夏が入ってくると、どこからか蘭ちゃんが現れて一夏にスマイルを向ける。

「いらっしゃい、一夏さん」
「おう、久し振り」

笑顔を向けられた一夏は、俺もよく見た優しい笑顔を浮かべる。俺がこういう笑顔を浮かべようとすると、優しい笑顔ではなくヤサシイエガオ（別名・怒れるちー姉さん笑い）になってしまうから注意が必要なんだが……良いよなぁ……ああいうきれいな笑顔を浮かべられるってさ……。

……まあ、鈴や弾にはいつもの俺のままが良いって言われてるから気にはしてないけど。

一夏と蘭ちゃん以外は誰もいない五反田食堂のカウンター席に座って一夏と蘭ちゃんを見ながら足をぷらぷらとさせていると、少しずつ霧が晴れていくように薄ぼんやりとしていた二人がしっかりと見えるようになっていった。
そこで一夏は俺に気付き、ここが夢の中だと理解したらしい。

「またか。二日連続は初めてじゃないか？」
「こっちもちょっと驚いてるよ、パパ」

「ぱ、ぱ……パパぁ！？」

俺がそう呼ぶと、蘭ちゃんは凄く驚いたらしく大声で叫んだ。結構ビックリ。

「い……一夏さん……？　この子って……」

「俺の未来の子供だってさ。誰との子供かは教えてくれないけど」

「言ったらもしかしたら俺が消えちゃうかもしれないからって大天災さんは言ってたけど、言っても平気なようにしてみせるって張り切ってたよ？」

「……なんか嫌な予感がするなぁ……」

ああ、多分正解。こう言うことには勘がいいのに、どうして女心やら好意やらにはここまで鈍いかな。そんなんだから襲われるって言われた時に親友に納得されるんだよ。

まあ、一夏だし仕方無いか。

「もしかしたら、次は意外な人の夢に出てくるかもしれないよ？　確実じゃないけど」

次は原作的に考えて……シ……シャ……シャンタクだっけ？……いや、それは確かどっかの神話のかなり高位の邪神の眷属の名前だったような気がするな。ねるねるねるねだったかねるとんパーティだったかナイアなんとかだったか……最後が一番近い気がするな。とにかくそいつの。

まあ、何でもいいか。確か愛称はシャルだったはず。だから勝手にシャルと呼ぼう。

シャルが相手のはずだ。確か。

まあ、何でもいいけど。

ちなみにこの夢は狙って見ているわけではないので、相手も時間も場所もわからない。だが、もしかしたら一夏のＩＳであるびゃっくん（これでいいよな。わかるし）の中の騎士っぽい女の人が出てくる可能性も無きにしもあらず。ないと思うけど。

……あー、ここで蘭ちゃんをママ呼びしたらすっごい面白いことになるんだろうなぁ……ちー姉さんとどっちの方がカオスになるかね？

……流石に悪趣味すぎるか。自重しよう。

でもこれだけは自重する気は全く無い。

そう思いながら一夏の膝の上に乗って背中を預ける。俺の頭を撫でる手が気持ちいい。蘭ちゃんが羨ましそうな目をしているが、今は無視しよう。

「撫でられるの好きだよなぁ」

「……ん……」

気持ちがいいからね。気持ちいいことは好きだよ？　寝ること含めて。

上を向くと、俺を見下ろしている一夏と目が合う。その優しい瞳で、いったい何人の女を墜としてきたのやら。

そう思いつつも何も言わずに、俺は一夏に獣耳をつける。今回は蘭ちゃんに合わせて尖った銀色犬耳（子犬）だ。好きな相手には子犬のように甘える的な意味で。

勿論俺もつける。尻尾つき。耳をつけると勝手に尻尾も装着されるため、便利だ。

「……」

もう一つ同じどこかメカニカルな気配のする銀色の犬耳を持って、蘭ちゃんをじーーーっと見つめてみる。今なら蘭ちゃんの大好きな（原作ではそうだったはず）一夏とお揃いだよーとアイコンタクトをしてみる。通じるかな？

そう思っていたら蘭ちゃんの顔が赤くなったので、多分通じた。一夏と蘭ちゃん自身がお揃いの耳をつけて子供（俺だな）と一緒にいるところでも想像したんだろう。真っ赤になっている。

「ほら、蘭も来いよ。どうせ夢なんだし、寝ないと出れないみたいだしさ」

一夏が言うと、周囲の風景が五反田食堂から織斑家の一夏の部屋に変わる。そこには当然ベッドがあり、俺はすでに潜り込んでいる。

「はいこれお土産。大事にするといいことあるかもよ？」

そう言って蘭ちゃんに犬耳をくっつける。似合ってる似合ってる。

……さてと。寝ようか。

一夏と蘭ちゃんに挟まれて眠りにつく。いい夢が見れそうだ。

……おっと、ここもう夢だったわ。

ｓｉｄｅ　五反田　蘭

夢だと言われて一夏さんと一緒の布団で寝て、しかもそれは一夏さんの未来の子供とも一緒で、こうしているとまるで結婚してしばらくしてもまだ仲良しな夫婦みたいな気分になって、頭がくらくらするほど一夏さんの匂いに包まれて、そこで私の意識はぷっつりと切れた。

そして気が付くと、私はいつもの自分の部屋で寝ていた。

……なんだ、やっぱりただの夢かぁ……。

ちょっとがっくり来たけれど、夢なら夢でしかたない。いつかこの夢とおんなじように一夏さんと同じ布団で寝れるようにしたい。

ファイト、私っ！

ぐっと力をいれたところで、何となくいつもと違うような気がして頭に手を当てると、そこには夢の中であの子につけてもらった銀色の犬耳が。

……何でここにこれが？　あれは夢じゃなかったの？

寝る前に聞いたあの子の言葉を思い出す。

『お土産』。そして、『大切にするといいことあるかも』

……あれは、もしかして本当のことだったのかな？

……ってことは……私は一夏さんと同じ布団で一緒に寝ちゃったって事で……ッ！

顔が熱い。きっと真っ赤になっているだろう。

私は、あの子にもらった一夏さんとお揃いの犬耳を大切に抱え込んだ。

「……一夏さん……」

「おーい蘭ー！飯できてるぞー！」

……お兄の……馬鹿……っ！！

## ちょっとした噂、ほんとかな？

弾の家からＩＳ学園に戻ると六時ごろだった。明日の快適な朝のために寝ようとしたところで、鈴がドアを開けて入ってきた。着替え中だったらどうするんだ。

「謝ってから出直すわね」

そうかい。

「それでね一夏。どうせあんたは夜食べないで寝ようとしてるだろうと思ったから誘いに来たのよ。一緒においで」

「『食べよう』とかそういうのじゃない辺りに鈴の性格が出てるよな」

「いいから来なさい」

そう言われて俺は鈴に手をとられて食堂に向かうことになった。あーれー。

いつもの通り、妙に多い食事を平らげてから、わざわざシルバーカーテンでステルスをかけながら女子の一団に近付いていく。鈴からは趣味が悪いと言われたが、俺の将来が勝手に決められそうになってるんだから首も手も突っ込んで当然だと思う。

きゃーきゃーと騒ぎ続けている一団の、一番俺の近くにいる生徒に声をかける。あえて話したことのない相手に話しかけるのがポイント。

「ずいぶん騒いでるけど、なんの話？」

小さいときの俺の声はぶっちゃけ女子でも通用する程度に高い。だからあえてそのまま話しかけてみたんだが、見事に引っ掛かってくれた。

「それが、今度の学年別トーナメントで優勝すると、なんと織斑君と交際できるのよ！」

……そう言えば、原作でそういう話があったな……。俺の方を見もせずに言った誰かさん。情報提供感謝するよ。

「そうなの？」
「そうなのよ！」
「……情報源はどこ？」
「それが――」
「ちょ、待ちなさいバカ！」
「え？　なん……織斑君！？」

ようやく俺に気付いたらしく、その一団の全員が噂の相手である俺の登場に驚愕していた。

「……面白い噂だね？」

にっこりと笑って言うと、なんでか全員が俺から引いた。

「……一夏。あんたがそういう笑い方すると、千冬さんが怒った笑顔にそっくりなのよ。知ってた？」
「知らなかった」

そうか、あの笑い方にそっくりなのか。それは引くな。

「……まあ、別にそんな噂くらいじゃ怒らないけどね」

そう言うと空気が軽くなり、全体的に引いていた一団も元の場所に戻った。

「それじゃあ……その噂って本当なの？」

その問いに、俺はさっきと同じ笑顔を浮かべる。

すると質問をして来た女子生徒は慌てたような顔で、何やら言い訳らしいことを言い始めた。

「あ、ご、ごめんね織斑君！そんなわけないよね、うん。変なこと聞いてごめんね？　みんなデマに決まってるよね……」

「さあ？　それはどうかな？」

空気が固まった。それはもう、ビシッ……という音が聞こえたような気がするほど。

「……え？　えっと……つまりそれは……」

「……聞いた話によると、今年の学年別トーナメントは二人一組らしいから、仮に交際することになったら、優勝した組のどっちかが引かなくっちゃいけないんだけど」

ここで笑い方の質を変える。鈴曰くのちー姉さん笑いから、いつものんびりした笑い方に。

「……頑張ってね？」

直後、俺の声が聞こえていたらしい（そう言えば、途中から食堂全体が静まり返っていたような気がする）全員が、爆発したかのような歓声を上げた。

「マジ！？マジで！？」

「織斑君から直接言われたんだよ！？マジだよマジ！」

食堂全体がきゃーきゃーと騒がしくなる。先程の一団だけじゃないらしく、周り全員が、だ。

……でも、なんでか鈴とののちゃんは慌ててないんだよな。これはバレてるか？

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

いつもと同じ笑顔で周りのやつらを引っ掻き回している一夏を見ると、溜め息が出てくる。

それはどうやら隣に座った箒も同じらしく、私達は同時に溜め息をついて、それから目を合わせる。

「……気付いてる？」

「……ああ。……全く、質の悪い……」

そう言って箒はまた溜め息をつく。

原因は、もちろん一夏の事だ。

さっき一夏が言った言葉は、噂が本当だといっているように聞こえる。

けれど実際は、噂がただのデマだよねと確認している女子に向かって『さあ？』と曖昧な返事をして、それから例えの話をしただけ。つまり一夏は、噂のことを否定はしていないけれど、肯定もしていないということだ。

それを勝手に周りが肯定だと取り、一夏は詳しく聞かれる前にその場を立ち去る。

……中学時代にもよく見た騒乱の種の蒔き方だ。だからわかる。

そして周りが勝手に騒いで、優勝したから付き合ってと言ったらその事を引っ張り出して言いくるめるんだろう。

……その前に、優勝すると言うことは、一夏にも勝たなければならないと言うことだからまず無理だと思うけどね。

無人ＩＳとの勝負のデータはなぜか欠片も残っていなかったし、あの時は外に出ることはできるけれど中に入ることはできないという状態だったから、あの時ステージに居た私とピットに居た千冬さんと山田先生、そして箒くらいしか一夏の本気は知らないと思う。

……ああ、そう言えばセシリアも居たわね。ピットに。

だからみんな一夏の全力はセシリアと戦った時のあれだと思ってるはず。あれでも私は勝てる気しないけど。

「……とりあえず、私達は静観ね」

「そうだな。それがいいだろう」

騒いでいる周りには悪いけど、私達はなんにも教えてあげない。だって、その方がやる気が出るでしょ？

## 百万アクセス記念外伝、ぷちかパーティー（前書き）

今度から本編は２３時に予約投稿することにします。
……十五分単位で決められたらなぁ……。

# 百万アクセス記念外伝、ぷちかパーティー

……あー、これはちょっと昔の話。ちー姉さんがドイツから戻ってきてちょっと過ぎた頃の、ちー姉さんの誕生日パーティーの時の話だ。

俺は自分にできる限りの料理の腕を振るい、ちー姉さんと束姉さん、そして数いるぷちか達に料理を作っていたため何があったのかはよく知らない。

だからこれは、ぷちかたちから聞き出した、ぷちか視点のお話だ。

ｓｉｄｅ　ぷちか四十六号

「わぅわぅわぅ！」
「ぅにゃう！」
「きゅい？」
「ちゅん！」
「……ふにぃぁ……ぁふ……」
「ゴロゴロゴロ……」

おれを含めて百八匹ぷちか大行進。行進はしていないけどとても賑やかで足の踏み場もない。
さっきから歩こうとするとつまづくし、転ぶところころと回りを巻き込んで転がってしまう。

あんまり出ようとしないケルベロスぷちかやガルムぷちか、ドラゴンぷちかにカメレオンぷちかも出てきていて、本当に賑やか。
でも、割と頻繁に真っ赤な華が咲くのはどうなんだろうと思っていたり。

「……ぷはぁっ！？」
「……かふっ……！？」

どささっ！とちー姉さま達が倒れる音が連続して聞こえ、またこの場に真っ赤な華が咲いた。

……この一時間でもう三回。ちー姉さまの健康が心配だ。
そんな気持ちを込めて、ちー姉さまと束姉さまの顔をべろりと舐める。ちー姉さまはおれが。束姉さまは白虎ぷちかが担当している。

「……う……」
「！　わぅ！」
「ぐふぁっ！？」

どさっ！

一瞬起きていたはずのちー姉さまは、また真っ赤な華を咲かせて気絶した。どう見ても出ている血が致死量を越えている気がするけど……大丈夫かなぁ？

「くはっ！？」

どさっ！

……どうやら束姉さまの方でも同じ現象が起きているみたい。
……大丈夫？　しっかりして！
そんな意思を込めながら、おれたちはち一姉さまのほっぺに顔を押し付け、ぺろりと舐め、肩を少しだけ揺する。

ＰＩＣで体重をほとんどゼロにした鳩ぷちかや鴉ぷちかがち一姉さまの上に乗っかって顔を覗き込む。倒れているち一姉さまの頭の下には樋熊ぷちかが寝転がっていて、枕の代わりになっている。
ちなみに束姉さまの方には北極熊ぷちかがいて、こっちも枕代わり。

「わぅ？　わぅわぅ！」
「わぅっ！」
「にゃぅ？」
「わぅ！」

とりあえずち一姉さまと束姉さまが咲かせた真っ赤な鼻血の華を片付ける。おれの指揮のもと、他のぷちか達は尻尾をふりふり耳をぴこぴこ掃除を始めた。

……今さらだけどなんで指揮官がおれみたいなことになってるんだろう？

「わぅわぅ！」

ん？　雑巾が汚れてきたって？
……だったら洗面台で洗って、綺麗にしてからね。
ついでにバケツも持ってきてくれない？　チェシャ猫ぷちかもつけるから。

「わぅ！」

ありがとね。

しばらくそっとしておいたら、ちー姉さまと束姉さまが目を覚ました。

「……ふぅ。ぷちかそっくりの天使が引き戻してくれなかったら危なかったな」

「私もリトルデビルぷちかが引き上げてくれなかったら戻ってこれなかったかもだよ」

そんな風に呟いているちー姉さまと束姉さまだったけれど、どうやら気合いを入れていれば大丈夫みたいで、今は普通におれたちのことを膝に乗せたり肩に乗せてほっぺをすりすりしたりしている。

なんだか順番待ちの列ができていて、ちー姉さまと束姉さまの前で

『次！次おれっ！』

と言っているかのように目をキラキラとさせている。

「ああ、わかったわかった、順番だぞ」

「わぅ！」

ちー姉さまに言われて順番待ちのぷちか……ケルベロスぷちか（両手に犬の人形、首輪に『けるべろぷちか』と書いてある）が尻尾を激しく振る。

……なんとなく構ってもらえないのがさみしかったので、ちー姉さ

まの服の裾の部分を指先でつまんで引っ張ってみる。
……いつもはぴんっ！と立っている耳も尻尾も萎れている自信がある。

……狼は、寂しいと泣いちゃうんだよ？

「はいはい、ちー姉さんを困らせないの」

そう言いながらごしゅじんさまはおれをひょいと抱き上げる。
そしてすりすりと優しくおれの頭を撫でてくれた。

「ああ、一夏か。もう料理は――――」

そこでちー姉さまの声が止まる。その視線はごしゅじんさまの首に釘付けになっている。
それにつられておれもごしゅじんさまの首に目をやると、そこには首輪がついていた。ネームプレートには平仮名で『いちか』って書いてある。

頭にはおれとお揃いの白くて尖った耳。腰からは白い毛に包まれた尻尾。元気よく振られている訳じゃないけど、ふりふりと尻尾は自己主張をするように揺れている。

「――――一夏」

「わぅ？　どうしたのちー姉さん」

ごしゅじんさまはそう聞き返す。なんだかちょっと危ない雰囲気になってきたような……。

いつの間にか周りのぷちか達は束姉さまの後ろに隠れようとしてい

た。チワワぷちかなんて束姉さまに抱きついてぷるぷると震えている。

「なに、今日は久し振りに一緒のベッドで寝ようという話だ」
「ち……ちーちゃん？　なんだか目が血走ってるように見えるのは束さんの気のせいかな？」
「ああ、気のせいだとも。一夏の首輪を見てちょっと苛めてやりたくなったり味見をしてみたくなったりなどしてないさ」
「……本格的に食べちゃう気も無いよね？」
「……さあ一夏。私の部屋に行こう」
「ちーちゃん！？　それは駄目だよ束さんもまぜてよ！」

このあと色々あって、気持ち良さそうに寝ているごしゅじんさまをちー姉さまがお姫様だっこでお持ち帰りして、おれたちもそれにぞろぞろとついていった。
そしてその日の夜はみんなで一緒に寝た。
ちー姉さまも束姉さまもごしゅじんさまもおれたちも、みんな。

……流石に全員はベッドに入れなかったから、何体かで集まって寝たけどね。

## 転校生、……ん？

俺が噂話に爆薬をくべた次の日のこと。転校生がやって来た。しかも、二人。

……どうでもいいが、普通はクラスを別にするよな？　何でわざわざ同じクラスに放り込むんだ？　向こうさんたっての願いか？

……正直なところ、なんだっていいんだけどさ。俺とちー姉さんと鈴とののちゃんに被害が来なければ。

後は、無いと思うけど蘭ちゃんと弾とカズも。ついでに心配無用だと思うけど束姉さんにも。

……手を出したら……プチッ、しようかね。物理的に。呼吸音を『ぜひ』に変えてやる方が面白いかも。

とは言え、この世界では俺は誘拐されてないし、教室の前の方に居る……銀髪眼帯黒兎に恨まれる原因は無いし、平気だと思うがね。

ちなみにこの思考は、転校生が入ってきたすぐ後の、自己紹介もまだの短い空白の時間で行っている。千の顔を持つ英雄を自在に操れる身体能力の中に、思考速度も入っていたらしい。

……まあ確かに、いくらラカンと同等の身体能力があっても、巨大な隕石を空に向かってぶん投げるとかそういうことは無理だろうし、そう考えれば不思議ではないな。ラカン並なのは身体能力じゃなくって気の量だけらしい。しっかり読んでみたらそう書いてあった。

わかりづらいことこの上無い。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました」

あ、自己紹介が始まったな。まあ、一応覚える努力はしておこうか。

シャルル……だったか。

……間違ってたら悪いね。先に謝っとくよ。

……ふぁ……と欠伸をして、自己紹介を前から後ろへ聞き流す。正直言ってあんまりこいつに興味ないし、どうでもいいかね。

ただ、どうもなんか違う気がするんだよな。空気と言うか、雰囲気と言うか……とにかくそういったものが。

周りで男だ守ってあげたくなる系だと騒いでいるが、静かにしてやれって。

……やれやれ、元気だねぇ……。

……嫌な予感。Ｌｖ６の枕を準備しておこう。

そう思ってちょうど枕を出し終わった所で、もう一人の転校生……ランドクルーザー・ボロボロ……だっけ？　が、俺に近付いてきた。

それと多分名前は違う。まず違う。

……ののちゃんに聞かれたら、ひどい間違いだって言われんだろうな。

ボスッ！

枕ガード！今回は成功した。前回はコットンガードって言ったんだっけ？

「……で、誰？」
「そこから！？　いま自己紹介したよね！？」
シャルル・ディアブロが突っ込みを入れた。昔、突っ込みの上手い奴に悪いやつは居ないと誰かが言ってたような気がしなくもない。
「私はみとぶっ！？」
仕返しの枕アタック。ただしこの枕は自動式。某使徒がコアとして持っていたえすえす機関なんて使ってないよ！ほんとかもよ！
「くっ！きさまぶっ！」
抱き枕用の長い枕は勝手に動き、ランドスターの腕に絡み付いて頬を殴り付ける。中身は綿……ではなく、ウォーター枕に見せかけたマーキュリー枕なので中々痛いはずだ。コアもあげふんげふん。
「……知らないのか？　最近の日本製枕は使用者の安眠のことを考えてあって、寝ている時や寝ようとしている時に襲われると反撃するんだぜ？　しかも中々強いんだ」
「そんなわけないよね！？　そんな物騒な枕はないよね！？」
目の前に強い枕があるじゃないか。現実を認めろよ。
「ちなみに枕は、はじめての使用者を決める際に一対一の決闘を挑み、それに負けた時にのみ使用者を使用者と認めると言う。勿論ナイフ等を使っても良いが、素手で押さえ付けてやらないと使えなくなるからな……苦労したぜ……」
「ウソだよね？　ねえウソなんだよね！？」

やれやれ、だから目の前にその強い枕があるって言ってるのに。

「……一夏め……いつの間にあれほど腕のたつ枕を……」

「あれ？　僕がおかしいの？　何でこの教室のみんな当然みたいな顔をしてるの！？」

「……ふっ。まさかこれほどの枕を使用しているとはな……どうやら私は貴様のことを見くびっていたらしい」

「え！？　こっちも！？」

「ＩＳ使いの中ではどれ程強い枕を使っているかがステータスとなる。……まさかこれほどの枕と出会えるとは！」

「……俺は、もっと強いぞ？」

俺は、枕と向き合いながら俺の顔を見て笑う銀髪眼帯黒兎を見て、笑う。

「いいだろう！これからお前は私の好敵手（ライバル）だ！」

「面白いことを言うねえ……受けて立とうじゃないか」

そうして笑い合う俺たち二人の近くで、シャルルが頭を抱えていた。

「……って言う夢を見たんだ」

「……一夏だったらほんとにやりそうだから怖いわね」

「待て待て、いくら一夏でもそれは」

「ここに自動で動いて警護をしてくれる枕（水銀入り）がね？」

「やめろよ？」

「やめなさいね？」

怒られた。

# 転校生、正夢か？

なぜか本当に転校生が来た。夢の内容と同じだ。
……だが、流石に枕の件まで一緒ではないだろう。と言うか、一緒じゃないことを祈る。枕ガードはするけどな。
もちろんえすえすな機関は入っていない……はず。
……きっと入ってない。……うん、きっと。

そう考えつつ、俺は頬に向かって飛んできた平手を枕で受け止める。
……ちょっと埃が舞った。強く叩きすぎると中の綿が切れて埃みたいに舞うんだぞ。この枕中身水銀だから関係無いけど。

……あれ？　じゃあこの埃はどこから……？

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

そう言ってくる銀髪眼帯黒兎に向かって、俺はいつもの眠そうな表情を崩さないようにして聞き返す。

「……ごめん、眠くてよく聞こえなかった……もう一回お願いできる？」

ぴきっ、と縄に亀裂が入ったような音がしたような気がした。気のせいだな。そうだ気のせいだ。例え目の前の銀髪眼帯黒兎の額につい数秒前までは確実になかった怒りマークがあっても、気のせいで押し通す。

「……って言うかその前に……誰？」

「……ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「あ、覚える気ないから。ついでに存在自体が眼中にないから。さっさと空いてる席に座ったら？　そこにいつまでも木偶の坊みたいに突っ立ってもなんの役にもたたないどころか織斑先生の授業と話の邪魔になるだけなんだからさ。そう思わないか？」

そう言ってやると銀髪眼帯黒兎は憎々しげに俺を睨んで、後ろの方の空いた席に座ってから腕を組んで目を閉じた。

……ん～、最初の頃のセシリーを思い出すね。あれはそのうち俺の大切なものに手を出すと見た。

……その時は覚えてろ？　……俺は、執念深いぞ？

所で、この世界には水を自在に操るナノマシンがあるそうだ。きっと水銀でも使えるよな。エネルギー食いそうだけど。

……水銀は金属だ。ランブルデトネイターで爆破できる。

そして気体にすれば毒性を持ち、頭をぶっ壊す事も肺の中で爆破することもできる。

……欠点は、気体になると無差別攻撃しかできない上、ＩＳ使用中には恐らく使っても意味がないと言うことだ。ウォーターカッターのように直接ぶちこんでやるんだったら効果はありそうだが。

……さてと。それじゃあさっさと着替えて第二グラウンドまで行かないとな。

「ああ織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

ちー姉さんはそう言った。やっぱりそうなるかぁ……。面倒臭いよなぁ……着替えなんて千の顔を持つ英雄で一瞬で終わるからいいけ

どさ。

「君が織斑君？」

「いいから先に着替えに行くよ。あとわかると思うけど寝てて自己紹介とか何一つ聞いてないから後で教えてね」

さて、それじゃあ行こうかね。

「毎回空いてるアリーナの更衣室での着替えになるから覚えといてくれ。……ところで、足は速い方？」

「え、えっと……人並みには。走るんだったらついていくから大丈夫だよ？」

そっか、人並みか。じゃあ多分ついてこれないから手を引っ張って行こうか。捕まったら多分怒られるの俺だし。

「それじゃ行くぞ？」

ＩＳ発動、ライドインパルス。バレないように展開は最小限に。

……よい、しょっと。

「え、ちょっ……きゃあぁぁぁぁぁっ！！」

この日、ＩＳ学園の廊下には、金髪の少年（……にしては骨盤の形が変だし、股関節の骨のくっついてる所の隙間が広すぎると思うんだよなぁ……）の悲鳴が響きわたった。

……原作だったら女の子だったはずだけど、ＴＳなんて結構よくある事だし、気にしないことにした。なにより面倒だし。

「はい到着。毎時間調べておかないといけないから気を付けろよ？
……平気か？」

その問いに少年（……にしては以下略）は、荒い息をつきながら首を横に振った。まあ、あれだけきゃーきゃー叫べば疲れるわな。

「……俺って足速くてさ。人並みだったらついてこれないと思って。捕まったら厄介だしね」

主にちー姉さんの出席簿クラッシュが。あれ面でも痛いんだわ。枕ガードしても衝撃抜けてくるし。

「……はぁ……はぁ……っ、うん、大丈夫……」
「そっか。知ってると思うけど俺が織斑一夏だ。おりむーでも一夏でも好きに呼んでくれ。ただいっくんだけは勘弁な」
「すー、はー……うん、よろしく一夏。僕の事もシャルルでいいよ」
「わかった、シャルル」

……ん？　‘シャルル’？

「……なあシャルル」
「？　どうしたの？」

‘シャルル’は不思議そうな顔で聞き返してくる。間違っていると言う訳じゃ無さそうだ。
くんくんと鼻を寄せてみる。‘シャルル’は顔を赤くして離れようとしたが、逃がさないように手は掴んだままだ。

「……シャルルってさ……ほんとに男？」

びくっ！と体を跳ねさせた。わざわざこうして無駄に近付いて平常心を奪った訳じゃない。素直な反応が返ってきてくれて嬉しいよ。

「……な、何を言ってるの？　僕は男だよ？」

「……それにしては、弾とかカズみたいな男っぽい匂いがしないんだよな……どっちかって言うとののちゃんとか鈴によく似た感じの匂い」

「そ、そういう体質なんだよ！」

……まあ、‘シャルル’がそう言うんだったらそれでいいけど。名前が偽名とかそんなのも含めて。

「……ふーん。そう。まあ良いけどね」

さっさと着替えて行っとくか。千の顔を持つ英雄でＩＳスーツはもう着てるし。

## いい勝負、鈴・セシリーｖｓ真耶先生

ＩＳスーツに着替え終わり、ちー姉さんに言われた通りに第二グラウンドに向かう。絡まれそうになったが逃げ切れた。かなり楽だったな。シャルルは手を引かれて悲鳴上げてたけど。

「そりゃあげるよ……なんであんなに足速いの？」

「俺だから」

「……なんでだろう。一夏のことはよく知らないはずなのに、なんだかすっごく納得できる」

仕方ないさ、俺だもの。

さてと、もうすぐ授業開始だし、さっさと並んでおかなくちゃな。

「では、本日から格闘および射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同練習なので人数はいつもより多い。俺としては鈴がいるのが嬉しいね。

「あたしも一夏と一緒は嬉しいわね」

そう？　ならよかった。

「……今日は戦闘を実演してもらおう。凰！オルコット！前に出ろ！」

「はい！」

……なんだろう、原作と同じはずなんだが、なぜかちー姉さんがイライラしてる気がする。俺が鈴と一緒は嬉しいと言ったからか？

……まさかね。

「それで、相手の方はどちらに？　……まさか、また一夏さんにいじめてもらえるんで」

ドズッパァン！！

「……あんたも大概馬鹿ね、セシリア」

「ああ、痛いですわ……ハァ……♪」

ダメだこの金髪、早くなんとかしないと……。

恐らくこれはほとんどの者が思ったことだろうと思う。シャルルも冷や汗をかいていた。

妙な空気になったところで、真耶先生が現れた。いつもと同じように柔らかな雰囲気だが、ＩＳを装備しているとなんとなくきりっとして見える。入試の時にあまりにも慌てすぎてるのが見ていてわかったからゆっくりと宥めてやった人と（身長と顔と体格と体型と声と網膜とＤＮＡ以外は）同一人物に見えない。

「……そこまで一緒なのだったら同一人物と言って差し支えなかろう」

特に網膜な。あれ同じ人はまずいないそうだし。

……真耶先生が使っているＩＳは隣にいるシャルルの実家の作った第二世代型量産機の……バザール・デゴザール……だったっけ？

「一応言っておくがラファール・リヴァイヴだ。けしてバザール・デゴザールなどという名では無いからな」

「あ、やっぱり？　絶対違うと思ってたんだよね」

やっぱりね～。

「さっさと始めろ小娘共。いつまで惚けているつもりだ？」

「……作戦会議は何分頂けますか？」

「実戦の中でやれ」

お、始まった始まった。頑張れ鈴～、頑張れセシリ～。

真耶先生は強いだろうけど頑張れ～。

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

試合開始直後にセシリアとプライベート・チャネルで作戦会議をする。

『あたし前衛、あんた後衛、あたしは隙を作ることに専念するから、できたら撃って』

『わかりましたわ。……ですが、わたくしは一夏様と戦った時のわたくしではありませんわ。新しい世界への扉と一緒にいろいろ開きましたの♪』

『そう。だったら頑張ってね』

そう言ってからあたしは突撃して死角を作る。その隙にセシリアはビットを二機だけ飛ばして、自分も動きながら山田先生に少しだけプレッシャーをかける。

あたしもあたしで至近距離からの拡散型で低威力の衝撃砲を連発しながら山田先生の機動の邪魔をする。

セシリアに銃を撃ちたい時に向けられた銃口に衝撃砲を撃ち込んで邪魔をし、ビットを落とそうとする所で邪魔をし、邪魔をしてできた隙にセシリアがレーザーを撃ち込む。山田先生はなんとか避けているけれど、それでも僅かずつシールドエネルギーは減っていっているはず。

そうでなければ山田先生がこんなに難しそうな顔をしている理由がないし。

……それにしても強い。いつものあたふたとした姿からは全く想像できない強さね。

セシリアやビットを狙うとあたしに邪魔されるということであたしを狙うようになった山田先生は、乗っているのが第二世代の機体とは思えないような強さを持っていた。

正確な射撃。高速かつ精密なスラスター出力調整とその機動。フェイントの巧みさ。どれをとってもあたし一人では絶対に勝てないだろう。

そう。あたし一人では。

あたしにできた隙をつこうとする山田先生に、セシリアの操るビッ

トからの青い光条が二本突き刺さる。
それで勢いを削がれた山田先生は、一度下がる……と見せかけてさらに突っ込んできた。武器は近接ブレードと近距離用ショットガン。
確かにあたしに近付けば誤射を恐れてセシリアの射撃は少なくなる。けど、私にだって意地がある！
双天牙月をバラしたまま振るい、ショットガンの銃口をあたしに向けさせないように弾く。衝撃砲はコンパクトに連発し、できるだけ撹乱する。
……でも、そろそろ詰みね。
今までも何発か食らってるし、ショットガンの銃口を向けられた直後にぶちこまれたのも二回三回じゃない。その度にセシリアからのレーザーが山田先生に当たりはしたけど直撃には程遠い。機体の性能差で覆そうにも、あたしの技量じゃ無理。
『……ちょっとこれは……』
『やっぱり難しいわよね？』
『勝つのは……難しいですわね』
……まあ、それでも。
『諦めるわけにはいかないわよねぇ？』
『その通りですわ！』
一夏に追い付くまでは。

side　織斑　千冬

……ふむ。想像以上に粘るな。これも一夏効果か？

そう思いながら一夏を見るが、肝心の一夏はいつもの通り、七割程度は眠ったまま授業を受けている。

……やれやれ。

# お昼ご飯、壊れシャルル（前書き）

色々不味いかも……

## お昼ご飯、壊れシャルル

「はぅあ～～～♪」

シャルルが壊れた。俺がつれてきたぷちか達を見たら壊れた。現在黒猫ぷちかを抱き締めているが、頬の緩みが物凄いことになっている。写真に残しとけば黒歴史入りは間違いないな。

……やっとくか。面白そうだし。

「……あんたも悪ねぇ……パシャリと」

「鈴には言われたくないかな。その手に持ってるのはなんだ？」

「カメラよ？」

「全く、貴様らは何をしようとしてるんだ……録画オフと」

「な、何か聞こえましてよ！？　撮ってましたわね？　完全に撮ってましたわね！？」

まあ気にするなよセシリー。気にしたってシャルルが壊れてしばらく帰ってきそうにないことは変わらないんだから。

さてと。飯にしようか。弁当はちゃんと作ってきたからな。

「シャルル、おいシャルル！」

「ん～♪　かわいいにゃ～♪」

「……やれやれ……剥くぞ？」

「はっ！？」

そう言ってやったらようやくシャルルが帰還してきた。黒猫ぷちかはその隙にシャルルの腕から抜け出し、鈴の膝に座っていた獣耳２４号チェシャ猫ぷちかの隣に飛び込んだ。

「ぅ～～」
「はいはい、怖かったわね～……ところで一夏。シャルルの名前は呼べるのね？　なんで？」
「偽名だからじゃね？」
「！！？」

びっくーん！と全身を強ばらせるシャルル。バレバレだからね？
……前に誰かが言っていた。こうやってちょっとずつ追い詰めていく過程が一番楽しいと。

「……そんなことを言ったのって誰？　ちょっと一夏に変なことを教えた罰を与えてきたいんだけど？」
「同感だな。緋宵の切れ味を確かめるちょうどいい試し切りの材料になってくれるだろうよ」
「そうですわね。最近になって偏向射撃もできるようになりましたし、試し撃ちもいいかもしれませんわね」
「怖いよ！？　冗談なんだよね！？」
「さあ？　ちなみに言った奴はちー姉さんと束姉さんの手で人間失格とも言える生活を世界のどこかで送ってるらしいけど」

いいツッコミだシャルル。ツッコミの上手い奴には悪い奴はいないらしいからな。問答無用でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩは勘弁してやろう。

「……それで、なんでシャルルは偽名使って男のふりしてまでここにいるのかしら？」
「な……なんのこと？　どうして僕が偽名使ってるって話になるのさ？　それに、僕は正真正銘の男だよ」

シャルルは顔を真っ青にしつつ、それでも言い訳を続ける。

……でもなぁ……無駄なんだよ。

「男じゃないってわかった方の理由は簡単。ってかばれない方がおかしいと思うんだが……骨格違うじゃん」

「普通一目じゃわかんないよね!?」

「普通わかるに決まってるだろ？　なに言ってんだか」

「えええぇぇぇっ!?」

簡単だろ。スリーサイズはわかんないけど骨格はわかるんだよ。

「偽名の方はもっと簡単だ。……俺が覚えられたからな」

「どんな理由さ!?」

シャルルのツッコミはキレが良いな。

「まあまあ落ち着け。犬と猫どっちが好き?」

「どっちもだけど……って、話をそらさないでよ!」

「はい柴犬ぷちかと三毛猫ぷちか。こいつらを撫でながら落ち着いて聞け」

「にゃう!」

「わぅ!」

「……っ!?」

シャルルはぷちか二体を膝の上にのせ、上目使いを食らってくらくらだ。ああ見ていて面白い。

「一夏はね……他人の本名を覚えられないのよっ!」

どーん！と効果音が出そうなくらいに威張りながら鈴は俺の特性について説明をしてくれた。
ちなみに俺の特性は、日本語に直して平仮名片仮名三文字以上……と言っていたが、ローマ字に直してａｉｕｅｏの五つの母音の数が三個未満（特例として『ん』は母音カウント）の名前なら覚えられる。

だが、シャルルの名前はローマ字に直すとｓｙａｒｕｒｕで母音は三つ。本名なら覚えられるはずがない。
ただし、偽名や愛称などの本名とは違う名前や開発コードだったらなぜか覚えられる。

それを利用して偽名発見なんてことをできるんだが……シャルルが引っ掛かるとは少ししか思ってなかった。
ついさっきまで俺はシャルルのことを、女顔で声が高くて男性ホルモンの匂いが希薄で女性ホルモンの匂いの強い、骨格が女性そっくりで胸をなにかで押さえつけている性染色体がＸＸの男だと思っていたからな。

多分ののちゃんとセシリーが

「性染色体がＸＸの男が居るわけ無いだろ」

的なことを言ってくれてなければ気づかなかったろうね。

……ちなみに、ＸＸのみってのは確かにいないけど、ＸＹ（Ｙ）だったらたまに居たりする。人間の細胞はファジーにできてるな。

「……そこまで解ってたなら気付きなさいよ」
「だってそれを踏まえて『ほんとに男？』って聞いてもイエスって

答えたんだし、なにか知られたくないことがあるんじゃないの？」

例えば、父親が外に作った愛人の子供で母親が死んでから父方に引き取られたけど偶然ＩＳとの相性がよかったからテストパイロットになったはいいけど愛情なんて全く注がれることなく育ってきて、最近落ち目の実家の会社を立て直すために俺とシロのデータを取りに来たスパイみたいなものにさせられてるとか。

「……いつもの勘？」

「……いつもより当たるだろう勘……かな？」

原作知識だけど。

……ああ、そんなことのために俺の貴重な睡眠時間を削ろうと画策していやがったのか。ムカつくな。実にムカつくな。

「……シャルル。今の一夏の話で外れてるところとかある？」

鈴が憤怒を抑え込んでいる声でシャルルに問いかける。鈴は元々激情家だし、当たり前かね。特に家族関連のことは。

……しかし、ぷちかに挟まれて壊れていたシャルルはと言うと……

「うぇへへへぇ……♪」

女としては出してはいけない笑い声を出しながら、ぷちか達を可愛がっていた。

気持ち悪いほど蕩けた顔と頭とは違い、手はしっかりとぷちかを優しく撫でていたことを確認した。やっぱり悪いやつじゃないな。

……三分以内に帰ってこなかったら痛いと評判のデコピンをかましてやろう。

## 昼食、シリアスムードに

‘シャルル’は帰ってこなかったので、痛いと評判のでこぴんをした。本気じゃないからソニックブームも出なかったし、食らった‘シャルル’が吹き飛ぶといったことも無かった。

「――ッ！？　――――――ッ！？」

「……うわぁ……」

「……一夏。どれだけ力を込めたのだ？」

「……わたくしの額があのでこぴんを……はぁ……♪」

約一名を除いて‘シャルル’の反応に引いていたが、三十秒もすると痛みが引いてきたのか半泣き（半分どころか全泣きしてるような気もするが）で俺のことを睨んできた。

「俺の話を完全に無視してあり得ないほど蕩けた笑顔で涎を垂らしていたお前が悪い」

「え！？　う、うそっ！？」

そう言いながら‘シャルル’はポケットからハンカチを取り出し、ごしごしと口の周りを拭き始めた。

「ほらこんな顔してたんだぞシャルル」

「ッ！？」

‘シャルル’は俺の携帯の画面に映った写真を見て顔を真っ赤にする。確かにこれは恥ずかしいよな。

「け、消してっ！」
「はいはい……で、本題といこうか」
‘シャルル’の緊張も解れたようだし、質問タイムだ。盗聴機その他はいつもの通りチャフで無効化してある。ぷちか達に頼んでおけば、学園中のどこにでもすぐさま張ってくれるからいいよな。
「ある程度の予想はついているんだ。さっきシャルルがだらしない顔をしてた時に話したんだけどな」
「あ、あれはもう忘れてよ……」
……‘シャルル’って、からかうと楽しいな。
「……とりあえず、イエスかノーかはいかいいえでお答えください」
「……わざわざ二ヵ国語で言う意味はあるの？」
無いよ？
「まず始めに、前提としてお前の染色体が全てＸＸであるということは確認済みだと言うことを頭に置いとくとして……シャルルは望んで男として来た」
「……ノーだよ」
やっぱりか。じゃあ次だ。
「お前のところの実家の社長である父親の命令？」
「イエス」
「社長には本妻と愛人が居て、シャルルは愛人の子供？」
「イエス」
「本妻に暴力を振るわれた経験がある」

「イエス」
「父親から愛情らしきものを受け取った覚えはない」
「イエス」
「俺達にバレたからフランスに戻ろうとしている？」
「イエス」
「フランスに戻ったら最低でも牢獄生活、最悪社会的に社長に抹殺されるとわかってる？」
「イエス」

淡々と答える‘シャルル’の言葉に、周りの三人が怒りを押さえられないといった顔をしている。俺？　俺はそんなことはない。……ただ、そう言う親は嫌いだけどな。

「目的はシロと俺のデータ取り？」
「イエス」
「それも社長の命令？」
「イエス」
「……ちょっとだけだったが、ここは楽しかったか？」

この質問に、‘シャルル’は一瞬戸惑ったものの、儚げな笑顔を浮かべて答えた。

「……うん。楽しかったよ……ほんとにちょっとだけだったし、大変だったけどね」

そうかそうか。それはよかった。

「……できるなら、まだシャルルはここに居たい？」
「……無理だよ。だって」
「イエスかノーで答えろって」

すると‘シャルル’は少し迷って、小さくイエスと答えた。

……よしよし。素直なのはいいことだよ。
いくらでもやりようはあるし、束姉さんが本気であっちにつかない限り負けはない。

俺はにっこりと笑って言う。

「そっか」

……試したことはないけど、多分できると思うんだよね。

「ののちゃん。鈴。セシリー。ちょっと行ってくる」
「……あたしたちの出番は無いってことね。その分しっかり思い知らせてあげてね……誰に喧嘩を売ったのか」
「そうだな。行ってこい、一夏」
「いい報告をお待ちしております、一夏さん」
「ん」

……さてと。やるかね。

千の顔を持つ英雄で、幻想を殺す右手を持った不幸な少年が主人公の世界の滞空回線を作り上げる。あれは学園都市だけだったが、こっちのは全世界を覆い尽くせるような馬鹿みたいな数を出す。
これだけでもかなり疲れるが、ここからが本番。

魔力を持った武器が作れた。形をもっていれば作れた。だったらこ

いつも作れるはずだと、ネギま世界の電脳兵器、力の王笏を作り上げた。
ここから滞空回線を通じてハッキングをかける。後のことは……まあ、多分なんとかなる。

とある銀行のデータを騙くらかして、架空の口座に架空の金を大量に用意し、勝手に‘シャルル’の実家の会社を買い取った。ネット上でのあっという間のことだったので、恐らく誰一人として気付いていないだろう。
……ちなみに電子精霊千人長七部衆の姿は手のひらサイズのぷちかだった。きびきび働いてたけど。

……さーて後は‘シャルル’を合法的に雇い直して、それから社長を軽く脅してやろう。それには遠距離で当てないように狙撃でもやればいいな。
滞空回線でその場所を見ながらだったら簡単に千の顔を持つ英雄でライフルでも何でも出せる。ああ便利。
周りのことは知らないね。面倒臭い会社のことは任せるよ。潰れるだろうけど。
そしたらテロ組織の亡国企業に罪を擦り付けて‘シャルル’のＩＳだけ貰っていってやる。

俺の機嫌を損ねた報いを受けるがいい！みたいな？

……おっと、脅迫メール出しておかないと。

ｓｉｄｅ　セシリア・オルコット

一夏さんは黙って目を閉じて、それから数分動かなかった。
しかし次に目を開けた時、そこにはわたくしを封殺して苛めぬいた時と同じ光が宿っていました。

「……ふぅ……」
「……終わったみたいね。はい一夏。あーん」
「……はむ」

一夏さんはもきゅもきゅと美味しそうに鈴さんの作ってきた青椒肉絲を食べる。何をやったのかはわかりませんが、どうやら終わったようですわね。

「多分しばらくすれば答えが出るから、それまでここにいろ」
「それが一番ね。……そう言えば、あんた名前は何て言うの？　あたしは凰　鈴音よ。鈴でいいわ」
「私は篠ノ之　箒だ」
「わたくしはセシリア・オルコットですわ。以後よろしく」

わたくしたちがそう言うと、デュノアさんはしばらくぽかんとわたくしたちを見て……その目に涙を浮かべた。

そしてぽろぽろと涙をこぼしながら、ありがとうという言葉を繰り返していた。

「いいから飯にしようぜー。ほらシャルルも笑って笑って」

一夏さんの言葉に従い、デュノアさんもわたくしも食事を始める。

……ちなみに、わたくしが自作したサンドイッチは酷い味でしたので自分で食べるようにしました。甘苦いタマゴサンドは少しト

ラウマですわ。

# 昼食、シリアスムードに（後書き）

中途半端にしかシリアスになれない

## ＩＳできたよ！やったねかんちゃん！

‘シャルル’の実家の会社をハッキングして脅しつけた次の日の事。
俺はいつもの通りにＩＳ整備室に行ってシロの調整をする。
乗るたび乗るたび調整しているが、それでも調整の種は尽きない。
いくらでも要望は出てくる。

例えば前回は瞬時加速時の移動距離調整が少しぶれていたのである程度固定したし、その前は銃火器を使うときに必要なロックオンシステムがなかったので追加したりもした。
必要以上のエネルギーがスラスターに振られていてスラスターがエネルギーを持て余していた時にはそのエネルギーを別のところに回すように調整することもあったし、装甲の調整も多少とはいえした。

……ちなみに、シロの調整結果はぷちか達の使うミニシロにそのまま繋がっているため手は抜けない。元々抜く気はないけど。

……そして今日は、いつもお手伝いをしてくれているかんちゃんのＩＳが完成したというおめでたいことがあった。ちなみに、機体だけ。
それと今必要なのは稼働データと武装。荷電粒子砲はともかく、ミサイルの方は今度の個人トーナメントでとあるものを試してみようと思っているため協力できるだろう。

かんちゃんにはよく助けてもらってるし、こっちから助けてあげたいと思うのも不思議じゃないはず。
流石に今度の個人トーナメントには間に合わないけど、原作では六巻であった弾丸より早いレースには参加できるんじゃないかと思っ

ている。

……一応使えるんだし、荷電粒子砲も使うことを視野に入れとくか。

「……いいの？　シロは……近接型でしょ？」

「違うんだよねぇ。確かに近接白兵戦闘能力が高いのは認めるけど、実際には遠中近距離どこでもいける万能型」

「……でも、武器がない……」

「それについてはなんとかなるようになってる。ミサイルも荷電粒子砲も」

具体的には千の顔を持つ英雄で。

「ほら、よく言うじゃん。そんなものは気合いでどうとでもなるって」

「……いくらなんでも無理だと思う……」

「そう思うのは気合いが足りないからだって。『気合い』を『意思』に変えてみればよくわかると思うよ？　力があっても技術があっても、それを使う意志が無ければ宝の持ち腐れだし」

だから俺は千の顔を持つ英雄をよく使っているわけだが。

「まあ、俺も自分にあった戦い方を見付けられてないわけだし、それを探すついでだよ。ラッキーとでも思っときなって」

けらけらと笑いながら近くにあったクッキーをかじる。カロリーのことを考えてバターを使わずに作ってみた。サクッとした歯応えではなく、どちらかと言うとガリッといった歯応えだが、それはそれで美味い。

かじりかけのそれを、かんちゃんの膝の上に座っているリスぷちかに渡すと、かりかりかりと食べ始める。
そんなぷちかを見たかんちゃんは、少しだけ頬を緩めてぷちかの頭を撫でている。

「……何て言うか、そうやって撫でてるところを見ると親子に見えなくもないよな」
「……へ？」

そう言ってみると、珍しくかんちゃんの呆けた顔が見れた。これはなかなか珍しい。

「髪の色は違うけど、ぷちかもかんちゃんになついてるみたいだし」
「……そう……かな？」
「そう思うよ？　確かにぷちかは純粋で人見知りはしないけど、悪い人にはなつかないからな」

何でかは知らないけど、実際その通り。悪人というかこっちを利用してやろうとするやつにはなつかなかった。
……まあ、手がかからなくっていいけど。

……さてと。それじゃあそろそろ帰って寝ようかね。‘シャルル’も待ってるだろうし。

「それじゃあまたね」
「……うん」

ｓｉｄｅ　リスぷちか

カリカリカリカリカリ……

……クッキーおいし♪

ｓｉｄｅ　更識　簪

……あれ？　いまなにか……あれ？

……気のせいなの？

……。

……気のせいだったみたい。疲れてるのかな。

基本部分は出来上がった打鉄弐式のことを思う。武装のマルチ・ロックオン・システムや荷電粒子砲はまだ完成していないけど、一人で悩んでいた時に比べればずいぶん早くできたと思う。

……これも、織斑くんの協力のおかげ。

……織斑くんは、シロの悪いところを改善するのに協力してほしかっただけで、協力した訳じゃない……って言いそうだけど……。

本当は……わかってる。織斑くんは……本当についでに助けただけ。

……でも……その割には随分よく整備室に来ていた。……それも、わざわざ私の居るところに。

織斑くんにとっては大したことじゃあなくっても……そうしたわかりにくい心遣いの積み重ねに気付くと……嬉しくなってくる。

……こうやって、織斑くんは……無意識に、女の子を落としてるのかもしれない。

……だって……織斑くんと初めて出会ってから……二ヶ月とちょっと……たったそれだけの付き合いなのに……私は……織斑くんに惹かれてる。

ちょっと前までなら……嫌な気分になっていたかもしれないけど……。

……今は……なんだか心地いい。

ふと、考えていた相手の名前を口にしてみる。

「織斑くん」

私は、それだけでひどく赤面した。

# 束姉さん参上！そしてちー姉さんによる惨状（前書き）

キャラ壊し。どんな意味があるのかは不明。

## 束姉さん参上！そしてちー姉さんによる惨状

「やっほーいっくん、おひさしー。はぐはぐしに来たよ～」

部屋に戻ると、シャルル、の代わりに束姉さんが居た。何をしたのかよくわからなかったので一度部屋を出て確認してみようとしたら、束姉さんに捕まってベッドに引きずり込まれた。

「もう、つれないなぁいっくんってば。束さんへの愛はそんなものだったのかい？」

「いえ、びっくりしたのでとりあえずちー姉さんに電話をしようかと」

「おぉっとやらせないよ？　昔からちーちゃんはいっくんのことになると怖いからね。残念だけど連絡を取れないように電波障害を起こしてあるのさ！」

……簡単に言ってるけど、そいつは現代の科学力で簡単にできることじゃないぞ束姉さん。

「束姉さんの科学力は世界一ぃ！」

「知ってます」

それこそ嫌っていうほどに。でなけりゃＩＳなんて作れやしないだろうし。

「いいからいっくん！さあはぐはぐの時間だよ～♪」

「……お風呂は」

「？　束姉さんと一緒に入るかい？」

「まだ鬼籍に入る気も人生の墓場に行く気も無いので遠慮しときます」

怖い怖い。束姉さんは言ったら本当にやるからね。有言実行のマッドサイエンティスト、束姉さん。

「じゃあいますぐだね。束姉さんの胸に飛び込んでおいで～」

束姉さんはにこにこ笑いながら両手を広げるが、俺はそれを努めて無視して束姉さんの隣に寝転んだ。

「いっくんってばほんとにつれないなあ。でも抱き締めちゃうよー」

「……どーぞ」

「許可が出たよ！じゃあさっそく束姉さんの束姉さんによる束姉さんのためのはぐはぐタイム！はっじまっるよー！」

テンションがアホみたいに上がった束姉さんは俺のことを思いきり抱き締めながらベッドに転がった。少し息が苦しいから手加減してほしいところだけども……まあ、無理だろうな。

「はぅぁ～久し振りのいっくんだぁ～♪」

「はいはい、一夏ですよ～」

そんなことを言いながらも、俺はゆっくりと意識を手放していく。束姉さんはなかなか信用できないけれど、信頼できない訳じゃないからな。

……ふぁ……はふ……。

……すか～……。

## ｓｉｄｅ　篠ノ之　束

しばらくいっくんを抱き締めていると、寝息が聞こえてきた。そこでいっくんの息がつまらないように少し隙間を開ける。

じっ、と見つめていると、いっくんは何でもないように眠り続けている。

……私は知っている。いっくんがＩＳに乗れるとわかってから、いっくんのことを誘拐しようとした組織の半分は、いっくん自身の手で排除されていたことを。

この場所に来てからはそういうことは減ったけれど、その代わりに盗聴機やカメラの個数がずっと増えたことと、それをすぐに学園が仕掛けた護衛用とそうでないものに分けて。護衛用以外を壊していたことを。

一人になった夜に、いっくんの部屋に入ろうとしてちーちゃんに捕まった女のことを。

そして、それを知っていてなにも知らないように振る舞っていたいっくんを。

……束さんじゃあちょっと足りないかもしれないけど、いっくんをこうして抱き締めてあげることはできる。

……ほんとはちーちゃんが一番いいんだけどね。いっくんはちーちゃんが大好きだから。

ちーちゃんは今、色々忙しい。原因の大半は私だけど、だからこそちーちゃんは忙しい。

……ごめんねちーちゃん。でも、いっくんを守ってあげたいっていう気持ちは束さんにもあるから、安心してね？

いっくんは強い。戦ったらまず勝てない。だから私は、いっくんが本気を出せない状況にして。その上で戦わずに勝つ。

そのために私は白式を……シロを作ったんだし、その中に爆弾代わりの仕込みもした。これでいっくんは死なないまま、ちゃんと強くなれるはず。

相手に選んだあの子も、いっくんを一度は追い詰められるくらいに強くなるように技術提供もした。その結果も期待通りだった。

……だから、きっと大丈夫。

……大丈夫。

私は心細さを隠すように、いっくんを強く抱き締めた。

……起きた時には、いつも通りの『束姉さん』に戻ってなくっちゃ。

……そして、朝。

「……」ぎぢぎぢぎぢぎぢぎぢぎぢぎぢ……

ちーちゃんに見付かってアイアンクローをされた。頭蓋骨が軋むとかそんなレベルの話じゃなくって、もっとこう直接的な命の危機にさらされてるような痛みが……っ！

## 模擬戦闘、俺ｖｓ‘シャルル’

‘シャルル’がここに来てからはや五日。初日に性別詐称が発覚するも、俺は全く気にすることなく同室で寝泊まりしていた。
たまに俺のベッドに鈴やののちゃんが居たりして騒ぎになることもあるが、なかなか楽しい生活だ。

……ちなみに‘シャルル’の実家の会社だが、いつの間にか経営が少し良くなっていた。忘れてたけど俺って一応黄金率と幸運スキル持ってるし、当然……なのかもな。
現在の経営者は俺だし、言うことを聞かなかった‘シャルル’の父親はちょっと洗脳したから言うことを聞いてくれるようになったし、問題ない。

そして現在、俺は衝撃砲以外の遠距離武器の練習ついでに‘シャルル’と模擬戦をしている。
ラピッドスイッチの真似事をして遠近両用にしているが、やっぱり面倒臭い。一発の威力も必要だけど、やっぱり弾幕張れる武器の方が好みだ。楽だし。
ちなみに基本戦法は、相手のバランスを崩すとかして意識をそらし、不意を打つように近付いて荷電粒子砲または雪片で攻撃して離れる。わざわざこんなところで手の内を見せたくないし。

ただ、荷電粒子砲って面白いな。束姉さんの使ってた遠隔操作型のＩＳみたいに曲げることはできなくとも、衝撃砲とは違って速度があるし、縦に裂いて散弾のようにすることができる。
エネルギーをアホみたいに食うのが厄介だけど、元々攻撃特化型のＩＳであるシロはそんな感じだし気にしない。

……どんな手を使っても良いんだったらこの世界ではどんなやつにも勝てる自信があるが、流石に人前でディープダイバー使って地面に相手を引きずり込んで地中に放置するのは不味いしな。

「っ！？　い、いま何か怖いこと考えなかった？」

「考えてないぞ。ただ、どうやればシャルルを落とせるかってことだけを考えてる」

「……それはそれで怖いような……」

戦闘中はそんなもんだろ。それ以外のことを考えていて落とされて死んじゃいました、何てことになったら多分ちー姉さんが泣くだろうし。

だから、手加減はちょっとしかしないぞ？

中々いい勝負をした。使い慣れない射撃系武器を使って、よくもまあここまで粘れたな。偉いぞ俺。

「と、言うことで吹っ飛べ」

「ちょっ！？　グレネードがあるなんて聞いてな」

どっかん。

‘シャルル’は不意打ちで放られたグレネードの爆発に巻き込まれ、シールドエネルギーを0にした。

あと、言ってないんだから知らなくてもおかしくはないさ。

「……まーた強くなったわね？　少しはのんびりしたらどうなのよ」

「してるさ。週一しか乗ってないしね」

その代わりに週一でメンテナンスしてるし、出力調整もしてるけど。

鋼龍に

「甲龍よ。読みはシェンロン。クシャルダオラじゃないわ」

そうだったか。すまん。だが俺は覚えられない！だから呼び名はコドラで。

「……まあ、ポルンガよりはましかしら。甲のドラゴンでコドラ？」

「正解、と言うことで正解者にはハグしてあげます」

「バッチこいね。あたしにも一夏にも損のない美味しい話じゃない」

「ああ、できれば私も良いか？」

「わたくしはむしろ椅子にしてもらいたいですわね。一夏さんの重みを体で受け止める……ああ、なんて気持ち良さそうな……」

「黙れよ養殖マゾヒスト」

「あはうぁ！」

セシリーは自分の体を抱き締めるようにしながら恍惚とした表情を浮かべた。

その上頭のネジが外れたのか、くるくるとその場で回っている。

「お……オルコットさんはどうしたの？」

「あの変態は気にしちゃ駄目だ。変態が移ったら大変だからね」

「普通移らないよね！？」

「普通じゃなければ移るんだけどね？」

普通は移らないって言うことはそう言うことだよな。普通じゃなければ移ってもなんらおかしいことはないわけだ。

「……普通じゃ……ないの？」
「変態って言うのは新しい種族として考えても問題ないと思うんだよな」
「ぁあぁぁぁぁ……♪」
「一夏、もうやめてあげて。それにこれ以上は一夏の貞操が危ないわ」
「てっ！？」

？‘シャルル’はいったい何を驚いてるんだろうな？　貞操の危機なんて割と多かったよ？
原因は基本的に束姉さんと鈴とちー姉さんだったけど。
実際に襲われたことは一度もないし、大丈夫だと思われる。
……と言うか、思いたい。

……さてと。それじゃあ俺は個人トーナメントに向けて銃の練習もしとくかな。

## 練習中、眼帯兎に絡まれる

しばらく練習をしていると、銀髪眼帯黒兎が現れた。乗っている機体はドイツのシュヴァルツェア・レーゲン。量産の目処が立たない ある意味欠陥機らしい。シロよりはまだましだろうけど。

「おい」

さてと。俺は適当に練習を続けるとするか。関係ないし。

「……おい」

それが終わったら明日には整備室に行かないとな。整備は大切だし、データをかんちゃんに見せてあげたいし。
やることはいっぱいだな。

「っ！おい！聞いているのか！」

……さっきからおいおい五月蝿いな。誰だよ。

「そう言えば、韓国語でキュウリの事を『オイ』って言うらしいぞ。種のことは『シー』で、日本人が美味しいって言うと韓国語では『キュウリの種』ってことになるんだとさ」
「へー、一夏ってそう言う無駄知識は多いわよね」
「まあ、役に立つとは到底思えないが、面白くはある」
「だろ？　ところで、さっきからキュウリキュウリ言ってる韓国人だと思われる人は何をしたいんだろうな？」
「一夏わかってて言ってるでしょ！？」

さて？　なんの話やら。

「え？　だって呼び掛けてるにしては名前を言う気配もないし、傲岸不遜だし、俺の名前はオイじゃないし、高慢な口調がムカつくし、第一俺はあいつのこと好きじゃないしどうでもいいし話したくないし戦いたくないしあいつが俺の事を憎んでるとかどうでもいいし嫌ってる理由なんて聞く気もないし話し合う理由もないし優しく返してやる義理もないし生憎と叩かれそうになった相手に対する優しさの持ち合わせはないし最大限ぶっちゃけると面倒臭いから関わり合いになりたくない」

「そこまで言うの！？」

「まだ加減してるけど無くしてみる？」

「やめてね？」

「加減を？」

「違うからね！？　本気を出すのをやめてってことだからね！？」

わかってるとも。

「……貴様……」

「貴様って誰だろうね？」

「キサマって人が居るんじゃない？　世界のどこかに」

「いないとは言えんな。そうかそんなものを呼んでいたのか……幻覚でも見ているのか？」

「……どうせ見るなら一夏様に苛められる幻覚でも見たいものですわねぇ……」

「どうしよう僕には止められないよ……」

おちょくりは人数が増えると格段にレパートリーが増えるからな。

止めるのも大変だろうな。

「それにしても、こんなに訓練機の多いところで周りに確認もしないで戦闘行為をするなんてまず無いよな。馬鹿のやることだし」
「ぬぐっ……」
こらこら、俺の前でそんな風に悔しそうな顔をしちゃ駄目だっての。そこにつけこんで罵倒しちゃうよ？
「……一夏は意外とSなのだな」
「今さら気付いたの？　一夏はあれで嫌いな相手を苛めるのが大好きよ？　あと好きな人に愛でられるのも」
「嫌いな相手と好きな相手に対する態度が全然違うのですわね……わたくしはどちらなのでしょうか……？」
セシリーは嫌いじゃないよ？　どっちかって言うとギリギリ好きに入るかな。
少し前に襲ってこなければ普通に好きにはいってたんだけどね。
「……じゃあ俺は戻って寝る。あとは好きにして」
「だったら一夏の部屋に泊まろうかしら」
「駄目だよ！？　女の子が男と一緒なんて！」
そんな風にぎゃいぎゃいと騒ぎながら俺はアリーナから去る。ギリギリと歯を軋ませる銀髪眼帯黒兎をほっぽって。
……ってか、名前なんだっけ？　ランサー・ボーキサイト？
……違う気がすんなぁ……どうでもいいけど。

「そう言えば、何であの子は一夏に喧嘩を売ってきたのかしら？」
「第二回モンド・グロッソの会場内で誘拐されそうになってな。その時に爆破してやったんだがそれが不味かったらしくて試合中止になったんだよ。つまり、俺のせいでちー姉さんの大会二連覇が無くなったって事で恨んでるんだろ。態度から見てちー姉さんの崇拝者みたいだし」
「あれって一夏が原因だったの！？　原因不明の爆発事故って聞いてたんだけど！？」

「ちなみに、爆発は指向性を持っている衝撃と熱をバラ撒くタイプ。起爆点から五十メートルほどが爆砕されていたってさ」
「自分のことだよね！？　なんで他人事みたいな言い方をしてるの！？」
「月に秘密基地を持ってそうな知り合いのお姉さんからもらった防犯装置だったから」
「防犯装置に爆薬つけるの！？」

束姉さんだからね。自重を知らない束姉さんだからね。

ののちゃんはそういうことをしそうな人のことを知っているので、額に手を当てて空を仰いでいる。まあ、しょうがないね。

「たぶんそれが原因だと思うぞ？　俺は全く気にしないけど」

睡眠時間が削れることなく、さらに俺の身内（家族だけじゃなく友人含む）に被害がなければ。
あったら潰すけどな。

あと、原因は束姉さんじゃなくて普通に俺なんだけど。

## 練習中、眼帯兎に絡まれる（後書き）

昼頃に外伝、シャルル、編を投稿します。

# 外伝、予知夢？　シャルロット編

俺がシャルルと同居を始めて数日後。またもや薄ぼんやりした夢を見た。
タイミングを考えると、シャルル、なんだが、もしかしたらのほほんちゃんという可能性も……

……と、思っていたけれどやっぱり、シャルル、だった。
……ただし、なぜか、シャルル、はコルセットをしていない上に、一夏はベッドに横になっている、シャルル、に覆い被さるようにしていたが。

「……パパ？　無理矢理するのは犯罪だよ？」
「しねえよ！？」

俺の声を聞いて、一夏は凄まじい勢いで体を跳ね起こした。
その勢いのまま俺の事を見て……肩の力を抜いた。

「……ふぅ……驚かせないでくれよ」
「ごめんね、パパ」

ここで固まっていた、シャルル、が再起動。

「い、一夏っ！？　ぱ、ぱ……パパってどういうこと！？」
「ん？　ああ、そう言えばシャルルは会うのは初めてだったな。名前を言うと消える可能性があるから言えないらしいけど、未来から送られてきた俺の子供だってさ」

そこで俺はペコリと頭を下げておく。礼儀正しくするのもたまには良いだろう。

「……え？　時間移動って……そんなのできるわけないよね！？」

「できそうな人が知り合いにいるんだよ……」

確かに束姉さんならほんとにできそうだよな。そういうの。今回違うけど。

「そうそう。気にしたって仕方がないんだからさ」

「だよな。束さんの行動を読み取ろうって言うのがまず無理だし、行動から考えていることを理解するのもまず無理だよな」

うんうんと俺と一夏が頷き合う。束姉さんを理解できたら、それは確実に人間としてどこかおかしいよな。

……まあ、多少の付き合いがないとわからないことだけど。

「……一夏は、それを信じられるの？」

「……確かに非常識だけど、束さんは時間移動くらいなら平然とやりそうだし、面白そうだからっていう理由で本当にやっちゃうからなぁ……」

「いつか平行世界に行けるようになったら、まだ小さい頃のパパを拐って逆光源氏計画実行するとかなんとか言ってたよ」

「突っ込みどころが多すぎる！？　俺はどこから突っ込みをいれればいいんだ！？」

「一夏の頭の上の虎耳からじゃないかな？」

‘シャルル’はなんだか色々と疲れたような顔をしている。まあ、気にするだけ無駄さ。

「……へぇ？　今回は虎耳かぁ……シャルルにもあると思うぞ。お揃いのやつ」
「期待に沿いまして……じゃーん」
取り出してみた虎耳、ただしどこかメカニカル。
……束姉さんの獣耳を真似ようとしてるんだけど、どうしてもなんとなく機械的になっちゃうんだよなぁ……。
「よしよし、偉いぞー」
一夏に頭を撫でられる。撫でスキル高いよなぁ……はふぅ……♪
「っ！」
きゅぴんっ！と‘シャルル’の目が光ったと思ったら、いつの間にか俺は‘シャルル’の膝の上に座っていた。
「ん～♪　かわいいねこの子」
「可愛いだろ俺の子。前に弾にも言ったんだけど、その時には苦笑いされちまってなぁ……」
ぎゅう～っ、と抱き締められているが、苦しくなく、それでいて逃げられないように上手く押さえ込まれている。
普通だったら抜け出せないんだろうけど、俺ならいける。
……やらないけどな。面倒だし。
「はい、大事にしてね」

‘シャルル’の頭にメカニカルな虎耳を装着したあと、自分にもつける。つけた瞬間‘シャルル’の抱きつきが強くなった気もするけど、まあいいや。

「……ふぁ……」

「ん？　眠くなったのか？」

その問いに頷くと、一夏は俺を‘シャルル’と一緒にベッドに引き込んだ。

「ぇ？　え、ちょっ！？　一夏ぁ！？」

「気にすんなよ。なにもしないさ」

「そういう問題じゃなくって……あぁもう！」

‘シャルル’は一夏の顔がすぐ近くにあることに驚くが、一夏はもう慣れてきたのかたいした反応を見せない。もしかしたら原作以上に鈍くなってしまったかも知れない。

もしそうなってたら、ごめんねののちゃん。ごめんね鈴。あとセシリーとシャルルも。

……まあ、俺はそういうことを気にせず寝るんだけど。

……すか～……。

ｓｉｄｅ　一夏Ａｎｏｔｈｅｒ

目を覚ますと、俺の腕の中に夢で見た俺似の子供がいた……なんて事は無く、いつも通り一人だった。
……なんだか寂しいのは気のせいだと思いたい。一人寝ができなくなるのは困るし。

いつものように頭についていた虎耳を取って、獣耳置き場に。箒の尖った犬耳。セシリアの垂れた犬耳。鈴の灰色の猫耳。千冬姉の狼耳。弾の羊耳（角付き）。蘭の銀の子犬耳。そしてシャルルの虎耳。

……いったいどこまで増えるんだろうな？

後ろでもぞもぞと動いている気配を感じて振り向くと、シャルルがぼんやりとした目で俺の事を見ていた。

「おはよう、シャルル」
「……いちか？」

ぽけー、としていたシャルルはその雰囲気のままに答えてくるが、だんだんと頭がはっきりとしてきたのか目の焦点が合ってきて……

「……一夏？」
「おう」

顔を真っ赤にしたかと思うと、がばっと布団に潜り込んだ。

「おーい、シャルルー？　どうしたんだ？」
「見ないでっ！こんな僕を見ないでぇぇっ！！」

……いったいなんなんだろうな？

あと、頭は隠れてるけど尻尾が出てるぞ。

## 書類整理、シロは俺のだ

白式の正式な使用者登録に関係している書類にサインをするという仕事で真耶先生に呼び出された。白式じゃなくてシロだって訂正しておいたけど。

一枚一枚丁寧に見ていたらかなりの時間がかかりそうだったから睡眠時間を多くとるために覚えた速読で読んでからさっさとサインを済ませる。

これで形式的にもシロは俺のＩＳになった。元々束姉さんが作ってくれたやつだから俺のと言っても過言じゃなかったんだが。

ちなみにぷちか達にも小さなＩＳコアがあるが、どうやらこっちの方は束姉さんの不思議技術で本格的なＩＳのコア・ネットワークから独立したネットワーク（命名、ぷちか・ネットワーク）を構築しているらしい。

俺が獣耳を装着するとシロが一端既存のコア・ネットワークから外れ、ぷちか・ネットワークに入って状態を共有、ぷちか達の使うミニシロにシロの状態がフィードバックされてる仕組みになっているようだ。

ダメージを受けている時にはダメージのフィードバックは起こらないが、経験はしっかりと蓄積されていっているらしい。

……いったいどんな技術を使っているんだか。知りたいような知りたくないような……。

……やれやれ。

一応晩飯を食べに行くと、もう鈴とののちゃんと‘シャルル’とセ

シリーはそこにいて談笑していた。初日でこの三人の前で盛大にバラしてやったが、どうやら大して気にしてないらしい。
俺の幼馴染み達は、何故か大体のやつが神経が図太い。弾や鈴が最もよく分かりやすいだろうし、最近ではののちゃんやセシリーもどんどん細かいことを気にしなくなってきている。

今のところ一番そういうことを気にするのは……蘭ちゃんか‘シャルル’のどっちかだな。

……自分でバラしといてあれだけども、性別詐称をあっさり受け入れると言うのはなかなか難しいだろうに。
しかもこの三人は、性別詐称になんとなく気付いていたとか。

理由は、ののちゃんが気配、セシリーが言動、鈴が勘。珍しくセシリーが一番マトモな答えを持っていた時には驚いた。
驚きすぎてつい足の甲を踏みつけて確認してしまったほどだ。ちなみに悦に浸っている表情をしていたことから本物と判断した。‘シャルル’のひきつったような笑顔が印象的だった。

特に山もなく谷もなく食事が終わり、今日という日も終わる。
俺は同室の‘シャルル’に背中を向けて眠る。今日のぷちかは何ぷちか？　白蛇ぷちか？　黒豹ぷちか？　それともまさかの鴉ぷちか？

「ぷち束姉さんでしたー♪」
「……きゅう？」

出てきたのはデフォルトでうさみみ装備のぷち束姉さんと、同じく白いうさみみのぷちか六号。きゅーきゅー鳴く姿が可愛らしかったり。

中学の頃は鈴や弾にスティックにんじんをもらってはカリカリかじっていた、アイドル的存在だった。
……それは他のぷちか達も同じだが。

……まあ、いいや。さっさと寝ちゃおう。

「おおぅ、寝ちゃうのかい？　だったらこのかわいいぷち束姉さんをはぐはぐしながら眠ってむぐっ？」

騒いでいたぷち束姉さんを抱き寄せて黙らせる。寝るときは静かにどうぞ。
ぷちかの方はぷち束姉さんを挟むように俺と逆のところに陣取ってぷち束姉さんを抱き締めている。

ぷち束姉さんがなんだかやばい痙攣を起こし始めたような気がするけど、気のせいだろう。
……というか、もしかしていつかぷちー姉さんが登場して俺と一緒に寝たりするのか？

……束姉さんだったらあり得る話だが……実行はしないで欲しいなぁ……どういう反応をすればいいのかわからないから。

……さてと。寝ようか。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　束

ここだけの話。私と小さい私はＩＳのセンサーのようなもので繋が

っていて、小さい私が体験したことはこっちの私にも流れてくる。

……つまり、いまの束さんはヘヴン状態！非常で奇妙で異様なテンションで箒ちゃんの専用ＩＳの紅椿を作っているのさっ♪

白式……今は違うんだったね。シロとは違って速度に特化した訳じゃあないけれど、全性能の特化に特化したＩＳ。それが紅椿。
最高速度、加減速力、反応速度はシロに僅かに劣るけど、戦場に合わせた多様性と防御性能は紅椿の方が上。
武器についてはいっくんの千の顔を持つ英雄に届くことは流石に無いけど、それでも多彩な使い方があるようにしたし、箒ちゃんにも合うは

「ふぁあっ！？」

小さい私の背中をいっくんの（相対的に）太い指がなぞりあげていって、つい声が出てしまう。小さいいっくんも小さい私に抱きついていて、背中から小さい私の首筋に顔を埋めている。
こ、これはいくら束さんと言えども頭がぱーんってなっちゃうよ！？　溢れ出すリビドーに任せていっくんを襲っちゃうよ！？

ちっちゃい私はちっちゃいいっくんを、私はいっくんを襲うから、しっかり役割分担だよ！いっくんハーレムだよ！最後にはちっちゃいいっくんおっきいいっくんみんなまとめて束さんのだい！

ぱらりろぱらりらぺろ～♪

むむっ！この着信音はぁ……ちーちゃんだなぁっ！とうっ！

「いつもニタニタいっくんのそばに、そっと這い寄る混沌束さんだよっ！」

「……今お前、一夏に手を出してぷちかも連れていってハーレムだーとか言ってなかったか？」

……（汗）

「……そんなことは……ない……よ？」

「……そうか。欲しいと言うならやってもよかったんだが」

「欲しい！」

「駄目だ」

ちーちゃんがいじめるー！いっくーん！傷ついた束姉さんを慰めてー！

## ののちゃんの独白、そして毒吐く

周りで騒ぐ者達を見て、私は一つ溜め息をつく。
彼女達は、一夏にいいように踊らされているに過ぎない。それはわかっている。

一夏は実は意地が悪い。こういう洒落になる範囲とならない範囲の見極めが上手く、ギリギリ洒落になるところをついてくるのがいつもの一夏の人のからかい方だ。私も昔はよくそれに振り回された。

だが、それでも一夏のことを嫌いになれないのは、一夏は一番辛いときにそこにいて、さりげなく手を貸してくれたり叱咤してくれたりするからだ。
それを恩着せがましく言うでもなく、ただそこにいてうつらうつらと船を漕ぎ、人の事をからかう。
どんなときでも変わらないその在り方は、色々なものを私に教えてくれた。

……主に諦めとかそういった系統の事だが。

そのお陰で私は性格が少し丸くなったし、人当たりもよくなった。
ストレスにも強くなったし、姉さんの奔放さを受け入れることができるようにもなった。

私は、姉さんの事が嫌いではない。むしろ好きであると言っていい。
あの自由奔放な社会不適合者には色々な事で迷惑を被ってきたが、それでもだ。

……そう、一夏と付き合えるだろうと頑張った剣道の試合当日に引っ越しさせられても、重要人物保護プログラムで東西問わずに引っ越しさせられて友達の一人もいない青春（今も青春だが）を送ることになってしまっても、一夏にもらった電話の電波を解析されて居場所がわかるのは困るとかいう取って付けたような理由で政府がテレビ電話を壊しても（日本政府に呪詛を送ってみたところ、当時の総理など八人が同時に盲腸で入院した）、姉さんの事は嫌いじゃない。

……よく私は姉さんの事を嫌わないでいられるな。自分で驚きだ。その分政府の方に行っているような気がしなくもないが。

確かにＩＳがなければこんなことにはならなかっただろうが、それをわざわざ戦争に使おうとしたりする馬鹿共がいなければ問題なかったんだ。

そもそもなんだ日本は。初めのうちはＩＳがあったのは日本だけだったのだから交渉の材料にするなりなんなりして日本有利に動かせばいいものを、アメリカに好き勝手にむしられよって。弱腰外交も時と場合を考えてやれ。まったく情けないな。あまりにも理不尽な要求は突っぱねればよかろう。

……理不尽と言えば、最近ＩＳ学園に転入してきたラウラ・ボーデヴィッヒ。一夏に勝手に恨みを持ち、憧れに泥をつけたと憎み、初対面で暴力を振るおうとしたあげくに喧嘩を売ってくる、軍の特殊部隊の隊長をしているものが、あれでは駄目だろう。

別に私はボーデヴィッヒが一夏を恨むのが気にくわないわけではないし、それを止めようとも思わない。

だが、それに周囲を巻き込むのはいただけない。

ＩＳ訓練中にやって来たボーデヴィッヒは、恐らくあのまま一夏が去って行ったら容赦なく肩のレールカノンを撃ち込んでいただろう。

……周囲の事を考えることもなく。

一夏とボーデヴィッヒの問題に首を突っ込むことはしたくないが、こちらに被害が来るならば首を突っ込むしかないだろうに。

……やれやれ。困ったものだな。

ちなみに、デュノアはともかく、私と鈴は一夏の心配はまったくしていない。

理由と言えるかどうかはわからないが、戦略や戦術はともかくとして、戦闘で一夏が負ける姿が想像できない。

これにはセシリアも同意していて、どう想像しても一夏がボーデヴィッヒをボロボロにしている画面に繋がったとか。

その想像の中には、一夏は生身でボーデヴィッヒはＩＳ使用と言うものもあったのだが、セシリアの中ではそれでも一夏が勝ってみせたらしい。

……笑い飛ばせないのが一夏の恐ろしいところだ。何らかの方法で相手を落としてみせそうで、なかなか怖い。

「……できそうよね」

「……違和感が欠片も無いな」

「二人ともおかしいからね！？　生身の人間がＩＳに勝てるわけないでしょ！？」

私達も、一夏が普通だったら諸手を上げてその言葉に賛同しただろうが、生憎と私達は一夏の非常識さを知ってしまっているし、理解

もしている。

私と鈴はデュノアの肩に手を置いて、言う。

「「ようこそ、非常識な一夏のそばに」」

デュノアは頭を抱えた。

# 衝突寸前、鈴・セシリーｖｓ眼帯兎

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

放課後の第三アリーナでセシリアと向き合う。いくら先生が相手とはいえ二対一で負けてしまったあたしたちは、特訓とは呼べない小技の練習中。

急激な戦闘力の増加は無いけれど、手札が増えた分だけとれる手段が多くなった。

とは言っても、あたしのは衝撃砲の効率運用と、あとは一夏がやっていた衝撃砲の曲げ撃ちの練習くらいなもの。

龍咆は一夏のシロの衝撃砲みたいに一部の出力を変えることはできないし、後ろから拳による推進力が加わってない分初速が遅い。

それに加えて一発撃つ度に砲身を新しく作らないと移動した相手を追えないし、出力も角度も威力も変えることもできないから色々と面倒臭い。

……けれど、逆に考えれば自由度は少しだけ増す。

例えば、砲身が固定されていても、角度や威力が固定されていても、やろうとすれば連射はできるし、口径を小さく作れば当たりにくくなるかわりに威力は倍率ドン！さらに倍！になるし、小さくなった分貫通力が増して相手が吹き飛ばなくなったところに何発か叩き込んでやれるようにもなった。

これも一つの成長ね。やっぱりそばに一夏がいるとやる気になるわ。

だって一夏は、あたしの目標だから。今は追い付けないほど遠くにいるけど、いつか必ず追い付いてやるんだから！

あと、曲げ撃ちの方は少しの工夫である程度の結果を得た。セシリアも何か新しくできるようになったみたい。

「正確には、確認しただけですわ」

「あっそ。何でもいいわよ」

一夏と戦ってMの扉を開いたセシリアは、同時に色々なものを見付けていたらしい。

今回の特訓（？）で、それを可能なだけ拾い集めて来たんだとか。

……一夏って、人を変える天才よね……いや、あれは天才と言うよりも、天性の方が合ってるかもしれない。多分本人に自覚はないし。

「……それでは、最後に模擬戦でもいかがですか？」

「あ、それいいわね。お互い本番に向けて、手札を隠しながらいい勝負をしましょ？」

あたしとセシリアはお互いに笑顔でメインウェポンを呼び出して、構える。

「……なんだか、すっごい面倒なことが起きる気がするんだけど」

「……奇遇ですわね。ちょうどわたくしもそう思っていたところでしてよ」

例えば……横から飛んでくる砲弾とかね！

あたしは口径を小さくして威力を上げた龍咆で。セシリアは呼び出

したばかりの青いライフルでその砲弾を撃ち落とす。
そしてその砲弾が飛んできた方に目を向けると、そこには一夏に喧嘩を売ろうとしたあの……名前なんだっけ？　キュウリキュウリ言ってたのは覚えてるんだけど……。
……そうだ、機体情報を参照すればいいじゃない。ＩＳ学園に所属してるんだったら、名前は登録してあるでしょ。
えーっと……機体名が『シュヴァルツェア・レーゲン』で、操縦者はラウラ・ボーデヴィッヒか。

「……いきなり何用ですの？　ドイツの軍では挨拶にレールカノンを撃ち込めという作法でもあるのでしょうか？　ずいぶんと野蛮な国ですわね」
「しょうがないわよドイツだもの。きっとあれの頭の中身はドイツが最強と言われていた頃で止まってるのよ。いいから無視して模擬戦しましょ」

……そうは言ったけれど、実はあたしは無視する気もセシリアと模擬戦を続ける気も残っていなかった。

初めに向こうから攻撃させることはクリア。実のところこれが戦闘前の最終目的だったので、いくらでも攻撃を返してやることができるのだけれど……まだ周りには人がいるから、逃がさないと。

「……中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」
「はいはい、保健室はあちらでしてよ。付き添いは必要ありますか？」
「無人のＩＳやスペックしか載ってない画面の方が本物より強く見えるって、確実に頭が逝っちゃってるわよね。精々お大事に」

あたしとセシリアを挑発しているのだろうけど、あたしたち……少なくともあたしは一夏のあの挑発を知っているから大して怒りを感じない。
全てを見下しているような目も、傲慢な口調も、あたしたちには致命的な油断にしか見えない。

『セシリア。あんた多分偏向射撃できるわね？』
『あら、バレてしまいましたわ♪　鈴さんこそ、色々できるようになっているでしょう？』

目の前で向き合っているラウラ・ボーデヴィッヒを挑発しながらも、あたしたちは大まかな戦法を練っていく。

……それにしても、セシリアはＭじゃなかったの？　よくこうして舌が回るわね。あたしが言えることじゃないけど。

『ＭとＳは表裏一体なのですわ』
『あっそ』

……元々あたしは沸点が高くない。一夏と一緒にいてずいぶんと怒りっぽくは無くなったけど、その分一度怒ると怖いと言われるようになった。

一夏と別れたあとの中国で、嫌だと言っているのに何度も何度も食事に誘ってくる馬鹿を相手に一度キレてから、あたしの評価がキレると龍より恐ろしいというものになった辺りからもその事が伺える。

……あたしが龍より怖かったら、千冬さんなんていったい何よ？
鬼神？

……ああ、似合ってるかも。きっと鬼子母神ね。子供と言うか大事な弟は一人だけだけど。

まあなんにしろ、あたしは一夏を馬鹿にしたこの糞女――――っと、下品だったわね。これを許す気にはなれない。

例え一夏がどうとも思ってなくとも、あたしは嫌だ。

『あんた後衛、あたし前衛。前と同じに見せて、偏向射撃とあたしの衝撃砲と双天牙月で封殺するわよ』

『あちらにはワイヤーとプラズマエッジ、そしてＡＩＣがありますわよ？』

『わかってるわ。情報は武器だもの。……援護よろしく』

『承りましたわ』

……さて、始めましょうか。

一夏みたいに上手くはできないけれど、言質はしっかり取った。

『加減はいらん』に始まり、『二人で来たらどうだ』、『所詮は数しか能の無い国』、『古いだけが取り柄の国』、『下らん種馬を取り合うメスに負けるわけがない』。

……最後のは千冬さんにも聞かせることにしましょう。ぼろくそにしてあげる予定ではあるけれど、もし負けたときでも復讐はできるように。

……くすくすくすくすくす……

# 激戦、鈴・セシリーｖｓ眼帯兎

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

戦闘開始。まずはあたしが口径を小さくして貫通力と速度を上げた衝撃砲を撃ち込む。セシリアはその間にビットを自分のすぐ近くに二機だけ出した。後はまだ腰のところにくっついている。

「ふっ……無駄だ」

そんなことを言いながらあの女は右手を前に出す。恐らくあれがＡＩＣの予備動作なんだろう。

別にあれがなくともできるけど、あった方がやりやすいんだと思う。

まあ、消される前提で撃った衝撃砲でそれだけのことがわかったんだから上出来ね。

相手は動かないようだから、砲身はそのまま衝撃砲を連射する。その時、後ろからセシリアがビットとライフルからレーザーを、ギリギリ当たるラインであの女に撃ち込んだ。

「ちっ！」

あの女は舌打ちをしながらＡＩＣを解除して移動する。やっぱりシロの空間固定とは違って光学兵器は防げないみたいね。

それに、止めている間は動きと反応が鈍かったし、かなり集中が必要なんだろう。

けれどあたしの砲身リユース式衝撃砲の連射速度を見誤っていたらしく、その装甲がいくつか抉り飛ばされた。

そして、セシリアの偏向射撃で鋭角に折れ曲がったレーザーがＩＳごとあの女を貫いた。

その隙にあたしは瞬時加速であの女に接近し、二つに分けた双天牙月を同時に叩き付ける。

それはあの女の手首のパーツから出たプラズマエッジに阻まれたけれど、私には関係無い。

あたしのやるべきことは、こいつの動きを抑えて進行方向の予想を容易にすること。痛手を与えるのはセシリアが基本だ。

「舐めるなっ！」

「舐めてんのはそっちでしょうが！」

射出されたワイヤーの根元、両肩の四つと腰の二つに口径を小さく、砲身を短くして即射性と弾速を上げ、命中精度を少し落とした衝撃砲を打ち込む。

威力は無くていい。気をそらせれば、横から飛んできたセシリアのレーザーが、ワイヤーを操る集中力を掻き乱してくれる。

そこで双天牙月の峰に衝撃砲を撃ち込み、さらに圧力を加えてあたしからも精神を掻き乱す。ワイヤーに少し削られたけれど、シールドエネルギーはまだ余裕がある。

「後ろ見なくていいのかしらっ！」

その瞬間に背中に突き刺さる二本の光条。セシリアのすぐそばに待

機していたビットは撃っていないのに、なぜか。
そんな問いが頭のなかを回っているだろうこの女に、囁くように種明かしをする。

「あんたってほんとに馬鹿ね。射撃型ビットは二つじゃなくて四つあるのよ？」

なんの事はない。この女があたしとセシリアの近くにあるビットだけに集中している間に、残った二つのビットを後ろに回り込ませていただけ。

「馬鹿な！誤射が恐ろしくないのか！？」
「当たる前に折れ曲がるもの。何度も見たのにわざわざそんなこと説明させないでよね」

心底馬鹿にしたように言ってやれば、この女は屈辱に顔を歪ませる。
いつの間にか眼帯が外れて金色の目が見えている。

……ああ、そう言えば衝撃砲を高速連射したときに落ちてたわね。
どうでもいいけど。

その時から妙に反応がよくなったけれど、どうもこの女は言葉を使った騙し合いには弱いらしい。

「ほらまた後ろ！」

そういってやると焦ったような顔で何もない背後を睨む。
その隙にあたしは双天牙月の峰に面積広めの衝撃砲を撃ち込み、斬撃の後に打撃を与えて吹き飛ばす。
体制を崩した所にビットから撃たれた四本のレーザーが襲いかかり、

それを避けようとしている間にあたしが近付く。
肩のカノン砲を撃たれたら、セシリアがライフルで撃ち落とす。
そしてもう一度双天牙月を振りかぶって、その体勢のまま瞬時加速キック。そして双天牙月を振り下ろして、あの女をアリーナの地面に抑えつける。

プラズマエッジを出す両手は抑えた。ワイヤーを出す両肩と腰の搭載部分を圧縮衝撃砲で破損させた。ＡＩＣはこの場ではたいした意味はない。なぜなら。

「この距離だったら外さないし、あんたの後ろは地面だから吹き飛ぶことも無いわ――――何発耐えられるかしらね？」

……なんとなく、この女からさあっと血の気が引いたような音が聞こえた気がした。

「発射」

その単語を皮切りに、アリーナに絶え間なく轟音が響き渡った。

ｓｉｄｅ　セシリア・オルコット

鈴さんが一夏さんに手を上げた雌ブ……女に覆い被さり、衝撃砲を気持ち悪いくらいの速度で連射し始めたところで、わたくしは少し気を抜いた。

武器を封じられ、動きを止められ、衝撃砲の雨霰を浴びている状況

を引っくり返すなど、織斑先生かあるいは一夏さんくらいじゃないと無理だろうと思えたから。

当然まだ何らかの手を残している可能性があるので警戒はしていますが、それもほとんど形だけのもの。実態はもう終わったような気分ですわ。

……それにしても、言うだけあって強かったですわね。一対一ではまず勝てないでしょうし、即興のコンビネーションで勝てたのは奇跡かもしれません。

……鈴さんとわたくしのＩＳの相性は中々にいいらしい。また今度にタッグマッチでもあれば、組んでみたいものですわ。

そこまで考えた次の瞬間に、ほとんど決まっていた戦況が一気に様変わりした。

そこに居たのは、全身装甲の黒いＩＳ。その手にあるのは、この世界で現在もっとも有名な剣。

色は黒いが、その姿はまさしく現役時代の――

「千冬さん！？」

「織斑先生！？」

わたくし達の言葉には反応せず、黒いＩＳは一瞬でわたくし達に接近し、手に持った近接ブレード――雪片を振り下ろした。

# 観戦、そして乱入

実は、セシリーが銀髪眼帯黒兎の背後に二機のビットを回り込ませて撃ち抜いたあたりから観戦していた。なんかあの二人、相性がいいな。

それに、つい最近真耶先生と戦っていい勝負をした時よりも強く……いや、上手くなってるし、セシリーなんかは五巻だったか六巻だったかまで使えなかったはずの偏向射撃ができるようになっていた。

……この短時間に、あの二人にいったい何があったのやら。知りたいような、知りたくないような……。

だが、観戦程度の気持ちでこの模擬戦を見ていられたのは、鈴が衝撃砲でラッシュを始めて五秒程度までだった。

突然銀髪眼帯黒兎のＩＳから馬鹿みたいな電撃が放たれ、鈴はＩＳごと吹き飛ばされた。

そして状況の変化は続き、黒兎のＩＳがぐにゃぐにゃとその形を変えていく。

……そういやそんなのもあったなぁ……。

「い、一夏っ！あれってどう言うことっ！？」

「何で俺に聞く？　俺は何でも知っているって訳じゃあないぞ？」

第一、あれの名前は知らないしな。知っていても覚えてなさそうだ。

しばらくぐにゃぐにゃとしていた黒兎のＩＳだったが、衝撃砲を連続して食らっていたためにできたクレーターの真ん中でふわりと浮

き上がり、両足を地につけると同時に急速にその形を整えていった。
それは黒い、全身装甲のＩＳだった。
束姉さんが前に送ってきた奴とは違ってごつくはなかったが、そのシルエットは見覚えがある。

「……あいつ、自殺志願者だったのか」
「誰が！？　って言うか怖いよ一夏！」

だってそうだろ。束姉さんの逆鱗に好んで触れたがるなんて、死にたがりか自殺志願者か狂人か頭がぱーんしてるかのどれかだろ。もしくはただの無知。
とりあえず俺は怖いから絶対に束姉さんの逆鱗には触れたくないね。
とりあえず俺は怖いから絶対に束姉さんの逆鱗には触れたくないね。
とりあえず俺は怖いから絶対に束姉さんの逆鱗には触れたくないね。

「なんでわざわざ三回も言ったの！？」
「重要なことだから」

少なくとも俺にとっては。
……ついでに言っとくと、口には出してないぞ。思ったけど。

そう思っている間に、自殺志願者Ｒ（Ｌかもしれないけど、それこそ知ったことじゃない）の乗ったＩＳが高速でセシリーに接近し、雪片もどきを振り下ろす。
それが当たる寸前に鈴が割り込みをかけるが、どうやらスペック自体は向こうの方が数段上らしく、見事に弾かれていた。
高速で展開された衝撃砲の砲身も出来上がった頃にはその先に目標がいないということが多々あるようだ。

それでも食らいついていける鈴とセシリーに、すごいなぁと本気で思う。

……っと、いくらなんでもあれはマズイな。データだけで動いているとはいえ、ちー姉さんだし。

……息を吸って、吐いて、もう一度吸って……周囲の視線が全て鈴とセシリーの方に向いているのを確認し、

「ＩＳ発動、シルバーカーテン」

その場で電子光学迷彩をかけて不可視になり、

「ＩＳ発動、ディープダイバー」

アリーナのステージと観客席を分けているシールドをすり抜けた。

物理的なものがすり抜けられるんだったらできると思っていたが、やっぱりできたな。うまく応用すればうちはのマダラみたいな真似ができそうだ。

生体はすり抜けられない代わりに無機物だったら選択してすり抜けられるみたいだし、もう少し便利そうだけど。

いきなりのことで反応が遅れていた教師陣から、ようやく状況がレベルＤだの生徒は避難しろだのと言っているが……まあ、鈴とセシリーは友人だし、ちょっと無視して助けるか。

……それにしても、マジで鈴とセシリー凄いわ。データとはいえあのちー姉さんの攻撃を耐えてるんだから。零落白夜が無いってのも大きいのかもしれないが、それでもな。

とりあえず、そろそろシールドエネルギーの残量がやばげな二人から引き離すかね。

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

ったくもう！なによこいつはっ！

いきなり動きの癖や戦法までをがらっと変えたこの女に、明らかに妙な方法で形を変えたＩＳ。

色々と聞きたいことはあるけれど、落とそうとしても全然落ちてくれない。

隙はできないし、誘いにも乗ってこない。

セシリアがやった背後からの射撃も見事に回避して見せたし、不可視の高速展開型衝撃砲も空振った。

攻撃方法はブレード一本で切りつけてくる、高機動・高攻撃力型。

ただ、変わる前に相当痛め付けたからシールドエネルギーは限界のはずで、あと一発ぶちこめば終わると思う。

『その一発が遠いですわね……』

『全くよ。なんて理不尽な。ブレード一本でこんな真似ができそうな人なんて、一夏と――――』

そこまで言ってようやく気付く。

一夏が使う雪片弐型と、ほぼ同型の近接ブレード。

操縦者と色こそ違うけど、ＩＳに関わる者なら誰もが一度は見たことがあると思われる機体。
高機動型で、高威力かつ高速の剣使い。

『……姿形だけじゃなくて、本当に千冬さんみたいな戦い方をするのね』

……でも、やっぱりこれは違うと思う。
だって本当の千冬さんなら、あたしたちがどれだけ頑張っても五分あれば三回は落とせるはずだし、それ以前に剣が見えるわけがない。
今だって双天牙月と打ち合っているけれど、本物の千冬さんなら打ち合うことなんてできないしね。

……けど、やっぱりそんなになっても千冬さん。
一夏曰く、

「ちー姉さんだったら多分『覇王炎熱轟竜咆哮爆裂閃光魔神斬空大鉄拳』で山の一つくらいは吹き飛ばせそうだよね」

とまで言われる千冬さんだ。あたしたちを蹴散らすなんて造作もないことだろうし。
……一夏の言ったあれのことは気にしない。どうせ確実にろくでもないことだし。

ガギィンッ！と双天牙月が横からの攻撃で弾かれ、小さく煇が入る。
流れた体勢を整えようとするも、あの女の剣の方が早い。
セシリアのレーザーは確かに早いが、発射までにあるタイムラグが大きすぎるので、今から撃っても間に合わない。
衝撃砲も間に合わないし、もう片方の双天牙月も弾かれてガードに

間に合いそうにない。

……絶対痛いわよね。あれ。

あたしの衝撃砲と同等くらいの攻撃なんて、食らったら確実に絶対防御は抜けてくるだろう。

ＩＳの操縦者生命活動補助型があるから死にはしないと思うけど、脱け殻とはいえ千冬さんが相手だから油断はできない。

半ば諦めかけていたけど、それでもやっぱり……

（……負けたくないなぁ……）

あの女の刀があたしに振り下ろされて、世界がゆっくりになる。

最後まで目は閉じない。諦めたくないから。負けたくないから。

……だから、この光景はきっと神様からのご褒美なんだと思う。

一次移行を終わらせて真っ白になったシロを駆り、真剣な顔の一夏があたしを護ってくれた。

まあ、神様なんて信じちゃいないんだけどね。

## 原作崩壊？　だから今更だって

鈴に斬りかかる偽ちー姉さん型ＩＳの刃を雪片弐型で受け止める。
威力だけはしっかりあるみたいで、ぎしりとシロの腕の関節が鳴く。
偽ちー姉さんはすぐさま剣を戻して縦に振るが、それも受け止める。
同時に左の衝撃砲で貫通型を撃ち込んでやるが、逃げられた。
速いな、流石データそのもの。人間で言う思考時間によるタイムラグがほとんどない。人間でもＩＳに乗っている間はそこらのパソコンより演算能力がつくはずなんだが、それでも僅かにあるそれがない。

「よう、鈴。なんだ手こずってるみたいじゃないか。白馬の王子様をただ待ってるだけなんて、鈴らしくないな？」
「五月蝿いわね。ちょっと寝ぼけてただけ……よっ！」

そう言いながら鈴は衝撃砲を撃つ。それは瞬時加速で避けられるが、距離はできた。

「それじゃあ鈴。セシリーもだけど、そろそろシールドエネルギーが不味いだろ。巻き込まない自信はないから退がっててくれないか？」
「嘘つきなさい。普通に『ちー姉さんが相手だと心配だから』って言いなさいよ。わざわざ自分のことを小さく言ってないでさぁ」
「そうですわ。わたくし達だって彼我の戦力差は承知しています。一夏さんがわたくしたちを巻き込むようなことがないと言うことも」
……む。そうか……。

「じゃあ、後でオウムぷちかに『大好き』って言葉を覚えさせてから抱かせてあげるから退いて」
「退くわよセシリア。ここは一夏に任せましょう」
「そうですわね。そういたしましょう」

最初からこう言えばよかったかもな。と思うくらいに簡単に鈴とセシリアは退いてくれた。
……さてと。俺は俺で、鬼退治、とでも洒落込むかな。

……あの黒いＩＳを鬼と考えると、囚われのお姫様みたいだよな。あの銀髪黒兎。名前は忘れた。どうせ言おうとしても相当酷い間違いしか出ないと思うし。
例えば、ランバダ・ボーロキーレとか。

……襤褸布（ぼろきれ）？　流石にこれは無い。ランドクルーザー・ボロボロと同じくらい無い。

まあ、いいか。とりあえずさっさと終わらそう。

俺は零落白夜を発動し、高速で接近。ギリギリ反応はしたようだが、空間固定で偽雪片と腕を被ってやれば逃げられない。
零落白夜が使えればまだわからないが、使えないみたいだし。

「……さっさと起きろ、馬鹿兎」

俺は雪片弐型を振り下ろし、黒い‘くー’に似たＩＳを縦に真っ二つにした。
絶対防御の恩恵か何かは知らないが、乗っていた銀髪黒兎はたいした傷は負っていないらしい。
ここでもう一発やったら死んじゃうだろうから、優しい俺はそんな

ことをしないで黒兎（ＩＳと言う皮剥ぎ済み）を静かに受け止めてやる。

今回は大して疲れなかったけど……寝たいことにはかわりない。さっさと引き渡して保健室でも寮の自室でもいいから布団に入ろう。

……そして、こんなものを載せた馬鹿にはお仕置きだ。死人はでないから安心しな？　代わりに珍しい病気が流行ると思うけど。

ｓｉｄｅ　ラウラ・ボーデヴィッヒ

その二人に手を出したのは、単なる挑発と憂さ晴らしのためだった。教官の弟、織斑一夏と戦うための下準備でもあったが、大半はそちらの理由だったと今では思う。

織斑一夏は、必要最低限の時間しかＩＳに乗らないらしい。代表を決める決闘でも、週に一度のＩＳ搭乗日でもできるだけ乗らないようにして、そして空いた時間は惰眠を貪る。

それらの情報からただ学年トーナメントで当たっただけではすぐに棄権されると思ったため、棄権しないようにと織斑一夏と仲の良い二人がアリーナに来たところで挑発した。

織斑一夏は友人を馬鹿にされると本気になると聞いたため、ボロボロになるまで叩き潰してやれば棄権することも、戦いを拒否することも無くなるだろうと予想したからだ。

その目論見は当たった。しかし、それも途中まで。

前のデータには無かった、甲龍の衝撃砲の速射と連射。不意を打つための話術と詐術。
ブルー・ティアーズの偏向射撃と、隙を付く巧みさ。
一人一人ならば容易く撃破することもできただろうそれに、私は一方的に追い詰められた。

――私は、こんなところで負けるわけにはいかない。
私の憧れる教官を、その存在だけで変えてしまう男。
そんなことを認めるわけがない。そんなものの存在を、認められるわけがない。
だから、私はその男を敗北させ、地に伏せさせると決めたのだ。あの男を、完膚無きまでに叩き伏せると。
そのために、こんなところで負けるわけにはいかない。あの男に触れることすらできずに敗北するなど、あってはならない。
――そこで声が聞こえ、私はその声に、一も二もなく飛び付いた。
力があり、私の全てを払うことでそれを手に入れられるなら、こんな私など何から何までくれてやる！
――だから、私に力をよこせ。
比類無き、唯一絶対の最強の力を――私によこせ！！

私は力を手に入れた。先程までは一方的に加えられていた攻撃を全て避け、近接ブレード一本であの雌共を一方的に攻撃している。

私は力を得た。圧倒的な、力を。

……しかし、その力すらも目の前の男には届かなかった。

……何故だ。私はあの人の……最強である教官の力を得たはずだ！それなのに、なぜ貴様は遥かな高みに居る！！

『ちー姉さんの力を手に入れた？　アホかお前。ちー姉さん以外にちー姉さんと全く同じ力が持てるわけないだろ。それ以前にあれがちー姉さんの力？　あんな空っぽな力がちー姉さんの物と同じな訳ないだろ』

……ならば、私はどうすればあの人のようになれる！？　何をすればあの高みに到達できる！

『……馬鹿なんだなお前。自分が新しい自分になることはできても、全く違う他人になれるわけが無いだろ』

……私は、あの人のようにはなれないと言うのか……巫山戯るな！

『五月蝿い奴だな。全く同じになれないってだけだ。お前のままでちー姉さんの高みに行けないとは言ってないぞ』

……ならば答えろ。私はどうすればその高みに登り詰めることができる！？

私の悲壮感すら漂う問いに、奴は一瞬も迷うことなく答えた。

『知るか。自分で考えろ』

それに私が返す前に、その男は続けて言う。

『自分が他人になれないように、他人も自分にはなれないんだから、そんなことを聞いたところで無駄だよ。自分で考えてこそ意味があるし、例えそれが間違っていてもそれは糧になるしな』

その言葉は奇妙なほど現実味に溢れていて、私はつい聞いてしまった。

――お前も、そうして強くなったのか？

『……精神的には、その通りだな。精神は肉体に直結するし』

その言葉に、この男の周りに居る者達がなぜ強いのかが理解できたような気がした。

あれは、意思の力だったのだろう。

私のような、依存と嫉妬から来る力ではなく、ただ純粋に思いを通したいという意思の。

そこに到達するまでに、恐らく誰もが迷ってきたのだろう。

高みに登るための道が間違っているかもしれない、届かないところで切れてしまっているかもしれないといった不安を乗り越えながら、ずっと進み続けたのだろう。

間違ってしまった時や転んでしまった時には、周りにいる誰かと力

を合わせて。

この男のために。

『……まあ、そんなわけだ。登りたいんだったら勝手に登れ。俺はお前のことが大嫌いだが、頑張っている奴を見るのは……まあ、嫌いじゃないからな』

そう言い残して、その男は消えた。

……ああ、ああ、理解した。あの男があれほどだらしないのに、あの女達が呆れた顔をするだけで離れようとはしない理由を。

あの男は、人を垂らし込むのが上手いんだ。

気が付いたら近くに居て、気が付いたら心の一部に住み着いていて、気が付いたらその割合をどんどんと大きくしている、そんなやつなんだ。

……そして、どうやら私も手遅れらしい。

……全く。あいつは実に厄介な男だ。

――織斑、一夏

……本当に、厄介な男だ。

とりあえず電話を掛ける。お相手はさっきの戦いを見ていただろう束姉さんだ。

「もしもし束姉さん？　ちょっとゾナハらせたい奴がいるんだけど、手助けしてくれない？」

『いいよー♪』

即ＯＫが出た。と言うか束姉さんも凄まじく怒っているらしい。

「ちー姉さんが怒るし、殺人は無しね」

『え？　やだなあいっくん。この束さんがそんなに簡単に死なんていう楽な道に逃げさせてあげるとでも思うの？』

「そんなわけないでしょ。束姉さんがそんなに甘いわけがない。そして俺もそんなことをさせてやるほど優しくない」

『だよね！』

なんだか束姉さんのテンションが高い。理由は何となくわかるけど。

『それじゃあ束姉さん情報を聞くんだいっくん！ちーちゃんの胃の健康はいっくんの手際にかかってるよ？』

「全力でやらざるを得ない」

元々そのつもりだったけど。

細かな金属片に水滴をつけた霧が、部屋の中に現れる。これで学園のカメラは潰れた。盗聴機は率先して潰したため、これでもう俺の

行動を知ることはできなくなった。
そんな中でも何故か束姉さんと俺を繋ぐ電波はそのまま繋がりを保っている。

「それで、場所は？」
『ドイツだよ？』
「それは知ってるよ？」
『適当にドイツ全土にばらまいちゃえばいいと思うんだけど』
「ばれないと思うけど、ばれたらちー姉さんに怒られそうだから、やだ」
『……仕方無いなぁいっくんは』

そして束姉さんは詳しく場所を教えてくれた。よーし潰すぞー。

ちなみに、ゾナハ虫は戦闘機やミサイルを分解して無力化することができたりする。

さあさあいこうか。そこが地下ならドリルで穴を開けて侵入するのもいいし、吸気口からの侵入もいい。フィルターなんて無いも同然だしな。
とりあえず、三千人分も用意しておけばいいかね。

来たれ。　千の顔を持つ英雄。　ゾナハ虫【アポリオン】。
当然監視用のゾナハ虫も用意している。監視と確認は重要だよな。

目標、ドイツの秘密研究所。そこにいる人間全てをゾナハに罹患させろ。
ただし、一人たりとも殺すな。ＩＳがあれば持ってこい。束姉さんに渡して改造してもらうから。

空中投影型ディスプレイで現在のドイツのとある場所の状況を見てみる。

『ぜひ、ぜひ、ぜひ、ぜひ……』

『こ……ぜひ、ぜひ……ころ、じ、て……ぜひ、ぜひ、ぜひ……』

喉をおさえ、白目をむいたり瞳孔が半開きに固定されたままぜひぜひという苦しげな呼吸を繰り返している白衣の研究者達が、男1、女6くらいの割合で床に倒れて悶えている。

ゾナハ病に発症し、進行がレベル3まで行くと代謝が下がり、体の筋肉も石のようになって飲まず食わずでも死ねなくなる。怖い怖い。

このまま誰にも気付かれず、何らかの原因でその研究施設が吹き飛ばされたりしない限りは、この研究者達は生き続けるのだろう。

もしかしたらゾナハ病の原因解明のために解剖されたりもするかもしれないが、その時はゾナハ虫一匹一匹が見えないように飛び出して解剖している相手をゾナハ病にすることだろう。

それが機械なら分解し、操作しているものや近くに居るものをゾナハに罹患させる。

……流石にISを装備されてたら無理だと思うが、装備していないうちに飛び込めば平気だろう。最悪ランブルデトネイターで爆破するし。

「これでいいかな」

『いいんじゃないかな？』

「……束姉さん。またハッキングして監視カメラの映像をジャック

したんですか？」
『そうだけど、なにか問題あった？』
……無いけども。
どうせやるんだったらＩＳ管理委員会には流れないようにお願いします。あとついでにデータの全消去も。
何となくその辺りからこっちの方に悪意と一緒に向けられそうな気がするし。

『いいよ？　ただ、ちょっとぷちーちゃん作ってみたから、今度実験よろしくー』
「あいさー了解。ちー姉さんの前に出しても平気？」
『それをやっちゃうとちーちゃんと感覚がリンクしてなでなでするとちーちゃんがヘヴン状態になっちゃっていっくんの貞操が危なくなっちゃうから、やめた方がいいかも？』
「……視覚リンクとかは？」
『もちろんあるよ？』
「……束姉さん、それを使って覗きとかしてませんよね？」

……束姉さんから返事が来ない。どうやらやっていたようだ。

「……ちー姉さんに通報します」
『それはやめてぇ～～っ！ちーちゃんのちーちゃんクローは痛いんだよ！？　頭蓋骨が‘ギリギリギリ……’っていう生優しい音じゃなくって‘ギヂギヂギヂ……’っていう致命的な音と痛みがするんだよ！？』
「じゃあ俺のでこぴんで」
『……いっくんのでこぴんって、確か小学生の頃に誰かを相手にして八メートルくらい飛ばしたんじゃなかったっけ……？』
「それはちゃんと加減してます。鼻から上だけが消し飛ぶとかそん

なことにはなってないでしょ？」
『でこぴん怖いっ！？　いっくんのでこぴんすっごく怖いっ！？』
束姉さんの頭が吹き飛んじゃうよっ！？』
「加減はします。ダムダム弾の直撃くらいまで」
『死んじゃうってば！？』
「じゃあこんにゃくを叩き付けたくらい」
『……あれ？　一気に弱くなった？』
「ただし、上空三千キロメートルくらいから三千キログラムくらいを時速三千キロくらいで」
『やっぱり死んじゃう！？』

束姉さんはこうやってノリノリで返してくれるから良いね。ちー姉さんだと止まっちゃうし、からかえないんだよね。
最近は‘シャルル’がおんなじ感じでからかえるけど。

「まあ、それじゃあお元気で。きっとそっちにちー姉さんから電話が行くと思いますけど」
『うん！いっくんも元気でね』

そうして俺は電話を切り、チャフを下がらせる。

……ふぅ。一仕事したし……寝ようかな。

……すか～……。

## 予想外の行動、予想外の言動

鈴とセシリーが銀髪黒兎を苛め、俺が張っ倒し、ドイツを相手に一仕事を終わらせた次の日のこと。銀髪眼帯黒兎は俺の席の前に来て、こう言った。

「私はお前がいないとこの世界に意味を見出せなくなった！責任をとってずっと私と一緒に居ろ！」

そして俺の頭を抱え込み、額にキスをしてから自分の席へと戻っていった。

……久々に本気で困惑したわ。あと、シャルル、が黒い気配を醸し出してるのがちょっと怖い。

……何がどうなってこうなったのやら。

ｓｉｄｅ　ラウラ・ボーデヴィッヒ

予備のパーツをフルに使って組み直されたシュヴァルツェア・レーゲンを使い、本国にいるシュヴァルツェ・ハーゼの副隊長、クラリッサ・ハルフォーフにプライベート・チャネルを繋ぐ。

クラリッサは本国では私に次ぐ好成績を叩き出している者でもあるが、今連絡をとろうとしている理由はそれだけではない。

クラリッサは確か隊員達に慕われていて、よく悩みを聞いてやっていたはずだ。
当時の私は下らないことだと切り捨てていたが、その事を頭の片隅に止めておいてよかったと、今では思う。

『――受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』
「ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐だ……突然だが、一つ質問がある」
『はっ！なんなりと』

そう答えたクラリッサに、私は勢いをつけるように深呼吸をしてから本題を切り出す。
本題、それはすなわち――

「――男の気を引くにはどうしたらいい？」

そう、織斑一夏のことだ。

しかし、なぜかクラリッサからは返答が来ない。まるで凍りついてしまったかのようだ。

「……クラリッサ？　クラリッサ・ハルフォーフ大尉！聞こえているか！？」
『は、あ、え、えぇぇえぇぇえぇっ！！？』

いきなり爆発したような声を上げたクラリッサは、ただただ驚いているようだった。

しばらくの間ひたすら驚き続けていたクラリッサを抑えると、クラ

リッサはなぜか私に質問を繰り返してきた。

なぜそのようなことを聞くのかと言う問いには、正直に『気になる男ができたからだ』と答え、それが誰かと言う問いにも正直に『織斑教官の弟で、織斑一夏と言う男だ』と言った。

確かに相手のことを知らなければ助言などできはしないだろうし、この質問も的外れなものではないな。

『……隊長は、その男の事を好いているのですか？』

「ああ、惚れている。もし一夏がこの瞬間世界から姿を消したら、世界の九割以上が色を無くしてしまうだろうと言う予想ができるほどにな」

……ただ、それが『女』としての感情か、それとも『今までの何でもなかったラウラ・ボーデヴィッヒ』を『人間であるラウラ・ボーデヴィッヒ』として生まれ変わらせてくれたという『子供』としての感情かの区別はつかないが。

「……今まで私は男とまともに話したこともないからな。隊員の話をよく聞いているクラリッサに話を聞こうと思ったのだ」

『……了解しました。このクラリッサ・ハルフォーフ、ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長のサポートを勤めさせていただきます』

「よろしく頼む」

そこからは早いもので、クラリッサは次々に質問をし、私がそれに答えて作戦を練る。

「惚れていると言ったが、正直に言ってこれが女としての思いなのかわからないのだ。それよりも今は『勝ちたい』という思いが強くてな……」

『なるほど……（恐らく隊長はその相手を好敵手として見ていると同時に、男として意識し始めているのだろう……ならば、私はその背を押してやるまでだ）話は理解しました。隊長は恐らく、その男の事を好敵手（ライバル）と同時に男として想っているのでしょう。ならば、まずは好敵手として関係を深め、相手のことを理解するのがよろしいかと』

「……だが、それで相手のことを理解できるのか？」

クラリッサの話はわかるが、それが成功するかはいまいち不安だ。

『何をおっしゃいますか。隊長が今回織斑教官の弟君に惚れたのも、原因は弟君との戦闘がきっかけのはずですが？』

「！」

そうだ、確かにその通りだ。私が織斑一夏を想うようになったきっかけはそれだった。

力に酔い、暴走していた私を抑え込み、初めて私が本音をさらけ出して話をしたのは、織斑一夏との戦闘があったからだった。

「すまない、クラリッサ。私が浅はかだったようだ」

『初めは皆そのようなものです。お気になさらぬよう』

……そうだな。ならばクラリッサの助言に従い、織斑一夏に好敵手として宣戦を布告しよう。

『好敵手への宣戦布告でしたら、こういった方法がございますが』

クラリッサに聞きながら、私は織斑一夏への宣戦布告の言葉を考えていった。

そして次の日の朝。織斑一夏の目の前で言う。

「私はお前がいないとこの世界に意味を見出せなくなった（憧れと目標を失って気力が出なくなるという意味で）！責任（私を強烈に憧れさせた責任）をとってずっと一緒に居ろ（私の目標で在り続けろと言う意味で）！」

このあと、教官による凄まじい威力のアイアンクローを食らい、そのまま振り回され、壁に何度か叩きつけられ、投げられ、壁に激突して崩れ落ちたところをグリグリと踏みにじられたのは……実に刺激的な体験だった。

刺激的すぎて死ぬかと思ったがな。

## トーナメント、ペアを作ろう

銀髪眼帯黒兎から訳のわからない告白を受けた当日の昼休み。俺と‘シャルル’は大勢の一年女子に囲まれていた。原因は、学年別トーナメントのペア決め。正直やりたくないが、ちー姉さんにやれと言われたなら仕方無い。

「すまないけど俺はシャルルと組む予定だから」

ちなみにこの事は昨日のうちに決定されていて、既に鈴とセシリー、ののちゃんと銀髪眼帯黒兎が組んでいる。

ののちゃんと銀髪眼帯黒兎の仲が悪くない理由は、どうも目標が俺と言うことで意気投合したらしい。あと縦に前方三回宙返り土下座を披露したと聞いた。

俺も土下座されたけど後方三回宙返り土下座だった。器用だな。

「器用ってレベルの話じゃ無いよね!?　物凄いよね!?」

「ちー姉さんなら助走無しで三回宙返りに二回捻りくらいはやってくれる」

「織斑先生ってどこまで凄いのさ!?」

普通だよ普通。凄いけど。

「で、ペアは俺でいいか？　突っ込み上手のシャルル」

「いいけど……突っ込み上手にしてるのは誰さ！」

「シャルル自身だろ。俺が話すとシャルルが突っ込むだけだし」

そうだよな？

「……もうそれで良いよ……」
「そうか」
‘シャルル’はぐったりと体から力を抜いたが、それで良いと言質は取ったし、これからもからかうことにしよう。

食事時にはいつものメンバーが集まって食事をする。のほほんちゃんが入ってきたりそれに便乗していろんな人が入ってきたりしてなかなか騒がしいが、今日はいつものメンバー＋一名だった。
その一名とはすなわち銀髪眼帯黒兎。なぜか一緒に食事をすることになった。雰囲気悪くなったりはないから別に良いけど。

「……そうだ、一夏」
「もきゅもきゅ……ごっきゅん。……なに？」
「……まさか本当に『ごっきゅん』って飲み込むのを見るとは思わなかったわ……まあ、それは良いとして、一夏はここでは作らないの？　睡眠愛好会」
「何それ!?　睡眠愛好会って何!?」

ああ、そう言えば中学では作ってたな、睡眠愛好会。裏で鈴や弾達がなんか色々やってたような気もするけど。

「……じゃあ、作るか。睡眠愛好会」
「会長は一夏で良いとして、副会長はキャリアのあるあたしで良いわね」
「ではわたくしは参謀などを務めさせていただきますわ」
「私は……何をすれば良い？」

「粛清部隊の隊長なんてどう？」
「いや、それは実力的にそれはボーデヴィッヒか鈴が良いだろう」
「篠ノ之。私のことはラウラで構わん……ならば私が隊長で、篠ノ之は副隊長でどうだ？」
「私のことも箒で構わん。……ならばそうしよう」
「良いんじゃない？　じゃあ決定ね」
「なんの話をしてるの！？　睡眠愛好会って何！？　粛清部隊ってなんなの！？　参謀は必要なの！？　なんだかすっごく危ない組織に聞こえるんだけど！？」
「何言ってるの。裏組織のＩＩＩ・ＩＳ学園本部創設の話に決まってるじゃない。支部長の弾に報告しておかなくっちゃ」
「支部まであるの！？　って言うかＩＩＩってなに！？」
今日も‘シャルル’の突っ込みは絶好調だな。一人で突っ込み続けるのは疲れるだろうけど、頑張れ。

「ＩＩＩって言うのはいっぱいいっぱい一夏の略称で、一夏の健やかな眠りを妨げようとする者や独占しようとする馬鹿共を粛清するついでに一夏の可愛らしさを布教するために中学の頃にあたしと親友たちで作り上げた組織のことよ。つい最近ラウラが粛清されたわ」
「あれもそうだったの！？」
それは初耳だな。粛清はあそこまで過激なものだったのか。

「だってラウラ強いから♪」
「強いから♪　じゃないよ！あれはやりすぎだって！」
「どこが？」
「どこがだ？」
「どこがですの？」
「なにがやりすぎだ？」
「ラウラ含めて全員自覚なし！？」

……ほんとに元気だなぁ……ふぁ……。

「どうした一夏。眠いのか？」

「……ん」

うなずくと、ののちゃんが自分の膝をぽんぽんと叩く。

「ほら一夏、こっちにおいで」

当然俺はその誘いに乗って近付いて行き、ののちゃんの膝に頭を乗せる。

すると俺の頭を誰かが撫でるのを感じた。多分これはののちゃんかな。

俺はただゆっくりと意識を沈める。俺のことを撫でる手が少しくすぐったいが、これくらいなら‘シャルル’が寝る前にやっている頬ぷにと似たようなもんだ。問題ない。

「……へぇ？　シャルルってば毎晩一夏のほっぺをぷにぷにしてたんだ？」

「鈴。ＩＳの展開は禁止されているから、私の腰の緋宵を使うと良い」

「……護身用のニードルガンがなんの役に立つのかと思っていましたが……意外とすぐ出番になりましたわね」

「――――斬る」

「え、えぇっ！？」

ののちゃんは俺の頭を撫でているから動けないが、代わりに鈴がその腰の刀を鞘から抜いて構えた。

それと同時にセシリーが袖の中からペン型スプリング式のニードルガンをいくつか取り出して、シャルル’を見据え、銀髪眼帯黒兎がつや消しされた黒のサバイバルナイフを制服の中から引き抜いた。

そして狼狽する、シャルル’に向かって、全員が同時に言う。

「冗談よ」

「「冗談だ」」

「冗談ですわ」

その言葉を聞いて、シャルル’は、力が抜けたらしく床にへたりこんだ。

「心臓が止まっちゃうかと思ったよぉ……」

「人間、心臓が止まった時間が一分以内なら割と助かるらしいぞ？」

「それは知ってるけどさぁ……」

# 再誕、睡眠愛好会（会員募集中）（前書き）

起きたら外伝のラウラ編を投稿します。

# 再誕、睡眠愛好会（会員募集中）

起きたら既に授業が始まっていた。いつの間にか席についていて、いつの間にかノートに黒板と真耶先生の話の内容を書き出していた。どうやら俺は寝たままある程度動くことができるようになったらしい。凄いなこの体。

まあその事は置いておくとして、俺は今現在、放課後が楽しみで仕方無い。

シロに乗るのは楽しい。じゃなかったら乗ってないし、わかり会おうともしてなかっただろうし。

かんちゃんとＩＳの整備をするのも楽しい。シロの事がよくわかってくるし、かんちゃんと話をするのも楽しい。

……でも今はそれ以上に嬉しい事がある。

部活動の発足についてはともかく、愛好会の発足についての書類は面倒なことが少ないし、会員が五人以上居れば認められる。部費は出ないが別にいらない。道具は千の顔を持つ英雄で十分だ。

ちなみに会員は、俺、鈴、ののちゃん、セシリー、‘シャルル’、銀髪眼帯黒兎の六人。会員は随時募集中、ただし盗聴機とか隠しカメラとかを持ってくる相手にはご遠慮願っている。

……部活動に組み込まれそうになったらすぐさま解散して無許可で寮の自室で開いてやる。面倒なことは嫌いだ。

文化祭の出し物とか、中学でやったみたいに放送ジャックして曲流すくらいしか思い付かないしな。

「一番に思い付くのがそれってのもねぇ……」

「しょうがないじゃん。中学の三年間毎年やってたんだから」
「毎年放送ジャックって……なにやってるのさ……」
‘シャルル’が疲れたように突っ込むが、しょうがないじゃん事実だし。
……それにしても、プライベート・チャネルは便利だな。黙ったまま話ができるし。ほんとは校則違反なんだが、俺は準待機モードかつステルスモードにしておけばまずばれないから平気。
欠点はののちゃんが入ってこれないところなんだよな。紅桜（べにざくら）を早く作って送ってもらおうかな？
……ちょっと違う気がするけど。
「ああ、確かに違うな。紅椿だ」
「……何でできるの？」
「姉さんに頼んで作ってもらったんだ。ただ、機体はまだだから通信くらいにしか使えないと聞いているがな」
「……ほんとにそう思う？」
「思わん」
だよな。束姉さんだし、絶対なにかしら仕込んでるよな。武装だけ展開するとかだったら普通にできそうだし。
……それどころか普通に完成してそうだし。
……まあ、何でも良いんだけどね。トーナメントで使うのか？
「使わん。アリーナがもう使えないから練習もできないし、ぶっつけ本番でできると思うほど自惚れてもないのでな」
「そ。まあ、頑張って」

放課後。真耶先生に愛好会発足の書類を提出してどこかを部室がわりに使えないかと話し合いをしてみるが、やっぱり使えるところは無いらしい。
仕方無いので寮の俺の部屋を部室がわりにすることでファイナルアンサー。俺もシャルルもあんまり物を持ってないからスペースはあるし。

ちなみに愛好会だから顧問はいないし部費が学園から出ることもない。大会なんてありゃしないし、あったとしても出たくない。

活動内容は、学園の敷地内で四季折々に合わせた昼寝スポットを探し、健やかな睡眠をとること。猫だけが知っている涼しいところや温かいところ、みたいなものだ。
裏で鈴やののちゃん達がなにかやってるけど、それについては関知していない。勝手にどうぞ、俺は寝るけど。

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

「弾？　久し振り」
『ん？　おお、鈴か！久し振りだなぁ。元気してたか？』
「そばに一夏がいるのに元気じゃないわけないじゃない」
『それもそうだな』

弾とあたし、久し振りに話して笑い合う。そこには一年離れていた

ことによるぎこちなさなんてまるでない。これこそ同志って言うものよね。

『……で？　もしかしてＩＳ学園にもＩＩＩを作ったとかそんな話か？』

「話が早いわね。頭のいい味方は一夏の次に好きよ？」

『何回も聞いたから知ってるよ』

本当に弾は察しがいい。ここまで来たら最後まで当てられないかしら？

『それで一夏の居るそっちを本部にしたいって話だったら構わないぞ。一夏からお前が日本に戻ってきてるのは聞いてたし』

「本当に察しがいいわね。ありがと」

『そう思うんだったら写真送れよー。コピーして布教するから』

「それなんだけど、一夏がＩＳ動かせるようになって有名になっちゃったから、ごくごく一部の身内だけにしてくれる？」

『……ああ、なるほど。わかった』

弾はあれで頭がいい。今もたったこれだけでなぜ隠すのかを理解してくれた。

まったく。ありがたい話ね。

「それじゃあ、蘭にも‘よろしく’言っておいて」

『おう。またな』

電話が切れて、ツー、ツー、という電子音が聞こえる。

……弾も蘭も、元気でやってるみたいね。よかったわ。

……やっぱり家族は仲良くなくっちゃね。

# 外伝、予知夢？　ラウラ編

ラルちゃんに熱烈な告白を受けてからおよそ一週間が過ぎた日の夜。
俺はつい最近も見た薄ぼんやりした夢の中に居た。
……まあ、今までの事を考えると、十中八九ラルちゃんなんだが、もしかしたらかんちゃんということや束姉さんと言うことも有り得る。誰が来ても驚かないように、覚悟だけはしておこう。

そう思いながらぼんやりした霧のカーテンをぬけると、一夏とラルちゃんが一つのベッドの上で仲良く眠っていた。
……確か、ラルちゃんは寝るときには服を着ないんだったっけ。布団を捲る前に一応パジャマ（昔、ちー姉さんが使っていた物と同型）を用意しておこうか。ついでに一夏が寝巻きに使っているのとおんなじシャツも。千の顔を持つ英雄で。
……便利だなぁ……。

寝ているうちにとりあえず黒い兎耳を二人に装着。残念ながらこれは起きないと外れないぜ？
大丈夫、俺もつけるから恥ずかしくない。赤信号をみんなで渡ればなんとやらってやつ。俺の場合は積載量オーバーした十トントラックが時速百二十キロでぶつかってきても大丈夫だけど。

何て考えているうちに、一夏がもぞもぞと動いてラルちゃんの事を抱き締めたじゃないか。これは多分もうすぐ起きるな。

ぱちっ、と目を開いた所で、一夏の事を上から覗き込んでいた俺と一夏の目が合う。

「おはよう、パパ。布団を捲るんだったら上の方から少しずつ捲っていった方がいいよ」
「……夢？」
「そ。いつものね。もう一人は誰だかわかる？」
一夏はここで少し考え込んで――――ここで考え込めるあたり一夏は本当に鈍いよな――――、答えた。
「……ラウラ……か？」
……ラウラ……？
……ああ、そうそう、そういう名前だったな。そう言えば。
「そうだよ？　パパがいま抱き締めてるのがそう」
「どれど……れっ！？」
一夏は俺の忠告を忘れたらしく、なんでもないかのようにさっさと掛け布団をめくりあげてしまった。俺はすぐさま目を閉じたけど。
「……パパのえっち」
「ち、違うぞ！これはラウラがどんな状況かわからなかったからであってだな！」
「……抱き締めてるときに色んなところを触ったのに？」
かぁぁっ……と赤くなっていく一夏。ラルちゃんはまだ眠っているようだが、布団は剥がれているし一夏の声は大きいしで、恐らくすぐ起きるだろう。
「……えっち」

「ぐはっ！？」

止めとして言ってみたのだが、想像以上にダメージは大きかったらしい。

「……む……何事だ……？」

ちょうどここでラルちゃんが起きた。寝てるときにも眼帯は外さない主義らしいラルちゃんは、露になっている右目だけを眠たげに擦っているのだろう。ただし全裸で。

微睡みタイムを放棄するように何度か目を擦ったラルちゃんは、俺の事を見つけて急激に気配を刺々しい物に変えた。

「あー待て待てラウラ！こいつは未来から大天才の束さんの手で送り込まれてきた俺の子供なんだ！そんな睨み付けるんじゃない！！」

一夏が言うと、まるで銃口を向けられているかのような刺々しい気配が少し和らいだ。怖い怖い。

「……今の言葉は本当か？」

「あ……ああ、本当のはずだ」

「誰との子供かは教えられないけどね」

教えたら本気でこっちの未来が激変しかねないし。

だが、ラルちゃんはえっへんと胸を張って言い切った。

「問題ない。私の嫁の子供なら私の子だろう」

……自信満々だなぁ……ある意味では憧れるよ。少しだけ。

……でもさ。

「だとしたら、子供の前で全裸ってのはまずいんじゃない？」

教育に悪いだろうし。目はずっと瞑ったままだから俺には関係ないけど。

「……ここにちょうど寝巻きに使えそうなパパのシャツがあります」

「私に渡せ」

「ちょ、おいぃぃっ!?　何やってんだよ!?」

……何って、見ればわかると思うけどね。

「寝る準備だよ？　パパ達は二度寝になっちゃうけど」

まあ、二度寝はいいものだ。個人的には特に微睡みからの二度寝は最高だと思う。

ラルちゃんの準備（一夏のシャツを着る）も終わったし、さっさと寝ようぜ？

ｓｉｄｅ　一夏Ａｎｏｔｈｅｒ

……俺似の子供にせがまれて二度寝をすることになったんだが、どうやらここはまだ夢だったらしい。時計が動いてなかったし。

だから寝ることについての不満は無いんだが……。

……どうしてこうなった……。

右を見るとラウラの顔。かなり近くで、いつもの凛々しい顔とは全然違う表情をしている。
それはいい。ちょっと前までは騒いでただろうけど、いい。

問題はラウラが俺のシャツしか着てないのにぴったりとくっついてくることだ。ラウラの兎耳が俺の兎耳にちょっかいをかけてくるとかそんなことよりも。さすがにこれはまずい。

いつもだったら間に入ってくれる息子（もう断言してしまおう）は、今回に限って俺の左腕を全身で抱き締めて眠っている。
可愛いんだが、そして嬉しいんだが嬉しくない。

ラウラの顔がすぐ近くにあると言う状況は、どうしてもあのキス事件を思い出してしまうから。

……あーやばい、落ち着け俺。確か、こういう時には素数を数えるんだ。

……羊が2匹、羊が3匹、羊が5匹、羊が7匹、羊が11匹、羊が13匹、羊が17匹、羊が23匹、羊が29匹、羊が31匹、羊が37匹、羊が41匹、羊が43匹、羊が47匹、羊が53匹、羊が……。

……か～……。

## トーナメント、その前に調整だ

トーナメント前の最後のシロの調整。最後なのでとりあえず気合いを入れてやってみた。

「……荷電粒子砲も、ミサイルもないみたいだけど……」

「シロが受け入れてくれないからちょっと反則臭い方法でやることにしたから安心してくれ」

千の顔を持つ英雄でリアル『空が3でミサイルが7』をやってやるつもりだし。

もちろんミサイルだけじゃなくて荷電粒子砲も実弾兵器も使うけど。

荷電粒子砲は弾をカートリッジ式にしてそのカートリッジを千の顔を持つ英雄で交換してやれば銃身が焼き付きを起こすまでいける。

もちろんシロの高速機動を殺す気は無いけどな。ミサイルの弾幕をすり抜けてゼロ距離から荷電粒子砲をぶち込んでやる。

……悪役のやることだよなそれ。

普通に考えたらある意味じゃあ根比べなんだけど。

具体的にはミサイルの段幕に耐えきれたら後は武装のないこっちを一方的にボコるだけ。耐えきれなかったらアウト。ゲームオーバーだ。

まあ、俺本体がミサイルの隙間を抜けて一発入れていくから、実際はもっと難易度高いんだろうけど。

ミサイルが（切れないけど）切れたら雪片弐型と荷電粒子砲で、荷電粒子砲が（切れないけど）切れたら左右の衝撃砲と雪片弐型で戦

える。
空間固定でコア抜きはしない。それやったら乗ってるやつが落ちて地面に叩きつけられたザクロかトマトみたいになるからな。楯にはするけど。

「……頑張って」

かんちゃんは、いつもの無表情をちょっと崩して心配そうな顔をしている。

「大丈夫だよ。シロもかなり具合良いみたいだし、優勝も狙えるかも」
「……そう」
「そう。データを楽しみにしてるといいよ」

データ取りの他にはあんまり意味ないし。遠距離武器とか千の顔を持つ英雄で作った剣をぶん投げてランブルデトネイターすればいいよ。もしくは相手に一瞬触ってからランブルデトネイターで直接爆破してやればいいよ。
ミサイルはミサイルで使い道があるから別にいいけど。

「とりあえず、いい時間だし昼食べにいかない？　頭使うとお腹空くでしょ」
「……わかった……行く」
よっし、ご飯だご飯。

うどんのかき揚げはしっとり派な俺。かんちゃんはたっぷり全身浴派だそうだ。

どう違うかというと、先に全部沈めちゃうのがかんちゃんで、食べるときにちょっとずつ汁につけて食べるのが俺。

先につけちゃうとサクサクが全部なくなるから、その時その時につけてサクサクもしっとりも味わいたい欲張りな方におすすめ。
途中からサクサク派に変えることも全身浴派にすることも可能だ。

……最後の方は強制でしっとり派になるけど。

「ちゅるるるる……もきゅもきゅもきゅ」
「……もきゅもきゅ……ごっくん」

……ＩＳ学園の学食って美味いよなぁ……ちょっと量が少ないのが珠に傷だけど、その辺りは男に食べさせることを想定してないだろうから仕方無い。
その分お代わりすれば良いし、問題は無いかな？

ちなみに周りは上級生や同級生に囲まれている。騒ごうとしたところで『食事中は静かに』ってことを言ったから静かだけど。

あと、その時に『めっ！』てやってみたら全体の五割くらいが鼻血を噴き出して倒れ、倒れなかった奴の七割くらいが俺をお持ち帰ろうとしてどこからか現れたちー姉さんにアイアンクロー＋震動で気絶させられた。残りはなんだかにこにこしながら俺を見ているような気がする（ちー姉さん含む）。

「ちゅるるる～～……もちゅもちゅ……ごっきゅん」
「……こっち、向いて」
「？」

かんちゃんに言われて振り向くと、口の端に付いていたらしいかき揚げのかけらを指で摘まみ取られた。

「……はい、もういいよ」

「ありがと、かんちゃん」

ちなみにとってもらったかき揚げのかけらは俺が食べた。指にぱくりと食いついた時になんだか物凄い負の気配があったような気もしたけど、中学の頃にはよくあったから気にしない。

中学の時は鈴に食べさせてもらった後に鈴が俺の口の端に付いていた酢豚のたれを指でとってぺろりと舐めた時とかにあったよな。

ぶっちゃけるといつものことだ。

「……もう少し……気を付けないとだめ」

「むく？」

「……はぁ……なんでもない」

そ。ならいいや。

# 一回戦、その直前

来賓に色々と来ているらしいが、正直なんでもいい。俺には関係ないことだし、邪魔さえしなければ。

「どうでもいいって言うけどね……あの人達の目的の一つには、一夏を見ることも含まれてるんだよ？」

「見られるのには慣れてるから別に平気。邪魔さえされなければ」

「……一夏らしいなぁ……」

俺だからな。

……さて、確か原作では初戦が銀髪眼帯黒兎ことラルちゃんとののちゃんコンビだったんだが、こっちではどうなのかね？　鈴とセシリーも居るし、原作なんて無かったんだ！くらいの勢いだし。

セシリーはリベンジに燃えているようだし、鈴は再戦を楽しみにしているみたいだ。ののちゃんとは初勝負だし、一応ラルちゃん自身とも初勝負。

それなりに気合い入れてやらなくちゃ負けるかもな。今のセシリーは強そうだし。

かんちゃんと約束したし、頑張らないとなぁ。面倒だけど。

「……あと、僕のことをシャルルって呼ぶのは辞めてくれないかな？」

「じゃあ何て呼ぶ？　普通に名前で呼ぼうとすると、多分酷い間違いがあると思うけど」

シャアザク・デュケーンとか。

……俺の頭はどうなってるんだろうな。かなり本気で不思議だよ。

「……じゃあ、一夏が決めて」
「シャルで」
「……安直だなぁ……」
「安直なのは嫌？　じゃあ【シャラポワンヌ】とか【草臥れシャーさん】とかが良いのか？」
「い、いやシャルがいいな！シャルっていうのがいいな！」
「そっか。じゃあシャルで」

‘シャルル’改めシャルは、なんだかかなり本気で胸を撫で下ろしている。何でだろうね？

「一夏のせいかな」
「そうなのか？」
「そうだよ一夏。だからちょっと癒しを提供してほしいな」

そう言ってシャルはベンチに座り、膝をポンポンと叩いた。
……寝ろと？　シャルの膝枕で寝ろと？

まあ、良いけどな。

……すか～……。

起きたら相手が決まっていた。ラルちゃんとののちゃんだった。こういうところは原作通りなんだな。
まあ、ラルちゃんのあの変型機能（不許可な上違法）はネタが割れて使用不可になっているし、鈴やセシリーも参加してるし、ののち

ゃんが実は奇妙なほどに強いし……外れてるところは多々あるんだけど。
一番のイレギュラー（転生者、チート持ち、魔改造ＩＳ持ち）がなに言ってんのかとも思うけど、面倒だし気にしないことにした。
……もうちょっとで始まりかぁ……あー……棄権したい。

「開始直前にいったいどんな夢を見てるのさ!?」
「俺は大抵寝てるぞ？　最近起きたのはラルちゃんにお仕置きした時とゴーレムとバトった時とセシリーをボコった時くらい」
「結構起きてる!?」
「でもその前にはっきり起きたのは実は中学の学園祭の睡眠愛好会特別バンド±1の時以来だったり」
マイナス1＝鈴、プラス1＝蘭ちゃんで、それなりに好評だった。
……まあ、やるか。仕方無い。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　箒

……初戦の相手が一夏か……勝てる気が欠片もしないな。
勝てたとしても一夏の棄権か面倒だったから大会そのものをサボったかのどちらかだろう。

「ラウラ。一夏に勝てると思うか？」
「無茶を言うな」

ついに一夏に勝つこと自体が『無茶』と言われるようになったか。
理解はできるが。

「まあ、それでもやるしかなかろう。一夏は私の目標なのだから、戦えると言うのなら喜ばなければな」
「ほう？　なかなか良い目をするな。期待させてもらうとしよう」
「専用機を持たない私にいったい何を求めているのやら……期待に応える努力はするがな」
「それでいい」

いつの間にか仲良くなったラウラと、軽く拳をぶつけ合う。よく一夏と鈴がやっているのを見るこれは、なかなか面白い。

「……では、行くとするか。箒」
「そうだな。ラウラ」

私達は飛ぶ。一夏の居るだろうアリーナに向けて。

……一夏。私はお前に近付けているか？

ほんの少しだけでも、昔よりお前の近くにいるか？

私はお前に教えてもらった強さを追い求めて来たから、ここまでこれたんだ。

だから、お前が私に教えた強さが、お前にどこまで通用するかを確かめさせてくれ！

## 一回戦、その直前（後書き）

このあとしばらくバトルが続きます。途中で和める外伝をいれるつもりですが。

## 一回戦、俺・シャルｖｓラルちゃん・ののちゃん

試合開始寸前に、俺はののちゃんにプライベート・チャネルを繋ぐ。

「ののちゃん」

「どうした、一夏。棄権するのか？」

できればしたいんだけどね。面倒臭いし。

「いやいや、先に謝っておこうと思ってさ……ごめんね？」

「……凄まじく嫌な予感がするのだが」

きっとそれ正解だよ。うん。

……ああ、あと三……二……一……

「シャル。下がるぞ」

「大丈夫！わかってるよっ！」

開始直後に俺とシャルは一気に後ろ向きに瞬時加速をして下がり、俺は千の顔を持つ英雄を発動する。

使うものは大威力拡散荷電粒子砲と、武装で錬金な世界にあったミサイルポッドの武装錬金。

荷電粒子砲の方には名前はないが、ミサイルポッドには名前がある。

その名前は――

「ジェノサイドサーカス！」

特性は‘無限弾装’。数は八。とりあえず、リアルで『空が三でミサイルが七』をやってみた。

「……」
「……」

その無数の弾頭を向けられているののちゃんとラルちゃんは、なんだか物凄く顔をひきつらせていた。

「……」
「……」
「……」

そして、隣に居るシャルと観客席に居る鈴とセシリーの顔も盛大にひきつっているように見える。

「秒間百五十発×2のミサイルが、三十秒ほど続くから……頑張って避けてね♪」
「「「無茶苦茶言うなっ！！」」」
ラルちゃん、ののちゃん、シャルに口を揃えて言われた。悲しいなぁ……悲しすぎるからとりあえず発射しよう。

「発射ァ！」

号令と共にミサイルの第一陣が発射され、ラルちゃんとののちゃんに向かって飛んでいく。

「頑張ってね？」

「「死ぬわっ！」」

……そう返されたんだが、結構なんとかなるらしい。

ラルちゃんは予備の部品で組み上げたばかりのシュヴァルツェア・レーゲンを。ののちゃんはいつも乗っていたらしい打鉄を使っているが、二人ともに妙に切れが良い。

ラルちゃんが大口径レールカノンとワイヤーブレード、そしてＡＩＣを駆使して自分に当たるミサイルを落としているのはわかる。けども、ののちゃんが打鉄の近接ブレードでミサイルの横っ腹を高速で飛び回りながら全部切り捨てているのを見ると、ちょっと呆れる。

「……もう十五秒過ぎるけど……凄いね、あの二人」

「凄いよな。流石ののちゃんだ……さてと。俺も行くかね」

カートリッジ式の荷電粒子砲を持って、ミサイルの雨が降り注ぐ中に飛び込む。まず狙うのはののちゃんだ。

ほとんど無いミサイルの隙間をすり抜けてののちゃんの背中に回り込む。

「……見えているぞ！一夏ぁっ！」

するとそれに気付いたののちゃんに斬りかかられた。ミサイルの影を伝ってきたし、見えないようにしたって言うのに随分と鋭いことだ。

「なに、肉眼では見えなくとも気配の目では見えている」
「そりゃすごいな」
そう言いながらののちゃんが切り落とす寸前のミサイルに重なるようにののちゃんを撃つ。
「見えていると……言っているだろうがっ！」
そう言ってののちゃんは荷電粒子砲の射撃とミサイルの誘爆まで避けきって見せた。
……が、すべてを見通している訳じゃない。
ズドンッ！といきなりののちゃんの後ろに爆風と衝撃が起き、ののちゃんのバランスと姿勢を崩させた。
「一夏ばっかり見て、僕を忘れちゃダメだよ」
「くっ……デュノアかっ！」
今までちょこちょこラルちゃんの方にばれないようにちょっかいを出していたシャルが、ののちゃんの背後にグレネードを投げつけたのがさっきの爆発の原因だ。
バランスと姿勢を崩されたののちゃんはミサイルを懸命に避けようとしていたが、流石に無理があったらしく直撃を十数発食らった辺りでシールドエネルギーが0になったようで、一応残っていた機動用のエネルギーを使ってゆっくりと降りていった。
「……次は、負けんぞ」

「あるかどうかもわからないけどね」

短い会話を終わらせて、俺はののちゃんに向かっていた分のミサイルにまで襲われているラルちゃんに意識を向けた。

シャルはシャルでアサルトライフルを使ってうまいことラルちゃんにダメージを与えている。

なんと、ＡＩＣの張られている場所をミサイルの停止位置から考えて、無いところに撃ち込みつつ誘爆でじりじりと減らしているらしい。器用だな。

……ののちゃんがミサイルの雨に倒れた時間が、開始から２６秒程度。残りのミサイルはまだまだあるが、三十秒と言ったし一秒分をののちゃんの分からとっておこう。

……いやまあ、実際にはそんなこと必要ないんだけど。

「……あ、ミサイル切れた」

と、わざとギリギリ聞こえるくらいの声で言ってみる。するとそれに釣られたのかラルちゃんが元気になった。

……ここで『嘘だ阿呆が』とか言ってミサイル出したらかなり絶望感溢れる表情が見られるんだろうな。

……とか思ったりしたが、俺は優しいからそんなことはまだしない。

……まだ、しない。

「……いつか……やるの？」

「やるけどどうかした？」

「……ううん。なんでもない」

あっそ。

それじゃあ次行こうか。

今度は背中から大量にガトリングガン系統の銃を適当に五十ほど用意してみた。弾の口径は八十八ミリで、一発一発がライフル弾のように回転している。

「……おい、冗談だろう？」

酷く青ざめてひきつった笑顔を浮かべるラルちゃんに、俺も笑顔を返す。

「大丈夫。痛いのはちょっとだけだから」

そして俺は、トリガーを引いた。

## 最早只の苛め、何を今さら

ガトリングガンのトリガーを引くと、弾が飛び出す。当たり前のことだ。
そしてそのガトリングガンでばらまかれた弾は、殆どがラルちゃんのＡＩＣによる停止結界で止められてしまった。

「シャル」
「うん。わかってるよ一夏」

その隙にシャルがＡＩＣを避けてマシンガンでラルちゃんに向けて銃弾をばらまく。
ラルちゃんはシャルのばらまいている弾を避けながらもＡＩＣを辞めようとはしない。まあ確かに一分に千五百発の三十倍で八十八ミリ弾をぶちこまれたら十秒持たないだろうしな。

ちなみに反動は全部相殺されている。そのかわりに全然動けないけど。ＰＩＣが高性能で助かった。

「……ねえ一夏。そのガトリングってどこで売ってるの？」
「自作って言ったらどうする？」
「……冗談でしょ？」
「冗談だといいね」

そう言って俺が笑うと、シャルはなぜか複雑そうな表情をする。

……んー。そろそろラルちゃんのエネルギーが切れてもおかしくないんだけどな？

ＡＩＣって要するにＰＩＣと同じで、相殺する物の運動エネルギーが大きければ大きいほどエネルギー食うはずなんだけど。
シールドエネルギーとは別系統だから強制解除とかにはならないだろうけど、まともには動けなくなるはずだし。

……さてと。それじゃあ荷電粒子砲でも撃ち込むとするかね。
ガトリングの反動を消すのも面倒になってきたし、これなら止められないだろ。

ゆっくりと狙いをつけて、引き金を引く。

ＡＩＣの壁をすり抜けて、光線がラルちゃんを貫いた。

「……そう言えば、そんなのもあったね」
「ガトリングの印象が強くて忘れるだろ？」

忘れてくれれば隙をつけるしな。こういうド派手な武器の裏に、効果の高い地味な武器を隠しとくのが好きなんだよ。

そしてアリーナに試合終了のブザーが鳴り響く。

『試合終了。勝者――織斑一夏、シャルル・デュノアチーム』

……ふぅ。やっぱり強いやつの相手はめんどくさいわ。さっさと寝たい。帰りたい。ちー姉さんに撫でてもらいながら寝たい。

「あ、ちっちゃくなった……なんで一夏の身長は伸び縮みするのさ！？」

今さらすぎる疑問だな。確かに見せるのは二回目で、一回目はそん

なことを気にできる状況じゃなかったし、仕方無いか。

……ふぁ……。

……すか～……

ｓｉｄｅ　シャルロット・デュノア

一夏がさっさと帰っちゃったあと、回りを見てみると見学していた大体の人がひきつったような顔をしていた。うん、気持ちはわかるよ？　だって多分僕も似たような顔をしてると思うから。

一夏の言葉を信じると、秒間１５０×２×３０秒で９０００発のミサイルと、１５００×３６／６０（分）×３０門で２７０００発の銃弾がこの試合の中で飛んだことになる。当然これは一夏が撃った弾の合計で、僕やラウラが撃った弾は別計算だ。

……どこにそんな容量があったのかとか、昨日見た時にはそんなの無かったよねとか、色々と言いたいことはあるけれど、やっぱりやったのが一夏だと思うとなんでか納得できちゃうのは……どうしてかな？

「……ふぅ。やはりまだ勝てんか……手加減までして貰ったと言うのに、情けないことだ」

「どこに手加減の要素があったのさ！？」

僕が言うと、箒はきょとんとした顔で、当たり前のことを当たり前

に説明するかのように言った。

「雪片も零落白夜も使っていないだろう？　それに、遠距離からの狙撃で直撃させられる隙などいくらでもあった。そこを突かないと言うだけで、十分すぎる手加減だろうが」

……そんな隙なんてあったっけ……？

「ああ、あった。私にも、ラウラにも」

へぇ……。

……あれ？　僕って今声出したっけ？

「一夏に付き合った時間がある程度長くなれば、何となくで読むことができるようになる」

「読心術を使えて普通ってどんな普通さそれはっ！？」

「普通ではないが、常識だ。シャルルも覚えておくといい」

「そんな常識はやだよ！？」

「諦めろ、デュノア」

「あ、シャルルでいいよ。このトーナメントが終わったら名前変わるけど」

「そうか」

ラウラに諦めろって言われちゃったので、受け入れることにした。

でも、きっとこの突っ込み癖は直らないんだろうなぁ……と思う今日この頃。

「……さて。そろそろ移動しよう。次の試合の邪魔になってしまう」

「そうだね。行こうか」

「うむ」

僕達は一夏の消えていった方向に向かって飛ぶ。多分一夏はピットのベンチで寝ちゃってると思うし、着替えても大丈夫だよね？

「私は相手が一夏なら全く問題ないが」

「私もだな」

「そこは恥じらいを持とうよ！？」

## 一回戦終了、二回戦までは暇

ラルちゃんとののちゃんのコンビをなんとか倒し、俺はのんびりと寝ることにした。

……したんだが、その前にやることがある。それは、今回の戦闘のデータをかんちゃんに見せないといけないと言うことだ。

ミサイルと荷電粒子砲は、それなりに相性が良いらしい。荷電粒子砲がスナイパーライフルに変わっても同じように使えると思うけど、やっぱり複数のミサイルはコンビ戦等の多対多の勝負に有利だ。

「……でも、打鉄弐式には……あんなにミサイルはない……」

「波状攻撃って意味では同じだと思うけど？」

特に、ミサイルに気をとらせて荷電粒子砲で遠距離射撃とか、そう言った戦い方だったらある程度少なくないと誤爆するし。

「あと、マルチ・ロックオン・システムの方はどう？　無理矢理やるんだったら４８個同時に通常のロックオン・システムを使えばできなくはないと思うけど」

「……それは……無駄が多すぎる」

だろうね。だから『無理矢理』って言ったわけだし。

でも、多分原理的には似たようなものだよな。４８発のミサイルをそれぞれ独立させて狙うってのは。

「……織斑君は……どうやっていたの……？」

かんちゃんはそう聞いてきた。どうって言ってもあれはぶっちゃけるとなんとなくなんだが……。

「……簡単に言うと……気合い？　射撃用のシステム搭載してないし」

「そんな機体であんなに弾幕を張ったの!?」

おぉう、びっくりした。かんちゃんが大声を出す所なんて初めて見た。

「そうたよ？　ハイパーセンサーもあって動体視力は良いし、弾幕張るタイプの武器だからある程度狙えば当たるしね」

「……だから、弾幕なの？」

「そうだよ？　荷電粒子砲の時は近付いて撃つか、相手の動きが止まったところでゆっくり狙って撃ってたし」

「……そう……近付けば……狙わなくっても当たる……」

まあ、乱暴に言えばその通りだな。

ついでに言うと、近くなれば空気中を進むことによる威力の減衰もほとんど無いから威力は高いままだしね。

「それじゃあ、俺は運動した分寝なくちゃいけないから、この辺りで失礼するよ」

「……待って」

ん？　なんだ？

かんちゃんは俺の方を見ると、無言で腿を叩いた。

「……そんなに眠いんだったら……ここで寝ていけばいい」

そう言っているかんちゃんの頬は真っ赤だったが、俺はお言葉に甘えることにした。

……布団は千の顔を持つ英雄で出せるし、ベッドはいらない。枕はかんちゃんの膝枕。考えようによってはかなり贅沢な気がする。

そう考えながらも俺は布団を用意して、かんちゃんの膝枕に頭をのせる。

「おやすみ、かんちゃん」

「……おやすみ……一夏」

……初めて名前を呼んでもらった気がする。嬉しいね。

そう思いながら、俺はゆっくりと意識を深く落としていった。

……すか～……。

ｓｉｄｅ　更識　簪

織斑君は、私の膝の上で寝息をたてている。五月蝿くてもまず起きないとは言っていたけれど、私を含めたこの場に居る全員は、できる限り静かに作業を続けている。

「……織斑君の寝顔……可愛いね」（小声）

「だよねだよねっ！」（小声）

「……撫でても大丈夫かなぁ……嫌われちゃったりしないかなぁ……」（小声）

……それは大丈夫だと思う……だって織斑君は……撫でられるのが大好きだから……。

今も私が撫でてあげると、ほにゃっという笑顔を浮かべて私の手に髪を擦り付けている姿を見ながら、そう思う。

……だけど、教えてあげない。この時だけは、織斑君は……一夏は、私だけのもの。

そんな独占欲を持ちながら、私は片手で打鉄弐式のデータを弄り、片手で一夏の頭を撫でていた。

「……んぅ……はむ……」

かぷっ、と一夏に私の指が食べられた。そんなに強くは噛んでないみたいだけど……なんだかすっごいクルものがある。

はみはみと一夏は私の指を甘噛みし、その度になんだかぞくぞくしてくる。

このままじゃあいけないと思って一夏の唇から指を抜く。結構簡単に抜けたけど、何でかまだぞくぞくする。

指を見てみると、一夏ので私の指が濡れて――

……この指を舐めたら間接キスになるんじゃ……。

そんな邪な思いがよぎったけれど、意識してそれを頭から追い出す。

……打鉄弐式の方に集中しないと……。

そう思って画面を見てみると、そこには一面に『一夏と間接キス』の文字が踊っていた。

……空間投影型のディスプレイじゃなくって、ほんとによかった。

私は画面に映った文字を、いらないところだけ纏めて消した。

## 二回戦、原作何それ美味しいの？

確か原作では一回戦で中断することになったはずなんだけども……
まあ、続くんだったらそれは仕方ない。面倒だけど。

「一夏。油断はダメだよ」
「わかってるよ。油断せずミサイル弾幕を」
「弾切れ起こしたって言ってなかった！？」
「なんか増えてた」
「何でさ！？」
「知らない。何で俺に聞くんだよ」
「一夏のＩＳだからだよ！？」
「じゃあシャルは自分のＩＳの部品の一つに含まれる合金の種類と割合と元々の金属の原産地までわかってるの？」
「僕の聞いたことってそんなに難しいこと！？」
「幽霊が存在しない確たる証拠を見付けるのと同じくらい難しい」

ちなみに、存在することを証明するにはそれを見つければ良いが、存在しない証明は存在する可能性を全て否定しなければならないのでまず無理だそうだ。

「ああ、ちなみに増えてたってのは冗談だから」
「……なんだ、冗談だったの？　よかったぁ……」
「本当は最初から切れてなかった」
「あれだけ撃っといてまだ残ってるの！？」

ののちゃんに撃つはずだった分が少しね。それがなくても作れば普通にあるんだけど。

それ以前にジェノサイドサーカスの武装錬金としての特性は無限弾装だから切れないんだけど。

「半ば冗談だよ」
「もう半分は！？　もう半分は本気なの！？」
「まあ、どちらにしろミサイルは使わないけどね。もう残ってないし」
「結局残ってないんだ！？」

シャルの突っ込みが今日も冴え渡る。良いなぁ……。

「……僕もう疲れたよ……」
「諦めるといい」

そう言うとシャルはぐったりとした表情で俺を見てから、無言でＩＳを展開してカタパルトに向かった。
……拗ねたのか？

「拗ねてないよ」
「拗ねてるように見える」
「拗ねてないってば」

まあ、本人がそう言うなら構わないがね。

……それじゃあ、始めようかね。

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

二回戦の相手は、名前も知らないだれか。使っている機体はどちらも訓練機のラファール・リヴァイヴで、あんまり変な武器も持ってはいないみたい。

だけど、油断はできない。さっき箒が見せてくれたように、訓練機だって使い方次第であそこまで上れるんだから。

「セシリア。油断は禁物よ」

「ええ。わかっていますわ」

あたし達の視線はたぶん鋭い。相手の二人にはちょっと悪い気がしなくもないけど、本気で行くことにする。

ただ、あたしは我流の無理矢理な衝撃砲の曲げ撃ちを、セシリアは偏向射撃を封印中。これは一夏と戦うまではとっておくつもりだから。

「それじゃあいつもの通り、あたしが前衛でセシリアは後衛ね」

「わかりましたわ。落とされないようにお気をつけて」

「誰に言ってるのよ。あたしは凰鈴音、中国の代表候補よ？　一夏にはまだちょっと勝てる気がしないけどね」

くすくすと笑い合い、それから武器を展開する。

「確かに、わたくしも一夏さんにはまだ勝てる気がしませんわね」

それでも、あたし達は目標に向かって進むことしかできないんだけどね。

双天牙月を構え、相手に視線を向ける。少し前に輝を入れられた双

天牙月は新しいものに変えられているため、早々折れることもないだろう。

試合開始の合図まで、あと六秒。

試合開始直後にあたしは瞬時加速で接近する。一秒足らずで隣接距離まで入り込んだあたしは、双天牙月の先端をリヴァイヴの腹に直撃させたまま更に力を込める。

もう一人の方には口径を広げた拡散型の衝撃砲を一発。シールドエネルギーは大して削れはしないけど……

「隙ありですわ」

「えっ、キャアァァァッ！？」

セシリアのビットから出たレーザーがもう一人のリヴァイヴを貫いて、ダメージを与えた。あれ直撃すると割とダメージ大きいのよねぇ……。

そんなことを考えながら、あたしはアリーナの遮断シールドにリヴァイヴを叩き付ける。シールドエネルギー同士が干渉して、リヴァイヴのシールドがガリガリ削られているのがわかる。

もちろんここでなにもしないあたしじゃない。小さく衝撃砲を展開して、武器を展開しようとした両手を撃ち抜く。

もちろんそれでシールドエネルギーの消費は速まるし、そろそろこっちのリヴァイヴのシールドエネルギーが切れても

双天牙月を持ったまま、急速上昇。後ろから相手のパートナーの撃

った弾が飛んできた。危ないわね。

「な……なんで避けれるのよ！？」

「勘よ。勘」

なんて当たり前の事を聞くのかしらね？

「……鈴さん。当たり前ではなくってよ？」

「はいはい、つまらない冗談なんて言ってないで、続きしましょ」

なんでわざわざそんな下らない嘘を言うのかしらね？　誰が聞いても嘘だってわかるじゃないの。

「……はぁ……」

「？　なによ溜め息なんてついて？」

「……なんでもありませんわ」

……なんとなく気に食わないけど……セシリアがなんでもないって言うならなんでもないんでしょ。

## 決戦、俺・シャルｖｓ鈴・セシリー

色々あって、一年の中ではこのどれかの組が優勝するだろうと言われている組が三つあった。
始めに、俺とシャルのペア。
次に、ののちゃんとラルちゃんのペア。
最後に、鈴とセシリーのペア。

そのうち、ののちゃんとラルちゃんのペアは一回戦で俺達に敗退したため除かれた。
それでは、次はどちらがこの勝負から消えるのだろうか。

「ふふふふ……一夏っ！……私達が死なない程度に、手加減してね♪」
「元々殺す気は無いっての」
「なんで普通に殺す殺さないの話になってるのさ!?　これ試合だからね!?」
「……？　何を言ってらっしゃるの？　試合では『事故』と言うものがあるんですのよ？」
「事故は狙って起こすものじゃないからね!?」
「そんなものは当然ですわよ？　全く、シャルルさんはいったい何を言っているのか……」
「え、悪いの僕なの!?　僕なにか変なこと言った!?」

俺と鈴がいつものかけあいをしていると、シャルとセシリーが二人らしいかけあいを初めた。仲が良いなぁ。
まあ、二人が強くなったのは知ってるから……手加減はしても、侮ることはしない。負けちゃうからね。

特にセシリーの偏向射撃。あれは流石に完全に避けきるのは難しいしね。
例えば、シャルと俺を重ねて作った死角からの攻撃に鈴からの攻撃を合わせ、更に偏向射撃で狙い撃たれると避けにくい。
シロは攻撃特化＋極限速度特化だから、防御は固くないんだよね。
弱点は超々広域殲滅攻撃。もしくは束姉さんによる搦め手。

……こう考えると、結構弱点多いのかもね。

……まあ、いいか。

『とりあえず、シャルは鈴の方をお願い。鈴の衝撃砲は速射で狙いを散らしたりすることができるから気を付けて。あと、壁に押し付けられたらラルちゃんを落とした超速連射が来るから』
『……あれかぁ……うん、頑張ってみるよ。一夏も気を付けてね！』
『当然。死にたくないからね』

……さてと。頑張ってみるかね。

開始のブザーが鳴り響き、四機のＩＳが動き始める。
俺はセシリーに向かい、セシリーは後方に飛びすさり、鈴はこちらに向かい、シャルが鈴に向かって飛ぶ。

「あら？　あたしの相手はシャルルなの？」
「うん、そうだよ。一夏じゃなくってごめんね？」
「別にいいわよ……あたしがあんたを落とせば良いだけだしねぇっ！」

どうやら向こうは向こうで話が付いたらしく、急激に戦場の空気が辺りを包み込む。

「あら？　あの時とは違って今度は一夏様からダンスのお誘いですか？」

「まあな。鈴と一緒だとかなり面倒なんで、悪いが付き合ってもらうぞ？」

鈴と組まれると凄まじく厄介だからな。コンビネーションを発揮される前に叩き潰してやらないと。その方が楽そうだし。

「……ふふふっ♪　それでは一曲お相手しましょう♪」

「よろしく頼むよ、セシリー」

相手をしてくれるんだったらかなり嬉しいし。その方がシャルの勝率は上がるし。

「……では、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズ。参ります！」

「織斑一夏とシロ。相手をしてやるよ。面倒だけど」

やれやれ。これが終わったら、思う存分寝るとしようかね。

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

あたしの相手はシャルロット。それは別にいい。たぶんこうなると

思っていたから。
一夏はきっと、ある程度読みやすいあたしよりもセシリアの方を優先するだろうという予測はたてていた。
そのときのことも一応考えてはいたけれど、やっぱり一夏の操るシロは凶悪ね。高機動状態でもない筈なのに、あたし達を一瞬置き去りにして動いた。
あの時に攻撃されていたら、きっと避けることはできなかっただろう。

まあ、もしものことを考えても仕方ない。一夏はあたし達を攻撃しなかったし、あたしはこうしてシャルロットと向き合っている。
シャルロットの言った通り、本当なら一夏と戦いたかったところだけど……だからって今の相手に集中しないまま戦うほど、あたしは馬鹿じゃない。

それに、さっさと倒せば一夏とも戦えるかもしれないしね。

……でも、相手は二世代機とはいえ専用機持ちで、さらに随分改造されている。こっちの手札は全部はバレていないけど、それは向こうも同じ。どんな隠し球があるかわかったもんじゃない。

「……それじゃあ、いくよっ！」
「来なさい！」

シャルロットがショットガンを展開すると同時に、あたしは武装を展開せずに口径を広げた衝撃砲を撃ち込んだ。
威力は下がるし発射速度も落ちるけど、シャルロットが動こうとする前から準備をしておいたから関係ない。
そして発射直後に砲身を破棄。双天牙月を展開して、シャルロット

に斬りかかる。

「わっ、わっわっ！」

「ほらほらぁ！あんまり逃げ回ってると、その可愛い可愛いお尻を取っ捕まえて食べちゃうわよぉ？」

「ひぃっ！？　り、鈴！？　なんだか手つきが怪しいよぉ！？」

失礼ね。ただちょっと揉んで擦って撫で回して押し潰して掴んで指先で擽って爪を立てて弄ぶだけじゃない。噛み付いたり食べたりなんてしないわよ。

「それでも‘だけ’じゃないよぉ！？」

「嫌なら勝ちなさい？　一夏に助けてもらうんじゃなくって、自分でね」

あー、一夏がシャルロットをからかう理由がわかった気がするわね。

この娘……慌てた時の反応がすっごく可愛いわね。一夏ほどじゃないけど。

まあ、それなりにからかいながら戦うとしましょうか。

……真剣に、ね？

## 決戦中、俺・シャルｖｓ鈴・セシリー

「そこですわっ！」
「教えてくれてありがとさん」

俺とセシリーは空中を舞うようにして戦っている。
偏向射撃ができるようになってから、セシリーは中距離だけではなく近距離もそれなりにできるようになった。誤射の可能性が低くなったということもあるんだろうな。強い強い。

……ちなみに、鈴とシャルは結構離れたところで逃げ回り、追いかけ回しながら撃ち合いをしている。

「わぁあぁぁん！」
「あははははっ！まだまだいくわよーっ！」
「こないでよぉぉっ！」

……楽しそうだな、鈴。まあ、昔からこうして他人をからかうのが好きだったからな。俺と同じで。

「余所見とは随分余裕がおありですことっ！」
「視界は前後上下左右全方向にあるっての」

あんまり活用できてるやつはいないけど。
その点は仕方ないよな。人間の脳味噌はそんな視界に耐えられるようにはできてないことが多いからな。例外はあるけど。ちー姉さんとか。

そんなことを考えながら飛んできた青いレーザーを避ける。銃口と銃身を見ればある程度避けられるのがレーザーって言うものなんだが……曲げられると言うのがきつい。ギリギリの回避もできないし、流石のシロも光速では動けない。

もちろん俺も、光速あるいは亜光速での機動は無理……だと思う。やったことないからわからないけど。

ちなみに今の避け方は、左手の衝撃砲でセシリーの持っているライフルの横っ面に衝撃を叩き付けて射線を外し、偏向させないと当てられないようにしてから避けている。ビットの方は、出てきた四機を空間固定で止めてすぐさま退場願ったら残った二機は出てこなくなった。

あんまり頭使うのは好きじゃないんだけどなぁ……。寝るのとは真逆の行為だし。

でも、ちー姉さんに言われちゃったし、負けるのは気に食わないしなぁ……。

……こうなったら被弾覚悟で一気に零落白夜で叩っ切るか？　それが一番早そうだ。

今のところ、セシリーのライフルが一発撃ってから次を撃つまでに必要な時間は０．５秒ほど。これだけあれば一発二発食らう程度で済むだろう。

瞬時加速を発動。セシリーに一気に接近する。

それと同時に雪片を振る――――わずに、もう一度瞬時加速で横に軌道を変える。

するとセシリーの腰にくっついていた二機のビットからレーザーが

飛び出し、虚空を貫いた。

「……先に落としたうちの二機は、射撃型じゃなくて弾道型だったんだな」

「ええ。よく避けましたわね」

セシリーがなんだか地味に策士だ。ちっちゃい策だけど有効だよな。

……まあ、こっちもやることはやったし、おあいこってところかね。

「セシリー」

「はい？」

「右肩見てみ」

俺の言葉に従って、自分の右肩を見る。するとそこには――

「なっ！？　グ、グレネード！？」

「正解♪」

瞬間、爆音と共に、赤い大輪の炎の花が開いた。

「たーまやー」

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

爆音と衝撃がアリーナ全体を揺るがせた。

鬼ごっこ（シャルはかなり必死）をしていたあたし達は、同時に一

夏とセシリアの方に振り向いた。

「隙あり」

「無いわよ」

ついでにシャルはあたしにショットガンを五発ほど撃ち込んできたけれど、口径を広げた擬似的な拡散型の衝撃砲で撃ち落とした。

「……何があったんだと思う？」

「とりあえずあたしに向けてのマシンガンの斉射を辞めてから聞いてよね」

「防いでるくせに」

「まあ、実態があって軽ければ双天牙月で落とせるからね。あと、さっきのことだけど……どうせ一夏が馬鹿威力のグレネードでも使ったんでしょ」

と言うか、セシリアの声が聞こえていればわかると思うけどね。おもいっきりグレネードって言ってたし。

……一夏って、グレネードなんて持ってたのね。

まあ、勝負を終わらせるにはもう少し必要みたいだけど。グレネード一発で落ちるほどセシリアもヤワじゃないだろうし。

「えいっ」

「返すわ」

「困るよ」

「こっちもよ」

シャルロットがグレネードを投げてきたので双天牙月で打ち返す。

盾で打ち返してきたので今度は上に弾く。

……なんだか、ほのぼのとしながら殺伐とした戦いね。何でもないことみたいにグレネードを投げ合うことになるなんて、思ってもみなかったわ。

……普段からそんなことを考えているのは、それはそれでまずいことかもしれないけど。

「……そろそろ終わらせない？」

「あ、それいいね。僕もちょっと（貞操の）危機を感じてた所なんだ」

シャルロットはそう言って、いつもの高速展開で両手に連装型のショットガンを二丁取り出した。

「ああ、負けたらシャルルのところに泊まるから」

「え……こ、困るよ！」

ああもう可愛いわね。どうせいつもと同じように一夏と寝るだけなんだから、気にしなければ良いのに。

「じゃあ頑張りなさい」

「うう……鈴の意地悪……」

そこまで言って、お互いに瞬時加速。どうやらあっちも不意を打とうとしてたみたいね。

それに驚く感情はあるけど、それよりも今はシャルロットを倒さなくちゃ。

そして一夏と……まあ、本気じゃなければ五分くらいは持たせてくれるかな？

……それも、ここでシャルロットを倒せればの話だけど。

あたしは双天牙月を弓を引き絞るように片手で振りかぶり、シャルロットの胸を貫くように突き込んだ。
当然、シャルロットは腕の盾で防いでからショットガンを撃ち込んでくると思っていたのだけれど……

「ぐぅっ……」
「な……」

シャルロットは、盾で防御しなかった。

「あ、あんたなに考えて」
「うふ」

ぞくり、と寒気が走る。シャルロットは今の一撃でシールドエネルギーがかなり削られていて、あとはちょっと力を込めた衝撃砲の一撃で落とせそうなくらい弱っているはずなのに。

「うふふふふふふ……捕まえたぁ……♪」

バンッ！という破裂音がして、シャルロットの腕の実体盾が弾け飛ぶ。そしてその腕から覗くそれは――

「盾殺し《シールド・ピアース》ですって!?」
「ふふふふ……この距離なら……鈴の衝撃砲より僕のこれの方が早い！」

あたしは急いで離れようとするけれど、それより早くシャルロットはあたしに向かって瞬時加速をした。
全てがゆっくりとした空間の中。双天牙月の間合いの内側で、シャ

ルロットはまるで千冬さんのような――――獰猛な獣の笑顔を浮かべた。

「ぶ……っち抜けぇっ！」

ズガンッ！という轟音と共に、あたしの体にパイルバンカーの一撃が突き刺さる。

同時に絶対防御が発動し、シールドエネルギーが一気に削られる。

けれど、それだけだ。確かに食らった胸は痛いけど（一瞬『成長止まったらどうしよう？』なんて思ってないったら思ってない）、そんなのどうってことはない。

あと一発叩き込めば、シャルロットは落ちる。だから私は痛みを訴える体を無視して、衝撃砲の砲身を作り上げる。

短くても、小さくても、薄くてもいい。一発撃てればそれでいい。

あたしはそう考えて、シャルロットの四回目のパイルバンカーの攻撃と同時に衝撃砲を撃ち込んだ。

真っ暗な中で、何かが動く。それは人間にしては小さな影だったが、人間の大人以上に俊敏に動き回っていた。

「わぅわぅ？」
「きゅっ！」
「くきゅっ！」
「ちゅぴぴっ！」
「わぅ！」

そのうちのひとつが確認するかのように声をあげると、帰ってくる声は四つ。

「ぅわぅ？」
「きぃっ！」

今度は別の方向に確認の言葉を向ける。何を確認したのかはわからないが、何かを聞いたと言うことはわかるだろう。

「わぅわぅ？」
「にゃう！」

ぱっ！とスポットライトが点き、色々なことを確認していた小さな影を照らし出した。

それは、いつもの寝間着だったり制服だったりする白狼ぷちかではなく、きりっとした燕尾服を着ている白狼ぷちかだった。

白狼ぷちかが手に何かを持ったままその手を上に上げ、ひゅっと動かした。

すると暗闇の中からピアノとフルートとドラムの音が聞こえ始め、それが一つの音楽になる。

それと同時に新しく一つスポットライトが何かを照らし、その姿を露にした。

それはリスぷちか。格好は白狼ぷちかと同じく燕尾服だが、白狼ぷちかの持っている細長い棒の代わりにぷちかサイズのバイオリンとその弓を持っている。

「おれは音楽家織斑ぷちか（栗鼠）♪　上手にバイオリン弾いてみましょう♪」

そこまで歌ってからリスぷちかはバイオリンを構え、曲に合わせて弾き始めた。

～～～♪　～～～～♪　※都合により省略させていただきます。

「いかーがですー♪」

リスぷちかがそう歌い終わると、リスぷちかに向けられたスポットライトはそのままに新しいスポットライトが別の何かを照らし出す。

白い兎耳を頭につけた燕尾服のぷちかが、ピアノの前に座っていた。同時に、さっきまで流れていたピアノの音が消えて、代わりにバイオリンの旋律が流れている。

「おれは音楽家織斑ぷちか（白兎）♪上手にピアノを弾いてみましょう♪」

～～～♪　～～～～♪　※都合により以下略。

「いかーがですー♪」

また新しくスポットライトが点き、今度は燕尾服を着た金色の小鳥ぷちかを照らし出した。手にはフルートを持っているが、今は吹かれていないために音は出ていない。

代わりに少し休んだ白兎ぷちかが代わりに入り、補填している。

「おれは音楽家織斑ぷちか（金糸雀）♪　上手にフルートを吹いてみましょう♪」

～～～♪　～～～～♪　※都合略

「いかーがですー♪」

もう一度スポットライトが新しい影を照らし出す。

狸耳をつけた燕尾服を着たぷちかが、太鼓の前に座っていた。

「おれは音楽家織斑ぷちか（狸）♪　上手に太鼓を叩いてみましょう♪」

～～～♪　～～～～♪　※都略。

「いかーがですー♪」

そして最後に、指揮をしている白狼ぷちか以外のぷちか達が全員同時に歌い始めた。

「おれ達音楽家織斑ぷちか♪　上手にあわせて演奏しましょう♪」

～～～♪　～～～～♪　※全略。

「いかーがですー♪」

最後のフレーズを何度も繰り返しながら、ゆっくりとぷちか達はフェードアウトしていった。

ｓｉｄｅ　織斑　一夏

再生の終わったブルーレイディスクを取り出して、『演奏会～ぷちか？～』と書いてあるケースに丁寧に仕舞う。

空間投影型の画面を消して、一緒に見ていた鈴達の方に振り向く。

死屍累々だった。

「……おーい」

「ぐ……がはっ……ぁ……はぁ……はぁ……」

「けほ……箒は……まだ声が出るなら平気ね……それよりは……」

「……」（鼻血をだくだくと流して恍惚の表情を浮かべて倒れているセシリア）

「……」（鼻血をだくだくと流してだらしなくかつしまりのない笑顔を浮かべているシャル）
「……ゴパッ」（今まで耐えてきたが我慢の限界に達して吐血したラウラ）
「……」（燕尾服を着た白狼ぷちかが出てきたときにぶっ倒れた千冬）

「……こっちのをどうにかしないと……」
「……すぅ……はぁ……そうだな」
「ちなみに、弾にも送ってみた」
「……弾。あなたなら平気だと信じているわ」

鈴は空を仰ぎながらそう言った。何故か、空に笑顔の弾が浮かんだような気がした。

## ただのネタ、時間軸とかは気にしないこと（外伝）（後書き）

……書いてから思ったんですが、これっていいんですかね？　替え歌なんですけど……。
ちなみに、ぷちか達の声は一夏によるアテレコです。

それと、このブルーレイを送られた後の五反田家の一部の惨状を、台詞主体でどうぞ。

「ん？　一夏からなんか来てるな？　珍しいこともあったもんだ……ってこれ切手とか郵便配達の紙とか張ってないんだけどどうやって……一夏だし何でもありか」

～仕事が終わって～

「さてと。それじゃあ一夏からのプレゼントを開けてみるかね」

「……なんだこりゃ？　ＤＶＤ……いや、ブルーレイディスクか？　まあいい、再生してみるか」

～見終わってから～

「お兄！さっきから晩御飯が……きゃあぁぁっ！！？」

蘭が扉を蹴り開けたそこには、血まみれで倒れる弾の姿が。

「お兄！大丈夫！？」

「ぁ……ら、蘭……」

「よかった……何があったのお兄！？」

「……あ……あれを……」

弾が指差したのはテレビ。今は何も映されていないが、どうやらビデオ1に設定されているらしい。

「テレビ？　テレビがどうしたの！？」

「……ブルーレイだ……ブルーレイが……致命傷を……」

そこまで言って弾の腕が力を失って床に落ちる。蘭は弾の遺言（？）に従って、ブルーレイを再生させてしまった。

そして……

「……かはっ……」

どさっ！という音と共に、弾の部屋に死体が一つ増えた。

## 試合終了、整備に行こうか

……シャルと鈴の方も終わったみたいだし、そろそろ真面目にやろうかね。これ使うとＩＳのプライベート・チャネルが使えなくなるから自重してたけど、これなら使っても平気だろう。

千の顔を持つ英雄で作るは、毎度お馴染みのアリス・イン・ワンダーランド。

ＩＳに乗れるとわかってから出番がかなり増えていたりするこれを、とりあえずサービスで核金二十個分ほど水滴をつけてばらまく。これで光学兵器の大半は無力化できたし、機動も無茶苦茶なものになるだろう。

「く……またそれですの！？」

「前回も使ったから、今回はちょっと工夫して霧もオプションにつけてみた。効果は倍増だ」

セシリーは始めにミサイル・ビットを俺に落とさせてしまった。だから使えるのはゼロ距離のライフルか近接戦闘用のナイフくらい。あと機体の装甲で直接殴るとか、最悪ライフルで殴るとか？

まあ、セシリーならライフルで殴るってのはやらなさそうだけど。

とにかく、視界は封じてビットの操作とレーザーも封じた。あとはさっさと斬り倒すだけだ。

機動はこっちが上だし、すぐ終わるだろう。

……周りには見せないけど。

「……零落白夜」

雪片弐型の実体部分が消え、鬱陶しいくらいに眩しく輝くエネルギーの刃が現れた。霧のお陰で向こうからは見えないだろうけど。

そして後ろから近付いて、剣を振る。これで終わり。

……さてと。それじゃあさっさと帰ろうかね。色々やりたいこともあるし。

ここは整備室。そして整備室と言えば……そう、かんちゃん。

「やっほーかんちゃん。勝ってきたよ」

「……うん……見てた」

どうやら見ていたらしい。それならもう少しミサイルの効率運用に気を使えばよかったかもしれない。

だけど俺の使い方は飽和攻撃で押し通す事だしなぁ……。

まあ、いいか。過ぎたことだし。

「……ん」

かんちゃんが俺に向かって手を差し出していた。なにかな？

「……シロの調整……しないの？」

「ん、する。ありがと」

「……私も……助かってるから」

そう言ってくれるとありがたいね。

……あー……眠い……。

ふぁ……とあくびをしてから立とうとすると、かんちゃんに腕を引かれてかんちゃんの隣に座らされた。

そして、いつの間にか膝枕に移行している。いったい何が起きたんだろうね？

「……お休み。織斑君」

「……ん。お休み……かんちゃん」

そして俺は目を閉じる。その寸前にかんちゃんが鼻をつまんで上を向いたような気がしたが、きっと気のせいだろう。

……すか～……。

ｓｉｄｅ　更識　簪

織斑君が私の膝の上で眠っている。これは一週間に一度は起きることだから珍しくもなんともない。

けれど、今の織斑君だとちょっと問題かもしれない。

全身にぴったりと張り付いているＩＳスーツが、男の子にしてはかなり華奢な体のラインを強調している。

いつも制服の裾から覗くお臍や首筋よりも、なんだか艶かしく見えるのは……きっと気のせいじゃない。

「あ、織斑君はここにいましたか。探したんで……寝てます？」

「……」

私は山田先生に頷くだけで返し、左手で織斑君の頭を撫で、右手と右足でシロをいじる。

……それにしても、シロの機動は凄い。と言うよりも、織斑君が凄いのかな。こんな真似をしようなんて、私じゃあシロを持っていたとしてもやろうとしないだろうし。

「えっと……一年四組の更識さんですね。織斑君に伝言をお願いしてもいいですか？」

「……はい」

「それじゃあ、今日から男子生徒はお風呂が使えますので、その旨と……あと、織斑先生が『毎朝の一夏分の補給がきかなくなってきた』と嘆いていたので、今度寮長室に行ってあげてください、と」

「……わかりました」

……私は今、笑っていないだろうか？　あの織斑先生がそんなことを言うなんて……。

私としては、なんとか抑え込んでいるつもりなのだけど……ちょっぴり不安になる。

笑ったらきっと織斑君を起こしちゃうし、我慢、我慢……。

「……くすっ♪」

## トーナメント終了、送られてきたモノ

すべての試合が終わり、表彰式に移る。優勝は俺とシャル。賞品は無いけどね。元々欲しくもないけど。

……さてと。それじゃあ……寝ようかな。時間もとれるようになったし。

……すか～……。

ｓｉｄｅ　？？？

……うんうん、いっくんはよーく寝てるなぁ？
その事を確認して、私は静かにいっくんのベッドの脇に段ボール箱を展開した。これぞ束さん流、遠隔展開だよー♪
いっくんが起きたどんな反応をしてくれるかなー♪

楽しみ、楽しみぃ♪

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

目が覚めて、ふと横を向いてみると……そこには段ボール箱が一つ

置いてあった。
……誰が置いたのかは知らないけど、多分束姉さんだと思う。だって束姉さんだし。

とりあえず開けてみることにした。上のところを目張りしているガムテープを剥がして、それから蓋を開く。
するとそこには、

「……？」
「……そう言えば、言ってたねぇ」

三十センチくらいで頭に茶色の狼耳をつけているちー姉さんが俺のことを見上げていた。

とりあえず抱き上げて撫でておく。なんでかうっとりと目を細めるんだが、それがまた可愛い。

「……」
「はいはい、おいで」

それをじーっと見つめていたのは狼ぷちか。なんだろうねこれ。
嫉妬か？
手招きすると、てててっと走ってくる。良いねぇ。でも鈴や弾に見せたら大変なことになりそうだよなぁ……。

きゃいきゃいと騒いでころころともつれあったまま転がるぷちー姉さんとぷちかを見ていると、なんでかまた眠くなってきた。
今日は休みだし……一日寝て過ごそうか……。

俺の意思を汲み取ったのか、狼ぷちかが俺に駆け寄ってきた。ちょ

っと服がぼろっとしているのはご愛嬌といったやつだろう。ぷちー姉さんの方もちょっとぼろっとしてるし。

俺が布団に入ると、ぷちかもぷちー姉さんも布団の中に潜り込んできた。ぷちー姉さんがかぷかぷと甘噛みを繰り返すのがちょっとくすぐったいけれど、まあ、問題ない。

ぷちかとぷちー姉さんの頭を撫でながら……お休みなさい。

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

私の朝は、一夏とぷちかの写真を見ることから始まる。これによって一夏への愛を全身に巡らせ、一日頑張ろうと言う気力を沸き立たせるのだ。

しかし、今日は違った。なぜなら、私の体が一夏に包まれていたからだ。

何がおきたのかはわからないが、これは確かに一夏だ。一夏の臭いがするし、一夏の声がするし、一夏の味がするし、一夏の肌の感触がするし、一夏がすぐ近くに見える。

ただ、一夏にしては大きいと思ったのだが……どうやら私が小さくなっているらしい。隣にぷちかの姿があった。

どういうことかはわからない。どうなっているのかも、どんな状況なのかもわからない。

わからないが――なんだこの幸せな拷問は……っ！？

一夏がこんなに近くにいるのに抱き締められず、撫でられず、頬プニもできず、首筋に舌を這わせることもできないなど……っ！

……えぇい、我慢できるか！私は一夏の部屋に行くぞ！

そこで私か見たものは、ベッドで眠る一夏とぷちか。そして小さな私自身だった。

「……ん……ぁ、ちー姉さんだ……♪」

一夏はぼんやりとした焦点のあっていない目で私を見つめ、ほにゃりと笑顔を浮かべた。

「ちー姉さん……一緒に寝よ？」

色々な意味でくらくらしていた私がこの一夏の誘惑に耐えられる筈もなく……気が付いた時には私は一夏と同じ布団で眠っていた。小さい私が尻尾を振っていたり、ぷちかが小さな私の頬をぺろりと舐めているのを見て、ようやくさっきまでの感覚が小さな私を通して伝わった物だと言うのがわかった。

……それにしても、そろそろ本格的にまずいな。

今までは抑えられたのだが、よく会うようになってから我慢が利かなくなり始めている。このままでは本当に食べてしまいそうだ。

なにしろ、今も一夏の唇を見て『……キスくらいなら問題ないのでは？　そうだ、そのくらいやっているところでは普通にやっている。そして私は一夏が好きだ。うむ問題ない』という思考が一瞬で

展開され、そして数分迷ってから却下されているのだから。

……それにしても、一夏の唇は柔らかそうだな。それに甘そうだ。

一夏の唇に指を当て、少し力を入れてみる。

すると一夏の唇はくにりとつぶれ、私の指にほんのりと暖かく、少し湿った柔らかな感触を伝える。

「……んぅ……はむ……」

一夏にくわえられた指に、ぬるりとした一夏の舌が這う。

奇妙なほど熱く感じるそれに私は耐え切れず、意識がまるで木っ端のように消し飛んだ。

目が覚めると、私の腕の中に一夏がいた。それも、腕をきゅっと自分の体に引き付けたまま寝ているという凄まじい威力を誇る姿で。

……やれやれ助かったな。これを前に着せた『だぶだぶのYシャツ一枚』でやられていたら……

『……ちー……姉さん……？』

いつも通りの眠そうな目に、わずかに涙が浮かんでいる。

だぼっとしたYシャツのボタンは上から二つが外されていて、胸元まで見えてしまっている。

『ふふ……一夏。お前は本当に可愛いな……』

私は一夏の肌に唇を落とし、一夏の反応を楽しむ。

『んっ……ぁ……』

『こら一夏。そんなに可愛い反応をしていると……食べてしまうぞ？』

私は一夏の耳元でそう呟き、耳をぺろりと舐めた。

ぞくぞくぅっ！と体を震わせた一夏が目を開く。

『ち……ちー姉さんなら……いいよ……？』

『……くくくく……可愛い奴め』

私は一夏の顎先を指で持ち上げ、ゆっくりと顔を近付けていく。

『一夏。目を閉じろ』

一夏は素直に目を閉じた。

それを確認して、私はまた一夏に顔を近付ける。

――――そこまで妄想した私の頭をかなり本気で殴る。非常に痛いが目は覚めた。

……ああ、今の私は相当不味いな。認めたくはないが、束のことをどうこう言えない程度には。

やれやれ。どうするか……。

# 睡眠愛好会日誌、またの名を一夏観察日記

俺の部屋には、表紙に【睡眠愛好会日誌】と書かれたノートがある。
俺は使ったことはないし、中を見たこともないが、鈴達はかなりの頻度で使っているらしい。理由は知らないけど。
……まあ、なんだっていいけどな。

ｓｉｄｅ　睡眠愛好会日誌

六月　〇日　凰　鈴音

今日は記念すべき睡眠愛好会の活動初日。と言うことで活動の内容をつけるこのノートを用意したから、皆も書きたいことがあったら好きに書くといいわ。

今日の一夏はいつもより少し深く眠っていたように思える。きっと色々あったせいであんまり寝れてないのね。
あと、やっぱり一夏は可愛いわよね。臍チラ最高！うなじもいいし二の腕のぷにぷにもいいけど、やっぱりあのお腹に顔を埋めた時の感触が一番よ！

六月　×日　篠ノ之　箒

今日の一夏は少し寝相が悪かった。膝枕が嫌なのかと思ったがそんなことはなく、ただ頭がちょうどよくはまる場所を見付けるのに時

間がかかっただけらしい。
一度そこを見つけてからは実に大人しく、いつもと同じように髪を撫でさせてくれた。

……ちなみに私は一夏の髪が好きだ。さらさらと指に通るあの感触が良い。
それに匂いも良いしな。なぜ一夏はこれほどいい匂いがするのだろうか？

六月　△日　セシリア・オルコット

今日の一夏さんは、いつもとあまり変わった所は見受けられませんでした。
いつもの通りにのんびりと眠っていて、あまり大きく動こうとはしません。
ただ、なにかを食べている夢でも見ているのか、時折むにむにと口が動くのがわかります。

ちなみにわたくしは足首から太股にかけてのラインが好みですわね。
抱きつきながらこの脚も使ってしがみつく姿と感触が最高ですわ。

六月　□日　更識　簪

……初めまして。更識簪です。今日は整備室で寝ちゃった織斑君を運んで、その時に見つけたので書いています。
今日の織斑君はいつもと変わらず私の膝を枕にして、犬耳をくてっと萎れさせたまま寝ていた。なんだかすごく撫でてあげたくなる表情をしていたから、つい撫でてしまった。

それと同時にシロの整備をしているのだけど……なぜか『織斑君がどんなものを求めているか』が簡単にだけどわかるようになっていた。
……これは……慣れ？
私はおでこが好き。撫でていると、なんだか落ち着くから。理由はわからないけど。

六月　☆日　鳳　鈴音

はじめまして、更識さん。そしてようこそ、ＩＩＩ（いっぱいいっぱい一夏）へ。一夏に健やかなる眠りを！
今日の一夏はなかなか起きてこなかった。入ってみると、なんとシャルルが一夏と同じ布団に入って顔を真っ赤にしたまま胸に顔を埋めていた。羨ましいわね代わりなさい。
ちなみに、本当に代わってもらったわ。遅刻しそうになったけど。
脚のラインと、髪と、おでこ……むぅ、どれも捨てがたい……。
あたしはどれを選べばいいの！？　教えて弾！

六月　☆日　五反田　弾

初めましての人は初めまして。鈴ともしかしたら一夏には久し振り。
一夏の親友五反田　弾だ。
深夜に書いてるから☆日でいいよな。もう一時だけど。
……羨ましいな。是非とも写真を送ってくれ。俺の所にある永久保

存版一夏アルバムに入れるから。中学までの写真が欲しい奴は、是非とも五反田食堂に来てくれよな。
高校生くらいの赤い髪の男が俺だ。注文は『ワンサマーアルバム』だ。出前はやってないけど。
あと、完全予約制だ。予約はここに取りにくる日時と一緒に書いてくれればいい。

それと、鈴。お前に俺に降りてきた天恵を教えよう。

『一夏の全てが可愛い』

これで解決だ。

六月　◇日　凰　鈴音

どうやって書いたのかはわからないけど、ありがとう弾！迷いの霧が一気に晴れ渡ったような気がするわ！
そうよね、みんなみんな一夏だもんね。選ぼうとするのが間違ってるのよ！何であたしはこんな簡単なことにも気が付かなかったの！？
……あたしもまだまだ修行が足りないわね。

六月　▽日　シャルロット・デュノア

いや、突っ込みどころが多すぎるんだけど！？　どうしてみんな突っ込まないのさ！？
何でいきなり鈴はそんなカミングアウトするのさ！？　そして箒や

セシリアも、乗っちゃ駄目でしょそこは！？
それと更識さんも毒されないで！お願いだから！

あと五反田さんはどうやってここに書き込んだんですか！？　不法侵入するのはまず不可能なはずなんですけど！？　ワンサマーアルバムは半ダース貰います。いくらになりますか？

……腕の中って、あったかくって、おちつくよね。

六月　◎日　ラウラ・ボーデヴィッヒ

……ふむ。なるほど。私の好敵手の腕の中は落ち着くのか。今度試してみるとしよう。

好敵手のことを知ることは大切なことだ。私もワンサマーアルバムを頼もうか。
……ああ、確か出前はしていないのだったか。それではまた今度、直接出向くとしよう。

ちなみに私はあの強い意思の籠った目が好きだな。あの目に見詰められると、体が熱くなってくる。
理由はわかるようなわからないような曖昧な状態だが、あの目は良い。

六月　∂日　織斑　千冬

……貴様等、面白い話をしているな？　一夏の話に私を呼ばないとは、まさか私と全力で模擬戦をしたいという遠回しな自殺か？
……まあいい。今回は多目に見よう。話を持ってきたのは凰だったしな。

そして五反田。貴様はいいことを言った。
そう、一夏は全てが素晴らしいのだ。それをわざわざ分割して考えようとするからこんがらがるのだ。一夏は一夏、それを理解して一つのものとして考えれば、一夏がどれほど素晴らしいかが見えてくるはずだ。

例えば声。一夏の声はそれ単体でもかなりの威力を持つが、それに甘えるような響きと人懐っこい子犬のような視線を加えればその威力は格段に増す。一夏が私に抱きついている状態だったなら更にクるな。
その他にも背筋や首筋も良い。撫でたときの反応や、ふっと息を吹きかけてやった時にきゅうっと目を閉じる姿はこれまた威力が高い。

さらに――――（以下数万文字を省略）

六月　φ日　布仏　本音

わー。織斑せんせーって、実はすっごいブラコンだー♪

# 臨海学校、準備中

もうすぐ臨海学校があるらしい。そのための準備は一応してあるけど……泳がないし、水着なんていらないよな。

そう言ったら、鈴とののちゃんとシャルが一瞬でアイコンタクトを交わし終え、いつの間にか買い物に行くことになっていた。メンバーはいつもの六人。多分ちー姉さんもくることになると思うけど。週末の日曜に駅前のショッピングモールに行くことになったが、どんな水着を買えばいいのやら。

「俺、泳がないよ？　砂浜で寝てるよ？」
「それじゃあパラソル買いましょパラソル。ずっと日の下に居て熱中症になったら困るものね」
「そうだな。スポーツドリンクは……学園で買えばいいか」
「それと、僕達の水着も選んでくれると嬉しいかな」

そんな感じで話は進み、たまに絡んでくる頭の悪そうな男と女にはニアデスハピネスで肺を内側から軽く爆破してちょっとやばい状態にしたりしながら買い物をする。

「一夏。こっちのワンピース型とこっちのタンキニ型はどっちがいいと思う？」
「ん……黄色いほうかな？　鈴にはそっちの方が似合うと思うぞ？」
「そう。じゃあこっちにするわね」

なんでかシャル以外の分の水着まで俺が選んでいる。まあ、みんな似合ってるけど。

セシリーだけは自分で用意した水着を着るらしい。なんのためにここに来たんだろうね。

ラルちゃんは誰の入れ知恵かは知らないけど黒が主体でレースがついている水着。確か原作でもこんなのを着ていたはずだ。

「ふふん。どうだ一夏」

「……ほー……意外だけど似合ってると思うぞ」

「そうだろうそうだろう。くくくく……」

なんで威張ってるのかはわからないけど、その姿も似合ってる。でも、試着室から出てくるときはちゃんと元の服に着替えてから出てこような？　見られてもいいなら別にいいけど。

「一夏。こっちの白と赤とならどちらがいいと思う？」

「なんでみんな俺に聞くんだ？　ちなみに最大限ぶっちゃけるとどっちも似合ってるから選びづらいんだよ」

強いて言うならののちゃんには性格的に『情熱の赤』より『純粋な白』が合ってるような気がするが。

「そうか、白が似合うか。なら白にしておくか」

なんで喋ってないのにわかるんだろうな？　便利だから別にいいけど。

「いや便利だからって……」

「シャルも読んでるじゃん」

「そうですわよシャルロットさん。あと、そろそろ性別の公表をしたらどうですか？」

「……大丈夫かなぁ……？」
「平気平気。一夏が止めないってことはなんとかなるってことだから」
妙な信頼をされてるな？　確かにこれについては問題ないだろうけど。
ちなみにシャルの水着はおそらく原作通り。黄色いし所々黒いし背中で紐が交差してるし。違うかもしれないけど似合ってるし問題ない。
「あっ！　織斑君！」
「一夏と……貴様等か。何をしている？」
「一夏に水着を選んでもらっていました。千冬さんも選んでもらったらどうですか？」
真耶先生とちー姉さんが現れた。なんでちー姉さんはちょっと不機嫌？
「あ、織斑先生は織斑君に誘ってもらえなくって拗ねて」
「山田くん。学園に戻ったら武術組手をしよう。折角だし五十本ほど」
「そんなことをしたら折角の織斑君との時間が無くなっちゃいますよ？　織斑先生？」
なんだか真耶先生が強かだ。ちー姉さんが原作よりも一部子供っぽい分が真耶先生の方に行っているんだろうか？
「……織斑先生が選んで貰わないなら、かわりに私が選んでもらっちゃいます♪　ということで……どっちが似合うと思いますか？」

そう言って真耶先生が見せてきたのは、共にワンピースタイプでパレオ付きの水着。色は薄いピンクと黄緑色

「黄緑の方で」
「そうしちゃいますね。……ほら、織斑先生も」
「うむ……どちらがいいと思う……？」

真耶先生にせかされたちー姉さんが俺に見せたのは、機能性重視な白の水着と、機能性だけでなくおしゃれの方まで視野に入れられて作られただろう黒い水着の二つ。
まあ、即決だよな。

「黒い方。その方がちー姉さんの髪が映えるんじゃない？」
「……そうか」

ちー姉さんはそう言うと、白い水着の方を戻しに行った。
ちなみに俺は原作の一夏のように気に入った方を先にじっくりと見ることはない。とりあえずほとんど均等にしているつもりだ。

……全員分の水着選びは終わったことだし……寝たい。

なぜか最近さらに小さくなれるようになり、今では１００センチメートルを切ることもできるようになっている。
と言うか、気を抜くと勝手に縮む。そして争うように獣耳が遠隔展開してくる。
その度にお持ち帰られそうになったり、実際にお持ち帰られたりしている。

……ただし、お持ち帰りできてるのはシャル（まだ同じ部屋）と鈴（泊まっていく）とののちゃん（同じく）とちー姉さんくらいなも

のだ。

「寝たいなら寝ればいい。運んでやるぞ？　一夏は軽いしな」

「ん……ありがと……」

ののちゃんのお言葉に甘えて、ののちゃんの背中に乗せてもらう。剣道で竹刀を振っているお陰か、確りと筋肉がついていて安定感がある。

……昔にしてもらったちー姉さんの背中もこんな感じだったよなぁ……。暖かいんだよ。凄く。

そして誰かが――まあ、鈴だろうけど――が俺の体が冷えないようにと肩になにかを羽織らせてくれた。嬉しいね。

……すか～……。

# 臨海学校、移動中

バスに揺られて移動中。止まってるときの細かい揺れはともかく、動いてるときの大きな揺れは寝るのに丁度いい。揺りかごみたいで。ちなみに俺の隣は、百に届きそうな数十回のあいこの結果、ラルちゃんが取っていった。

鈴の勘とののちゃんの気配とセシリーの理論を抜けた理由は、左目を使うことによる動体視力の底上げで出す手を読んでいたらしい。どこかで聞いたことのあるじゃんけんの必勝法だと思ったが……まあ、ルールは守ってるし問題はないだろ。

それとこれは俺達の中ではもはや当然のことなんだが、手を上げてから下ろすまでの間に手の形が四～六回変わる。俺は身体能力任せで五～六十回程度は変えられたりもするが……まあ、使わない無駄能力だな。

それでもあいこが続いたのは、流石にラルちゃんは手の動きが追い付かなかったらしく、最後のに合わせて手の形を変えるのに苦労したからだろう。

……シャル？　シャルは頑張ってついていこうとしたけど、六十三回目で脱落。流石に幸運だけでは勝てなかったらしい。自分の出したチョキを凄く恨めしそうな顔で見詰めていたのを俺は知っている。

それは置いておくとして、俺は今、ラルちゃんと寄り添うようにして眠っている。起きているところは五厘（０．５％）程度。正直寝てるのと変わりない。

何で起きているかと言うと、夏になると蚊が多くなるから自動で潰せるようにだ。痒いのは嫌。そしてあのモスキート音（本物）も嫌。大嫌いだ。

いつもはそれ専用のライトで何とかするんだけど、ここで使うと勝手に触られて感電されても困るし使えない。普通の人間ならまず死ぬ威力だし。

……まあ、何でもいいけど。ここに蚊はいないみたいだし。

……ふぁ……。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　箒

ラウラと一夏が眠っているのを、私は（自分では見えないが、おそらく）優しい目で見守る。一夏の隣になれなかったのは残念だが、こうして一夏を眺められるのだから……まあ、いいだろう。

「可愛いわよね」

「本当にな」

「……いや待ってよ。何で鈴がここにいるのさ!?　このバスは一組のバスだよね!?」

「千冬さん……っと、織斑先生を一夏の生写真と実際に使っていた腹巻きで買収したわ」

「それいいの!?　いや駄目だよね!?」

「五月蝿いぞシャルロット。一夏が起きたらどうするつもりだ。一夏がくれたソードサムライＸの錆にしてやろうか？　手入れはするから錆にすらさせないが」

「ちょ……冗談だよね？　冗談なんだよね！？」

シャルロットは小声で叫ぶという器用な真似をしてみせた。まあ、これなら冗談にしても構わないか。

「もちろん冗談だとも。なあ鈴」

「そうよ。あたし達がこんな人目のあるところで殺るわけないじゃない。どうしても殺るならセシリアの出番よ」

「その通りですわね。バレるような真似はいたしませんわ」

「冗談にしても酷すぎるからね！？　冗談に聞こえないんだってばぁ！？」

ん？　『冗談に聞こえない』だと？

それは当然だろう。私だけでなく、鈴やセシリアもそこそこ本気なのだから。

……まあ、それを表に出すようなことはしないがな。一夏のそばに居られなくなるのは困る。

「はっはっは、シャルロットは小心だな？　いいことだと思うぞ？」

戦いには必要だ。恐怖が無ければ人間はどんどんと退化していくだろうし。

……おや、どうやら目的地に到着したようだな。一夏を運んでやらなければ。

「篠ノ之。織斑は私が運ぶ。お前はボーデヴィッヒを運べ」

「……職権乱用では？」

「フッ……権力とは使うためにあるのだ」

そう言って千冬さんは、いつもと同じく小さくなった一夏を背負ってバスを降りていった。

……まったく。千冬さんはブラコンだな。それも超弩級の。

「仕方無いわよ。だって千冬さんだもん」

「……まあ、そうだな」

やれやれ。

心の中でため息をつきながら、私はラウラを背負う。

……軽いな。ちゃんと食べているのか？

……いや、体格からしてこれが適正体重なのか？　私はあまり気にしていないからよくわからないが……。

「気にしてないのにその体型って言うのは……羨ましいわねぇ……ちょっとくれない？」

「私としても少し貰って欲しいのだがな。残念ながらそういった技術がない。諦めてくれ」

私はもう少し小さい方がよかった。手のひらにはギリギリ収まらないくらいの大きさがよかったのだがなぁ……。

理由？　この胸で寝ている一夏を抱き締めると、一夏を窒息させてしまう可能性があり、抱き締められないからだ。かなり悲しい。そしてその点では千冬さんが羨ましい。

……まあ、羨んでも事実は変わらないので諦めてはいるがな。

# 臨海学校、睡眠中

目が覚めるとちー姉さんがいた。が、気にせず眠ることにした。
ちー姉さんの腕枕はいいね。固すぎず柔らかすぎず、高すぎず低すぎず……。
それに、よく俺の髪をなでりなでりと撫でてくれるし。ぎこちない撫で方のはずなんだけど、なんでか気持ちがいい。

「……ふにぅ……」

……どうやら今は猫系がくっついているらしい。猫っぽいあくびが出たし、尻尾が猫だし、耳も感触的に猫だし。
まあ、いつものことだ。

もう一眠りしようとまたあくびをして、そこで俺が空腹だったと言うことに気が付いた。
……まあ、いいか。眠いし寝よう。一食や二食抜いたところで死には……。
……すか～……。

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

くきゅう、という軽い音で目を覚ました私は、とりあえずその音の音源を探してみることにした。

きゅくぅぅ～……

……それはすぐに見付かった。それもそのはず。その音は私のとなり、一夏から聞こえてきたのだから。
さらに正確に言うならば、一夏の腹から聞こえてきたのだが。つまり空腹なのだろう。

……そう言えば、一夏は昔から食事を抜いてまで寝ていたな。今日は昼抜きか。
ならば、夕食は確りと食べさせなければいけないな。一夏の健康のためにも。

「ん……ぅみゅ……」
「ぐふっ！？」

……だが、夕食の時間にはまだ早い。もう少し一夏を堪能していてもいいはずだ。この柔らかな一夏の抱き心地を離すのは惜しいしな。

一夏を抱き締め、頭を撫でる。一夏の髪に鼻を埋め、ゆっくりと深呼吸をする。
……ふぅ。愛情が暴走してしまいそうだ。

ｓｉｄｅ　セシリア・オルコット

隣に座る一夏さんを見る。一夏さんは起き抜けということもあり、いつも以上に眠そうにしている。

たとえばふらふらと揺れる体や、こっくりこっくりと船を漕ぐ頭。
そして

「……ふにゅ……」

という可愛らしい寝言。これのお陰で多くの方達が血の海に沈んでいる。
それは当然耐性の低い生徒だけではなく、花月荘の従業員にも飛び火しているあたり、流石一夏さんだと思う。
生き残っているのは……わたくし、鈴さん、箒さん、シャルロットさん、ラウラさん、更識さん、布仏さん、山田先生、そしてここの女将の九人だけ。後は血の海か暴走して鎮圧されたか前後不覚ですわね。

……まったく。修行が足りませんわよ？

「ふにゃぅ……」

くねりと揺れる猫尻尾。たまにピクリと震える耳。可愛らしい声と行動。

……あぁ……天国ですわ……♪

「一夏さん。あーん、です」
「……んぅ……ぁむ……」

……ふぅ……こんなに幸せだと明日が恐ろしいですわ……。

side　篠ノ之　箒

臨海学校一日目の間、一夏はバスを降りて（降ろされて？）から夕食まで、私達の前に出てくることはなかった。千冬さんの手によって教員室の布団の中に監禁されているのだろう。鎖のかわりに千冬さんが抱き締めていたと見た。

……実に羨ましい。妬ましい。

「はいはい、割と本気の冗談はいいから。今は一夏の写真を撮るのが大切よ……パシャリと」

「……ふむ、その通りだな。妬むより先に私達にできることをやろう……ええい携帯の画像が粗いな。こんなことになるのなら姉さんに改造してもらえばよかった……まあ撮るが」

「後で送ってね」

「無論だ総帥」

「総帥になった覚えは無いわ。……あたしはＩＩＩの本部長よ」

「それは失礼した、本部長殿」

鈴と私はちらりと視線を合わせてから、同時にフッと笑う。

「あ、一夏がおねむよ？　行ってきたら？」

「そうしたいのはやまやまだが、今行ったら確実に千冬さんがラウラにやったあれを仕掛けてくるだろう。ラウラと違って私はか弱いからな。あんなものはできれば食らいたくない」

「……自分が膝の上に乗っけてるものをよく見てから言ってみなさい」

「膝の上……？」

鈴に言われて自分の膝の上を見てみると……おや一夏。いつの間に私の膝に頭を乗せたのだ？

「……」

それと千冬さん。そんな雰囲気が悪いと一夏が怖がるぞ？

そういったことを視線に乗せて送ってみると、凄まじい殺気が私だけ、を貫いた。気配を読んでみると、見事に殺気が一夏を避けている。

「……命知らずね……」

「たまに言われるよ」

……さてと。姉さんへの頼みが増えてしまったな。報酬は一夏の風呂上がり（髪の毛しっとり、肌上気、タオルでわずかに湿っている頭を私に拭かれている）の写真で構わないだろうか？

ちなみにその写真は鈴がアナログオンリーで撮った写真だから流石の姉さんも持っていない……らしい。嘘臭いが。

……当然だが服は着ていたぞ？　流石の私や鈴も一夏の裸を無断で撮ろうとはしない。

……何があってそうなったのかは知らないが、鈴と、鈴の友人の一人は許可をもらっているらしいが。

「……」

「ちょ、箒、あたしを巻き込まないでよ。千冬さんからの視線がいきなり強くなったじゃない」

「それはすまないな、本部長殿」

「次は無いわ。私が出会う前の一夏の写真をくれたら考えないでも

ないけど」

……あったか？　出会いが確か小学校だから……ああ、あるな。

「ちょうだい？」

「構わんぞ。私と千冬さんと姉さんも写っていてもよければ」

「……大事なの？」

「まあ、相当な」

出会ったばかりの一夏と私は、お世辞にも仲が良いとは言えなかった。姉同士が友人だったから、たまたま千冬さんが私の実家の道場に通っていたから……程度の仲だったな。

……それが変わったのは……いつのことだったか……。

「……箒。回想に入ろうとしてるところ悪いんだけど、千冬さんの視線と殺気がそれだけで殺人レベルにまで強くなってきてるから辞めて。いくらあたしでもそろそろ胃が痛いわ」

「……回想という逃避から戻って見れば……ここまでの濃密な殺気は一夏が本気でキレた時以来だな」

「……え？　あんたもアレ見たの？」

「……なんだ鈴もか」

あの時の一夏を思い出してみて……一気に体温が下がった気がする。だから私達は何も言わずに食事を終わらせ、すぐに席を立つ。私のかわりにシャルロットに膝枕をさせて、すぐさま退散する。

……シャルロットの胃の冥福を祈ろう。

# 臨海学校、まだ睡眠中

……すか～……。

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

あたし達はいま、鬼の寝床に来ている。

「誰が鬼だ、誰が」

千冬さんです。……と言いたいのを我慢して何も言わずにスルー。何か言ったら……プチッ、されちゃいそうで怖い。もしくはラウラみたいに

【ガッ！ギヂギヂギヂギヂギヂギヂギヂ……ヴォンヴォンドゴッ！ガズッ！ゴッ！ヴォンガゴォンッ！ズダンッ！！ゴリゴリゴリゴリゴリ……（かなりショッキングな映像であるため、効果音だけでお送りしました）】

……っていうのにはなりたくないしね。あの後しばらくラウラの目のハイライト消えてたし。瞳孔が開きっぱなしになってたし。怖かったわね。

ちなみに、一夏は今は寝ている。お腹も膨らませたし、しばらく起きないだろう。

「……それで、あたし達を呼んだ理由はなんですか？　一夏の写真を全部渡せって言うのだったらＩＳ使ってでも抵抗しますよ」
「安心しろ、それは違う……が、後で商談があるんだが」
「後でですね、わかりました」

どうやらいつもの千冬さんに戻ったらしく、あたしや箒やシャルロットに殺気を叩きつけるようなことはしないでいてくれている。

「なに、ちょっとした興味でな。……お前達、一夏のどこを好きになったんだ？」

千冬さんは片手で一夏を撫で、もう片方の手でビール（作業用オイル、と悪戯書きがされている）を飲みながら聞いてきた。はいはいそういう話ですか。千冬さんも女なんですね。

「あたしは優しいところです。あと、辛いときにそばにいてくれるタイミングの良さ？」
「同じく、辛いときにそばに居て色々な方法で励ましてくれる優しさですね。可愛いからというのも無いとは言いませんけど」

こうしてすぐさま答えを返すのはあたしと箒。箒はどうだか知らないけど、あたしは前に『一夏のどこが好きなのか』を考えたことがあったからすぐに答えられた。

「そうですわね……優しく厳しく激しくわたくしを教育（ちょうきょう）して下さったから……と言うのが始まりで、今は……純粋に好きだから……ですわね。どこが好きなのかはわかりませんが」

まあ、あるわよね。どこが好きなのかわからないけど、なんでか好きって言うのは。

「僕は――やっぱり、優しいところ、です……」

初々しいわね。可愛い可愛い。一夏ほどじゃないけど。

「な……なんで撫でるの？」

「可愛らしいから？」

にこにこと笑いながら言ってみる。

「ラウラは……ラウラ？」

「……すぅ……」

気が付いたらラウラは一夏のすぐそばで眠っていた。

……ラウラ。起きないと危ないわよ。千冬さんのアイアンクローが少しずつ迫っていってるわよ。言ったら矛先がこっちに来るから言わないけど。

「……起きろ、ボーデヴィッヒ」

「むぐっ！？」

おお、口封じ《マウスキラー》。口だけじゃなくて鼻も塞いでるように見えるけど……大丈夫かしら？

それに、ギヂギヂとまではいかないけどミシミシって音はしてるし。骨が軋んでるんじゃ？

「……！……！！」

ぱたぱたと無音で暴れるラウラに千冬さんは冷たい視線を向け、静かに手を離した。こんな時でも止まらずに一夏の髪を撫でたり指先

に絡めたりしている逆の手とのギャップが恐ろしい。

「……話は聞いていたか？　ボーデヴィッヒ」

「はい、教官」

びしっ、とラウラが千冬さんに敬礼を返すけれど、さっきまでのことを見ていたからシュールでしかないわね。

「私は、一夏の心の強さに惹かれたのです」

確かに一夏の心は鋼鉄の粘りとダイヤモンドの硬度を併せ持ったような強さを持ってるわよね。

そのくせ霧や煙みたいに掴み所がなくって、どんな形にも見えるっていう不思議設計だし。

まあ、それでも普通に優しいっていうのはわかるんだけど。

「まあ、色々聞いたわけだが……一夏はお前達にはやらん」

「構いません。奪い取りますから」

「あたしは一夏の方から選ばせてみせようかしら？　それなら千冬さんも邪魔できないでしょうし」

「わたくしはそばにいられるだけで幸せですわよ？　できることなら少し構って欲しくはありますけど」

あたし達三人はニヤリと笑う。ラウラとシャルロットもあたし達の言葉を聞いてやる気になっている。

そして、そんなあたし達を見て、千冬さんはニヤリと……いや、むしろニタリと笑った。ゾクゾクときそうな笑顔だった。

「それでいい。女ならば惚れた男の一人くらい奪って見せろ」

……うわかっこいい。いつも一夏にデレデレしている千冬さんと同一人物とは思えないわね。周りがキャーキャー騒ぐ理由もわかる気がするわね。あたしは一夏がいるから特に騒がないけど。

# 臨海学校、まだまだ睡眠中

こしこしと目を擦って……夜であることを確認した。
……ん。じゃあ寝よう。よい子は寝る時間だよー、と。

……すぴー……。

……はみ……はみ……。

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

私の夜は、一夏に抱き締められて気絶することで幕を閉じる。たまに人生の幕も降りてしまいそうになることもあるが、そんなものは気合いと一夏への愛情でどうとでもなる。
私が死んでしまったら、誰が一夏をどこかの国や個人の魔の手（人体実験上等な不法な研究所など）から守るというのだ！

……束？　あの奇人変人極まりない奴に託せと？　本気で言っているならば、私は貴様の皮膚を剥ぎ取り筋肉と神経を切り分けて筋肉を硝酸で溶かし、神経と血管と骨だけになった体を鑢で少しずつ削って粉にして魚の餌にしてくれる。

まあ、慣れのお陰でしばらくは一夏を抱き締めたり撫でたり頬擦りしたり頬や額にキスしたり嘗めたりできる。堪能しよう。

「……かぷ」

「ッ……！？　ッ……！？」

「はむ……」
「っぐぅ……！？」

「……はみ……はみ……」
「……」（へんじがない、ただの萌え死死体のようだ）

……ぎゅっ……。↑とどめ

ｓｉｄｅ　織斑　一夏

起きたらちー姉さんが幸せそうな顔で俺を抱き締めていた。何でここまで幸せそうなんだろう……？　と思いつつ、俺はちー姉さんを抱き締め直してまた目を閉じる。

……そう言えば、昨日の記憶が無いなぁ……。また寝てたか？睡眠こそが俺の生き甲斐だから、別にいいけど。

……ちー姉さんって、なんかいい匂いがするよな……。

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

前にも言った通り、私の朝は一夏の寝顔を眺めることから始まる。今回は写真ではなく、一夏本人が私の腕の中に居るため、愛情チャージがいつもより早い。
狼耳を着けたぷちかも私の背中に身を擦り寄せていて……ああ、

うむ、役得だ。

ただ、そろそろ一夏に離してもらわないと愛情が暴走して何をしてしまうかわからん。姉弟でそういったことは不味いと頭では理解しているのだが、頭の片隅で悪魔が私に囁くのだ。

『食べちゃえ食べちゃえ』

『法律なんて周りが勝手に決めただけのものだし、ＩＳ学園では親近婚は禁止されていない』

『それに、もうキスはしてしまったんだからおんなじだよ。誤差誤差』

……い、いや、しかしだな……

『やっちゃいなって。弟さんも喜ぶと思うよ？　痛いのは君だけだし』

『我慢は体によくないよ？　ほら、もう限界なんじゃあないのかい？』

『きっと弟さんの体は美味しいよ？　柔らかくて、すべすべしていて……』

……う……。

『……もしかしたら、君のトモダチに食べられちゃうかもよ？　ぱくっ♪　……てさ』

『くすくすくすくすくす……ほらほら、食べちゃいなよ、織斑千冬。きっとすっごく美味しいよ？』

「……ちー姉さん？」

はっ！？　と気が付くと、一夏が私のことを見つめていた。

「……大丈夫？　目が血走ってるけど……」

「……あ……ああ、大丈夫だ、問題ない」

一夏がここで話しかけてこなかったら……まずかったかもしれないがな。

「そっか……まあ、ちー姉さんが平気って言うならそれでいいよ」

そして一夏はまた私に擦り寄り、肩のあたりに顔を埋めて寝息をたて始めた。

「……」

私は無言で一夏の頭を撫でる。まったく、可愛い奴だよこいつは。

……それにしても、一夏が寝ているところを見ると眠くなるな。起きたばかりだと……言う……の……に……。

目を開くと一夏がいた。ぷちか達がいた。たくさんいた。

右を見る。ぷちかが折り重なって眠っている。

左を見る。一夏が私の腕と小さな私を抱えて眠っている。

布団がない。ここはどこだ？

「ふはははははぁ～！ここはいっくんとちーちゃんの夢の中っ！束さんの超科学によりちーちゃんといっくんの夢の世界をくっつけてお邪魔したのだ～っ！」

「出ていけ」
「あぅ、ちーちゃん酷い！束さんはすっごく頑張ったのに！慰謝料を請求します！具体的にはいっくんをハグハグさせあばばばばばばい～た～い～よーーっ！？」
「当然だ。痛くしているんだからな」

ふざけたことを言い始めた束の頭を締め上げる。骨が軋みを上げるが、知ったことではない。

「ちょっと前より格段に強いよーっ！？」
「一夏の貞操を護るためならば、私は鬼にだってなるさ」
「ぴぎぃぃぃっ！？」

数分間締め上げてから振り回して真上に投擲。落ちてきたところで掴んで頭から地面に埋めてやった。犬上家だな。
スカートの中身が見えないように、その辺にあった紐で脚にくくりつけ、放置する。一夏の教育に悪いからな。

「……っぷはぁ！痛かったよちーちゃん。いっくんをハグハグするくらいいいじゃないか。初めてって訳じゃないんだから」
「……初めてじゃない、だと……？」

私がそう聞き返すと、束は私から目をそらして大量の冷や汗をかきはじめた。

「……え、えー？　束さんそんなこと言ったかナー？」
「一夏。束に抱かれたことはあるか？」

束に聞いてもらちが明かないので、今度は一夏に聞く。

「……むぅ……キスまでしかされてない……」

そう言って一夏は小さな私を抱き締めて意識を落とした。

……抱く、とはそういう意味では無かったのだが……そうか、キスまでか。

「ち……ちちち……ちー……ちゃん……？」

……ああ、ここまで怒るのは久し振りかもしれないな。確か、一夏を拐おうとした黒服の言葉を盗み聞きした時以来だ……ッ！

……頭が冴える。すかーっと青空のように澄み渡っていて、それでいて氷河のように冷静だ。

その上体は火照っていて、まるで私が焦熱地獄か煉獄の炎にでもなったような……そんな気分だ。

「さあ、束……貴様の罪を数えろ！」

「に〝ゃぁあぁぁあああぁぁぁっ！！！」

私の夢のなかで、束の悲痛な叫びが響いた。

ｓｉｄｅ　織斑　一夏

……起きてみると、ちー姉さんはなんだか変な顔をしていた。具体的には怒りと憤怒と激情が入り雑じったような……同じか。

……どんな夢を見てるんだろうね？

## 臨海学校、まだまだ睡眠中（後書き）

※千冬の夢の中身はただの夢です。束ならあり得る話ですが、今回はただの夢です。

# 臨海学校、漸く起きた（前書き）

……なんかごめんなさい。

ちー姉さんを起こして一緒にご飯を食べる。ちー姉さんにあーんで食べさせたり、ぷちー姉さんにあーんで食べさせたり、ちー姉さんにあーんで食べさせてもらったり、ぷちー姉さんが小さい雪片を振り回そうとしていたのでぷちかに頼んで止めてもらおうとしたらなぜかころころ転がっていったり、ちー姉さんの膝の上で撫でられたり、白猫耳がくっついていたので猫のポーズをとりながら「にゃん♪」と鳴き真似をしてみたら周囲が赤に染まったりとか……まあ、色々あった。

ちなみに、ののちゃんと鈴も鼻を抑えている手の隙間から血を溢れさせていた。

「……血じゃ……ないわ……」
「これは……血ではなく……」
「……っく……一夏様への……」

「『愛情』よ！」
「『愛情』だ！」
「『愛情』ですわ！」

……仲が良いね。良いことだと思うよ。いろんな意味で。
ついでに言うと、シャルはちょっと致命的とも言えそうなだらしない笑顔で気絶していて、ラウラは鼻血は出していないものの頭がオーバーヒートしたらしく気絶中。
起きている鈴とののちゃんとセシリーも、出血多量で動けないらしい。

……何が言いたいかと言うと、

「可愛すぎるよいっくーーーんっ！！」

こうして俺を拉致ろうとしている束姉さん（一人不思議の森のアリス）を止めることはできないと

「たぁあぁぁばぁあああぁぁねぇえぇえぇえぇっ！！」

復活したちー姉さんのアイアンクロー！束姉さんはえげつないダメージを受けた！

なんと、一夏を落としてしまった！

「大丈夫？　一夏」

しかし、鈴に拾われた。鈴は一夏を拾った！

「……ん。大丈夫だ……お休み」

「これから装備の稼働テストがあるんだから、すぐに起きてもらうわよ」

……どうせシロには使えないと思うけどな。

そう言えば、かんちゃんは機体だけはもうできるからこの臨海学校にも来てるし、装備もいくつか送られてきていたはず。それ使うのかな？

確か完成したって聞いた後、色んな人に話を聞いてちょこちょこ強化していったみたいだし、マルチ・ロックオン・システムはまだ七

割程度だけど荷電粒子砲の方は完成したって言う話だ。直接聞いたんだけど。

……もしかして、俺の分までかんちゃんがやることになるのかね？

それならそれで問題無いような気がするけど。

「それでは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。迅速に行え」

うん、かっこいいよちー姉さん。でもさ、その右手に掴まれてヤバい感じに痙攣してる束姉さんにはちょっと引く。

「あ……あの……織斑先生？　そちらの方は……？」

真耶先生がちー姉さんに恐る恐る聞きにいくと、ちー姉さんは不思議そうに自分の右手を持ち上げて……

「……ああ、忘れていたな」

いやいや、人を一人掴んでおいて忘れるってなにさ。掴んでるのが当然みたいな状態か？

「これは束だ。篠ノ之はこっちに来い」

「は……はい……」

当たり前のように言うけれど、束姉さんはあれでもＩＳを作った大天才（天災？）科学者なんだけど……いいのかあれ。

……まあ、いいか。どうせすぐ復活すると思うし。束姉さんもたい

がいシスコンだからな。ののちゃんとの話のときには元通りになっているだろ。

束姉さんはやっぱりすぐに復活した。今はののちゃんと話をしている。

「やあ！久しぶりだね箒ちゃん！」
「ええ。お久し振りです姉さん。お元気なようで何よりです」
「もちろん元気さっ！箒ちゃんも元気みたいでよかったよ！それにしても大きくなったよね。特におっぱいが」
「姉さんのほうが大きいではありませんか」
「最近またおっきくなっちゃってね～」
「そうですか。やはり大きすぎるのも困り物ですね」

ののちゃんと束姉さんは仲良く話を続けているけど、周りの目が怖いよ。特に一部の人の目が。
ちなみにかんちゃんはそこまで怖くはないけどなにも映していないような目でののちゃんと束姉さんの胸を凝視している。

「あははは……この合宿では関係者以外はこの島には入っちゃいけないはずなんですけど……」
「んん？　珍妙奇天烈なことを言うね？　ＩＳの関係者と言うなら、一番はこの私をおいて他にはいないよ」
「関係者というのが『ＩＳの関係者』ならばその通りですが、『学園の関係者』としては少しばかり足りないような……」

おお、言い返した。

「……ですので、篠ノ之さんと織斑君と……できればそれ以外の人のＩＳも少し見ていただければ『臨時の技術者』として処理できるのですが……」
「やだよ」
「……ですよね。織斑先生に聞いてましたが、やっぱりそうですよね」

まあ、諦めたほうがいいと思うよ？　束姉さんは俺と同じくらい我儘だから。

「まあ、安心していいよ。私は箒ちゃんに頼まれた物を持ってきただけだしね。ついでにフィッティングもしていくけど、別にいいよね」

質問の形をとってはいるけど、どう聞いても引く気はないな。
それがわかったらしい真耶先生は、小さくため息をついてしまった。

「……もう好きにしてください」
「いい判断です山田先生。こいつは何を言っても無駄ですから、山田先生は各班のサポートをお願いします」
「……はぁ……はい、わかりました」
「むぅ、ちーちゃんが優しい……さてはこのおっぱいでたぶらかしたなおっぱい魔神め～！」

そう言って束姉さんが真耶先生に飛びかかって行って……視界がなにかに塞がれた。多分鈴の手。耳も塞がれている。多分こっちはののちゃんだろ。

……まあ、何が起こってるのかは大体わかってるけどさ。気配と原作知識で。

十秒くらいしてから解放される。そこには顔を真っ赤にしながら胸を両手で庇っている真耶先生と、頭から砂浜に突っ込んでいる束姉さん。そして束姉さんが立っていただろう場所の一歩後ろに立つちー姉さんがいた。

……何があったのかわかりやすいな。本当に。

「……姉さん。大丈夫ですか？」
「ううう……ちーちゃんが酷いんだよ箒ちゃん……傷心の束さんを慰めて？」
「はいはい」

そう言いながらののちゃんは束姉さんの頭を撫でる。どっちが姉がわかったものじゃない。

「……復活！」
「ならもう一度いっておくか」
「ひーん助けて箒ちゃーん！」
「織斑先生。話が進みませんのでそろそろ……」

……本当に、どっちが姉か……。
まあ、束姉さんは楽しければ良いって感じなんだろうし、ののちゃんを守るのはちゃんとやってるから姉としての仕事はやってると言ってもいいんだけど。
……不器用だけど。

「ううう……ありがとう箒ちゃん……」
「構いませんよ。姉妹じゃないですか」
「そんな優しい箒ちゃんにお姉さんからプレゼントぉーっ！があるよ。さあさ大空をご覧あれっ！」

腰に左手を当て、右手を空に向かって突き上げる束姉さん。それを見ていたほぼ全員は、つられて空を仰ぐ。

ズムッ！

鈍い音が響き、銀色の塊がそこに現れていた。
落ちてきたようには見えなかったし、見えないほどの高速で落ちてきたにしては衝撃波やらなにやらが少なすぎる。しかしそれでも放射状の落下跡があるので落ちてきたはずなんだが……まあ、慣性停止か何かをやったんだろう。束姉さんだし。

「じゃじゃーん！これぞ私が箒ちゃんのために作った専用機こと『紅椿』！箒ちゃん以外が乗ろうとするととりあえず周りに居る奴皆殺しにするまで止まらないようにプログラムしてあるから注意してね！」
「……何をやっているんですか姉さん。危険すぎるでしょう」
「しょうがないよ。全スペックが現存するほとんどのＩＳを凌駕するＩＳだからね。奪われたときのこともしっかり考えておかないと。まあ、皆殺しにするって言ってもちーちゃんといっくんと箒ちゃん、そして私自身は平気なんだけど」

……あれ？　現行ＩＳ全てを上回るんじゃ？

「ちなみに、速度関係と一部の機動系は白式……いや、シロが上だよ？　シロはそれに特化して作ってあるからね」

……なるほど、そのせいか。確かに原作ではコアは一つだったはずだし。
もしかして、紅葉の方もコアをいくつか積んでいたりするのか？

「積んでるよ？」

積んでるそうだ。恐ろしいな。

「さあさあ箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをするからね。おいでおいで～♪」

「……全く、姉さんは……」

ののちゃんはそんなことを言っているが、ちょっと嬉しそうだ。

原作と違って大抵の場合笑っているようになったののちゃんの『ちょっと嬉しそう』は、『すっごく嬉しそう』と訳して構わない。

「……それでは、お願いします」

「堅いよ～。実の姉妹なんだからもっとキャッチーな呼び方でいいのに」

「……例えば、どんな？」

あ、これ本気でわからなかったんだな。嫌みとかそういうのじゃなくて。

「……うーん……」

「……むぅ……」

「……うーん……」

「……むぅ……」

「似た者姉妹だと言うのはよくわかったから、さっさとフィッティングとパーソナライズを終わらせろ。悩むのはそれからだ」

「わかったよちーちゃん。それじゃあ箒ちゃん、あとで一緒に考えようね～」

ぽちっ、とよくあるボタンを押す音が鳴り、紅鮭（きっと違う。と言うか違ってほしい）がしゃがんでから操縦者を受け入れる形態に移る。しゃがむ機能とか地味に便利だな。

「そうですね。あとで一緒に」

ののちゃんは束姉さんににっこりと笑顔を向けて言った。原作よりもずっと仲が良い。よかったよかった。兄弟姉妹で仲が悪いのは嫌だよ俺は。

みんな仲良くが一番だ。その方が厄介事も減って睡眠時間が増えるし。いいことずくめだ。

「え～っと、箒ちゃんの戦い方は基本は剣だよね？」

「はい、そうですが」

「よかったよかった。近接戦闘主体の万能型に調整してあるからすぐ馴染むと思うよ。なんと自動支援装備付き！すごいでしょ？」

「姉さんの頭がどうなっているのか本気で気になるくらい凄いと思いますよ。流石姉さん」

「えっへん！」

それは誉めて……るんだろうね。ののちゃんの誉め方はよくわからない。

まあ、束姉さんは嬉しそうにしてるし、別に良いけど。

「はい、フィッティング完了～♪　パーソナライズが終わるまでは大人しくしててね？」

「はい。……それにしても、凄い機体ですね。スペックから色から装備から何から何まで」

「そりゃあもうね。束さんが箒ちゃんのために直々に作ってる訳だし、特別であって当たり前だよ」

まあ、束姉さんもシスコンをこじらせてるしね。特別製で当然でしょ。

あとセシリー。こう言う時には話しかけない方が良いぞ。束姉さんはちー姉さんとののちゃんと俺以外には――原作にはもう一人、娘としているくーちゃんとやらが居たけど、俺は知らないから省くとして――基本毒舌だから。また心を折られても知らないぞ。

そこで、群衆の中から小さな声が聞こえた。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？　身内ってだけで」

「だよねぇ。なんかずるいよねぇ」

……そうか？

「身内って結構大切なことだと思うけどな。俺もちー姉さんの身内じゃなかったらＩＳ学園き来る前に拐われて解剖なり実験なりに使われてたと思うし」

なんかいきなり空気が重くなった。なんでだろうな？

「そもそもなんで家族のことに口を出すのかわからないんだが。こんなの誕生日の贈り物と変わらないだろうに。ちなみにＩＳのやり取りは法律で禁じられているけど、それは『前に束姉さんから渡された４６７機について』の話だと明言されてるから、束姉さんが新しく作ったＩＳは束姉さんの好きにしちゃって良いんだよね。悔しかったら束姉さんに気に入られるように動けば？　もう無理だけど」

「い……一夏？　なんで挑発してるの？　と言うか誕生日のプレゼントにしては規模が大きすぎると思うんだけど！？」

「挑発？　してないよそんなの。なんであんな現実を見てない知識も足りない脳が足りない奴にどうして俺が時間を使ってやらなくっちゃいけないんだ？　そんなことをやってる暇があるなら寝るよ」

「同感だね。あれは歴史の勉強をしたことがないか、あるいは夢見がち過ぎる脳味噌のお陰で宗教の教主とか為政者の建前だけの戯言を心の底から信じ込んじゃっている可哀想な馬鹿なんだから。あんなのに挑発の言葉を向けるくらいならいっくんを膝枕していた方がずっと有益だよ」

「それってただの欲望ですよね！？」

「シャルロット。諦めろ。姉さんも一夏もこうなったら暫く止まらん」

「あ、そうだいっくんシロ見せて。束さんはシロがどんな風に進化してきたのかに興味津々なんだよ」

「良いですよ」

「止まったぁ！？」

止まるさ。面倒だし。

……おいで、シロ。

## （一部を除き）最高性能、紅椿

束姉さんがシロを調べている間にののちゃんの紅梅のパーソナライズが終わったらしい。ハイパーセンサーに出てきたらしいそれを視線でクリックしてから、ののちゃんはゆっくりと空に浮かび上がり始めた。

「で、いっくんのシロに新しい機能をつけてあげよっか？　コスプレ機能で千種くらいの服が展開できるように」

「辞めてください」

「そう言うと思ってたよ。だからこれあげる。コスプレ用のＩＳね」

そう言って束姉さんが渡してきたのは灰色っぽいＩＳコア。二次移行はしていないらしく、まだ丸い。

……束姉さんは何を考えてこんなのを作ったんだろうか？　あと、名前は？

「名前はそのまま【コスプレイヤー】だよ。【クロゼット】でも良いけどね」

「じゃあクロで」

「クロゼットからクロね。いいんじゃない？　なまじシロっていうＩＳを持っているせいで色だと勘違いしちゃうよね」

……まあ、そのあたりはしょうがない。呼ぼうとするとまた変な呼び名になると思うし。クラレットとか。

ちなみにクラレットと言うのは赤ワインのことらしい。あんまり一般には知られていないけど。

だから、ホテルに行って「クラレット一つ」ってからかうのはやめてあげよう。新米だったらまず引っ掛かるから。

「それじゃあパーソナライズも終わったみたいだし、空飛びついでに刀を使ってみようか？」

「刀……ああ、これですか」

「そうそう、それそれ。右のが『雨月』で左のが『空裂』ね。武器のデータ送るよー」

束姉さんはちゃちゃっと空中に指を走らせて武器データをののちゃんに送る。それを確認したらしいののちゃんは、同時に二本の刀を抜いた。

そう言えば、ののちゃんは二刀流の方が強かったね。一本の方がちょっとだけ上手いんだけど。

「束姉さんの解説付きだよ～♪　雨月と空裂、どっちからがいい？」

「……では、雨月から」

「おぅけぃ！雨月は対一使用の武装で、打突にあわせて刃部分からエネルギー刃を出せるんだよ。なんと連射機能つき！射程はアサルトライフルくらいでたいして広くないけど、紅椿の機動性なら大丈夫！やってみて？」

束姉さんのお願い（？）を聞いたからかどうかはわからないが、ののちゃんは右手に持った雨月を雲に向けて突き出した。

するとののちゃんの右手の周りに赤色の光球が現れ、次々に飛び出してその雲を見事に穴だらけにした。

「次は空裂ねー。こっちは対集団用で、斬撃に合わせて帯状の攻勢エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動展開してくれるから超便利、というわけでこれ落としてみてね」

束姉さんが出したのは、十六連装のミサイルポッドが二つ。それが現れたと思った瞬間に、一斉射撃を行った。

「ののちゃんがんばー」

「百人力だ！」

ののちゃんがそう言ったのと腕を振るったの。いったいどっちが早かったのやら。

とにかく紅楸の出した攻勢エネルギーの帯がミサイルをまとめて撃ち落とす。出力すごいな……。

「まあ、これで武装の説明は終わりだよっ。あとは慣れていくにつれてちょこちょこ追加されていくはずだけど」

……後々になって凄まじい超兵器が出てくるような気がしたのは間違いだろうか？

「……奇遇ね一夏。あたしもなーんか嫌な予感がするわ」

『うむ。妙な気配が近付いてきている気がするしな。遠すぎてあまりはっきりとはしないが』

……うん、たぶんそれ束姉さんのやったアレだと思う。なんだっけ……シルベスタ・スタローン？　違う気がするけど。

例えるならば、ラルちゃんのＩＳの名前がツヴァノレシェフ・レーズンだっていうのと同じくらいおかしい気がする。

「それはおかしいわね。いろんな意味で」

「おかしいよな。色々と」

うん、おかしいな。

「ああ、姉さんに質問が」

「ん？　なにかな～？　箒ちゃんの質問だったらなんでも答えちゃうよ～？」

「……もう一つ武装があるのですが……」

「……え？」

ひゅん！と風を切って降りてきたののちゃんが、束姉さんに自分の見ている画面を見せる。

「……もう出ちゃったのか。っていうか、流石の束姉さんもアレだけで穿千を構築するなんて予想してなかったよ……」

「……やっぱり、おかしいですか？」

「ほんとなら十月くらいに構築されると見てたんだけど……まあ、速いならそれに越したことはないから良いけどね」

なるほどね。本当なら……確か……七巻で構築されるアレか。出力可変型のプラスターライフル。威力と射程距離は折紙付きの。

「うーん……ついでに試し撃ちしてみる？　大出力すぎてＰＩＣを姿勢制御に結構回さなくっちゃまともにあたらないけど」

「いえ。エネルギーがそろそろ切れそうなので」

ののちゃんはしっかりそっちにも目をやっていたらしい。流石武人だ、視野が広い。

でも、確か紅榎にはワンオフがあって、エネルギー切れとは無縁のはずだけど。

……ああ、そうか。まだ使いこなせていないんだな。貰ったば

っかりだし、当然と言えば当然か。

「……紅椿だよ。もう、色々凄いことが起きすぎて頭が痛くなってきたよ……」

そんなことを言うシャルに、その場で座った俺は自分の足を指差して聞く。

「寝る？　俺の膝枕とか貴重だよ」

「フゥハハハァー！いっくんの膝枕は頂いたいいたい痛い痛い痛い頭がぎしぎしぎしぎちぎちぎちぎぢぎぢ言っちゃってるよちーちゃあぁぁあぁぁん！？」

……お大事に。

## 緊急事態、わー大変

ちー姉さん、事件です。いや、本気で。
原作通りと言っちゃえばそれで終わりなんだけど、なんか明らかに空気が痛い。あと眠い。

「一夏。今は流石に寝ちゃ駄目よ」
「ん～……わかった」

眠いんだが……。まあ、仕方無いか。ゾナハ虫による監視網で見ている限り、どうも面倒なことになっちゃったみたいだしね。
ハワイ沖で試験稼働中だった軍用ＩＳが暴走したようだ。名前は……シルフィード・エヴァンジェル……だっけ？　違う気がするけど。

とにかくそれが暴走して、何故かここのすぐ近くを通過するルートを取るようだ。一時間はかからないくらいで。
地球上のどこにでもいる監視用ゾナハ虫でわかっていたけど、本当に面倒。
ののちゃんがＩＳを手に入れて、そのスペックを見せつけた当日にこんなのが来るなんて……おかしいとは思わないか？　俺は思った。これ絶対束姉さんが絡んでる。原作でもそうだったはずだし。

ちなみにいまはもう説明が終わり、作戦会議の真っ最中だ。

そのＩＳ……シルバリオ・ゴスペル（空間投影型ディスプレイに載ってた）の仕様は、広域殲滅用の特殊射撃型。銃ではなくそれ専用の射撃用の武装があるらしい。弾丸は実弾ではなくエネルギー弾で、

触れると小規模ながら爆発を起こす。
エネルギー総量は軍用ＩＳだけあってかなり多く、かなり長い時間飛び続けることができそうだ。
その上攻撃と機動力に特化した機体で、ちょっとシロに似てる。武器が剣か射撃武器かの差はあるが、たった一つしか武装がないところもそっくりだ。

……きっついな……セシリーが超遠距離から狙撃して曲げ撃ちで一方的にぼこせればなぁ……。
ＩＳを使わなくてよくて、さらに後々のことを考えないでいいんだったら、千の顔を持つ英雄で束姉さんが作ったあの無人ＩＳを数億単位で作って蹂躙させるなり宇宙戦艦降らせるなりしてやれば楽にいけるけど……後の事を考えると……無理なんだよなぁ……。

ミサイル弾幕も多方向同時射撃とエネルギー弾の爆散が相手なら相当多くつぎ込まないといけないだろうし、原作そのものよりたぶん少し強くなっているだろうから厄介だ。
束姉さんが何を考えているのかはわからないが、俺とののちゃんだけを強くして用意した敵役を強くしない……何てことがあるわけないし。

……嫌な予感がするな。これは三枚目の切り札も切らされるのか？
……使いたくないな……あれ使ったら絶対ちー姉さんに怒られる。

もうミサイルを秒間一万くらい撃ち込み続けるとか、大出力レーザー兵器で一撃必殺とかそっちの方が楽だと思う。
駄目だしされたらもうアリス・イン・ワンダーランドで方向感覚とハイパーセンサーいかれさせてシルバースキン・リバースで動きを

止めてから叩き斬るしか

「一夏っ！」
「わうっ！？」
いきなり尻尾を掴まれて変な声が出てしまった。びっくりしたぁ……。

「なに？　尻尾は敏感なんだから優しくしてくれよ」
「あ、ごめん。……で、話は聞いてた？」

全く聞いてない。どうやって潰すかばっかり考えてたから。

それを敏感に感じ取ったのか、鈴は溜め息をついた。溜め息をつくのはいいから尻尾をわしゃわしゃしないでほしい。腰の内側からぞくぞくしてくるから。そしてなんか妙な気分になってくるから。

「ふぁっ！ぁ、ゃ……んんっ！？」
「……箒。ちょっと私のこと殴ってくれない？　手が……止まらない……っ！？」
「ぁ、ぅあ、や、鈴、だめだって、あ、ふぁあっ！」

……いやいやいやかなり本気でこれはまずいって声抑えられないし体は動いてくれないしやばいやばい本当に待っ

ゴガスッ！

鈍い音が響いて鈴の手が尻尾から離れた。本気でやばかった。真面目に意識とか色々なものが飛ぶところだったぞ。
そうやって抗議したいところだが、全身がくったりとして動きたくない。動けるだろうけど動きたくない。

「――凰。貴様、私の一夏に手を出すとはいい度胸だな」
「ぉおぅあぁぁ……あ、頭が……頭が割れ……っ！」
ちー姉さんの情報端末クラッシュ！鈴は頭を抱えて悶絶している。
痛そうだな。なにもしてやらないけど。

「一夏、大丈夫？」
「……ぉー」
「……大丈夫じゃなさそうだね。一夏が福音を落とすことになったんだけど……いける？」
「……十分休ませてくれればなんとか……」
「うん、わかったよ」

どうやらここは原作通りに俺とののちゃんが行くことになったらしい。すっごい体力使った……前まではこんなこと無かったんだけど、なんで急にここまで敏感になったんだ？
……束姉さんがなにか弄ったのか？　俺がシルファリオン・ドスペラードに苦戦するように。

「一夏。シルファリオン・ドスペラードではなくシルバリオ・ゴスペルだ。お前の特性はよくわかっているから言うが、無理をして呼ぶ必要は無いぞ」
「じゃあシルバリオファミリーで」
「シルバニアファミリーか。そこまで呼べるならシルビーでもシーでもギンでも良いだろうが」
「じゃあギンにする。」

……ああ、よかったよかった、普通に喋れるくらいまでは回復した。
回復できなかったらどうしようかと思ったよ。

ぽてりと転がり、シャルの膝に頭を乗せる。ちょうどいい高さだと思いながら、鈴がちー姉さんにお仕置きを受けているのを見る。

「……」

ギシギシギシギチギチギヂギヂギヂギヂ……（アイアンクローで締め上げている音）。

ヴォンヴォンドガンッ！ガッ！ガッ！ドムッ！ヴォンドムッ！ダズンッ！！（そのまま振り回して机、壁、壁、床、振り回してからの床の順番で叩きつけてから踏みつけた音）

ドゴスバゴンッ！ダムボゴッ！（蹴り上げて天井に叩きつけられて落ちて床にぶつかった所に鳩尾のあたりにちー姉さんの爪先が入った音）

「お。織斑先生！いくらなんでもやりすぎです！凰さん死んじゃいますよ！？」

「安心しろ山田先生。凰はこの程度ならあっという間に復活する」

「そんなわけが」

「ぷはぁっ！あー、自業自得とはいえ死ぬかと思ったわ」

「なんで無事なの！？　あんなにボコボコボロボロズタボロで、あのときのラウラより酷かったのに！？」

「気合いよ。あと一夏への愛と謝りたいという強い思いの力」

「どんなさ！？」

……今って一応緊急事態のはずなんだけどね。緊急事態（笑）になっちゃった。

まあ、こうして笑い合っている方が俺達らしいと言えば俺達らしい

んだけど。

# 出発、紅と白

回復した俺はののちゃんに運ばれて作戦区域に入る。もうすぐ白マリオ（違うはず。方向転換の度に気の抜けるような音が聞こえるようなＩＳは嫌だ）と接触するはずだから、それなりに気を張っている。

ただ、運ぶ時は軽い方が良いだろうと言うことで小さく小さくなっている。現在の身長は９２センチくらいのはず。

このサイズになったときにシャルが暴走しかけてラウラとセシリーに止められていたのが記憶に残っている。正直に言って、ちょっと怖かった。ついさっきの鈴よりはましだったけど。

その鈴は自分の右手を左手で掴んで

「鎮まれ……あたしの右手……っ！こんなところで暴走しちゃ駄目なのよ……！」

という中二感溢れることをやっていた。確かに実際に暴走されるとまずいことになるから助かるけど。

展開装甲から放出されている真紅のエネルギーを放出し、俺を乗せているとは思えないほどの速度で紅椿（べにつばき）は空を駆ける。

「……一夏。惜しいが違う。紅椿（べにつばき）ではなく紅椿（あかつばき）だ。アカでいい」

「アカちゃん？」

「ちゃん付けはよせ。私の力が抜ける」

それはまずいな。もしギンとぶつかれなかったら作戦遂行が難しく

なる。
束姉さんがよっぽどの事をしていなければ勝てると思うんだが、束姉さんはそれをまるごとひっくり返せるような『よっぽどの事』を用意しているかもしれないし、油断はできない。
してなければしてないでその方が嬉しいけどな。最善は、今の俺がこうして考えていることが全部的外れの考えすぎで、束姉さんとはなんの関係もない暴走事故だった、って所かね。ついでに新兵器の暴発かなにかで自滅してくれるとさらに嬉しい。
……ないだろうけど。

「……想像以上にエネルギーの消費が早いな……これでは本当に一夏を運んだ後は大したことはできんぞ」
「この速度で運んでくれてるだけでもありがたいけどな」
「そうか。一夏がそう言うならばよしとしよう。……まだ眠いか？」

ののちゃんはまだ小さい俺を見てそう言う。ある意味では俺はいつでもどこでもどんな時でも眠いんだけど。

「……大丈夫だ。接敵五秒前には起きてるよ」
「……ならばいいがな。……あと十秒だ。集中しろ」
「あいよ。ののちゃんも接敵後は自己判断で頑張って」

俺はそれを最後に意識をギンだけに集中する。
できれば一撃で落として何事もなく帰りたいんだけど……という思いを込めて、零落白夜を雪片を振る一瞬だけ発動して攻撃をする。
瞬時加速からの零落白夜はエネルギーの問題であまり使ったことがなかったが、数回使ってみた時以上にガリガリとエネルギー残量が

削られる。これも高速戦闘仕様ならではのことだろうな。

しかし、ギンはなんと当たる直前にぐにゃりと体をよじらせて零落白夜の光刃を避けた。中の人間のことが心配になるような避け方をしたんだが、大丈夫なのか？

やってるんだから平気だろうと割り切って、俺は速度を落とさないまま反転してギンに攻撃を加える。速度だけならののちゃんのアカにも負けないシロは、僅かにギンの装甲を削り取った。

『……敵機確認。危険度Ａと判断。攻撃レベルＡで対処する』

ギンは異様に正確な機動で剣を避け、至近距離から弾幕を撃ち放ってきた。

……っておいなんだあの弾幕の密度は。気持ち悪いんだよ。

「お前のやったミサイル弾幕も似たようなものだ」

ののちゃんがそう言いながら現れ、ギンの弾幕を纏めて切り捨てた。エネルギーを相当食いそうだけど便利だな。

「ののちゃん」

「わかっているさ。援護する」

以心伝心だな。

ギンの翼のようなスラスターに数多く存在している砲口から、小さな羽根のようなエネルギー弾が発射される。弾幕ゲームは神経使うからあんまり好きじゃないが、苦手じゃない。

何が言いたいかというと、このくらいの弾幕なら普通に避けられると言うことだ。

それにしても、ギンのエネルギーはどれだけあるんだろうか？　二時間半以上高速飛行を続け、今はこうして高機動戦闘に加えて圧縮エネルギー弾幕をばら蒔いているというのに、一向に切れる気配がない。

「……一夏。一分預かるぞ」

なにかを考え付いたのか、ののちゃんは高速で転回して彼方へと飛び去っていった。何がしたいのかはわからないが、ののちゃんに任されちゃったんだから仕方無い。一分くらいだったら普通に持たせられるだろうし、別にいいけど。

ののちゃんがいなくなった分密度を上げたギンの弾幕だが、この程度だったら速度と気合いにまかせて避けきれる。
時々掠りそうになるが、シールドエネルギーが削れるだけで大したダメージは無い。

『一夏。それの動きを止められるか？』

急にののちゃんからプライベート・チャネルの通信が入る。まあ、可能か不可能かで言えば可能なんだが……そこまで離れて何をするんだ？　アカには遠距離系の武器は……あったな。そう言えば。

『あいよ。でも止めるのはちょっと時間がかかるから、少し待っててくれ』
『わかっているさ。落とされるなよ』

通信が切れて、ののちゃんが飛んでいった方向からかなりのエネルギーが感知された。

同時にギンも気が付いたらしく、ののちゃんの方に向かって飛んでいこうとしたが、

「よっと」

瞬時加速で回り込んだ俺がその道を塞ぐ。ギンはこの程度では止まってくれそうもないので、ショットガンをばら蒔くことで無理矢理足止めをする。

高速飛行時には実弾系射撃武器の威力は上がる。ギンはショットガンの弾を見事に避けきって見せたが、速度が僅かに落ちたし機動の道も見えた。

「そこだ」

その道を通ろうとしたところで、空間固定で動きを止める。あとは俺がののちゃんとギンを繋ぐ直線から移動すれば、ののちゃんが決めてくれるだろう。
ギンの全身を固めている空間固定を維持しながら、俺はその場から十メートル左に移動する。

『恐らく、これを撃ち終わったら紅椿のエネルギーは切れるだろう……運んでくれよ？』

まあ、画面を見る限りかなりのエネルギーを集中しているわけだし、予想はしてたからいいけどね。

『穿千……発射！』

カッ！と真紅のエネルギービームが超高密度圧縮状態で放たれた。

# 出発、紅と白（後書き）

白マリオ「ィヤッフー！」

**……いや、嘘だろおい**

ののちゃんの撃った超高密度圧縮エネルギー・ビームがギンに接近する。それは一瞬のことだったが、何でかかなりゆっくりに見えた。そのゆっくりな世界のなかで、ギンが動く。翼のようなスラスターの砲口を全てののちゃんの方に向け、まるで鷹か鷲のような大型の鳥がその翼を広げるように、スラスターをばさりと動かした。

砲口が光り、単発の小さなエネルギーの羽根が撃ち出されるのかと思ったが、撃ち出された羽根がギンのすぐ前方で集束を始める。溜めの時間は僅かだったが、三十六の砲口から随時追加され続けたエネルギーの総量は馬鹿にならない。

そしてギンがスラスターを羽ばたくように前に押し出すと同時に、集束しきったエネルギーの塊が羽の奔流となって放出された。

……こんな攻撃って原作にあったっけ？　束姉さん印のちょびっと魔改造か？　……ちょっとじゃねえよ！

空間固定は解けないし、接近してののちゃんの大出力レーザーに巻き込まれるのも嫌なので左の衝撃砲で攻撃。翼の一部を削り取ってダメージを与えるついでに、例の羽の奔流のエネルギー供給の邪魔をする。

そうしている間にゆっくりした世界の中で、ののちゃんとギンのエネルギーの奔流同士が正面から衝突した。

轟音が響き、エネルギー同士がお互いを消滅させ合う。どちらもエネルギー兵器であってレーザー兵器でなくてよかった。レーザーだったらお互いにすり抜けて両方に当たるから。

エネルギーがぶつかり合った中心で衝撃波が起き、遥か下の海面にまで被害が行っている。
先生達が海上を封鎖していてくれて助かったな。こんなところに船なんかがいたら、確実に転覆するか壊れてしまうだろう。本当に、封鎖してくれていて助かった。

確かに海上は封鎖されている。だから、船がいるはず無い。つまり、シロが映し出している船（これ）は『こんな所にはいない』。きっと蜃気楼かなにかだな。そうに違いない。

舞い踊る羽と真紅の極光はお互いに削り合い……ののちゃんの方が撃ち負け始めた。
確かに初めのうちはののちゃんが圧倒していたが、やはりエネルギーの使いすぎが痛かったらしい。あと数秒は持つだろうけど、それ以降は保証できない。

だから俺はギンにかけていた空間固定を解除し、ののちゃんの所に瞬時加速で向かう。ギンにグレネードをいくつか投げ付けておくのも忘れない。

……間に合うかね？

ｓｉｄｅ　篠ノ之　箒

私は福音との撃ち合いになり、拮抗しているのを見て作戦の失敗を悟った。
確かにあんな砲撃方法を福音が持っているというデータは事前のス

ペックデータにはなかったが、それでも失敗は失敗だ。

私の策は福音に大出力砲撃系の装備がないことが前提で、撃ち合いになることを想定の中に入れていなかった。

それに、と肩の穿千に目を向ける。

穿千は相当エネルギーを食う兵器だろうと予想はしていたが、まさかここまでのものだとは思っていなかった。

高速の移動と一夏の運搬でそこそこエネルギーを削られていたこともあるが、それでも七割近く残っていたエネルギーがどんどんと削られていくのがわかる。

エネルギー残量のゲージがどんどん短くなって行き、ついに警告メッセージが視界の隅に点灯し始めたが、私は無視を決め込んで前に視線を向ける。

今砲撃をやめてしまえば拮抗している福音の砲撃に飲まれてしまうし、かといってやめなくともいつかはエネルギーが切れて同じ未来が待っている。

八方塞がりとも言えるこの状況の中で、私は前だけを見つめ続ける。

……なぜか、目まぐるしく変わっているはずの今が遅くなり、そして私の過去にあった思い出が頭の中身を占領して行く。

一夏との出会い。私の実家の道場で私が竹刀を振っているのを、一夏は壁に寄りかかりながら眠そうな目で眺めていた。

一夏との初めての会話。いつも私を眺めているだけの一夏に竹刀を突きつけ、『稽古をつけてやる』と言ってやったこと。

初めての試合では、一夏は私の剣をひたすら避け続け、そして時間切れまで一度も攻撃らしい攻撃はしてこなかった。
何度も延長して試合を続けて、三回目の延長の試合で一夏は私の振った竹刀に自分から当たりにいった。

試合に勝って勝負に負けた私は、何度も一夏に向かっていく。この頃に学校でよくからかわれたのだが、一夏はからかわれても平然とあしらっていた。

ただ一度一夏が本気で怒った時。千冬さんを悪く言った教師は次の日には一夏を見るだけで恐慌状態となるようになり、学校をやめさせられた。

ＩＳが世界に広まり、私は姉さんの妹と言う目で見られることが多くなった。しかし、一夏は今まで通りの私として見てくれた。

転校してからは電話もできず、手紙のやり取りもできないという状態が続き、私は少しだけ姉さんを恨んだが、それはすぐに政府に向いた。

しばらく続く色褪せた生活。完全に白黒（モノクロ）ではないだけましかもしれないが、姉さんの失踪の後に何度も行われた尋問に辟易としていた。

剣道大会での優勝。確かに色々なことがあってなにかに当たりたいと言う気持ちがあったことは認めるが、自分の剣のあまりの醜さを見て、頭の中身を抑え込む術を身に付けた。

感情を抑制し、気に入らないものをただ否定するだけということをやめてみれば、少しだが交遊ができた。やってみれば簡単なことだ

ったのだ、と考えたな。

そして、一夏がＩＳを使えるという話が広まり、ＩＳ学園への入学が決まったという話をテレビで見た。

……少し前までならあまり素直に認めることはできなかっただろうが、今ならできる。

私は一夏が好きだと。

そしてＩＳ学園での再開。全く変わらない一夏に苦笑いと、それ以上に嬉しいという思いが溢れる。

抱きつかれた時には少し驚いてしまったが、けして嫌ではなかった。

ここでも私が一夏のことが好きだと再確認。

一夏に振り回され、やきもきし、甘えてくる一夏を可愛がり、真剣に向き合い、生涯の友を得て……今、私はここにいる。

……ああ、私はまだまだ死ねないな。一夏に告白もしていないし、鈴達との掛け合いも楽しい。

だから、私はエネルギーの放出をやめた。

穿千は真紅のエネルギーの放出をやめ、がしゃんと砲口を閉じる。

それと同時に展開装甲を防御に使おうとエネルギーを集めたところで、一夏の乗ったシロが私を抱えて砲撃範囲から移動した。

「助かったぞ、一夏」

「なに、気にすんな」

一夏と私はそう言いながら笑った。

……それにしても、お姫様だっこを一夏にされるのは……初めてだな……。

## 強制睡眠、そして一時帰還

ののちゃんを抱えてギンの砲撃を避ける。羽根の奔流はそこそこ離れた海面に衝突してかなりの被害を出していたが、まあ、少なくとも今はどうでもいい。

海面にギンの砲撃が衝突すると同時にギン本体の方からも爆音が響く。俺が手土産に投げつけておいたグレネードが爆発し、ギンのシールドエネルギーをそこそこ削り取ったらしい。ギンの装甲が僅かに削れていたため、絶対防御も発動していただろうと予想される。

「……ちょっと暴れるから、下りててくれる？」

「……ああ。悔しいが、あまりエネルギーが残っていない。……後は任せた」

そう言ってギンの機動用エネルギーを相当削っていったののちゃんは、海面近くにまで下りていった。

どうやら海面近くでＩＳを解除して、エネルギーを少しでも回復させようというつもりらしい。アルカリ乾電池じゃあるまいし、無理だと思うけど。

ワンオフでも発現させれば話は変わってくるんだろうけど、今は使えないはずだし。

……まあ、気乗りはしないが頑張ろうかね。

頑張ろうと言ったが、結局やることは変わらない。相手の撃ってくる弾幕を避けて、こちらの攻撃を当てる。

羽根の弾幕自体の速度があまり速くはなかったことが救いとなり、

今のところ被弾ゼロ。ただしそろそろ決めないと機動系統のエネルギーが不味い。三割くらいしか残っていないし。

遠距離系の武器はあの弾幕を抜けられず、接近戦に持ち込もうにもやはり弾幕に遮られる。

もう一度空間固定で止めてしまえば良いのだろうが、ギンをまるごと止めるとなるとかなりのエネルギーを持っていかれるし、かなり離れているから余計に持っていかれる。

近ければ近いほど、止める空間が狭ければ狭いほど、使うエネルギーは少なくなるが……逆に言えば遠ければ遠いほどエネルギーを使うわけだ。

はっきり言って、制限解除していないシロだとエネルギーが不安。と言うか、まず足りない。

……や～れやれ。後が怖いぜ……。

束姉さんに頼んでシロにつけてもらった特殊な武装は三つ。

一つは曲げ撃ち可能な衝撃砲。かなり初期にお披露目となった、両拳の狡い武器。

一つは空間固定能力。使いどころは限られるが、かなり使える第二の能力。

そこにちー姉さんのリクエストで雪片弐型が入り、偶然（物語的には必然）に零落白夜が入るが、俺がお願いした能力ではないので除外する。

三つ目の特殊な武装。それはさらにピーキーで、試合ではけして使

えない能力だったりする。

それを使おうとした所で、違和感が走る。

確認のためにシロに捜査を頼むと、すぐに結果が出てきた。

ほんの数秒前までは三割くらいは残っていた駆動系エネルギーが、全くのゼロになっていた。

そして駆動系のエネルギーが減った分、満タンを越して増えているシールドエネルギーを見て確信した。

……束姉さん。確かにこうすれば俺はＩＳの絶対防御の致命領域反応のお陰で動けなくなるし、確実にしばらくの間退場させられるだろうけど――

動きが止まった俺に、ギンが翼のようなスラスターの砲口を向ける。

そしてそこから一斉に発射されたエネルギー弾幕が、俺の視界を埋め尽くす。

――いくらなんでも、これは酷いだろ。

そう思いながら、俺はののちゃんにプライベート・チャネルを繋ぐ。

伝える言葉は一言。

『ごめん、なんか無理っぽい』

それと同時に、あるものをののちゃんのＩＳであるアカに送りつける。

そして全身に衝撃が走り、シールドエネルギーがガリガリ削れていく。

……こっそり体を強化しているからあんまり痛くはないが、シールドエネルギーがひどく削られていくお陰で意識が飛び始めた。

……任務失敗かぁ……。

side　篠ノ之　箒

一夏からの通信が入った瞬間に、私は再び紅椿を展開して空を舞う。福音の砲撃の直撃を受けて巨大な爆発に包まれた一夏を必死に探すと、爆煙の中から生身の一夏が落ちてきた。

私は一夏の体を受け止める。どうやらなんとか生きているようだが、ＩＳの絶対防御の効果で眠っているらしく、目を覚まさない。いつもならば私が呼び掛ければ軽く返事をする一夏だが、いまはなんの返答もしてくれないところからもその事がわかる。

……私はまだ戦うことはできる。エネルギーは僅かだが、戦える。

しかし、一夏は今は戦うことができない。気絶しているからと言うだけではなく、ＩＳであるシロもボロボロであることが予想できてしまうからだ。

私は福音を睨み付ける。ギシリと噛み合った歯が軋みをあげ、頭の中身と太陽が入れ替わったような熱が私を焼くが、それでも私は福音に背を向ける。

……もう一度、私は福音と戦うことになるだろう。先生達が止めようとも、確実に。

そのために必要な物は、ついさっきに一夏から送られてきた。これのお陰で私はまだ戦えるし、一夏と一緒に戦うことができる。

そう思うと同時に、紅椿の装甲から金色の光の粒が溢れ出し、削られるばかりだったエネルギーが回復していく。確認してみると、そこには『絢爛舞踏』という文字が躍り、これがワンオフ・アビリティーだと示していた。

……もう少し早く出てきてくれればよかったのに、という思いを打ち切り、私は回復したエネルギーをフルに使い、全速力で戦場を離脱した。

……それにしても、なぜ一夏は避けなかった？　まるで、残っていたはずのエネルギーが一瞬にして消えてしまったかのような動きをしていたが……。

……まさかな。

# 帰還後、密かに支度中

一夏は眠る。起きる気配は一向に無い。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　箒

全速力で一夏を旅館に連れ帰った私は、他の専用機持ちと同じように待機していた。
ただ、エネルギーは既に全て回復させ終えていて、今は時を待っている。

ベッドの上で『大きな姿のまま』眠る一夏に目を向け、頬を撫でる。
熱を持っていることに安堵し、そして力の無かった自分と、一夏に怪我を負わせた福音に怒気を向ける。

……私は、一夏の隣に立ちたくて、姉さんにＩＳの作成を頼んだ。
姉さんは私に答え、素晴らしいＩＳを作り上げてくれた。
最強にして、最硬にして、最速に最も近い最高のＩＳ。紅椿を。

それなのに私は、そんな素晴らしいＩＳを作ってくれた姉さんにも、信じてくれた一夏や鈴達にも、応えることができなかった。
昔のように力に流されてしまう自分はいない。だが、それと同時にどこかで慢心していた自分も居たのだろう。そうでなければ、こうして昏睡している一夏の隣で、ただ座っている等ということもなかったはずだ。

だから今は、そんな私を私の中から追い出し、ひたすらに思い出し続ける。

一夏が福音に落とされた時の驚愕を。
爆煙の中から落下した一夏を受け止め、反応が反ってこなかった時の憤怒を。
激情の中で福音に背を向けた時の、私への憎悪を。
この場所に戻ってきて、治療を終わらせた一夏の顔を見たときの悲しみを。

そしてそれらを纏め、純化し、昇華させて行く。この感情は、昔に感じたことがある。
当時はこの感情をなんと呼ぶのか知らなかったが、今ならばわかる。

これは、殺意だ。

……とは言え、実際に殺すことは無いだろう。私も抑えるし、一夏もあまりよく思わないだろうと考えればどうとでもなる。

そして、私の中の全ての感情が福音への殺意に転換し終わった時。
誰かが突然ドアを開いた。
……この気配は……鈴か。

「箒。あたしの言いたいことはわかるわね？」
「ああ。丁度私も瞑想を終わらせ、これから有志を募ろうとお前たちに順次声をかけていくつもりだったのだ」

私は立ち上がり、閉じていた目を開く。そして鈴と目を合わせて…
…そこでふと、少し前に鈴から直接聞いた話を思い出した。

鈴は元々激情家。だが、一夏と関わっていくうちに角がとれ始め、少しずつ丸くなっていったという話だ。

その話を聞いた時は半信半疑だったが、今の鈴を見てなるほどと思ってしまった。

その目は、私と同じようで全く違う色に染まっていた。

例えるならば、私が純化した氷のような殺意を持つとすると、鈴のそれは何もかもを取り込みながら静かに燃える炎のような殺意。

……私達は、私達が自覚している以上に似ているのかもしれんな。

「……場所はわかるの？」

鈴の問いに私は首肯して答える。

「ああ。一夏が落とされる前に、福音に発信器をつけていたらしくてな。その受信コードを受け取った。それによると、福音は現在三十キロ離れた沖合上空に居る」

「そう。流石は一夏、と言うべきなのかしらね」

私と鈴の視線が同時に一夏へと向き、辺りには沈黙が広がった。

「……一夏がこうなったのは、あんたのせいじゃないわ」

「……感謝する」

ぐっ、と拳を作り、さらに力が加えられる。この痛みも、恨みも、また純化してゆく。

「簪が手伝ってくれたから、全員パッケージのインストールはもう

終わってるわ。専用機は動くけれど、まだ少し不安なところがあって参加できないからせめて、って言ってね」

「そうか。簪にも感謝しなければな」

私の紅椿はパッケージのインストールが必要ない。つまり、既に私達の準備は全て終わっていると言うことだ。

「……それでは、行こうか」

「ええ。鬼の居ぬ間に堕天使狩りね」

堕天使とは、言い得て妙だな。

機械の体と機械の翼を持ち、電子の意思で暴れまわる『銀の福音』。なるほど、確かに堕天使のようだ。

私は、左腕の紅椿を握り締める。

……我儘な操縦者で済まない。だが、もう少しだけ……お前の力を私に貸してくれ。

そう思うと、私の左腕の紅椿から、ほんの少しだけ気配の揺らぎがあった。

「……ありがとう」

私はそれだけ呟いて、鈴達の作戦会議に混ざっていった。

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

……馬鹿者共が。あんなに大きな声を出しておいて、気付かれていないわけが無いだろうが。
確かに誰にも言わずにここまで支度を終わらせていたのには驚愕するが、一夏の周りであのような話をするような馬鹿があるか。

「……でも、止めないんですね」

山田先生が私に笑いかけながら言う。

「ああ、止めん。……と言うか、山田先生は止められるのか？」
「……無理ですね」

ならば、私達にできることは限られているだろう。責任をとるのは……大人の仕事だ。

「そうですね、織斑先生」

……さて。それでは書類を作ろうか。『私達が専用機持ちを全員作戦に参加させた』という書類をな。お前にも手伝ってもらうぞ、束。

「はいはーい♪　ちーちゃんの頼みだったら何時でもウェルカムだよ～。四十六十喜んで！」
「五月蝿いぞ。それと、箒が気になるのはわかるが手は抜くなよ」
「もっちろん！」

……やれやれ。また面倒なことになるな。

## 一夏の夢、そして接敵

よくわからないが、なんでか俺は海に居た。ここがどこかもわからないし、何でここにいるかもわからない。
確か、俺はギンを相手にしているときに妨害を受けて落とされたはずなんだけど……。
そう思いながらあたりをきょろきょろと見回してみると、なんでかそこには真っ白いワンピースを着た真っ白な髪（白髪とは言いたくない）の少女が歌いながら踊っていた。楽しそうだな？
とりあえず、俺は寝ることにした。近くにあった流木の端を枕にして、俺は砂まみれになるのも構わず横になって目を閉じる。
潮騒と少女の歌が良い感じに混じりあって……俺は浅く眠り始めた。

ｓｉｄｅ　ラウラ・ボーデヴィッヒ

ハイパーセンサーに映し出された福音に照準を合わせる。胎児のようにうずくまっているその姿は、まるでなんの力も持たない少女が自分の宝物を身の内に隠そうとしているかのようだ。
だが、私達は知っている。事前に見たスペックデータと、直接相対した篠からの新情報で、福音が相当の戦闘能力を所有していると言うことを。
私はためらうことなく引き金を引いた。ほんの数秒で【ブリッツ】

から吐き出された砲弾は五キロの距離を詰め、大爆発を起こした。

『初弾命中。続けて砲撃を行う』

福音が私を見つけるより早くもう一射。これも命中したが、これで私の場所はばれてしまったな。

向かってくる福音に、ブリッツからの砲撃を連射する。しかし福音にそのほとんどを落とされ、もしくは避けられてしまう。予想より……僅かに遅く飛びながら。

……なるほど。相当量のエネルギーを削ったと言っていたな。箒のあの砲撃とほぼ等量と、一夏を落とした時のあの砲撃分。さらに通常の弾幕による波状攻撃分を数十分に、だめ押しで機動分がかなりの量になる。

ここまで削られてしまえば、流石の福音も少々危なくなってきた、と言うことか。

反動相殺のために機動力の低下したシュヴァルツェア・レーゲンは、元々機動力に特化している福音の攻撃を避けることは難しい。

使う武器が実弾兵器ならばＡＩＣで止めることもできただろうが、生憎と福音の射撃武器にエネルギー系以外の武器は存在しないため、止めることは不可能だ。

……だが、私は元々避ける気など持ち合わせていない。

「――――鈴！」

オープン・チャネルで呼び掛けた瞬間、上空から炎を纏った四つの衝撃が、福音を海面に叩き付けた。

「はっ！ざまぁ見なさい！」

ステルスモードを解除した鈴は、わざと必要以上に目立つ大声を上げながら福音を叩き付けた海面を……否。ちょうどその場所にステルスモードで潜り込んでいたＩＳを見つめた。

「……首尾はどう？」

「完璧だよ、二人とも」

そこにいたのは、防御パッケージを装備したシャルロット。ステルスを解除した直後に福音に向かって瞬時加速で突っ込んで行くのがハイパーセンサー越しに見えた。

「……気を付けろ？　シャルロットのそれは……痛いでは済まないぞ？」

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

シャルロットが左拳を突き出しながら瞬時加速で飛び込んでいく。弾幕にシールドエネルギーを削られながらも左腕のシールドを弾き飛ばす。

そこから現れたのは、あたし達の中ではシャルロットの武器と言えばこれという印象が最も強い、二世代機の最強装備。そう……

とっつきだ。

「違うからね!?　こんなときにまで変なこと言わないで……よっ！」

そう叫びながらもシャルロットは福音の腹に【灰色の鱗殻】を叩き込む。
それも、瞬時加速で福音をラウラと逆方向に押しやりながら。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

ズガンッ！！という轟音が五度響き、左腕の先から福音が抜け出した。
けれど、そのくらいは予想済み。むしろ少し遅かったわね。

「わたくしの狩り場にようこそ。ゆっくりしていってくださいな」

シャルロットに弾幕を張ろうとしていた福音に、青いレーザーが六本突き刺さる。
そのうち四本はビットから。残りの二本はセシリアの持つ二丁のライフルから放たれていた。

大型ＢＴレーザーライフルの【スターダスト・シューター】と、長大な大出力ライフルの【ブルー・ピアス】。どちらもセシリアによって偏向されていて、ほぼ確実に福音の体に突き刺さっている。

「もちろん、あたし達のことも忘れないでよね」
「僕のことは別に忘れちゃっていいよ？　その隙に壊してあげるから」
「私達の全力をもって……な」

あたし達は福音を逃がさないように砲撃と射撃を繰り返す。ここで一番ダメージを与えているのはやっぱりセシリアだろうけど、ＭＶＰはラウラね。

逃がさないように砲撃で薄いながらも弾幕を張って、逃げ道を一つ一つ潰してくれている。

そのお陰であたし達は逃げることのできない福音をひたすら攻撃し続けることができる。まるで発狂しているかのように。

ラウラの砲撃とシャルロットの射撃が福音をこの場に抑え込み、あたしの衝撃砲でスラスターを、セシリアのレーザーで装甲を削り、少しずつ機動力を奪い取る。接近するとあの弾幕にやられるのでけして近付かず、着実に。

あたし達の射撃から身を守るように弾幕を張り、弾を打ち払っていた翼の片方に、大きく皹か入る。続けざまにもう片方の翼にも皹が入り、急激に福音の機動力が落ちた。

だけどあたし達は戦い方を変えたりしない。

人間はゴールが見えると自分の力量を忘れて突っ走ってしまいやすくなる。脇目もふらずに走るから、ゴールの寸前にある罠に気付きもしないで。

昔に聞いた一夏の言葉を思い出して、逸る気持ちを抑えながら攻撃を繰り返す。

削って、削って、削って、

削って削って削って

「……まだだ」

ラウラが呟く。恐らくその目でなにかを確認したのだと思う。あの速度のなかで、よく見えたわね。

「ええ。まだ福音のシールドエネルギーは切れていませんわ。何かあるかもしれません」

セシリアも、海中の福音に二丁のライフルを向けたまま気を抜いていない。

「……うん。大丈夫。わかってるから」

シャルロットも、一発だけ残っている灰色の鱗殻を格納し、新しくショットガンとマシンガンを一丁ずつ構える。

……さあ、第二ラウンドの準備はできたわよ？　福音（あなた）も早く上がってきなさい？

## 続く夢、続く戦闘

浅い眠りからゆっくりと意識を浮上させると、少し状況が変わっていた。
白い少女は歌うのをやめ、俺のことを見つめている。そして枕にしていた流木の代わりに、その白い少女とほとんど同じ姿をした少女が膝枕をしてくれていた。

……どういう状況なんだこれ？　何がどうしてこうなった？　いつも右腕にくっついているはずのシロもいないし……どうなってんだ？

……いや、いるのか、シロ。どこにいるかはわからない……と言うか、どこにでもいるような気配がある。……なんともわかりづらい状態だな。

「もう少し分かりやすいヒントが欲しかったよ」

俺はそう言って、膝枕をしている真っ白な少女の長い髪を摘まんでみる。

「……シロ……の、一人で良いのかな？　代（シロ）」

白い少女の一人は、驚いたように俺のことを見つめる。何に驚いてるんだろうな？　呼び名か？

ちなみに【シロ】と言う名前は少しは考えてつけてある。色が原作で白かったからという理由が一番大きなものだというのは変わらな

いが、それ以外にも。

【シロ】は、２０のコアを繋げて作られた、『総体』としての名前。今言った【代（シロ）】は、中心となる【白（シロ）】のコア以外のいくつかに付けた名前。その意味は『材料となるもの』。同じように【素（シロ）】と【料（シロ）】が居て、これらの【シロ】は基本的に演算やら何やらのスペックの底上げをしてくれている。

【代（シロ）】は主に速度や反応の即応性の上昇にその演算能力を使い、【白（シロ）】の演算の『代』わりをしてくれているからそう呼んでいる。追加されたうちのほとんどが、この【代（シロ）】だ。

【素（シロ）】は武器や装甲の容量、つまり拡張領域を増やしている。これによって俺の頼んだ特殊武装や能力を使用可能にしているわけだ。武装や装甲、能力の『素』を補っていると言うことだ。

【料（シロ）】はエネルギー方面を増やし、衝撃砲や空間固定のエネルギーだけでなくシールドエネルギーまでを産み出し、溜め込んでいる。ここで生まれた燃『料』は、【素（シロ）】や【代（シロ）】を通り、【白（シロ）】を動かしているわけだ。

……まあ、ただの言葉遊びだ。つけている最中はそこそこ面白かった。

「……それで、何か話があるんじゃないのか？」

いつの間にか初めの白い少女を入れて『２０人』になっていた少女達に話しかけると、なんでか白い少女達の中から騎士風の女性が進み出て問いかけてきた。

「力を欲しますか……？　何のために……」

ｓｉｄｅ　セシリア・オルコット

福音が落下した海面を睨む。落下してから数秒しか過ぎていないのに、わたくしには数分にも感じられた。

突如、注視していた海面が、強烈な光に吹き飛ばされる。

球状に吹き飛ばされた海面の中心にいるのは、自らを抱き締めるようにして浮かんでいる、青い電光を纏った福音だった。

……とりあえず撃っておきましょう。動かないようですし、こんなチャンスを逃すなんてバカのやることですわ。

全員がそう考えていたらしく、福音にラウラさんの砲撃が直撃する。

それに僅かに遅れて鈴さんの真っ赤な炎に包まれた衝撃砲と、わたくしのレーザーが突き刺さった。

爆煙に包まれていて肉眼は見えませんが、ハイパーセンサーの映像ではかなりのダメージを与えられたらしく、装甲に無数の皹が入っているのがわかる。

これならあと少しで倒すことができる……と思った瞬間。その全身の皹から、眩く輝くエネルギーの翼が映えた。

「……これは、不味いわね」

鈴さんの勘が危険警報をこれでもかとばかりに鳴り響かせているら

しく、その口調はいつもより遥かに重い。

「……ええ。まさかここでセカンド・シフトをするなん」

「セシリア！垂直降下！全速力！」

即座にわたくしは瞬時加速で高度を急落させる。すると直前までわたくしの居たところを、銀のＩＳが貫いた。

「皆さん、お気をつけて！先程までとは比べ物にならない早さですわ！」

そう言いながらわたくしはレーザーを撃つ。それは軽々と避けられてしまいましたが、そのくらいのことは予想済みですわ。

ハイパーセンサーを振り切る動きはしていない。つまり、どこに居るのかはわからなくともどの方向に居るのかは十分わかる。それだけわかってしまえば、後は偏向射撃で撃ち込むだけ。

グンッ！と曲がったレーザーは福音の胴体に直撃し……胴体の輝から生えたエネルギーの翼に防がれた。

同じように、鈴さんが撃った衝撃砲もシャルロットさんが撃ったアサルトライフルも、全てエネルギーの翼に弾かれてしまった。

……あれは、まるで攻性防壁ですわね。それも、相当性格の悪い方がお作りになられたものでしょう。

何よりも驚愕するのはそのエネルギーの絶対量。あれだけの弾幕を張り、あれだけ飛び回り、あの巨大な砲撃を二度も撃っておきながらもいまだに切れないエネルギー量。まるで、一機の中に二機分のエネルギーがあるかのよう。

今もわたくし達は射撃を続けていますが、そのエネルギー量を活かした防壁によって全てを防がれてしまっています。
このままでは、わたくし達のエネルギーが切れるのが早いか。それともあちらのエネルギーを削りきれるかというマラソンになってしまいます。それはできれば回避したいですわね。

……だから、多少の無茶は許してくださいね。

……ブルー・ティアーズ。

## 夢は終わり、眠たがりは戦場へ向かう

急に言われた問い。何のために力を求めるのか。その答えは、実は凄まじく簡単なことだったりする。

前にも言ったが、俺の本音はただ寝たいだけ。それを邪魔するやつを排除するためだったり、そもそも邪魔をさせないようにするために力をあの腰の低い神から受け取った。

その力を人前で使うと目立つというところから、俺は新しくＩＳを求めた。その時には既に俺がＩＳに乗れるとばれてしまっていたため、あまり悩むことはなかった。

だから、俺が力を求めることになった理由は、簡単に言ってしまえば睡眠時間の確保のためだ。

とは言え、今はそれだけではない。

今は周りに好きなモノが増えすぎた。

弾や鈴、ののちゃん達といった友人達。ちー姉さんや（たぶんもうこの世に居ない）両親。この学園の生活も、そこそこ楽しいしな。

だから、なんのために求めるかって理由は……

「今のまま過ごすため」

……かね？

……なんでかここにいる全員にくすりと笑われた。なんという

か、シャルにはできないけど鈴やののちゃんにはできそうな『まあ、一夏だからね』という笑いかただ。
少しイラッとしたので、とりあえず近くにいた【代（シロ）】のほっぺをつまんでみた。

……なぜかさらに笑みが深くなった。あと視界の外で鼻を押さえている奴がいる気がするんだが……気のせいだといいな。気のせいじゃないだろうけど。

「じゃあ、行かないとね」

その声の聞こえた方向に視線を向けると、そこにいたのは初めに見付けた歌う白い少女。多分、【シロ】。
寝転がっている俺を起こすために俺に向かって手を差し出しながら、俺のことを眺めて笑っている。

「……そうだな。そろそろ行かなくちゃ不味いか」

俺はシロの手をとって、体を起こす。すると急にこの場所全体が白く輝き始めた。どうやらこれで目が覚めるらしい。

……そう言えば、騎士風の女性（多分【白（シロ）】）はどこかちー姉さんに似ていたような気がするなぁ……。

ふっ、と目が覚める。ここはどうやら旅館の一室らしい。
周りには誰も居ないが、どうやら一応見張りはついているらしく、戸の外に気配をいくつか感じ取れる。カメラの数はわからないが……まあ、壊してしまえば同じだな。

ゾナハ虫を数匹カメラに送り込み、同時に全て爆破する。当然爆発音を聞いて外のが入ってくるわけだが、その時にはディープダイバーで俺はこの部屋の床をすり抜けて消えている。
後はシルバーカーテンで姿を消して、堂々と歩いて外に出ればいい。

『……織斑君……起きたの……？』

何故ばれたし。

『……シロが、ステルスモードになったから……』

おぉう盲点だった。確かにそれなら場所はわからなくとも、起きたってことはわかるな。
……どうしようかね？

『……私も連れていって』
『んな無茶な。まだＩＳ完成してないんじゃないの？』

参加してなかったのもそれが原因のはずだし……。

『……ついさっき、最終調整が終わった。……確かにロックオン・システムは従来のままだけど……十分、戦える』
『……もし、置いていったら……？』
『……泣く。みんなに迷惑かけないように……声を殺して布団にくるまって……泣く』

やべえ罪悪感が半端ない。流石はＩＳ界最強の妹属性の座を蘭ちゃんと奪い合っているかんちゃんだ。そりゃああの生徒会長もシスコンになるわ。

『わかったわかった、今どこにいる？』
『……さっきまで……織斑君が寝てた部屋に……』
『よしわかった。迎えに行くから窓を開けて顔を出して待ってて』
……さてと。アグレッシブなお嬢さんが同伴することになったが……まあ、いいか。後はちー姉さんに話を通しておかないと困るだろうし（もう遅いかもだけど）、エネルギーの問題も……ん？
満タンになってる？
「陰謀暗躍困った時はすぐに呼びましょ束姉さんだよっ！」
「……なんで束姉さんがその陰陽師の歌を知っているのかは束姉さんだから聞かないけど、とりあえずありがとう。そして後でこぴんします」
「なんでさ！？」
「シロの能力を逆向きに使って俺が動けないようにしたでしょ」
束姉さんはそっぽを向いた。その上口笛まで吹いている。なんで『ロイツマ』なんだよ。ぷちかにしか歌わせたこと無いぞ。言葉は全部わぅわぅにゃぅにゃぅだけど。
「……帰ってきたらまずでこぴんです」
「いっくんが帰ってくる前に逃げちゃうもんねー」
「帰ってきた時に居たらでこぴんの後抱き枕の刑です」
「……抱き枕……でもでこぴん……うーん……」
なんだかすっごく悩み始めた。まあ、放っておいても大丈夫だろ。
多分。
じゃあ、行こうか。

## ｓｉｄｅ　更識　簪

さっきまで織斑君が寝ていた部屋で、私は織斑君を待っている。
爆発が起きたこの部屋は少し煤けているけど、そんなことは気にならない。
打鉄弐式を組み上げるのは大変だったけれど、このときに間に合って良かったと思う。織斑君には感謝しなくっちゃ。

……もちろんそれだけじゃなく、私に色々なことをアドバイスしてくれた先輩達にも。

織斑君を見ていて、私は変わった。
昔の私はどうしても人の手を借りずに打鉄弐式を完成させて、姉さんの隣に立てるように……せめて正面から向き合えるようになりたいと思っていた。
けれど今は、あまりそういうことは思わなくなっている。……と言うか、織斑君を見ていると、そういったことがどうでもいいことに思えてきてしまう。

織斑君は自分がお姉さんと違っていても気にしていない。完璧といえるお姉さんを持っていても、自分を変えようとしない。
自分を貫き通せる心の強さを持っている人は、かっこいいと思う。
もちろん織斑君だけじゃなく、織斑先生や凰本部長。それに姉さんの……お姉ちゃんのことも、そう思う。

……たまに悪い方向に頑固な人も居るけれど。

空を眺めながら考え事をしていると、不意に私の頭に影が射す。顔を上げてみると、そこにはいつも通りに眠そうな織斑君が、シロを展開して飛んでいた。

「……待ってた」

「悪い。ちょっと人にでこぴんの約束をしててな」

でこぴん？　と不思議に思ったけど、そんなことをしている場合じゃないと思い直して、私は窓から身を踊らせる。

「おいで……打鉄弐式」

私の右手の中指に填まっている指輪が輝き、打鉄弐式が装着される。ＩＳスーツは脱がないでいたから、そのままで大丈夫。

「それじゃ……行こ？」

私は織斑君に手を伸ばす。

私のヒーローは、にっこりと笑ってその手を取ってくれた。

「ああ。行こうか」

私達は、赤くなりそうな空に向かって飛び立った。

「ああそうだ。ちー姉さんには報告いれてあるから大丈夫だよ。後で相当怒られると思うけど。これは出席簿クラッシュですむかどうか……」

「……怖いこと言わないで……早く行かないと……」

「そうだな。じゃあ、しっかり捕まってろよ？　シロのこの状態での最速は――――秒速２キロだ」

……え？

呆然としている私を抱えて、織斑君はなにかを確認してから加速を始める。

それは打鉄弐式では到底出せないような速度で……

「きゃあぁぁぁぁあっ！！」

私の悲鳴を置き去りにして飛んでいった。

## 戦場は移ろい、表情を変える

ｓｉｄｅ　シャルロット・デュノア

……これは、ちょっといけないかな……。そう思いながらも、僕はどうすればこの化物を落とすことができるのかを考えていた。

今の速度は、確実に僕たちの誰よりも早かった。僕たちはきっと、あのエネルギーの翼に押し留められて攻撃を当てることはできないだろうと思う。

だからといってなにもしないわけじゃない。保険はまだあるし、うまくいけば誰も落とされずに落とすことができるかもしれない。

エネルギーの翼を全身から生やした福音は、ゆっくりと僕に向き直り――――

『キアアアアア……！！』

異様に高い獣の咆哮のような声を上げて僕に飛びかかってきた。

その動きはまるっきり獣で、そのあまりの速度に僕は簡単に捕まってしまった。

「……まあ、いいけどね」

だって……もう一発だけ残ってるからねぇ！

最速で灰色の鱗殻を呼び出し、即座に顔面に叩き込む。それはエネルギーの翼で防がれてしまったけど……それでも十分。

だって、こうしている間は確実に福音の動きが止まってるっていう

ことだからね。

エネルギーの翼がゆっくりと僕を包み込んでくる。セシリアがレーザーを撃ち込んで助けてくれようとするけれど、絶対的に出力が足りていなくて、福音が僕から離れることはない。

「……ふふふふふ……」

それでも僕はにっこりと笑い、呟いた。

「今だよ、箒」

瞬間、真っ赤な閃光が飛来して、福音がその光に飲み込まれた。

『……着弾を確認。無事か？　シャルロット』

プライベート・チャネルから声が聞こえる。僕達がここに着く前から福音のことを狙っていて、後詰めをお願いされていた最後の保険。

「ありがとう、箒」

「なに、構わんさ。私も友が落とされる所を見るのは忍びない」

赤いエネルギーの奔流が書き消え、ステルスモードを解かないまま箒は場所を移動し始める。またしばらくしてから福音に狙撃をするんだろう。

今の箒にはワンオフ・アビリティーでエネルギーを回復する手段があるし、かなり本気でお怒りモードだから手は抜かないだろうね。

怖いくらいに。

「それじゃあ、僕もそろそろ秘密兵器のお披露目をしちゃおっかな」

まあ、盾なんだけどね。対エネルギー弾体用の特殊コーティング仕様の。エネルギーを散らすのにいいんだってさ。どうやって作ったのかは知らないけど。

……あの時に一夏が何かしてから、デュノアの兵器部門の発展が尋常じゃないんだよね。何をしたのかなぁ？

そう思いながら僕はエネルギーの弾幕を盾で受け止め、そして突貫してくる福音を実体盾で弾き飛ばす。

その間にセシリアのレーザーや鈴の衝撃砲がエネルギーの翼のない部分に当たって僅かずつ削り、たまに飛んでくる箒の赤いエネルギー砲が福音を飲み込もうとする。

その度に福音は別の誰かを狙おうとするけれど、無理矢理に僕とラウラがその道を塞いで狙いを僕に向けさせる。

防御能力だけなら、今の僕は（箒の展開装甲を防御に回した時を除いて）トップだからね。そうそう落ちてはあげないよ？

「……！お前達。どうやらもうすぐ心強い援軍が到着するらしい。気合いを入れろ！」

箒からオープン・チャネルでもたらされた情報に、少しだけ首をかしげる。

援軍って言っても、今の僕達は秘密でここにいるわけだし、例え僕達が外に出ていることを知っていたとしてもここにいるのがわかるとは思えない。

けれど、箒は確信を持って『援軍が来る』と言っていた。

……更識さんかな？　でも、まだ専用機が完成していないって……。

「一夏と簪に一夏のお昼寝ブロマイド」
「では私は一夏さんに一夏さんのお昼御飯の写真を」
「私が参加するのはフェアではないからな。ラウラはどうする？」
「むう……あれだけの攻撃を受けて起き上がれるとは思えん……教官達教師陣に一夏の『にゃん♪』の写真を賭けるか。ワンサマーアルバムを一グロス買ったらダブったのでな」
「一グロス！？　どれだけ買ってるのさ！？　っていうか賭けしてる暇なんて無いでしょもう！一夏と更識さんに織斑先生とのお昼寝写真！」
「……シャルロットも参加してるんじゃない」

だって僕も一夏ブロマイド欲しいんだよ！可愛い一夏が大好きなんだ！僕は悪くない！

そう心の中で叫んでいると、突然シールドのない横から羽根の形をした弾が装甲の一つに突き刺さり、爆発を起こした。その方向を見てみると、伸びたエネルギーの翼の一部だけが盾の隙間から覗いていた。

すぐに下がって翼から逃げようとするけど、その翼は当然のようについてきて僕に弾幕を浴びせる。
まあ、防いではいるけれど、かなり鬱陶しい。

攻撃はほとんど効かない、凄く早い、攻撃力もかなりある、操作性は抜群。まったくもう。僕はどうやればこの鉄屑をグチャグチャパラダイスにすることができるのさ？

「とりあえず……力を借りればいいと思うわよ？」
「誰のさ？　鈴達の力ならこれでもかってくらいに借りてるよ？」

「誰のかって……遅れて来たヒーローと同胞の、かしら？」

その瞬間に横から飛んできて福音を吹き飛ばしたのは、さっきから飛んできている赤い閃光ではなく、白い三本の荷電粒子砲の光だった。

そっちの方を少し見てみると、そこには大マジな目をした一夏と、そのとなりに浮いている更識さんが荷電粒子砲を構えていた。

「全員無事か？　無事じゃないやつは大声で返事しろ？」

「無事じゃなかったら返事できないよね？」

「まあ、一夏だし、それであってるような気もするけどね」

「そうですわね。おはようございます一夏さん。ブルー・ティアーズに背中を押してもらうなんていう無茶なことをしたセシリアを叱ってくださいまし♪」

「おあずけ」

「そんなひどいぃ♪」

「やれやれ。最近ましになってきていたと思ったが、セシリアはやはりセシリアか」

……一夏が現れた瞬間、空気がいつも通りになっちゃった。かくいう僕も、さっきまでの頭が沸騰しそうなほど冷静な状態を抜け出している。

「油断はダメ……まだ動いてる……」

「おうとも」

バジュンッ！と空気を引き裂きながら一夏に飛び掛かる福音を見て、一夏は当然のように雪片で一番大きな翼を切り落とす。

切り落とされたエネルギーの翼は爆発し、衝撃を盛大に撒き散らした。

「……エネルギーって斬れるんだね。びっくりだな」
「あまり驚いていないようだけど？」
「驚きすぎて逆に冷静になっちゃったかな」

そう言いながら僕は特殊シールドに隠れる。僕の後ろには更識さんがいて、福音に荷電粒子砲を向け……あ、当たった。止めてないのに何で当たるんだろ？

「努力と勇気と友情と気合いと愛と練習と根性……だよ……？」
「うんわかった、更識さんも理不尽側なんだね」

努力と練習はわかる。根性と勇気と……友情も……まあ、わかる。気合いと愛って……。

「……あ、それとノリと織斑君」
「一夏も入るの？　っていうか一夏に対する愛情だったりするのかな？」

更識さんは顔を真っ赤にして、コクンと頷いた。

……あれ……？　なんだか胸がきゅんってしたよ？　なにこの可愛い娘。あといつの間にか一夏が福音をぼこぼこにしてるんだけど。零落白夜って凄いね。

……まあ、それもこれも、一夏だから仕方無い……のかな？

## その後の話と、『お仕置き』と

こうして戦闘を終わらせて旅館に戻ってきた俺達だったが、今はちー姉さんによるお説教の真っ最中だ。
まあ、命令がなかったのに出動するのはまずいわな。全員正座中。
そろそろセシリーの顔色がやばい。かんちゃんとののちゃんは平気そう。慣れてるのか？

「織斑。気を散らしている余裕があるのか？」
「すみませんでした織斑先生」

今回は本気で心配させたと思うので、俺は全力で平謝り。ちゃんと起きている状態で。

「……まあ、貴様らには帰ってすぐ反省文の提出と懲罰用特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでな」
「はい、織斑先生」

この後、一度休憩が入ってから体に異常がないかの診察があったはずなんだが……。

「……それと、一夏」

おや、名前で呼ばれた。なんだろね？

「ここにうつ伏せで寝ろ。すぐにだ」

そう言われて指差されたのは、ちー姉さんの足元。ああ、昔よくあ

ったあのお仕置きか。
そう考えながら移動して、ちー姉さんの足元で寝転がる。そしてちー姉さんは俺の背中に足を置き、強弱をつけて踏みつけた。

「……まったく貴様は。もう少し周りの事を考えて行動しろ。お前はお前自身の想像以上に周囲への影響力が強いんだからな」
「うぎゅ、うみゅっ、ふぎゅぅっ！」

肺を背中から押し潰されるから、どうしても猫が踏み潰された時の鳴き声っぽいのが出ちゃうんだよな。
勝手に出るんだから、まあ、仕方無い。

「それと、なぜ起きた時に直接会いに来ない。心配をかけたという意識が足りんぞ」
「ふぎゅぅぅぅ……」
「自分の健康管理もなっていない。落とされて気絶していた直後に直ぐ様ＩＳに乗ろうとするとは何事だ。せめて健康診断をして、私と顔を合わせてから行け」
「うきゅ、ぅ、きゅぅ、うにゅっ」

それから三十分近くの間、俺はちー姉さんに楽器のように鳴かされるのだった。

「大体だ。なぜお前は簡単に体を他人に預けたりする。そういうのは家族であり、姉であるこの私が初めに候補として出てくるのが……」
「ふにゅっ！うきゅっ！きゅぅぅぅ……っ！」

なんだか話がずれていってる気がするよ～～……。

疲れたからご飯抜きで寝ようとしていたら、鈴とかんちゃんとののちゃんとラルちゃんに布団を剥がれて運ばれてしまった。尻尾わしゃわしゃするわよ、と言われたら起きるしかないじゃないか。

うぅ……鈴の意地悪……。

あの背骨の内側がぞくぞくするような感覚は、正直に言って色々やばいから好きじゃない。頭がぼんやりして何も考えられなくなるし、何より疲れる。ついでに恥ずかしい。

今はあそこまで酷くはないのかも知れないが、試してみたくはない。後で束姉さんに聞いてみよう。

「はい一夏。あーん」

「……あむ……もきゅ……もきゅ……」

「……かなり疲れてるみたいね」

まあ、あれで疲れてなかったら変だろ。大して疲れてないけど。だけど眠いのは本当なんだよな。気合い入れて動くとかーなーり眠くなる。なんでだろうね？

……ふぁ……。束姉さんのでこぴんどうしようかなぁ……。

「紅椿の稼働率は72パーセント。うんうん、相当扱いにくいはずの紅椿をたった三回でここまで乗れるようになるなんて、さっすが箒ちゃんだね！お姉ちゃんは鼻が高いよ！でも鼻ってそんなに高いと邪魔だよね？　いっくんにすりすりする時とか！」

「それより先にこっち向いてほい」

「は～いったぁ！！？」

バッヂィン！！という高い音が響き、束姉さんの額にでこぴんが直撃した。そしてのけぞった束姉さんは、そのまま柵の向こう側に落ちていった。

「束さん復活！いきなりなにをするのさいっくん！束姉さんの眉間から上が消し飛ぶかと思うくらい痛かったんだよ！？　ＩＳを応用した移動型ラボを展開してたのに！」

「気合いを入れたでこぴん。それだけ」

「いっくんのでこぴん怖い！旧時代の兵器の直撃にも耐えるシールドエネルギーを楽々ぶち抜いてきたよ！？　ちーちゃんより強いんじゃないの？」

さて、それはどうかね？　力だけなら負ける気はあんまりしないけど……実際戦うとなるとなぁ……。わかんね。

ただ、装備にＹシャツ（ちー姉さんのお下がり。ただ、お下がりと言うには貰ったときは新品のように綺麗だったし、ちー姉さんのサイズより二つ三つサイズが大きかったような気もする）を装備し、犬耳（ガルム、ゴツい首輪と鎖付き）で行ったら戦いにならないと思うね。色んな意味で。

ちなみに、前に一度やってみた。今生のセカンドキスが実姉になった。ちー姉さんは頭が沸いていたらしくて忘れているみたいだけど。ファースト？　束姉さんだよ？　母さん父さん除けばだけど。

「まあ、旧時代のミサイルより強いでこぴんができるかどうかなんて置いておいて、早く来ないと教員部屋までアイアンクローで運びますよ」

「そ……それは困るかな……」

「それじゃあ、はい」

手を優しく掴んで出発進行。テンションあげたくとも眠くて上がらない……。ふぁ……。

「……いっくんってば……魔性の男の子になっちゃって……」

知らないよ、そんなこと。

# 臨海学校、これにて終幕

朝起きたら束姉さんがちー姉さんに変わっていた。ついでに俺の体が全体的に真っ赤になっていた。多分鼻血で。出血多量で死んでもおかしくない量だぞこれ。平気か？

……まあ、ちー姉さんは大丈夫そうだな。束姉さんは……あ、部屋の片隅でシーツ巻きになってる。

「乙女のたしなみ、縄脱け～♪」

どんなたしなみだ。そんなのたしなむな。

「さ～てそれじゃあいっくんの寝顔を眺めてくんくんしてから帰ろっかな。くーちゃんも待ってると思うしね」

くーちゃんが誰かは知らないが、なんだか貞操のピーンチ。ちー姉さんに抱き締められてて逃走は不可能。万事休すか？

まあ、束姉さんに少しの理性があることを期待しよう。もしくはヘタレであることを。それならなんとかなるかもしれないし。

「……くんくん……すんすん……いっくんの匂いがするよぉ……」

たーすけてー。だーれかたーすけてー。

「ふっふっふ。助けを呼んだって無駄なんだよ？　ここの人間には暫く大人しくしてくれるように起床時間ぎりぎりまで起きないように」

「た　ば　ね？」

あ、ちー姉さん起きた。ついでに放してくれると嬉しいかな。

「なっ!?　ち、ちーちゃん!?　どうしてちーちゃんが起きて……!?」

「一夏の助けを求める声が聞こえた。ならば姉である私は万難を排して助けねばならないだろう」

「くぅ……流石はちーちゃん！この束さんが唯一認めた同格のブラコンだけはある……でも！今のちーちゃんは無理して起きているだけ！それなら束さんには勝てないよ！」

なんだろうかこの暑苦しい展開は。俺はどういう反応をすればいいんだ？　リス耳でも着けて『喧嘩はダメだよ？』とでも言っておくか？

「ふ……残念だったな。薬など一夏への愛の暴走で全て外に出ている！」

「な、なんだってー!?」

「詰めが甘いんだよ貴様はなぁ！」

そこで俺はちー姉さんと束姉さんを同時に布団の中に引きずり込んだ。

「なっ!?　い、一夏っ!?」

「……喧嘩はだめ。お仕置き」

そう言って俺はちー姉さんと束姉さんを抱き締める。ちー姉さんが慌てたり束姉さんが発狂しそうになってるのは意図的にスルーすることにした。

「ま、待て一夏！今そんなことをされたら私は……私はっ……ぷふぁっ！？」
「くんくん……すぅ～……コペッ！」
……対象沈黙。作戦完了。これより二度寝に入る。
……すか～……。

帰りのバスの中で俺は寝る。隣は二百数十回の読み合いの結果、偶然他の全員がチョキを出した時にグーを出していたシャルがかっさらっていった。

ああ、それと尻尾の件はやっぱり束姉さんが何かしていたらしい。設定を前の状態に戻してもらって事なきを得た。
だから今シャルに尻尾をわしゃられても大丈夫なわけだ。少しくすぐったいけど。

「……ぅぇへへへへほへへほほへへへへへ……」

……駄目だこれ。早くなんとかしないと取り返しのつかないことになるぞ……。

「シャルロット。シャルロット！よだれ凄いわよ」
「ほへぇ……？　……っ！？？！！？！？？　■■●□△◆▽∀∞※っ！？」
「……悪いんだけど、できれば人間の理解できる言語でお願いできる？」
「ああ。流石に『■■●□△◆▽∀∞※っ！？』では何が何だかさ

っぱりわからん」

「……よく発音できるな。普通は『■■●□△◆▽∀∝※っ！？』など聞き取ることも発音することもできないだろうに」

「そうよね。まあ、たとえ『■■●□△◆▽∀∝※っ！？』っていうのを聞き取って発音できても、『■■●□△◆▽∀∝※っ！？』の意味なんてわからないから意味無いけど」

さっきからなんの話をしてるんだ？　『■■●□△◆▽∀∝※っ！？』『■■●□△◆▽∀∝※っ！？』と五月蝿いぞ？

「ちなみに写真も撮ったわ。こんな顔をしてたのよシャルロットは」

「私も撮ったぞ。姉さんの改造のお陰でパネルが空間投影型になり、相当画像が細かくなった」

「お願いだからやめてよぉぉっ！！」

シャルは半泣きだ。まあ確かにあの顔を写真に残されるのは嫌だろうな。俺でも嫌だ。

……まあ、頑張れシャル。

……すか～……。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　箒

一夏が寝落ちしてすぐ、バスに見知らぬ女性が入ってきた。

「ねえ、織斑一夏くんっているかしら？」

すぐさま気配を読み取ってそこに悪意が無いかを確かめる。全く同時に鈴とセシリアもこの女性の観察を始めていて、ラウラはいつでもナイフを抜けるように構えていた。

「ちょ、なんなのいったい？」

……特に悪意に当たるものは感じ取れないな。少なくとも、一夏に向かってのものは。

鈴とセシリアに顔を向けて確認すると、二人とも同じ答えに辿り着いたらしく頷きを返してくる。すぐ近くにはシャルロットも居るし……まあ、問題ないだろう。何かをしたらソードサムライXの出番だが。

緋宵は切り口から足がつきやすいと言われたのでこっちに。こっちの方なら確実に隠し通せるらしい。

「……失礼しました。少しばかり過剰反応してしまいました。あそこで寝ているのが一夏ですが、起こさないでください」

「少しって……」

「問答無用で刻み潰していないので、少しです」

「それってどんな基準よ！？」

どんなと言われてもなぁ？　こんな、としか言えんが。

「常識だよな？」

「常識よね？」

「常識ですわよ？」

「常識だな」

「自分のじょーしきを～、世界のじょーしきとは思わない方が良いよぉ？」

む、布仏は良いことを言ったな。その通りだ。
それができない奴が宗教に嵌まると色々と訳のわからないことをやることがあるから面倒だ。

「……はぁ……それじゃあ、伝言をお願いできるかしら？」
「なんでしょうか？」
「『銀の福音』の操縦者から、ありがとう、ってね」
「承りました」

それだけ言ってその女性はバスを降りていった。

……しまったな。名前を聞き忘れた。

## 夏休み開始、驚愕の事実

夏休み。それは俺にとって最高の一月。
理由は実に簡単。俺がいくら寝ていても、文句を言われることがまったく無いという理由だ。

と、言うことで俺は寝る！……と言いたい所なんだが、前にやったことで少しばかり驚く結果が出てきているのでそっちの方を終わらせてからにする。

何が原因でどんな結果が出たのか。これも簡単。原因はデュノア社で、結果は頭がいかれてるんじゃないのかと言うレベルの黒字の預金通帳だ。
デュノアを買収した時に作った偽造金庫がいつの間にか本物の金庫になってしまっている。それもこれも黄金律と幸運のせいだろう。
兵器の部品に千の顔を持つ英雄を使っているものをデュノアの製品として売り出し、かなりの売り上げを得ている。もちろんこれにも意味はあり、できれば世界中の量産機の武装をデュノア製にしてしまえと思っている。

……敵対された時にその部品だけ消して暴発させてやることができるし、消すのではなく爆破することもできる。それができるようになれば量産機の脅威が欠片もなくなる。
……ＩＳ本体？　知らんよそんなの。

そして今はそうしてできた黒字の金庫から引き出して、ちょっと弾の実家である五反田食堂にむかって歩いている。ライアーズマスクって顔だけじゃなく姿形を変えるから便利だよな。

身長を変えるのは無理らしいけども、それはなんでか俺ができるから大丈夫。
こうして面倒なのに絡まれないようにして、さて、行こうか。

なんでか五反田食堂にシャルとラルちゃんが居た。シャルは私服だけどラルちゃんはいつも通りの制服でアホみたいに分かりやすかった。まあ、それがなくてもわかりやすい容姿をしてるんだけど。
二人は同じテーブルを使っていて、真剣にメニューを睨んでいる。

「あ……あの……お水……です」

蘭ちゃんが恐る恐る二人の前に水の入ったグラスを置いて、そそくさとカウンターに戻

「注文、いいかな？」

……ろうとしたところで、シャルに捕まった。蘭ちゃんは何でかびくびくしながらシャルとラルちゃんの所に戻った。

「は、はい。なににいたしますか……？」

蘭ちゃんの、今まで聞いたことのない妙な敬語を聞いて、ちょっと面白いと思ってしまった。随分緊張してるねぇ。それとも怖がってるのかな？
まあ、その二人はいきなり噛みついてきたりはしないよ。

「この……『業火野菜炒め』っていうのを、二つもらえるかな？」
「は、はい」

蘭ちゃんはなんでかびくびくしてる。なんでだろうね？

「あ……い、いらっしゃいませ」

ん？　……ああ、そう言えばライアーズマスクを解いてなかったな。面倒だし今回はこのままでいいや。

「ん。それじゃあ業火野菜炒め単品と、焼き魚とフライの盛り合わせ定食を」

「えっ、あ、はい」

蘭ちゃんは慌ただしく引っ込んでいった。大変そうだね。

そこで、入り口の方から見知った影が大量の袋を持ってやってきた。

「ふぅ、やれやれ間に合った。シャルロット・デュノアさんが六つでラウラ・ボーデヴィッヒさんが一つね」

「あ、こっちですこっち」

シャルが急に弾に向かって手を振る。いったいなんの話だろうか？　そう思っていると、弾と目があって――

「……一夏？」

なぜばれたし。ってかよくわかったな。女の格好してるのに。

「お前への溢れんばかりの愛情の成せる業だ。写真撮っていいか？」

「可愛く撮ってね？」

特に意味は無いけど言ってみる。スカートを履くのは躊躇われるの

で、外見的にはGパンを履いているように見えるはずだ。

パシャッ！と弾はどこからか取り出したカメラで数枚俺のことを撮り、それからシャルとラルちゃんに向き合った。

「遅くなって悪いな。予約されてたワンサマーアルバムだ。初回利用特典でレア写真一枚サービスしといた。これからもご贔屓に」

弾はにっこり笑ってから、すぐにエプロンを装備してカウンターの中に入っていった。まあ、弾やシャル達にも色々あるんだろうな。知りたいような知りたくないような……。

「……ふむ……なるほど、一夏は小さい頃から変わっていないのだな……」

「そうみたいだ……っ！？　こ……この写真は……っ！？」

「シャルロット。ここは公共の場だ。我慢しろ」

「わ……わかってるけど……頭に血が昇ってくらくらするよぉ……」

いったい何を見たんだあの二人は。

「お待たせしました」

「ん？　ああ、ありがとう」

丁度蘭ちゃんが業火野菜炒めと定食を持ってきてくれたのでそれを食べる。もきゅもきゅ……美味い。

そして食べながら弾とアイコンタクト。

『なんでそんな格好してんだ？』

『ここに来るまでの雌避け。直そうとしたら顔見知りがいてびっくりしてついこのまま入ったんだけど、よくわかったね？』
『まあな。鈴ほどじゃないが勘は良い方だし、なんとなく一夏と気配が似てたし、目付きが一夏だったし、後は少し考えればな』

弾すげー。平均してハイスペックな弾すげー。
ちなみに鈴は勘が廃スペック（言わずもがな）。ののちゃんは気配察知が廃スペック（同じく）。そしてセシリーは思考能力が廃スペック（ビットのマニュアル操作をそろそろ六つ同時にできそうだと言っていた）。

……あっれぇ？　弾にできないことってなんだ？

『彼女』

自分で言ってて悲しくないのか弾は。

『別に？　いつか好きなやつができたら報告するわ』
『その時はきっと応援するよ。ちー姉さんが相手だったら三発くらい殴るけど』
『ねーよ』
『ちー姉さんの何がダメだって言うんだ！』
『えぇぇぇ良いのか悪いのかどっちだよ！？』
『あ、冗談だよ？　弾はちー姉さんのことをそういう風に見れないってのはよく知ってるから』
『……一夏ァ……』

怒られちゃった。ごめんね？

# わぅわぅにゃうにゃう、きゅうきゅうきゅう

これは夏休みのある日の話。一夏が毎日毎日食事もせずに寝続けていた夏の、一ページ。

……らしいぞ？

ｓｉｄｅ　ぷちか５６号

どうも。どんな時でも蛇革マフラーを手放さないぷちか５６号ことオルトロスぷちかだ。オルトロぷちかと呼んでくれ。

今日もごしゅじんさまは自分の部屋でおやすみ中。寝たい子達はみんな集まってぷちか玉になって寝ている。

床一面ぷちか。右にもぷちか。左にもぷちか。前にも後ろにもぷちか。さすがに上にはいないと思ったら蝙蝠ぷちか。どこもかしこもぷちか。今の部屋はそんな部屋になっているので、起きているおれはちょっとＩＳ学園を散歩中。お供は適当に黒豹と黒兎。見事に黒いのばっかりだ。

マフラーで二匹を包んで運んでいると、なんでかみんなよく襲撃してきたり撫でてきたりお菓子をくれたりする。

ちなみに襲撃犯が現れると、毎回どこからともなく人が現れてその犯人を連れ去っていく。粛清部隊と言っていたけど、どこの粛清部隊だろうね。

……まあ、どこでもいいかな。お菓子くれるし。

「カリカリカリカリ……」
「もしゃもしゃ……」
「わぅ！」
「カリカリ……きゅ？」
「もしゃもしゃ……にゃう？」

廊下で歩き食いはよくないぞ、と言ったらおれのマフラーを椅子の代わりにしやがった。これでいい？　じゃなねえよよくねえよ。地味に重いんだよ。

「うにゃ」
「……わぅ」

まったく、おれがたい焼きなんかで釣られるのはこれが最後だぞ？

……もきゅもきゅ。

「にゃう！」
「わぅ？　わぅわぅ！」

おれは座ってるから良いんだよ。あー美味い。

ｓｉｄｅ　ぷちか１２号

白猫ぷちかだ。みんなと一緒にお昼寝中。いまだかつてないほど眠いので、とりあえず目を閉じてみることにする。

どこかで他のぷちかが身動きをすると、それがぷちか達を伝わってどこかがころりんと転がって、離れてしまったぷちかは他のところのぷちか玉に入ってまた眠る。いくらここの部屋が広くても、１００近いぷちかすべてが寝転がるのは不可能。しかも、ぷちー姉さんとぷちたば姉さんも居るし。

だから何体かのぷちかは他のにのし掛かったりしている。それでも狭いけど。

まあ、寝るのには問題ないから、いいかな。

「ふみぃ……はむ……」

「……わきゅ？」

「きゅぅ～……」

たまに誰かにぱくりと噛まれてよくわからないといった鳴き声をあげるチワワぷちかや、のしかかられて苦しそうな呻き声を上げるイタチぷちか。羽に顔を埋められてくすぐったそうな烏ぷちかに、水を張ったたらいの中でぷかーっと浮かんでいるラッコぷちか。

……きっとちー姉さんはこれを見たら、辺りを真っ赤に染めるんだろうな。自分の血で。

そして蝙蝠ぷちかがちー姉さんの顔についたままの血を舐めとっている時に目を覚まして、さらに周りが赤くなるに違いない。

そんなことを考えながら、おれはきゅうぅっと伸びをする。ベッドの上でぷちー姉さんとぷち束姉さんと一緒に寝ている。ごしゅじんさまだってもちろん一緒だ。

一緒に寝ているだけで、なんだか嬉しくなってくる。ぽや～とした中でごしゅじんさまの体温を感じると、なんだか幸せだ。

「……邪魔するわよ～」

鈴さんが入ってきた。すごく小声で呟いていたけど、今の部屋の状況を見てゆっくりとポケットから携帯電話とカメラを取り出した。

「……なによこのぷちか天国。とりあえず弾に送ってから……あと、箒達も呼ぶ必要があるわね。みんなで一緒にぷちかに溺れましょう」

すごい勢いでシャッターを切っているのに、どうしてか音は全くしない。凄いねそのカメラ。

「……篠ノ之博士に超高画質デジタルカメラを依頼しておいてよかったわ。ちゃんと音は出ないようになってるし、暗いところでも普段と変わらない明るさで撮れるし……これで撮った写真を毎回渡すだけでいいなんて、得したわね」

ああ、だからあの束姉さんに作ってもらえたのな。なるほどなるほど。

「撮ったら勝手に送ってくれるみたいだし、本当に便利ねこれ。現像とかもできないかしら？」

鈴が一人言のように呟くと、カメラの下部から現像済みの写真が連続して出てきた。……確かに画質いいね。

「……よく撮れてるわね」

そこでゆっくりと扉が開き、また何人かがこの部屋に入ってくる。

「……わぁ……わぁ……！」
「来たぞ、鈴。……うむ。桃源郷だな」
「そうだな。絶景、と言うべきか……ふぁ……」
「ちっちゃい織斑君が……こんなにいっぱい……」
「……さて、わたくしはどの場所に埋まればよいのでしょうか？」
「お～、ぷちおりむーがいっぱいだ～」

……なんだか人がたくさん。元々足の踏み場もないのにどうやって上がる気だろう？

「……さて、それじゃああたしはぷちかの海に溺れにいくわ。皆も起こさないように気を付けてね」

その場の全員が無言で敬礼をして、すぐにこの部屋の中でぷちかに埋もれて眠りについた。

「……うぇへへへへぇ……」

……駄目だこのシャル。早くなんとかしないと。

# ようやくまともな、夏休み

とある日。俺はいつも通りに自室でうつらうつらとしていた。こうして起きているような寝ているような状態、つまり微睡みタイムは大好きだ。

毎日起きてから完全に体が起きるまでの時間は二時間。その二時間を微睡み続けて過ごした俺は、一応食事をしに行く。食べてないことが鈴やののちゃんやちー姉さんにばれると怒られるから。

ただし、面倒だから服は着替えない。だぼっとしたパシャマを着たままスリッパをつっかけて食堂に行く。

適当に日替わり定食を選んで食堂のお姉さんのところに渡しに行く。最近身長の伸び縮みが楽にできるようになってきたから、カウンターが高くて置けないということは無い。

少しだけ待って、出てきた定食を適当なテーブルに運んで食べる。

……もしゃもしゃ、ごっくん。……おいし♪

ぺろりと食べ終えてから食器を返却して、自分の部屋に戻る。とても眠い。我ながら病気じゃないのか？　ってぐらい毎日寝てるけど、体は完全に健康体なんだよな。理由は知らないけど。

まあ、理由を知ったところで何か得があるわけでもなし。気にしないでおこう。

「あ、見付けた。部屋にいなかったから探してたのよ？」

「……ん……ごめん」

「良いわよべつに。あたしが勝手に探してただけなんだから」

そう言って現れたのは鈴。その手にはなにやら二枚の紙切れが握られている。なんだろうな？　チケット？

「そうよ。詳しい話は一夏の部屋でしましょ」

鈴は俺のことを抱き抱えると、揺らさないように静かに俺の部屋に向かって歩き始めた。

……揺れが良い感じだな……寝ちゃいそうだ。

「はいはい、寝ちゃってもいいけど話は聞いてもらうわよ」

「ん～……」

まあ、原作的に考えるとプールの誘いなんだけど……どうしようかなぁ……明日は外のケーキを買って食べる予定があるんだけど……。

……起きてから考えよ。今は考え事なんてしたくないし。

……すか～……。

夕方に起きると、鈴が膝枕をしてくれていた。セシリーとののちゃんとかんちゃんがベッドのすぐ横で俺のことを眺めていて、シャルとラルちゃんはどうやら落ちたらしく、部屋の真ん中に転がされていた。

ただ、ラルちゃんは普通に寝てるだけっぽい。白蛇ぷちかを抱き締めてるけど。

まあ、蛇は変温動物だから夏には涼しくて良いよな。俺にはある意味無縁だけど。

「ああ、起きたわね」

「……ん……一応……」

まだ眠いことには変わり無いけど、一応話を聞いて言葉を理解して考えて返答するくらいのことができるくらいにはなった。まあ、これなら起きてるって言っても良いだろうな。

「それじゃあ勝手に話すから、聞き返すなりなんなりしなさいよ？明後日の日曜に、新しくできたウォーターワールドに行かない？みんなで」

……やっぱりそのお誘いだったか……。プールなんて学校以外だとここ十年は行ってないな。

……行ってみるのもいいかもな。水の上で昼寝というのも悪くなさそうだ。悪かったらプールサイドでプールに足だけ入れて寝てよう。暑いし。

「いいよー」

「そうよね～やっぱりイヤよ……え？」

何でか信じられないものを見たっていう顔をされた。確かに俺はこういう付き合いは最悪って言えるレベルで悪かったけど、これは酷くないか？

「……来てくれる……の？」

「うん」

「……落ち着きなさい私。あの一夏が来てくれるですって？　よく

考えるのよ。……1、これは夢で、はしゃぐとベッドから床に落ちて頭を直撃。悶絶することになる。2、あまりの暑さに見ている幻覚。本当の私は保健室でぐったりしている。3、現実は意外と優しくできている。4、一夏のあまりの可愛さに頭が沸騰して出血多量で見ているいまわのきわの幻想。あたしとしては3番だと嬉しいわね。はい、答えはどれ？」

「鈴。三番だ。良かったな」

「三番だから……安心していいよ……？」

「三番ですわ。なぜそこまでいぶかしがるのかは知りませんけれど、今回は優しい現実ですわ」

それを聞いても鈴は信用できないらしく、自分のほっぺを引っ張ったりつねったりと忙しそうだ。

「……断った方がよかった？」

「いやいやいやいやいやいやいやそんなことは無いわよ？　ただ、今までにないことで驚いただけよ」

ならいいんだけどね。

「……明後日ね。準備しとくよ」

水着はあるし、タオルとゴーグルもある。使うことはほとんど無いけど。

……あ、そう言えばプールは騒がしくなるんだっけ？　そしてシロのデータ取りを真耶先生が伝えるのを忘れてたんだったっけ？

……あ、大丈夫だ。だってまだシロは二次移行してないし。よーし自由時間ができたな。無駄に遊び呆けるか。

じゃあ明日は外にケーキでも食べに行こう。ＩＳ学園のケーキも美味いけど、他のところのも食べたいからな。

## 甘い物、ちょっとした騒ぎ

鈴達とプールに行く約束をした次の日。昼頃に起きた俺はのんびりと町を歩いていた。あまり背が小さすぎると歩くのが面倒なので、１３０センチくらいにまで大きくなっている。

目指す場所は@クルーズ。原作だとプールに行く約束をした日に銀行強盗が立て籠った喫茶店だ。

まあ、プールに行くのは明日だし、問題ないだろ。

そう思いながら@クルーズの店の扉を開ける。

「いらっしゃいませ、@クルーズにようこそ」

「……何やってんの、シャル」

そう、そこにはシャルがいた。ちなみに執事服を着ている。

「……え……あれ……？　いち……か……？」

「お～、昨日ぶり。……それにしても……」

シャルの服装を見て、やっぱり、という思いを強める。

「似合ってると思うよ？」

「……ぅ……うわあぁぁぁん！」

なんでかシャルは泣きながら走っていってしまった。なんでだろうな。

「……なあ、ラルちゃん。ラルちゃんはシャルが泣きながら走っていってった理由とかわかる？　俺は全くわからないんだけど」
「さてな。私も理解できん」
俺に気付いて寄ってきたラルちゃんに聞いてみたが、ラルちゃんもわからないらしい。まあ、女心と他人の思考はいくつになってもわからないからな。
「……それはそれとして、一夏」
「ん？　なに？」
ラルちゃんに呼ばれたので考えるのをやめて振り向いてみると、ラルちゃんがその場でくるりと一回転。長めのスカートがふわりと少しだけ浮いて、ラルちゃんが止まるとゆっくり元の位置へ。
そして笑顔を向けられて、一言。
「@クルーズへようこそ、お客様」
……お～。凄い凄い。つい最近まで私服を持たないまま軍服と制服とＩＳスーツだけで過ごしてきたとは思えないな。
「……どうだ？　惚れ直したか？」
「惚れ直した云々は置いといて、似合ってると思うよ？　可愛い可愛い、やるじゃんラルちゃん」
「ふっ。当然だな」
ニィ……、と笑うラルちゃんは、それはそれは魅力的だった。ちー姉さんにちょっと似てるということは関係無しに。
「ああ、とりあえずおすすめの紅茶と、ケーキを全種類一品ずつお

願いね。パフェはいらないから」

「……それは構わんが……食べきれるのか……？」

ラルちゃんがひきつったような笑みを浮かべながら聞いて来るけれど、朝も昼も食べてないから楽勝だ。

「……頼んだからには食べ切れ」

ラルちゃんはそう言って厨房の方に消えていく。さてと。俺は適当なところに座って待ってようか。

しばらくして、紅茶と一緒にケーキの群れが運ばれてきた。メニューを見てみたが、そこに乗っている量からするとずいぶん少ないから、多分これで第一波。周りに座っている客からざわざわと言う声が聞こえるが、気にしない。

「……お、お待たせいたしました。紅茶でございます」

主にケーキを運んできたのはラルちゃん。紅茶を慎重に運びながら、無理が出ない程度にケーキも運んできたのがシャル。ラルちゃんはケーキを机の上に並べて空きができることを確認すると、またすぐにカウンターの方に行ってしまった。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？　よろしければ、こちらで入れさせていただきます」

顔を朱に染めながらも、シャルは仕事を全うしようとしている。流石シャル。真面目だな。

「それじゃあ、砂糖はいらないけどミルクたっぷりでお願いね」
「かしこまりました、それでは、失礼いたします」

そう言ってシャルは紅茶にたっぷりとミルクを注ぎ、静かにスプーンで紅茶をかき混ぜる。紅茶だけなら砂糖を入れてもいいけど、ケーキと一緒だったら砂糖はいらない。

……さてと。それじゃあ俺もケーキタイムにしようか。甘いものは嫌いじゃないし。

フォークでケーキを二割くらい削って、そのまま口に運ぶ。うん、美味い。そして甘い。
ぱくぱくと一つを食べ終わってから、紅茶を一口飲む。紅茶も美味しい。やっぱり紅茶はミルクティーにして飲むのが良い。個人の考えだし、レモンティー好きやストレート好きやコーヒー党を馬鹿にする気は無いけど。

紅茶で口を湿らせて、それから二つ目のケーキに取りかかろうとした時、急速に状況が変わった。

「全員、動くんじゃねえ！」

いきなりこの店に雪崩れ込んできた三人の男が怒鳴り、天井に向けて発砲した。
……弾痕付きの喫茶店か。まあ、世界のどこかにはそんな酔狂な店に来てみたいって思う人も居るんじゃない？　どこにいるのかは知らないけど。

ちなみに男達の格好は、安そうなジーパンにジャンパーに覆面。背

負ったバッグからは一万円札が何枚か飛び出しているのが見えていて、手には銃を持っている。

……どう見ても銀行強盗帰りの逃走犯です、本当にありがとうございましｔ（ｒｙ

「そこまで言っちゃったんなら最後まで言っちゃおうよ」

こんな時でもツッコミを忘れないシャル。そこに痺れる憧れぬ！憧れない理由は疲れそうだから。実にわかりやすい理由だな。

ちなみに俺は無視してケーキを食べている。とある理由から撃たれても平気だから。

……面倒臭いなぁ……。

……あ、このモンブラン美味しい。お土産とかできないかね？　ちー姉さんと一緒に食べたいよ。

# 超外伝、未来図？　移動編（前書き）

今さら出してみた。後悔はしていないけどまたしばらく間は空くと思われ

# 超外伝、未来図？　移動編

朝起きると、目の前に一夏の顔が広がっていた。それも鏡ではなく、原作の一夏の顔だ。
どうなったのかを考えると、恐らく俺が寝返りでも打って平行世界を渡りでもしたんだろう。

……こうなったら楽しまなくちゃな。とりあえず原作一夏の呼び名は『パパ』で固定して、背は百六センチくらいにしておけば良いだろう。
平行世界からやって来たんだが、ここはいつも通り未来からやって来たとでも言っておこう。どうやってかは……束姉さんの科学力は、ついに時空すらも越えたとか言っておけばなんとかなるはずだ。
……きっと。

……そう言えば今はいつだ？　三巻か？　四巻か？　まさかの五巻六巻？　その先？　ののちゃんがいないから一巻ではないだろうし、シャルがいないから二巻では無いだろうけど、正確な時間はわからない。

……お、一夏が起きそうだ。ここは朝一で『おはよう』と言ってやらなくちゃな。
そうだ、名前はどうしようか。面倒だし織斑家ルール（数字＋季節）で百秋にでもしとけばいいかな。シロ、しばらく名前の偽装よろしく。

シロがきらっと輝いた次の瞬間、一夏が目を覚ました。

そして俺のことをぼんやりとした目で見つめている。微睡みタイムだな。いいよね微睡みタイム。

「……ん？」

「おはよ、パパ」

一夏はぱちぱちと数回まばたき繰り返して、それからようやく俺のことを抱き締めていることに気付いたらしい。そして俺が誰かも。そして、大きく息を吸い込んだ……これは来るな。

急いで耳を塞ぐと、ギリギリでそれが間に合った。それでも五月蝿いけど。

「なにぃぃぃぃぃぃっ！！？」

この日、ＩＳ学園は一夏の声によって朝を迎えた。午前４時３０分ごろのことだった。

……迷惑だなぁ……。

いきなり一夏が叫んだことで、一夏に近しい少女たち（精神年齢的にはこっちが上）が一夏の部屋に集まってきた。

「一夏っ！何があった！？」

「どうしたの一夏っ！」

「敵襲か！？」

ばたばたと騒がしく集まってきた少女たちが一夏の部屋で見たもの

は……。

「……ふに……」

一夏の胸元に額を当てて寝ている俺（ここまで小さくなると女顔に見られる）と。

「ちょ、待った、なんでここに……あ」

……そんな俺の肩に手を置いて、見ようによっては押し倒そうとしているように見える一夏の姿だった。

「……ほう？　まさか私達の目の前で、知らぬ女を連れ込むとは……」

「一夏？　グレネードの威力実験に付き合って？　今すぐ」

「蜂の巣にして差し上げますわ！」

……大変だな。一夏。

朝っぱらから爆発音と破壊音が響き、一夏は起きたばかりだと言うのにボロボロになってしまった。

……可哀想に。

「……って、この子どこかで見たことあるような……」

「……たしかあれは……」

「……夢で見た、僕と一夏の……」

「いや、私との子だろう。なんと言っても夫婦だからな」

シャルさんや。爆弾発言はいい加減にしないと怒られるよ。後ろにいる鬼神（‘きしん’ではなく‘おにがみ’と読む）に。

「朝っぱらから喧しい！」

パアンッ！×６

お、こっちだと叩かれる音はまともなんだ？

「まったく、いったいなんの騒ぎだ……ん？」

そこでちー姉さんは俺に気付いたようで、キョトンとした目を向けてきた。

「……お前は確か……一夏の息子……だったか？　なぜここに居る？」

「大天才さんの技術力は、ついに時空をも越えたって」

「……またあいつか……」

ちー姉さんは頭痛がするのか頭を抑えてしまった。大丈夫かな？

とててっと近付き、手を引っ張ってしゃがんでもらう。

そしてちー姉さんの頭を撫でる。いたいのいたいのとんでいけー。

……アホらしく見えるが、俺がやると少し効果がある。マジで。

「……ああ、ありがとう……名前は聞けないんだったか？」

「大天才さんは、俺が過去に行った世界と過去に行ってない世界に分かれるから大丈夫だって言ってた」

元々平行世界だしな。全く問題ない。

「そうか。……名前は？」

その問いにはにっこり笑って答えよう。大嘘だけどな？

「織斑　百秋（ももあき）、十歳だよ？」

身長的には、一応そのくらいで通るはずだ。

## よし、潰そう

俺がもきゅもきゅとケーキを食べているところに、いきなり現れて立て籠った銀行強盗帰りの三人組。仮名称コーさんゴーさんトーさん。ギンは別にいるからつけられないんだ。ごめんね？

……なんでこんなに落ち着いてるかって？　撃たれても平気だからだけど？　まあ、大丈夫大丈夫。

外ではなんか警察が色々騒いでいる。なんというか、懐かしいような古めかしいような定型文を吐いている。

そんなことはどうでもいい。今はケーキだ。冷えてるうちに食べないともったいない。紅茶も冷めると味が落ちるし。

……あ、このショートケーキ美味しい。クリームが秀逸だ。なに使ってんのかね？

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺たち全員――」

こっちのチーズケーキもいいな。レモン風味で甘すぎず、生地もしっとりしてて美味しい。今度チーズケーキも作ってみるか。美味しくできたらみんなで食べよう。

「うろたえるんじゃねえっ！焦ることはねえ、こっちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

お、ミルフィーユか。サクサクの層が良いよな。クロワッサン系統のこういう生地は基本的に好きだ。歯応えがあるし。

ただ、寝てるときには嫌だな。食べにくいから。

「へ、へへ、そうですよね。俺達には高い金払って手に入れたコイツがあるし」

拳銃より大きな発砲音が響き、蛍光灯が破裂してガラスを撒き散らしたような高い音がした。

「きゃあああっ！！」

……それにしても、ここのケーキはみんな美味いな。ティラミスも美味い。水分が多すぎるということもなく、甘すぎず苦すぎずバランスがいい。

今度は拳銃の発砲音。そんなに弾を使うと必要なときに使えないぞ？　どうでもいいけど。

「大人しくしてな！俺達の言うことを聞けば殺しはしねえよ。わかったか？」

……あ、紅茶無くなった。どうしよう？　新しいの頼もうかね？

「おい、聞こえるか警官ども！人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！勿論、追跡車や発信器なんかつけるんじゃねえぞ！」

……まあ、いいか。バレないように千の顔を持つ英雄で補給してやれば。

カップに手を被せて、出して、ミルクと混ぜて飲む。……及第点だな。俺。

「おい、何してやがる！」

……ん？　俺？

横を向いてみると、ハンドガンを持った覆面がすぐ近くに立っていた。やっぱり俺らしい。

「大人しくしてるんだからケーキを食べるくらいいいだろう。温くなったケーキと紅茶は味が落ちるんだぞ？　もったいない」

もう話は無いだろうから、俺はケーキに向き直る。さあ、ケーキタイム再開だ。

「ッざけやがって！このガキ！」

バゴォンッ！という音と共に、テーブルに乗ったケーキがテーブルごと跳ね上がる。そしてケーキと紅茶は無惨に床に叩きつけられ、ケーキからケーキだったものに変わってしまった。

……よし、潰そう。物理的に。

ｓｉｄｅ　シャルロット・デュノア

一夏に銃を突き付けた男が、一夏に向けて怒鳴っている。自分がどれ程の事をしたのかも気付かずに、喚き続けている。

一夏の視線の先には、潰れたケーキの残骸と、割れた紅茶のカップ。

そして溢れた紅茶がある。

それを見て固まっている一夏が、暴力に対する恐怖で固まったのだ

とでも思っているんだろうか。あの男は。

自分が、眠たがりの竜の逆鱗の上でタップダンスを踊っていることにも気付かない。

「シャルロット。お前もシリアスの中でギャグを言うようになったな」

……ああ、そうだね。今気付いたよ。

だけど、確かにそんな感じだと思わない？

全く同時にちらりと一夏の方を見て、もう一度ラウラと視線を合わせる。

「……確かにな」

「……でしょ？」

……止めるのが大変そうだなぁ……。

もう一度一夏の方を見てみると、全く動いていなかった一夏が動いていた。それは、ハンドガンを持っている強盗の一人の腕を掴んでいるところだった。

……今のうちなら、一夏に気をとられてる残りの二人を無力化できるかな。

ラウラに視線を向けると、ラウラも同じことを考えていたらしく、すぐさま頷きが帰ってきた。

それじゃあ、行動開始。

静かにその二人の後ろに回り、そしてちょうどいい場所に立って期を待つ。

それはすぐにやってきた。ゴシャリ、という鈍い音が響き、リーダーらしい男のハンドガンを持った手首が一夏に握り潰される。

「うぐあぁぁっ！？」

「あ、兄貴っ！？」

その悲鳴に完全に意識がこちらから離れたのを確認して、肝臓のあたりに爪先を捩じ込んだ。防御が頭に無い状態でのこれは結構効いただろう。

ちなみにラウラは思いきり蹴り上げていた。どこをとは言わないけど。

悶絶するその二人を気絶させようと頭部と鳩尾と肝臓のあたりに二、三発ずつ蹴りを入れ、動かなくなったのを確認して武装解除をする。ショットガンとその弾と、内ポケットの中のハンドガンも取り上げてから、脱がせたジャンパーで両腕を縛る。足の方は……まあ、いいかなって思って放置。

ラウラも同じように気絶させ、武装解除してから縛り上げる。覆面を裂いて足を縛っていた。あ、そんな手があったんだ。僕もやろっと。

……ちなみに、一夏のこともちゃんと見ながらやってたよ？　心配は……一夏の心配はいらなかったみたいだけど。

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！！　ＨＡ～～ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！！！」

ゴスゴスゴス

## よし、潰そう（後書き）

殴り方は武装錬金の照星さん的な物を想像していただければ。

## その後の話と、ミックスベリー

気が付いたら俺はラルちゃんとシャルに止められていた。拳は血まみれで目の前には『公共の電波に乗せるときにはモザイクをかける必要があるだろうと思われる赤黒い塊』がある。一応、人型は保っている。

「ええい放せ！俺はそいつを殴るんだ！グシャグシャになっても殴るんだ！ミンチになっても殴るんだ！！ペーストになるまで殴ったら綺麗にロースト作るんだ！！！」

「グシャグシャの時点でやりすぎだってば！それ以上やったらホントに死んじゃうから！」

「大丈夫。人間って意外と丈夫にできてるからこれくらいならまだ死なない」

「だから死ぬ前にやめないと駄目なんだってば！って言うかローストされたら確実に死ぬから！」

「……ふむ。確かに外傷は凄まじく見えるが、内蔵へのダメージや出血量は大したことがないのか。なるほど……」

「ラウラも感心してないで一夏を止めるのを手伝ってよぉ！大きい一夏は僕一人じゃあずっとは止められないんだから！」

「あ、じゃあやめるか。そろそろ疲れてきたし」

「止まっちゃった！？」

シャルはかなり驚いているようだったが、実のところミンチになっても殴ると言っていた時にはもうただの悪ふざけだった。

「……一夏の悪ふざけは本気にしか聞こえないんだよぉ……」

そう言いながらシャルはその場にへたりこんだ。どうやらかなり疲れているようだ。大変だね。

さてと。それじゃあ俺は頼んで来たケーキと紅茶の分の金を置いて、さっさと逃げるか。面倒事は嫌いだし。

「と、言うわけでこれ代金ね。じゃねー」

「え、ちょ、待っ」

シャルの言葉？　聞こえんなぁ。

夕方。俺はとある公園でクレープを食べていた。シンプルにチョコバナナもいいけれど、たまにはしょっぱいクレープもいいよな？　ということで、俺が今食べているのはツナレタス。これが意外と美味い。クレープ生地さえあれば家庭でも簡単に作れそうだ。

「それじゃあ次はこのチョコミントってやつを一つ」

「……お嬢ちゃんまだ食べるのかい」

俺は男だ。まあ、女扱いでサービスしてもらえるんだったら普通に受けるし訂正しないが。

「……はいできたよ」

「どうも」

代金を渡してすぐ近くのベンチでチョコミントクレープを食べる。クリームにチョコとミントのソース的な何かがかかっていてすーっとする。美味い美味い。

「……次はブルーベリーにするか」

それが聞こえたのか、クレープ屋の中で店主が動き始めるのが見えた。

「ブルーベリー一つ」

「お待ちどう」

正直二秒も待ってないけどな、と思いつつ、できたてのブルーベリーのクレープを受け取る。今日は俺にしては珍しくよく食べる日だな。

これでクレープは最後にしようと店を離れると、ちょうど知った顔に出会った。

と言うか、ついさっきまで会っていた顔だ。

「よ。なんか疲れてる顔してるけど、大丈夫か？」

「……一夏が……それを言うの……？　あのあと……どれだけ大変だったか……！」

ちー姉さんもかくやという目で睨まれた。怖い怖い。

「まあまあ、これでも食べて機嫌直して。食いかけで悪いけど」

「何が――むぐっ！？」

食いかけのブルーベリーをシャルの口に押し込み、俺は新しいクレープを買いに戻る。

「ラルちゃんは何食べたい？」

「ふむ……それでは、苺を貰おうか」

クレープ屋のメニューを見て何かに気付いたらしく、少し笑みを浮かべながらラルちゃんは苺を頼んだ。

「じゃあ苺とラズベリーを一つずつ」

「あれ？　ミックスベリーは？」

ミックスベリー？　……ああ、いつも売り切れのミックスベリーの話か。確かそんなのもあったな。忘れてたけど。

「売り切れみたいだぞ」

「あ、そうなの？　残念……」

「……お待ちどう。……それにしてもお嬢ちゃん、よく食べるね。それでもう１４は食べてるだろ？」

クレープを渡しながら俺にそう言う店主は、何でか苦笑いを浮かべていた。

「……まあ、このくらいは」

代金を渡しながら言う俺も、たぶん少し苦笑いをしているはず。

「さてと、それじゃあ食べようか。……シャルはどっちを食べたい？」

「こっちのでいいよ」

そうか。まあ、いいって言うならいいけどね。俺はどっちでも構わないし。

「……ふむ。私としては一夏の食べているそれにも興味があるのだ

がな」
「ん？　それじゃあ一口いる？」
「貰おうか。……はむ」

ラルちゃんがそういったことで始まった交換会は、俺とラルちゃんがシャルにミックスベリーの種明かしをしてからかうまで続いた。
……それにしても、シャルはからかうと面白いな。いい反応を返してくれるし、ツッコミキャラだし。

「最近はシャルロットもボケに回ることがあるぞ？　頻度は低いがな」
「周りのキャラが濃いからしょうがないと言えばしょうがないんだけどな」
「なにそれ？　僕の影が薄いってこと！？」

影は濃いと思うぞ？　ツッコミは貴重だし。シャルとかんちゃんの二人だけだし。その二人もタイプが違うから被ることもないし、大丈夫だって。

# 夏休み、ウォーターワールドにて

今月できたばかりだというウォーターワールドに来ている。確か何かあったような気がしたんだが、何もない。普通に騒がしく、普通に静かで、水の感触がなかなか気持ちいい。

ぷかーっと浮かびながら天井を見上げていると、なんだか眠くなってきた。

「楽しんでるかしら？」

「ん。まあ、そこそこ楽しんでる」

すい～っと音もたてずに泳いで近付いてきた鈴にゆっくりと答え、また浮かんだまま流れる。かんちゃんが隣で一緒に流れていてくれるお陰か、まだ一度も監視員に声をかけられていない。

昔からこうして浮かんでいると声をかけられたり、酷いときには溺れてると勘違いされて引き上げられることがあったからな。感謝感謝。

あと、水着似合ってるぞ。

「あ……ありが……とう……」

「ふふふ……簪も可愛いわね。初々しくて。……あたしにもこんな時期があったのよねぇ……」

まあ、なんにしろ俺は今まで通り浮かんで流れ続けるだけだけどな。

……あと、悪いんだけど今の鈴の言葉がすっごい年より臭く聞こえた。

「……せめて大人っぽいって言ってくれないかしら？」
「だ……大丈夫……鈴も、可愛いよ……？」
「ありがと。簪に言われると自信を持てるわ」

鈴はそう言うけれど、実のところ始めからあんまり気にしていないようだ。雰囲気を読むのはそこそこ得意だし、鈴も隠す気はないようだからそれが楽にわかる。

「……そう言えば、なんかイベントなかったっけ？」

気になっていたことを鈴に聞いてみた。確か、原作ではセシリーと一緒に出てＩＳで暴れて大会そのものがなくなったはず。

「水上ペアタッグレースのこと？　それだったら昨日のことよ。そんなのがあったら一夏が落ち着いて遊べないだろうし、あたしもそんなのよりも一夏と一緒に流れてる方が好きだしね」
「ありがと鈴。そんな思いやり深い鈴が好きだよ？」
「あたしもこうして素直に心情を顕す一夏が好きよ？」
「わ……私も……好き……」

平然としたまま返してくる鈴と、顔を真っ赤にして口許まで沈んじゃったかんちゃんを見ていると、なんだか暖かい気持ちになってきた。かんちゃんは可愛いねぇ……。

「……？　どうして……撫でるの？」
「簪が可愛いからよ。ねえ一夏」
「そうだな。かんちゃんが可愛いから撫でる。おかしいことなんてなにもない」

と、いうことでなでなでタイム。かんちゃんを俺と鈴が撫でながら、

ちょっとの間流される。

「……そういや、ののちゃんとラルちゃんは？」

「箒とラウラ？　確か、ラウラが一夏の真似をして浮きながらぼんやりしてたからついて行くって言ってたわよ？　ちなみにシャルロットは妄想の海で溺死して賢者モードらしいわ」

「なに、それ……？」

そうか、賢者モードか。女でもなれるんだな。驚きだ。

弾は一時期常時その状態で、厳さんと蓮さんと蘭ちゃんに本気で心配されてたっけな。あの時はショック療法で直したんだっけ？

確か、当時も寝巻きとして使ってたちー姉さんのお下がり（にしては以下略）のボタンを上から二つ開けて、首輪つけて鈴つけて肉球つけてにゃん♪　って鳴いたんだったな。

その後軽く襲われて、弾だったら男相手でもまあ良いかな～と思って抵抗しないでいたら鈴と蘭ちゃんに弾がしばかれてた。二人ともキレると瞳孔が縦長になるのな。まるで猫科の動物みたいだ。

まあ、ちー姉さんがキレた時の白いところが黒く、黒いところが赤黒く変わった目よりは怖くないけど。

……ああ、比較対照にするのがそもそもの間違いだったな。あの状態のちー姉さんと同等に怖いものなんて、明らかにイカれた笑い声をあげながらキーボードを十枚くらい同時に叩いている束姉さんくらいしか知らない。人間の声帯ってあんな音（声とは認めない）を出せるんだと知ってびっくりした。

ちなみにその日に寝たら夢の中でひたすらその束姉さんが笑い続けていたのでちー姉さんの布団に潜り込んだら、最初はまた出てきたけどすぐにちー姉さんが夢に出てきてアイアンクローで止めてくれた。ありがとねちー姉さん。

「あ、一夏。その水着似合ってるね」
「ん、ありがと。シャルも似合ってると思うよ」

プールサイドでにこにこ笑いながら俺のことを見ているシャルは、なんと言うか本当に落ち着いていた。多分今ボケても普段みたいなツッコミは返ってこないんだろうなぁ……。

「ツッコミだけなら来るわよ？　ただ、いつもとはかなり違うツッコミだけどね」
「そうなのか？」
「まあ、いつもとは違うと思うよ？　今なら僕をＩＳ学園に送り込んだあの人と顔を会わせても延髄に踵落としを決めるだけで許してもいいかなっていう気分だし」
「シャルがそれで許したら、その後に俺が男として再起不能にしてやるけど」
「そしてあたしが本妻の方を女として再起不能にして、」
「私が刀で精神崩壊まで追い込み、」
「私がそれを物言わぬ蛋白質の塊に変えればいいのだな？」
「なら、わたくしはその場所を都合する裏方にでもまわりましょうか」
「ははははっ。その時はよろしくっ！……なんてね」

本当だ。随分と芸風が違うな。いつもならもっと慌てて俺達を止めようとするだろうに。

「え……あ……えっと……だ、駄目！」

かんちゃんが急に大きな声を出した。一体なんだろうと見てみると、かなり慌てていた。

「お、織斑君……そんなことしたら……駄目」

……もしかしてこの妙にアグレッシブなところのある娘さんは、今の冗談を本気で受け取ったのだろうか。

……可愛いなまったく。プールの入り口近くの柱の影にいる誰かさんとは大違いだ。

「え……な、なんで……撫でるの……？」

「さっき言ったばっかりよ？　簪が凄く可愛いからよ」

まあ、それ以外に理由なんて無いわな。可愛い可愛い。

「かんちゃんって可愛いよな」

「そうだな。私も撫でていいか？」

ののちゃんの問いに、かんちゃんは顔を真っ赤にしたまま答えなかった。

## 夏祭り、神楽舞

ののちゃんの実家の神社で祭があるので、行ってみることにした。
甚平で。
祭に行くなら甚平だろうと前世の父親に教えられていたので、その辺りは一応こっちの世界に来てからも守っている。

ちなみに俺の甚平姿はなかなか好評で、賢者モードから抜け出したシャルといつも通りのちー姉さんを含む生徒達（ちー姉さんは生徒じゃないけど）があたりを真っ赤に染め変えていた。ちょっと困る。
毎朝起きると全身が赤くて鉄臭い物で被われていて、寝間着があっという間に駄目になってしまうのが特に困る。ワイシャツなんてもう色が染み付いてとれないし。
中学生時代にその血がついたままのシーツ（量はすこしで真ん中よりすこし下の方に点々と付いていたやつ）を見た弾が俺のことを押し倒してきたり、鈴が押し倒してきたりしたから毎回漂白するようにしたという出来事もある。

……それとこれは余談だが、押し倒された時にはかなり詰問された。
端から見てれば完全に強姦一歩手前の状況だったと思われる。頭の上で両手を抑えられたり、着ていた部屋着のボタンが上からいくつかとれたりしてたし。

……まあ、俺が説明を終えた後は自分の勘違いに気付いて呆然としてたけど。
その時に腕にできた痣と服のボタンのことから一日泊まらせて、寂しい夜の抱き枕になってもらったことは言うまでもない。

ののちゃんには秘密で出発し、神社に到着。秘密にした理由は、その方が面白そうだったから。

武装な錬金のレーダー、ヘルメスドライブを使ってののちゃんを捕捉した俺は、遠くから神楽を舞うののちゃんを見ている。気配を読まれてバレているだろうけど、まあ気にしない。気を散らしたら悪いから、できるだけ気配は消してるつもりだけどな。あくまでつもりだけど。

……は～、綺麗だな。しばらく見ていたいね。

ｓｉｄｅ　篠ノ之　箒

懐かしの私の生家に戻ってみれば、そこはほとんどなにも変わっていなかった。変わっているものと言えば、壁にかけられた木製の名札の数と、それに書かれた名前くらいだろうか。

昔は私と千冬さんと一夏の三人と、私の父を入れても四人だけという状態だったが……と、しっかりと手入れのされている道具を見ながら思う。

ふと、昔の情景が私の前に現れた。

床に置かれた面を拾い、小さな一夏に竹刀を突きつける小さな私が、壁に寄りかかったままぼんやりとした目で私を見つめる一夏に言う。

『今日こそお前に勝ってみせる！剣を取れ！』

それに対して小さな一夏は、ゆっくりと息を吸い込み、ゆっくりと大きく吐き出した。

『……一戦だけね』

『臨むところだ！』

すぱんっ！すぱぱぱんっ！ぴしっ！ぱんっ！べしっ！ばしばしっ！パンばしっ！べしっ！すぱんっ！べしっ！べしっ！べしっ！べしっ！すぱんっ！びしっ！

……ぺち。

『……まあ、頑張って』

『くぅ……明日こそ……明日こそ勝ってみせる！』

……ああ、そう言えば無言で打ってくるせいで一本を取られないからと、ぼっこぼこにされていたな。

……後に響かないように優しく、それでいてけして手加減はせずに。

あの頃の私はそうしてもらっていることにも気付かないで、ただがむしゃらに向かっていっていたな。

……懐かしく、それでいて少しばかり恥ずかしい話だ。

生徒手帳を開き、中に入れてある数枚の写真を見る。

それらは私の思い出の写真。一つは折り目がついているが、今ではその折り目は伸ばされている私と一夏と千冬さんと姉さんの集合写真。折り目は当然、私と一夏のツーショットに見えるようになる場

所に入っている。私も子供だったものだな。

二枚目は最近撮ったもので、ＩＳ学園の屋上で私が一夏に膝枕をしている。自分で言うのもどうかと思うが、この写真の私はかなり優しげな笑みを浮かべている。記憶にある母の笑顔のようだ。

三枚目はこれまた最近撮った物で、私と姉さんが二人で写っている。私のことを後ろから抱き締めながら心底楽しそうに笑っている姉さんと、それを見て苦笑いを浮かべている私の写真だ。

くす……と笑ったところで外に気配を見つけた。恐らく雪子叔母さんだろう。遅くなった私を探しに来た、というところだろう。無理を言って手伝いをしているというのに、悪いことをしてしまったな。

写真の挟まった生徒手帳を閉じて、もうすぐ雪子叔母さんが見えるだろう扉の方に向き直る。

「箒ちゃん、ここにいたの」
「ええ。懐かしくて、つい。すみません」
「あら、いいのよそのくらい。元々住んでいた所だもの。誰だって懐かしくて見て回るわよ」
「そう言って頂けると、ありがたいです」

……ああ、やはりこの人も変わらない。それが私は、たまらなく嬉しい。

「……神楽舞は、六時からでしたか」
「そうよ。……それにしても、よかったの？　夏祭りのお手伝いなんてして」
「迷惑でしょうか？」

「そんなことないわよ。大歓迎だわ」

恐らく雪子叔母さんの中には、誘いたい男の一人でもいるのではないか、というのがあるのだろう。

だが、相手はあの一夏だ。あの眠たがりがこのような祭にわざわざ参加しにくるわけがない。

……私の神楽を見てほしいという思いはあるのだが、それを強制することはできないしな。

舞装束に身を包み、金の飾りをいくつか装う。それだけで私の意識は純粋に舞うことに向かう。

昔から私は影響を受けやすかったらしく、この格好をすると舞うのだという意識が強くなる。

口紅を塗り、鏡を見て、綺麗に塗れていることを確認した私は、渡されていた扇と雪子叔母さんの持ってきた宝刀を持つ。

「そう言えば箒ちゃん、昔はこれを一人で持てなくて扇だけだったわねぇ」

「ええ。そうでしたね。懐かしい話です」

だが、今は持つことができる。

刀を抜いて右手に持ち、左手には鈴のついた扇を持つ。

それでは、練習も兼ねて一差し舞うとしようか。

一応練習も続けてはいたし、そこまで酷いことにはならないだろう。

## 夏祭り、屋台荒らし

ののちゃんの神楽舞を見終わってから本格的に祭に参加。

……しようと思ってたんだが、何年か前に作った悪名のことを思い出して諦めた。

仕方がないから焼きそばを買って食べつつお守りでも買おうとお守り売り場に行ってみると、ののちゃんがにこやかに売り子をやっていた。

「やっほーののちゃん。神楽綺麗だったよ。あとお守り１４個ね。健康祈願が８で家内安全が５、あと安産祈願が１」

「なんだ、見ていたのか……ありがとうな。１４か……構わないが……そんなに買ってどうするつもりだ？」

「配るんだけど？」

健康祈願がかんちゃんとラルちゃんとシャルとセシリーと鈴と真耶先生とカズとちー姉さんで、家内安全が束姉さんとののちゃんと弾と蘭ちゃんと俺。安産祈願はネタでシャルに一回渡してから冗談だって健康祈願を渡すつもり。

「……そうか。シャルロットも不憫にな……」

そう言いながらもののちゃんはお守りを種類別に包んでくれている。手際が良いな。何で不憫なのかはわからないけど。

「あ、そうそう。どうせだし一緒に祭を見て回らない？　一人よりその方が楽しそうだし」

「……ふむ。それは面白そうだが、生憎と仕事があってな」

そっか。残念。

「あら、あらあらあら？　……うふふふふ♪　箒ちゃん、あとは私がやるから、夏祭りに行ってきなさいな」

「……よろしいのですか？」

「いいからいいから。ほらほら急いで。まずはシャワーで汗を流してきてね。その間に叔母さん浴衣を出しておくから」

なんだか話が良い方向にばかり進んでいく。夢か？　それとも現実か？　現実だったら嬉しいね。いろんな意味で。

「ちょっとだけ待っててね。彼女を待つのも彼氏の役目よ」

そう言ってその人（多分ののちゃんの叔母さん。話には聞いていたけど会うのは初めて）はののちゃんをつれて行ってしまった。

そう言えば、お守り売り場に誰もいなくなったんだが……ほっといていいのか？　良いなら良いんだけど。

十五分くらいで浴衣で現れたののちゃんは、綺麗と言うより可愛いという感想の方が合っていた。まあ、どっちにしろ似合ってることには変わりないんだが。

俺のいる場所から少し離れた所でののちゃんは目を閉じて、それから数秒後に俺に視線を向けた。気配で俺を探してたんだな。

「……一夏。どうやってそんなところに座った。危ないから降りて

こい」
「はいはい、っと」

俺は鳥居の上に座っていたが、ののちゃんに呼ばれて飛び降りる。
場所はののちゃんのすぐ手前だ。
ちなみに普通にジャンプしたら登れた。久し振りにチートを凄いと思った。

「浴衣似合ってるな。可愛いと思うぞ」
「そうか。……ふむ。案外嬉しいものだな」

とりあえず褒めてみると、ののちゃんはまんざらでもなさそうな顔をした。うん、可愛い可愛い。
そんな可愛いののちゃんの手を取って、祭の喧騒の中に歩を進める。

「それじゃあ、久々の祭を楽しもうか」

すっ、と大きくなり、ののちゃんに見合う大きさに。多分こっちの方がののちゃんは嬉しいだろうしな。
そうするとののちゃんは珍しく頬を少し朱に染め、僅かに恥ずかしそうに付いてきた。

「……むぅ……その姿は慣れないが……格好良いと思うぞ。一夏」
「ありがとよ」

褒められたら礼を返す。まあ、当然の部類に入る事だよな。

……それじゃあ、行くか。

side　篠ノ之　箒

一夏につれられて神社の中にある出店を回る。色々な店があるが、なぜか一夏入るか食べ物を扱うところにしか行こうとしない。焼きそばや焼きとうもろこし。チョコバナナにソース煎餅。そういった店をいくつか回ってから、ふとその事実に気が付いた。

「一夏。覚えているか？　小さい頃にこうして屋台を回りながら、何度も勝負をしたな」
「ああ、やったな。懐かしい話だ」
「……どうだ、再戦でも」

しかし一夏からの返答は色好いものではなかった。
一夏は何となく私から目をそらしながら、一言だけ呟くように言葉を発した。

「……いや、無理だと思う」

ここで私の興味を引いたのは、一夏が言った言葉が『嫌だ』とか『断る』と言った拒絶する系統の物でなく、不可能だという答えを返してきた事だ。

『無理』とはどうして『無理』なのか。どうしてそのような答えが帰ってきたのかを知らないまま、私は一夏を金魚すくいをやっている店の前につれていった。

「いらっしゃ……なっ！？　そんな馬鹿な……『屋台荒らし』だと！？　く……去年の祭に参加していなかったから油断した……っ

！」

……は？　『屋台荒らし』？　なんの話だ？

そう思いながら一夏を見てみると、なぜか一夏は苦笑いをしている。

「あー、安心してくれ。今回は前みたいに金魚がお椀に山積みになってるのを無視してひたすら掬い続けるとか、跳弾で景品をまとめて持っていくとか、籤で良い方から四つ全部持っていくとか、そういうことはしないから」

「……一夏。お前はそんなことをやっていたのか」

確かにそんなことをしていれば『屋台荒らし』と呼ばれる訳も理解できるが……。

「まあ、そんなわけで俺は基本的にそういう屋台から出入り禁止されてるんだよ」

……まあ、それなら一夏が『無理だ』と言った理由もわかるな。それは確かに無理だ。

「……まあそれは置いといて……俺は駄目でもののちゃんは平気だよな？」

「……まあ、お前さんじゃなければ大丈夫だろうが……」

「だってさ。やる？」

「……いや、やめておこう。」

「そっか。見てるだけでも結構楽しいから、少し残念だ」

一夏はそう言ったが、私としては一夏と一緒でなければつまらないからな。

私はそうして一夏と一緒に金魚掬いの店の前を離れたのだった。

## 夏祭り、初対面の二人

ののちゃんと一緒に食べ歩きをしていると、なぜか色々と面白い事が起きる。
例えば射的屋で土下座されてお引き取り願われたり、輪投げ屋で土下座されてお引き取り願われたり、籤引き屋で土下座されてお引き取り願われたり、スーパーボール掬いで土下座されてお引き取り願われたり……。

なんだ、いつものことか。

「お前はいったいどれだけ屋台荒らしをしたのだ」
「大してしてないぞ……あ、焼きそばのおっちゃんやっほー」
「おぉ、織斑の坊主か。久し振りだなぁ。とりあえず持ってけ。二百円だ」
「ありがとおっちゃん」
「バカヤロォ、お兄さんだ」
「……なあ、一夏。あの方とはどのような経緯でこのような関係に？」
「ん？　焼きそばのおっちゃんは何年か前からここの祭で焼きそば屋台を出してて、それを食べて美味かったからまとめ買いしたらそれが呼び水になったのかかなり儲けが出たらしくて、それ以来の付き合いだな」
「……そうか」

ののちゃんはなんでか納得していないような雰囲気だったけど、まあ、気にしたって変わりゃしないんだからほっとけって。
確かに焼きそばのおっちゃんはかなり強面で子供が見たら泣き出し

て、泣いた子供が凄まれたら涙と呼吸と心臓が纏めて止まりそうな顔してるけど、優しい人だぞ？　ヤクザの中でそこそこの地位に居るらしいけど。

「完全に危険人物では……いや、顔と経歴だけで人を判断するのは良くないな。確かに怖いが」

「ののちゃんってば酷いね。初対面の人にそんなことを言うなんて」

「さっきあそこまで言ったお前には言われたくはない」

まあ、そうだよな。

ちなみにこの祭で食べるものを売っている所には大概強面のおっちゃんｏｒおじちゃんｏｒお兄さんがいたりする。毎年のことで突っ込みを入れる人はほとんどいないが、久し振りに帰ってきたののちゃんには刺激が強かったようだ。

でも、喧嘩があったりすると店から出てきてすぐ止めてくれるし、基本的に気のいい人ばかりだから問題ないとは思うんだがね。

……未成年だろうがなんだろうが、気に入った相手に酒をすすめてきたり、あと組に入らないかって誘ってきたりするところは多少マイナスだけど。

「……まあ、とにかく今は祭を楽しもうぜ？　ほらののちゃん、あーん」

「む……あー……ん」

もぐもぐと焼きそばを食べていたののちゃんの目に、驚愕の色が浮かび上がる。

気持ちはわかるけどな。焼きそばのおっちゃんはヤクザをやってるのに、なんでか妙に焼きそばを作るのが上手い。そしてこの焼きそ

ばは美味い。

「……美味いな」

「俺が焼きそばのおっちゃんを‘焼きそばのおっちゃん’って呼んでる理由がわかった？」

ただ焼きそばを作ってるだけじゃそうは呼ばないとも。その焼きそばが美味いからそう呼んでいるんだよ。顔のせいか売り上げはそこそこらしいけど。

「それじゃあ、今度は飲み物でも買ってくるか」

「そうだな。人混みの中はやはり暑苦しい」

それに息苦しいしな。

「なにがいい？　ラムネ？　オレンジ？　緑茶？」

「焙じ茶があればそれだな。なければ緑茶でも構わんが」

「それじゃあ間をとって鳩麦茶を」

「それでも良いぞ」

驚いたことにＯＫが出た。それじゃあ一緒に買いに

「――――あれ？　一夏……さん？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。この声は……

「やっぱり蘭ちゃんか。久し振り」

「あ、は、はい。お久しぶりですっ」

くいくい、とののちゃんに軽く袖を引かれたので視線を向けてみる

と、困惑した顔ののちゃんが俺のことを見ていた。

蘭ちゃん。弾の妹で、初代睡眠愛好会の特別学外会員二号だ。

そう思ってみると伝わったらしく、袖をつまんでいた指が離れた。

「……それはそれとして、蘭ちゃんは浴衣も似合うな。いつも洋服のイメージだったけど、可愛いと思うぞ」

「はぅ！あ、ありがとうございますっ！」

うんうん、やっぱり蘭ちゃんも可愛いな。流石はＩＳ界の二大妹属性の一角にして、唯一の年下属性と言ったところか。

蘭ちゃんの後ろできゃいきゃいと蘭ちゃんと同い年くらいの娘達が騒いでるけど、まあ、あのくらいの女子にはよくあることだろ。前世でも普通にあったし。

……前世のは結構腐ってたような気がするけど。性根じゃなくて趣味嗜好が。

「……元気だな」

「ああ。そうだな」

あそこまで元気だと、もはや少し羨ましくなってくるよ。

てけてけてけー、と人混みの中を浴衣を着ているとは思えないほどの速さで駆け抜けていくその娘達のことを見てから、俺は蘭ちゃんに向き直った。

「……蘭ちゃんがよければだけど、一緒に回る？」

そう言うと、蘭ちゃんは凄く嬉しそうな笑顔を浮かべて

「はいっ！」

と、元気に答えた。

「……そう言えば、そちらの人は……彼女さんだったり……」

「安心しろ。まだ違う」

ののちゃんはからかうようにそう言って、手に持っていた綿飴を噛み千切った。

# 夏祭り、屋台遊び

ののちゃんと蘭ちゃんを連れて祭の屋台を回る。俺が参加しなければ屋台のおっちゃん達も土下座したりはしないので、そこそこ楽しく回ることができた。
あと、蘭ちゃんの射的は凄かった。よくあの鉄板をあの銃で倒せたもんだ。
本人にそう言ったらなんか微妙な顔をしてたが、何でだろうな。

「女心という物は複雑なのだ。そっとしておいてやれ」
「そうする」

ちなみに蘭ちゃんが落としたのは液晶テレビ。いくら俺でもそんな物を蘭ちゃんに持たせたまま祭の見学を続行しようとは思わないので、蘭ちゃんの代わりに俺が持っている。そこそこ重いが、前に運んだことがあるＩＳ一機よりは楽だ。

「それはそうだろう」
「？　何がですか？」
「ん？　五反田は一夏の思考がわからないのか？」
「わかるんですかそれ！？」
「一夏への愛情を満ち溢れさせれば、自ずと理解できるようになるはずだが……そうか、まだまだと言うことだな」
「むっ！そんなのわかるのは箒さんだけじゃないんですか？」
「私以外には鈴とセシリアとラウラと……最近簪がわかるようになっていたな。それに千冬さんもわかるぞ」
「ついでに弾もわかるよ」
「お兄が！？」

蘭ちゃんはなんでか驚いている。弾が俺の思考を読めるって知らなかったのか？

「知りませんよ！と言うかそんなの普通の人間にできるわけないじゃないですか！」

「五反田……いや、蘭。お前もいまこの時よりまともな人間ではなくなったぞ。おめでとう」

「なんの話ですか！」

「蘭ちゃん、ついさっき読んでたからな？」

蘭ちゃんはそれを聞くと、ピシッ、と固まった。

「まあまあ、お前もようやくこの高みまで登ってこれたんだ。歓迎するぜ」

あ、弾だ。甚平似合ってるぞ。格好いい。

「ありがとよ」

「……ほんとに読んじゃってるし……と言うか、さっきまで私お兄に一夏さんへの愛情で負けてたとか……」

「まあ、蘭も私達と同じ場所に立ったのだ。これからいくらでも挽回できる」

「……ありがとうございます」

「そうだぜ蘭。俺は蘭を応援してるぜ？」

「うっさい、バカ兄」

……その後に蘭ちゃんが言っていた『……でも、ありがと』という言葉は聞かなかったことにする。ちなみに、俺はたしかに鈍いが原作一夏ほど鈍くはないからそれだけでも十分わかる。

……と言うか、前にも言った気がしなくもないけどあれでわからない原作一夏は異常。

まあ、かなりどうでもいいけど。あいついつか刺されるだろうという予想を含めて全部。

「まあ、そんなことより祭を見て回ろうぜ。適当なとこで俺は抜けるけど」

「抜けるんだ？」

「おう。いくら俺でも他人の恋路の邪魔はしねえよ」

「私は弾がいてくれても一向に構わないが？　誰になんと言われようが、私の想いは変わらないのでな」

「そうか？　まあ、なんにしろ抜けるけどな。現像しなきゃならない写真が大量にできたし」

「一組だ」

「毎度」

ののちゃんと弾は仲良さげに笑っている。仲がいいのはいいことだ。

「それじゃあ一週間以上たってから来てくれ。それまでに焼き増ししておくから」

「かたじけない、支部長殿」

「いいってことよ、粛清部隊副隊長」

「なにその物騒な呼び名！？　箒さんもなんで普通に受け入れてるの！？」

「まあまあ、ののちゃんたちにはののちゃん達の事情があるんだよ。よく知らないけど」

「知らないんですか？　本当に？」

「まあな。いいからまた回ろうぜ」

蘭ちゃんの手を取り、弾とののちゃんを呼んでまた歩き始める。
さてと。楽しまなくっちゃな。

ｓｉｄｅ　五反田　蘭

なんでなんでどうしてなんでなにがどうしてなんでなにがなにしてなになになのをなにしてなんのなになにでなにをなんでどうしてこうしてなにかなになにをなんだなにかなになになんのなに！？

『落ち着きなさい、見苦しいわよ私』
『そうそう、ちょっと一夏さんに手を繋いでもらって』
『ばかっ！意識したら私達まで……あうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう……』
『どどどどうしよどうしよ一夏さんと手なんか繋いじゃってああなんだか一夏さんの手って柔らかいような固いようなふにふになのにごつごつしてるようなああすべすべした指が私の手の甲をつつって……つつぅ……って……！』
『え……えへへへ……手……繋いじゃったぁ……♪』
『……なんというかここまですべすべだと、女としてすこしプライドが……』
『一夏さん一夏さん一夏さん一夏さん一夏さん一夏さん一夏さん一夏さん一夏さん一夏さん一夏さん一夏さんあぁぁあぁぁあぁぁんっ！！』

あああぁぁあぁぁああ頭が沸騰してしこうかいろがしょーとしてもうなんにもかんがえられないよぉぉぉっ！

「……あれ？　おーい。蘭ちゃーん？　頭から煙出てるぞー？」

あぁぁあぁぁぁぁ一夏さんの顔が近い近いちかいちかいちかいちかいちかいちかいちかいちかいちかいちかいぅあぅあぅあぅあぅあぅあぅあぅうううっ！！

結局頭の中身がショートした私は、ここで一夏さんに連れられて家に戻ることになってしまった。

……ああ、もう。

## 厄介事と、二学期開始？

ギンの時以来のまともなＩＳ戦闘は、ののちゃんを相手にする時がかなりきつくなったこと以外は変化なしに終了した。アカのワンオフ狡いって。俺が言える台詞じゃないことはわかってるけど。

「触れたら一撃必殺の剣を持ってんのに、なに言ってんのよ。そういうのはあたしやシャルロットみたいな特徴らしい特徴がないＩＳを使っている奴じゃないと言えないことよ」

「……シャルロットさんはともかく、鈴さんは十分特徴的だと思いますわよ？　主に衝撃砲の砲弾の一部を武器で削って軌道を曲げるという斬新な戦い方が」

「あんたも十分イカれた戦い方してるじゃない。二回曲げ撃ちってなによあれ。最早凄いを通り越して気持ち悪いわよ。いつかあんた一つの銃口から出たレーザーを縦に裂いた一本一本を独立させて相手にぶち込むとかいう鬼畜な真似するようになるんじゃないの？」

「落ち着けお前達。同類が同類を馬鹿にしたところで自分に帰ってくるだけだぞ」

「ラウラよ。お前が言える台詞ではないだろう。ＡＩＣで動きを強制的に止めて、一方的にプラズマブレードで切り刻むような真似をしたお前が。まあ、私も人のことをどうこう言える立場では無いが」

「……まあ、皆のＩＳは……と言うか、皆はかなりアレだもんね……普通って言えるのは僕達のだけかな？」

「そうかも……。あとは……訓練機くらい……」

その訓練機から見れば、シャルのＩＳもかんちゃんのＩＳも十分ハイスペックだけどな。

……まあ、なんでもいいけど。

「とりあえず、俺は寝るから」

「駄目よ。ちゃんと昼も食べなさい。作ってきてあるから」

そう言われて食堂まで連行される。確かに腹は減ってるけど、人間一食や二食抜いたところで死にはそこまで考えたところで鈴とののちゃんとシャルに睨まれた。怖い怖い。多分こういう鈴達には一生勝てないな。

「はい一夏。あーん」

「あー……ん」

……うん、美味い。鈴が俺の食べ物の好みをよく知ってるからか、鈴の弁当は実に美味い。いい母親になること請け合いだな。

「ありがと。どうせなら協力してくれない？」

「協力ってなんのさ！？」

「勿論お母さんになる手伝い、つまり子供を作る手伝いよ？」

「普通そんなことを公衆の面前で言う！？　恥じらいを持とうよ！」

「いいじゃない。普通なんて言葉に縛られて身動きがとれないなんてお断りよ……はい、あーん」

「そうだな。と言うことで一夏。私にも協力してくれ」

「箒まで何を言ってるのさ！？」

「それでは私も立候補させて貰おうか。私が勝ったら勝者特権で」

「ラウラ！？　だからなんでみんなそんなにオープンなの！？」

「わたくしは……」

「まさかセシリアまで子供を作る手伝いをしてほしいとか言うんじゃないよね！？」

「いえ、わたくしは首輪でも着けて愛玩動物として一夏様に所有し

ていただければ」
「一番アブノーマルな答えが返ってきちゃった!?　ここには僕の味方はいないの!?」
「大丈夫……」
「か……簪ぃ……僕は……僕はぁ……」
「……一夏は、私達も纏めて……皆を愛してくれる……から」
顔を真っ赤にするくらい恥ずかしいなら言わなければ良いのに。

「だって……言わなかったら、前には進めないから……」
「よく頑張ったわね、偉いわよ簪。はい、あーん」
「……はむ」

鈴はそんなかんちゃんにご褒美としてか弁当を食べさせていた。食堂の入り口付近で時々ちらりと見える水色の髪が、ぴくりと跳ねたのが見えた。出てくれば良いのに。

「ぅわあぁぁあぁぁんっ！簪の裏切り者ーっ！」

あら、シャルってば泣いちゃった。仕方無い、ここは鳩ぷちかに任せよう。

「ぅ……ひっく……」
「くるっくー」
「……ひっく……ひっく……慰めてくれるの……？」
「くるっくー」
「……ありがとう……ありがとう……っ」

シャルは感極まって鳩ぷちかに抱きつき、背中を頭を体を翼を撫で回している。

「シャルロットって意外とエロいわよね」
「鈴には言われたくないよっ！」
「くる？」
「あ、大丈夫だよ、うん……僕はまだ、頑張れるよ……」
……まあ、頑張れシャル。そんな頑張るシャルを応援してる。
応援だけだけど。
……さてと。それじゃあ俺は早めにアリーナに戻っておこうか。遅れたらまたふみふみされそうだし。あれって見た目に反して結構辛いんだよな。
アリーナで昼寝をしながら授業開始を待っていたら、気が付いた時にはなぜか狼ぷちかと一緒にののちゃんに膝枕されていた。
「……おはよ」
「おはよう一夏。授業の時間だ」
ああ、もうそんな時間か。寝足りないなぁ……。
まあ、今日の夜にでもぐっすり寝ればいいか。
……あれ、なんか凄く嫌な予感がする。具体的には俺の睡眠時間を削る画策をどこかでこっそり進めておいて、逃げ道を塞がれた上で実行されそうな気がする。

## 予感的中、キレていいよな？

九月四日の朝に、ＳＨＲと一限目のおよそ半分を使うらしい全校集会が開かれた。内容は今月中頃にある学園祭について。

……だけど俺は正直に言ってやりたくない。クラスの方より睡眠愛好会の方を優先したいと思っている。

ちなみに睡眠愛好会の出し物は休息場。携帯を弄ったりカメラなどで写真や映像を撮るのは不可だが、静かにしていればおよそのことが許される。

そこで俺は寝続けるのだ。学園祭の間、ずっと。

……って鈴に言ったら却下された。一応起きてクラスの方にも顔を出しとかないとマズいからと言われて。

そのため俺は学園内を歩き回ることになったんだが……こうなったら弾とカズと蘭ちゃんを呼んで学園の放送機材を乗っ取ってゲリラライブでもやってやろうか。

とりあえずチケットは俺と鈴のがあればカズと弾は呼べるから、後はののちゃんからでも……いや待てよ？　ののちゃんはもしかしたら束姉さんにチケットを送るかもしれないな。確認はしておこう。

そして駄目だったらセシリーかシャルかラルちゃんかかんちゃんから貰おうかね。

……ラルちゃん、まさか本国の部下に送ってたりしないよな？

～その頃のクラリッサ～

場所はドイツ。とある軍事訓練所で、十数人の十代女子と僅かな二十代女子が、ひとつのテーブルを囲んで座っていた。
そんな中、一人の女性が話を始めた。
彼女は黒ウサギ隊ことシュヴァルツェ・ハーゼの頼れる副隊長、クラリッサ・ハルフォーフ大尉。黒ウサギ隊のメンバーをこの場に集めた本人でもあった。

「お前達。こんな時間に呼び出したのは他でもない……この、隊長から送られてきたチケットで、誰が隊長の好敵手にして初恋の相手を見に行くかを決めるためだっ！！」

その言葉に一瞬誰もが沈黙し、すぐさま様々なところから声が上がる。

「副隊長！その役目は是非この私に！」
「いや、私に！私にお任せください！」
「なに言ってるの私が行くのよ！」
「副隊長！ここは隠密行動に長けた私が行くべきかと愚行いたします！」
「はっ！そんなの胸が小さかったから目立たなかっただけじゃない。あ～あ、胸が大きいと不便ねぇ」
「……あ゛？　いまなんつった？」
「一部の盛りが少ないと、隠密行動では便利ね、って言ったのよ。乳だけじゃなくって頭も貧しいのかしら？」
「……その乳……貰い受ける！」
「あんたにできるとは思えないわよつるぺたが！」
「微乳舐めるな垂れ乳予備軍が！」

わーわーぎゃーぎゃーわーわーぎゃーぎゃー。

ドズンッ！ゴッ！ゴッ！ガスッ！

～戻る～

……なんか、ドイツあたりで凄いことが起きてる気がするな。
それに、送ってる気がする。今日の昼休みにラルちゃんに直接確認しとこう。その時に全員に聞けばいいだろ。

全員駄目だったら……偽造するか。千の顔を持つ英雄で。
まあ、そんなことにはならないと思うけど。

……なんでもいいから早く集会終わらねえかなぁ……。

そこまで考えたところで、ざわざわざわざわと喧しかった女子連中が静かになった。
よしよし、これで立ったまま寝れるな。静かじゃなくてもいけるけど、できれば静かな方がいいし。

シスコン生徒会長の話を右から左に聞き流していると、凄まじく嫌な予感がしてきた。

……変わりすぎていたからあんまり気にしてなかったが、そういえばこの場で生徒会長は――

「名付けて、『各部対抗織斑一夏争奪戦』！」

……ああ、やっぱり。

……何故だか俺の隣のシャルが後ずさってるんだが、理由を知っているやつはいるか？　言わなくていいけど。

……バレなければ、チート能力を使っても問題ない。そうだよな？

side　篠ノ之　箒

私の頭の中は、現在進行形でパニック状態だ。パニックでも意外と考え事はできるものだな。考えているだけで実行しようとするとパニックになった体に邪魔されて動けないが。

ちなみに、今こうして冷静に考え事をしている私は私の極々一部だけであり、意識の大半は未だに暴走中であることを明記しておこう。

さて、私がなぜここまでパニックを起こしているかと言えば、今さっきに私達の前に出てきた簪を明るくして胸を増量し、眼鏡を取り払ったような生徒会長の言葉に起因する。

本人は実に楽しそうに話を続けているし、大半の生徒はその説明に意識を奪われていて気付いていないだろうが……私にはわかる。恐らく、近くに見える鈴と一夏の隣のシャルロット、そして一夏のことをよく知っているセシリアにラウラに、勿論千冬さんもだ。

簪は距離が離れているから気付いているかどうかはわからないが、恐らく気付いているだろう。

一夏が、しっかりと目を覚ましていることに。

……私は正直に言って、気付かないで済むのならば気付きたくはなかった。

だが、一夏との付き合いの中で生まれたこの感覚は、今の一夏の状態を逐一私に伝えてくる。

……つまり、今の一夏は、疑う余地の欠片も無く、疑うことが馬鹿馬鹿しく思えてくるほどにわかりやすく、千冬さんを馬鹿にされた時と同等かそれ以上に――キレていた。

『な、なななななななんとかならないの箒!?』

鈴から視線すら向けられずに無言で怒鳴られるが、どれだけ怒鳴られようがこればかりは。

『むむむむむ無茶を言うなぁっ！いくら私でも本気でキレた一夏を止められるわけが無いだろうが！なら鈴が止めてみるか!?』

『なななななななに不可能なことを言ってるのよ無理に決まってるじゃない！千冬さんでも止められないのにあたしが止められるわけ無いでしょうが!!』

『ならどうする私はまだ死にたくないぞ！それもこんな巻き添えのような形で死ぬなど真っ平ごめんだ！』

『あたしだって死にたくないわよでも助からないわねあ～あ。一夏の子供……欲しかったなぁ……孫の顔も見たかったわ……』

『それは私も同じだ！一夏の子ならいくらでも産んでやる！重婚は認めた相手だけなら可！』

……こうして鈴との会話をしているわけだが、この時間は一瞬にも満たない。つまりこれは一種の走馬灯のような物だ。

……ああ、もう少し生きて、一夏と結婚して幸せな家庭を皆で築いて子供を作って育てて一人立ちさせて伴侶をつれてきた子供を笑顔で送り出し一夏や鈴やシャルロットや簪やセシリアラウラ達と共に年を取って老衰で死んで行きたかった……。

## キレた、苛めた

ディープダイバーを使って地面に潜る。当然地上にはシルバーカーテンで作った幻影と、幻影を触られてもわからないように人形の人形を置いておく。女性型を置いていってしまったかもしれないが、気にしない。どうせ後で入れ替わるし。

潜った俺は武装な錬金のサテライト３０を使って六人に分身し、それぞれルリヲヘッド、エアリアルオペレーター、アーマーバロン（破壊男爵の元ネタ的な人）の鎧を装備。
そして両腕にピーキーガリバーを装着して、準備完了。今回は周りを巻き込むわけにはいかないからな。

ずるっ、と顔を隠した三体が地上に上がり、すぐさま生徒会長を捕まえる。
そして問答無用で地面に引きずり込み、それなりに深い地下にまで連れていく。
その途中で生徒会長はＩＳを展開したようだが、そもそもそこらのＩＳより俺は力が強いようだし、地下から破壊男爵で引っ張っているから逃げられない。素でヴィクター以上に力があるならまた話は変わるが。

ごちゃごちゃと煩い話は無視して、生徒会長にルリヲヘッドを装着。ちなみにこれは新しく作ったやつだから顔はバレてないはず。
それからルリヲヘッドの能力を応用して、生徒会長にとある幻覚を見せる。かんちゃんにひたすら『大嫌い』と言われる幻覚……ではない。そんなのやったらかんちゃんと生徒会長の仲が修復不能になるかもしれないから。

だから、前世であったとある漫画のキャラクターを使った拷問モドキを用意した。耐えられるやつは耐えられるらしいけど。

そのキャラクターの名前は『エクスカリバー』。ソウルイーターという漫画の中でも屈指のウザさと力を持つ、一人だけでもウザいあれ。

それが数千ほどいて、上を見ても下を見ても右を見ても左を見ても前を見ても後ろを見てもどこを見ても視界を埋め尽くすほどのエクスカリバーが常時話しかけてくる。ＢＧＭはエクスカリバー本人による『エクスキャリバ～～～～』という声の無限リピート。

当人は歌ったり踊ったり話しかけてきたり人の話を無視して話し続けたり理不尽な質問をしてきたり自分語りを始めたり紅茶を飲んだりパジャマに着替えたりいきなりアップになったりカメラから引いたりポーカーしたりと自由気ままに動いているだけなんだが。

……束姉さんとどこか似てるような気がしなくもない。束姉さんはあそこまでウザくは無いけど。

ｓｉｄｅ　更識　楯無

「私の武勇伝を聞きたいか」

「私の伝説は１２世紀から始まったのだ」

「エクスキャリバ～～～～～」

「まったく、人が話をしているときは相手の目を見たまえよ。礼儀を知らぬ奴だ」

「しかしここはどこだ。男前ばかりで場所がわからん」

「エクスキャリバ～～～～～」

「君はどこから来たのだね？　私はエクスカリバーだ。サインはや

らんぞ」
「バカめ。パジャマに着替えろ」
「朝は紅茶だ」
「エクスキャリバ～～～～」

……うざい……なによこのウザさは……。ここまでウザいものが存在していたなんて……。

「聞いているのか？　君はどこから来たのかと言っているのだ」
「私は、ＩＳ学え「この世界で最も偉大な伝説は何かを知っているかね？」」
「え、ちょ、自分から聞いておいて「そう、それは私の作り上げた伝説だ」」

あ……あはは……ど……どうしようかしら。お姉さん本気でキレちゃいそうよ？

「エクスキャリバ～～～～」

……ぷちっ♪

「……っだあぁぁぁぁ鬱陶しい！『ミステリアス・レイディ』！」

ＩＳを呼び出してすぐさま武装を展開。ラスティー・ネイルで周りの変なのを斬り飛ばそうと振るうが、それは当然のように避けられる。

「バカめ。その程度で食らう私ではないわ」
「バカめ」
「バカめ」

「バカめ」

む……むっかつくぅっ！

言葉に構わず水の鞭で蛇腹剣でランスで攻撃するけれど、どれも当たらない。

その間も周りからは

「エクスキャリバ～～～～～」

「バカめ」

「バカめ」

「エクスキャリバ～～～～～」

「バカめ」

「その程度で当たるものか。バカめ」

「エクスキャリバ～～～～～」

「エクスキャリバ～～～～～」

「エクスキャリバ～～～～～」

「エクスキャリバ～～～～～」

あああぁぁあぁぁぁああああうっっっとうしいいいいいいいいいっ！！

「ならば私は黙ろう」

「ただしＢＧＭは流したままでな」

ふつっ、と話し声が消え、エクスキャリバーの

「私はエクスキャリバーではなく、エクスカリバーだ。間違えるな」

「黙ってるんじゃなかったの？」

「エクスキャリバ～～～～～」

「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」
「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」

それっきりエクスカリバーは話さなくなり、私のことを囲んだままじっ……と私を見つめていた。

「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」
「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」
「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」

……だんだんと、時間の感覚が鈍くなってきた。

「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」
「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」
「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」

……どうやれば私はこの場所から出ることができるのだろうか。
聞いたところで、答えは帰ってこない。

「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」
「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」
「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」
「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」

聞こえるのは、エクスカリバーの声だけ。そのエクスカリバーは、ＢＧＭに合わせて近付いてきたり遠巻きにしたりくるりと回ったり……うっとうしい。

「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」
「エクスキャリバ〜〜〜〜〜」

「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」

いつの間にか私はＩＳを解除して、その場に踞っていた。

「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」

この声はそんな私に構うことなく、ずっと私の頭に響き続ける。

「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」

……。

「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」

「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」

……ああ、あたまが、まわらなく……なっ……て……

……

「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」

……えくす……きゃりば～……

「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～～」

「エクスキャリバ～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～」
「エクスキャリバ～～～～～」
……。

side　織斑　一夏

「……っていう夢を見たんだ」
「前にもあったわよねこんなこと」
「ああ、あったな」
「あったんだ？」
「ああ、あった」

確かその時は正夢になりかけたんだっけ。

「今回も正夢になったりしてね」
「まさか。いくら生徒会長でもそれは無いだろう」
……。

「ある方に中学生時代のブロマイド三枚」
「ある方に小学生時代のブロマイド五枚」
「ある方にプレミアブロマイド二枚です」
「ある方に二枚」
「ある方に四枚」
「ある方に……三枚」
「それじゃあ賭けにならないと思うぞ？　ある方にぷちかのウマウマ動画」

……って、結局賭けにならないな。

## キレた、苛めた（後書き）

※注意　まだ夏休みです。

## 実はまだ夏休み、でももうすぐ終わる

夏休み初めに一度戻って軽く掃除はしたが、本格的に掃除をするためにもう一度家に戻る。
まあ、その程度なら三時間もあれば終わるので、終わったあとはのんびり寝ることにする。
……訂正。終わった後も《・》のんびり寝ることにする。どうせ今日は暇だし時間はあるし、昼も無しで夜まで食べずに寝てよう。朝も抜いたけど、まあ、平気だろう。人間二～三食抜いたところで死にゃしないからな。

……すか～……。

……ポーン……。
……かー、……いの……？　……ちか……？

何か音が聞こえたのでふっと目を覚ますと、なぜか体が動かない。

「いっく～ん……むにゃむにゃ……」

原因がわかった。どうやったのか束姉さんが入ってきて俺を抱き締めていたからしい。しっかりと体を押さえ込まれていて、動ける気が欠片もしない。
どうやら外にはいつものメンバーが勢揃いしているようで、気配を感じてみるとなかなか騒がしい。

動けないので仕方無くぷちかを何体か呼び出して鍵を開けに行かせる。ぷちかは見た目以上に力があるから肩車を繰り返してぷちかタワーを作って鍵を開けるくらいの事は普通にできる。ちー姉さんが見た時は暴走しかけてたけど、まあ、平気なはず。

「あれ、ぷちかじゃない。……ってことは、一夏はやっぱり寝てるのね」

確かにさっきまで寝てたけど、今は起きてるぞ。動けないけど。

「寝ているのに上がって良いの？」

「ぷちかが出たから良いのよ。一夏が寝てることなんてよくあることだから」

「……いいのかなぁ……」

別に良いよ。

仕事を終わらせたぷちか達は、てててっと俺の部屋にまで走ってくる。階段はぴょんぴょん跳ねて走り抜け、玄関の鍵を開けた時のようにぷちかタワーを作って俺の部屋の扉を開ける。

そして束姉さんに抱き付かれた俺と同じ布団に潜り込み、ぷちたばねーさんとぷちーねえさんを呼んで一緒に布団に潜り込んでくる。

俺の部屋のベッドは結構どころじゃなく大きいので寝るのには問題ないが（なにしろ部屋の面積の三分の一をベッドが占領している）、それでもこうしていると少し狭いと思ってしまう。

……狭いところで一塊になって寝るのも好きだから別に良いけど。

ぷちーねえさんは布団に入るとおとなしくなるが、ぷちたばねーさんは布団に入るとむしろテンションが阿呆みたいに上がる。騒いだ

りはしないが、楽しみにしていた遠足を明日に控えた小学生のような状態だ。疲れてか俺達につられてかはわからないが、ほっとけば普通に寝るからまだ良いけど（実際は気絶していることも多い）。

ぷちかにつられて俺の部屋にやって来たいつものメンバーの内、初めて来たやつはベッドの大きさに驚愕している。

結構大人数（主にぷちか。ぷちたばねーさんとぷちーねえさんも最近は入ってくる。たまに束姉さんがどこかから入ってきたり、ちー姉さんが入ってきたりすることもある）で寝ることが多いから、このぐらいはないと困るんだよな。ぷちか布団っていう手もあるけど、それだけだと冬になると寒いし。

静かに静かに部屋の扉が開き、鈴とののちゃんとかんちゃんとラルちゃんとシャルとセシリーがトーテムポールみたいに首だけをドアの隙間から覗かせてこっちを見ている。

束姉さんの事を見てののちゃんと鈴以外は少し驚いていたけど、その二人だけは奇妙なほど冷静にこっちを覗き見している。

「……覗き見するくらいだったらさっさと入っちゃいなよ」

束姉さんがそう言って体を起こした。……って言うか、起きてたのか。ちょっとびっくり。

するりと音も立てずに六人が俺の部屋に入る。全員人間のカテゴリから一部とは言えはみ出して来てない？　別に良いけど。

「いっくんは寝てるから、静かにね」

「勿論」

鈴はそう言いながら懐から何か本のようなものを取り出し、束姉さんに手渡した。

「約束のブツよ」
「ふむふむ……」
しばらく束姉さんは黙っていたが、ページを捲る音がやみ、静かに本を閉じる音がした。
「ナイスシャッター」
「感謝の極み」
なんの話だ。と言うかノリ良いな。
「約束のとは……鈴。何を約束していたのだ？」
「高性能カメラを作ってもらうかわりに、撮った写真を焼き増しして博士に送るって約束よ」
「そんな約束をしていたのか。……ところで、その写真は貰えるか？」
「勿論よ。でも現像にちょっと時間がかかるから、アルバム式にして渡すのはまた今度ってことになるわ」
「構わんさ。なあ？」
どうやらかんちゃん達も喜んでいるようす。それが良かったのか悪かったのかはわからないが、俺的にはよかったということにしておこう。そう思わないとやってられない。
くきゅぅ～～。
……腹減ったな。朝と昼を食べてないだけなのに、何でここまで腹が減る？　ＩＳ学園で毎日三食しっかり食べてたからか？

「私はチョキを出そう」
「では私はグーを出すとするか」
「……私は……パー」
「私もパーにしますわ」
「じゃああたしは、チョキ以外を出したやつに衝撃砲を撃ち込むわ」
「なんでいきなりそんな危ないことを言うｎ」
「ではグーを出したものには、私が抱きついてから展開装甲を開いて攻性エネルギーを撃ち出す新技を見舞おうか」
「パーを出したものにはＡＩＣからのプラズマカノンを撃ち込んでやろう。なに、手刀の出力を変えればその程度の事は簡単にできる」
「チョキを出されたら困りますので、福音の砲撃からヒントを得た増幅レーザーを撃ち込んでやりますわ」
「……山嵐を舐めない方がいい」
「急にみんなが物騒なことを言い始めちゃったじゃないか！どうするんだよこれ！？　何を出しても地獄だよぉ！」

頑張れシャル《ツッコミ》。そんな苦労人なシャルを応援してる。
……なんだかご飯を作ってくれるみたいだし、俺は束姉さんを抱き締めながら寝ようかな。

……すか～……。

「おおぅ、束姉さんのお腹がそんなに気に入ったかい？　普通はおっぱいの方だと思うんだけどね？」

知らん。

## ご飯と遊びと、皆の泊まり

ご飯を食べているときに鈴に聞かれて、うっかり二食ほど抜いて寝ていたことを白状したら怒られた。頬をつままれてむにむにむにむにむにむにむにと揉みしだかれた。一人二分。最後の方はちょっと痛かった。

食事はずいぶん豪華で、しかも国際的だった。セシリーの料理からは特に何も感じなかったので、恐らく人間がそこそこ普通に食べられる物はできているんだろう。よかったよかった。

ただ、ラルちゃんの料理はずいぶん豪快で、明らかに料理の経験が薄そうだった。冷凍しといたブロック肉をサイコロ状にして塩と胡椒で適当に味をつけて完成。まあ、失敗はしづらそうで何より。

束姉さん？　束姉さんはちー姉さんより少しマシ（一言で言うと、まあ食える味）程度らしいので辞退したようだ。疑わしい。

ののちゃんは束姉さんに料理を習っていて、つい最近もアドバイスを貰っていた筈なのにそれはおかしいだろうと。

……まあ、多分ののちゃんの作った料理を食べたいだけなんだろうけど。美味しいからな。ののちゃんの料理は。

ちなみに、かんちゃんはデザート担当。原作に出てきたカップケーキ……かと思ったら、ふわっふわのシフォンケーキが出てきて驚いた。

ちなみにこのシフォンケーキのクリームには、生クリームではなく自作の豆乳クリームが使われているらしい。甘さ控えめカロリー控えめの自信作と、自負とかそういったことが控えめなかんちゃんからそんな言葉が出るとは思っても見なかったが、出たということは

自信があるんだろう。

……かんちゃんも変わったな。ずっと内側を向いていて、話に聞くお姉さんの影だけをずっと追いかけ続けていた始めの頃とは見違えるようだ。

口説いている訳じゃないが、やっぱりかんちゃんもののちゃんも鈴もラルちゃんもシャルもセシリーも束姉さんもちー姉さんも、笑い顔が一番きれいだと思う。

……ああ、怒れるちー姉さんの笑いは綺麗の内に入るぞ？

凄まじく怖いけど、綺麗なことには変わりない。

凄まじく怖いけど。

凄まじく怖いけど。

「三回も言ったのは、やっぱり怖いから？」

「怖いけど綺麗だから、虫除け？」

そう言ってみると、束姉さんに後ろから抱き締められた。なんでか俺は束姉さんの膝の上に座っている。

……なんでだ？

「だってその身長じゃあ机が高くて食べにくいでしょ？　私も役得だし」

本音が出たな。

『呼んだ～？』

呼んでない。ってかなんでのほほんが出てくるんだ？　シフォンケーキを食べたいのか？

『食べたい～すっごく食べたい～！』

少し残しておくことにした。

遅い昼御飯も終わり、現在はトランプでポーカーをやっている。
手札は五枚でチェンジは一回。場に二枚カードを出しておいて、その二枚と手札の五枚を好きに組み合わせて役を作るタイプのだ。
ただひとつ予想外なのは、

「エースとクイーンのフルハウス！」
「なっ……またフルハウスだと！？」
「これでもう四回目じゃない！いったいどうなってるのよ！？」
「むぅ……シャルロットめ……」
「……強い……」
「またシャルロットさんの一人勝ちですか……一夏さんはいかがですか？」
「キングとジャックのフルハウス。ちょっと届かない」
「惜しいねー」

シャルが剛運無双している。いろいろ変えたがいつもこんなのだ。

神経衰弱だと勘で鈴が無双。ババ抜きだと気配読みでののちゃん負け無し。ポーカーとかバカラだと今みたいにシャルが無双で大貧民だとセシリーが強い。
俺？　俺は長年カードを使ってきてるから、傷とか痛みかたでガン付けくらいはできる。しかもかんちゃんが徐々にカードの傷の付き方を覚えてきていて、だんだん勝率を伸ばしている。
ちなみにラルちゃんはなんでも中の上から上の下くらい勝っている

高水準な平均型。一芸特化のそれには負けるが、十分高い能力を持っている。

……普通に考えて、たかが遊びのトランプで使う能力じゃないよなこれ。

「遊びこそ全力でってあたしに教えてくれたのは一夏だったはずだけど？」

「そうだな。好きこそ物の上手なれ、だから楽しむために遊びだと思い、全力で、と言ったぞ」

「そんなこと言ってたんだ？　じゃあ僕ももっと頑張ろっと」

「私も本気でやろう。ヴォーダン・オージェを解放させてもらうぞ」

「どこまで本気さ！？」

「どこまでも、だ。シャルロット」

「……私も……頑張る！」

全力全開だな。

……それをキャッチコピーにしていた恐ろしい魔砲少女が居たような気がするが、名前を忘れてしまった。確か……な……な……ナッパ？

……違え。↑命令

「次はなにやる？　王様ゲームとかそっち方向のに手を出してみる？」

「何を言っているのだ鈴。そんなことが許されるはずが無いだろう……おっと、手が滑って1から8までの数字と王冠が書かれた籤を落としてしまった」

「それは大変！すぐにこの黒い紙で被われた壜に入れないと大変なことにっ！」

鈴とののちゃんと束姉さんが手早く準備を進めていくが、ラルちゃんとセシリーとシャルの三人はののちゃん達が何をしようとしているのかわかっていないようだ。かんちゃんは顔を真っ赤にしている。可愛い可愛い。

「えっと……更識さん？　先程から話に出ている【王様ゲーム】とは一体なんですの？」

「か……簪で、いい……。……王様ゲームは……その……」

かんちゃんは聞き耳をたてている三人にぽそぽそと囁く。聞こえちゃってるんだが、まあ、聞こえてないことにしておく。

「え……ええっ！？」

「そんなゲームが存在していましたの！？」

「ふむ。案外シャルロットなら一番初めに引かせれば毎回王様になれるのではないか？」

なるだろうな。シャルロットだし。運のゲームは馬鹿みたいに強いし。

全員同時に引くから関係ないけど。

「せーの、王様だーれっ！」

……あ、俺だ。

「じゃあ、命令。みんなで寝よう」

こうして俺達は、馬鹿みたいに大きなベッドを丸々2つ使って寝るのだった。

# 二学期開始、……の前日

二学期開始の前日。俺はいつも通りに明日の支度をしてから布団に入る。現在時刻は二時。

午前二時？　いいや、午後二時、つまり十四時だ。俺が夜中の二時まで起きてるとか、いったいどこのハルマゲドンの前兆だよ。鈴が慌てて騒いで槍が降る核の炎が降るどうしよう弾もしかしたら日本が、いや地球が、いや太陽系が崩壊の危機よ！とか弾に電話しそうだし。

ちなみに前に一度本当にこうして鈴が弾に相談したことがあった。原因はその日の俺が学校で一度も寝なかったから。

まあ、当時の俺は、鈴がマジ泣きしてるところなんて久し振りに見た。なんて暢気なことを言ってたんだが。

それはともかくとして、昼御飯を食べた俺はカーテンを閉めて電気を消して狼ぷちかと楽しそうに揉み合いながらころころ転がっているぷちーねえさんを拾い上げて抱き締める。拾ったときの顔は毎回『きょとん』としていて可愛い。ちー姉さんにもこんな時代があったのかね？

「……はぁはぁ……ちっちゃいちーちゃんもちっちゃいいっくんも可愛すぎるよっ！こうなったら束さん式遠隔転送でちっちゃいちーちゃんといっくんをここに呼び出してすりすりするしかないよね！」

「ぷちか。ＧＯ」

号令と共にぷちかが二十ほど出てきてぷちたばねーさんをあっという間に包み込んだ。

「はぅあー！ちっちゃいいっくん達にもみくちゃにされてるよぉ～！暴走しちゃうよぉ～っ！！」
「わぅわぅ！」
「にゃうにゃう！」
「はぅあー！！」

ぷしゅっ！という水音がして静かになった。ぷちたばねーさんの近くにいたぷちかは赤っぽくなっていた。見事に暴走したと言うわけですねわかります。

流石に布団を血で汚されるのは嫌なので、血まみれぷちか達を風呂に入れてから寝ることにした。犬属性ぷちか達は割と普通に入ってくれるが、猫属性ぷちか達はなかなか入ろうとしない。ミニシロまで使って逃げている。そこまで嫌か。

「にゃう！」

嫌だそうだ。こんなところまで猫っぽくしなくてもいいだろうに。

仕方がないから無理矢理捕まえて、逃げられないように首根っこをつまんで持ち上げる。汚れた猫属性ぷちかが二体だけでよかった。それより多かったら面倒だった。

「みゃー！」
「おとなしくしてればすぐ終わるから」
「みゃー！！」

……やれやれ。

ぷちか達を風呂に入れて、わしわしと洗う。浴槽はなくとも洗面器はあるからな。無かったら作ればいいだけだけど。

犬属性ぷちか三体は、俺が洗っている猫属性ぷちかではない方を抑えていてくれている。ありがとな。

そして今洗っている方の猫属性ぷちかは、

「にゃ、にゃぁ、ぁ～……」

全身くまなく洗われて、満身創痍になっていた。さっきまで気持ち良さそうに鳴いてたのにな。鈴が聞いてたら暴走しそうな感じで。

「はい次。黒猫ぷちか」

そう言うと、なぜか素直に洗面器の中に座り込んだ。

ちなみにさっきまで洗われてたのは白猫ぷちか。赤い斑点が凄まじく目立っていたからついしっかりと洗い尽くしてしまった。

黒猫ぷちかの方も、しっかりと洗ってやらないとな。

……もちろん、犬属性達も。

ｓｉｄｅ　ぷちか一号

ぷちか一号こと、柴犬ぷちか。今はごしゅじんさまに洗ってもらう順番待ちの途中だ。

黒猫ぷちかがごしゅじんさまの大きな手でわしわしとマッサージをされながら洗われていて、気持ち良さそうな鳴き声をあげている。
それを聞いて他のぷちか達もぞろぞろと並び、今ではほとんどのぷちか達がごしゅじんさまの前に並んでいる。

それを見たごしゅじんさまは、面倒臭そうなため息をついたあと、壁に六角形の穴を開けておれ達を呼んだ。

そこに入ってみると、そこは大きなお風呂だった。そして、ごしゅじんさまが三十人も居た。
三十人のごしゅじんさまは、わしゃわしゃとおれ達を洗ってくれた。頭を洗い、首から背中を洗い、腕を洗い、足を洗い、血がべったりついていたおれ達は前も洗ってもらった。ごしゅじんさまの手は温かかった。

全身くまなく洗ってもらったおれ達は、今は大きいのに浅い風呂に浸かってだらけている。最後のぷちかを洗い終わったごしゅじんさまは、そんなおれ達を見てぽつりと

「ちー姉さんが見たらお湯が真っ赤に染まりそうな光景だ」

とだけ呟いて、それから始めの方に入っていたぷちかを優先してお湯から引き上げて体を拭いて、ベッドに運んでいた。

運ばれたおれ達は、先にベッドに入っていたぷちーねえさんやぷちたばねーさんを抱き締めて布団にくるまる。
何体も何体も運ばれてきて、ベッドに乗らなくなったらどこからともなく出てきた新しいベッドを連結してそこに寝る。

……わぅ……おやすみ……。

# 超外伝、未来図？　狂乱編

織斑百秋、十歳（大嘘）です。シロにもそう登録されてるけど。

とりあえず意識せずに原作の世界に来てしまった俺は、現在はこっちの世界のちー姉さんと織斑一夏と一緒に食事中だったりする。

なんだか周りが色々騒がしかったりするけれど、俺は全く気にしない。

……そうそう。ののちゃんがＩＳを貰っていなくて、かつシャルとラルちゃんがいることから二巻と三巻の間の空白期だと予想される。

中々面倒な時期に飛んだもんだな。

「そういやさ。お前って結局俺と誰の子供なんだ？」

一夏によるいきなりの爆弾発言。これによって周りにいた一夏のことが好きな皆が聞き耳をたて始めた。耳がダンボのように大きくなっているように見えるのは、きっと気のせいだと思う。

だが俺は素直には答えない。にっこりと笑いながらこう切り返す。

「当ててみて？」

すると一夏は悩み始める。そしてそれと同時に、一夏のことが好きなこっちののののちゃん、鈴、セシリー、シャル、ラルちゃんが一夏を睨み始めた。なんだか一番最初に出された名前が本命だとか考えているような気がするけど……相手は鈍感選手権世界記録保持者の一夏だよ？　髪の色とか目の色とかで考えるに決まってるじゃん。

「……ん～……？　髪真っ黒だし日本人っぽいし」

ほらね。

ちなみにののちゃんは今の一瞬で笑顔を浮かべ、凍り付き、殺気を放っている。

とりあえずこっちの一夏を殺させないように、一夏の膝の上に座ってみる。

「違うよ？」

なんだかののちゃんの殺気がこっちにも向いた気がする。怖い怖い。

さてと。それじゃあこっちからも爆弾落とし返すか。

「母さんの子供は女の子だけだから」

「ちょっと待て！？」

なんでか叫ばれた。なんでだろうな？

「母さんの子供はって……じゃあお前は！？」

「母さんは母さんで、おかーさんはおかーさんで、シャルママはシャルママで、ラルママはラルママで、鈴母さんは鈴母さんで、セシリーママはセシリーママだよ？」

「なにその状況！？　俺未来でいったいなにやっ」

ゴズンッ！

「――一夏。少し話があるのだが」

「あたしもね。どういうことかしら……？」

「もちろんわたくしもお忘れなく……おほほほほ……」
「へぇ？　一夏って重婚なんてしちゃうんだ？　僕、びっくりだな」
「お前は私の嫁だろう。何を勝手にそんなことをしているのだ」
「まだなにもしてねえよ！なあ、百秋からもなんか言ってやってくれ！」
なにか……なにか……。
「パパって夜のお布団の上だとおかーさん達よりずっと凄いのに、やっぱりお昼は」
「うぉおぉぉい！？　未来の俺はなにやってんだ！？　見られてるぞおいぃぃぃぃ！？」
反応楽しっ。
そう思っていたら、いつの間にかちー姉さんの膝の上に移動していて、一夏が五人に連れていかれているのを見ることになった。頑張って生き残ってね？
「……それで、お前を産んだのは誰だ？　ん？」
俺はそれに答えずに、ちー姉さんに背中を預けたまま眠りについた。
全員の居る前で言った方が面白そうだし、あと普通に眠いし。
……ふぁ……。
起きたら既に時間は昼だった。場所は……多分、寮長室。
備え付けのベッドは他の部屋と同じように柔らかく、体が布団に沈

み込む。

……ちなみに、俺としてはもう少し固めの方が好み。そして枕は抱き枕推奨。

別にいいけどね。寝れるし。

……さてと。もう一眠りするかね。昼食ってないけど平気だろ。多分。

ちなみに俺の無駄特技として、寝ながらご飯を食べる（受動）というものがある。

簡単に言うと、鈴や弾にご飯を食べさせてもらいながら寝れると言う特技。自分からは動かないから、無駄特技。

とはいえ、割と使われる頻度の高い無駄特技だったことは認めるが。

そうして無駄なことを思い出しつつ二度寝の体勢に入ると同時に、寮長室（仮）の扉が開いてちー姉さんが入ってきた。

「百秋。起きているか？」

「……ん～……まだ寝る……」

「昼を食べてからにしろ。一夏達も待っているようなのでな」

……仕方無いなぁ。

そう思いつつ、俺はゆっくりと起き上がる。……やっぱりもうちょっと寝ていたい。

いつの間にか装着されていた狼耳をぴこぴこと動かし、ぎゅぅ～っと体を伸ばしてからぷるぷると頭を振る。

それから顔を上げると、なんでかちー姉さんが、よく鈴や弾がしてる目と同じ目をしていた。言葉で言うと、「ああ、こいつ可愛いな

ぁ……」という目。

それから手を繋いで食堂まで一緒に歩く。数人の女生徒がちー姉さんの子供かと噂してアイアンクローを食らって撃沈したり、お菓子をくれたりした以外は普通だった。

「それで、結局百秋は誰の子供なんだ？」

「パパのだよ？」

わざと惚けて当たり前の事を言ってみる。

「いやだから……百秋を産んだのはだれかって聞いてるんだけど」

直接的に聞いてきたか。まあ、これで爆弾を落とす準備はできたかな？

「おかーさんの事が知りたいの？　パパだって知ってると思うんだけどなぁ？」

「じゃあヒント！ヒントをくれ！」

……ヒント……ヒントねぇ……。

……わかりやすくていいか。

「ヒント1。料理は上手じゃないよ」

ここでシャルとののちゃんと鈴が脱落。一夏に憎々しげな表情を向けている。

ちなみにちー姉さんはそんな状態を見てにやにやしている。

「ヒント2。おかーさん達の中ではかなり強いよ」

ここで視線はラルちゃんに向く。ラルちゃんは勝ち誇った顔をしている。

「ヒント3。ここにいないたっちゃんやかんちゃん達とは違うよ」

「おいぃぃぃぃぃ!?　俺何人と付き合ってんだよぉぉ!?」

「……いち、にぃ、さん、しぃ、ごぉ、ろく、なな、はち、きゅう……いっぱい？」

「いぃぃちかぁあぁぁああっ!!そこに直れぇえぇえっ!!」

こっちの世界ののちゃんは怒りっぽいなぁ。そんなことをしてて好きだと気付いて欲しいって言うのは虫がよすぎないか？

……俺には関係ないし、別にいいけど。

……うん。ここのチャーハンは美味しいね。薄味で、寝惚けた舌にはちょうどいいよ。俺は大抵寝惚けてるけど。

「……結局、誰かは言わないのか？」

ちー姉さんがそんなことを言うけれど、ののちゃん達の暴走が酷くて言えないだけなんだよね。

「……聞きたい？」

「ああ。教えてくれるのか？」

「いいよ？」

にやにやと笑っているちー姉さんの耳元に口を寄せる。なんだかすぐ近くでＩＳを使っていれば聞き取れそうだけど、その辺りはあえて無視して言ってみる。

「俺のおかーさんの名前はね――」
「ああ。なんだ？」
「――織斑千冬って言うんだよ。おかーさん」
すると、すぐ近くでＩＳを使っていた数人と、ちー姉さんがまるで石化したかのように固まった。
……さてと。ご飯の残りを食べちゃおうかね。
数人が固まっているのに気付き、不思議そうにしているののちゃんと一夏以外の専用機持ちは、全員がちー姉さんのことを凝視している。
「……な……なぁ……何があったんだ？」
一夏の能天気なその言葉が静かなこの場に響いた後、
「……な……」
「な……なな……」
「……な……」
ここで俺は耳を塞ぐ。やばいことになりそうだし。
「なにいぃいいいぃいぃっ！！？」

俺が耳を塞ぐと同時に、辺りに絶叫が響き渡った。

……ほら、やばかった。耳を塞ぎ損ねた一夏とののちゃんなんて悶絶してるし。

大変だね。

## 二学期開始、まず整備から

新学期が始まって、俺は久し振りにシロの調整をしていた。
久し振りの模擬戦が終わった辺りで少しのズレに気が付いて、かんちゃんと一緒に整備と調整を繰り返している。

「あ、更識さん。……ここで織斑君と一緒にいるところを見るのは久し振りじゃない？」
「は、はい……夏休みのあいだは……来てませんでしたから……」

そう言って話しかけてきたのは二年生にして新聞部の改竄パパラッチこと繭染桜子さん。名前はきっと違う。
かんちゃんはＩＳを完成させるときにこの人の力を借りて、それから交遊を続けているらしい。

ちなみに俺とも一応顔見知りではあるが、俺はあまりこの人のことは好きではない。
理由は、取材取材と騒いで睡眠時間を削ろうとしてくる上に、改竄率が凄まじいから。ＩＳ学園でハーレム作るのが夢だなんて言ってないっての。
そんな記事をあげてくれやがったので、俺は鈴とののちゃんに「めっ！」って感じで叱られてしまった。

仕返しに新聞部に突撃してこの人の頭をそこそこ本気で潰れない程度にかつ逃げられない程度にアイアンクローで締め上げたことがある。泡噴いてたけど人間ってのはかなり頑丈だから大丈夫なはず。

「……いや、あれは痛かったよ？　具体的に言うと、あの記事をあ

げた直後にやってきた織斑先生にやられた時とおんなじくらい」

ああ、織斑君は織斑先生の弟なんだなーって思った、などと言っているが、原因は向こうなので謝らない。悪いともあんまり思ってない。

酷いかもしれないけど、これもまた一つの戦争なのよね。

「ところで織斑君？　織斑君は更識ちゃんのことはどう思ってるの？」

「ポケットの中のボイスレコーダーとカセットと俺の後ろで別の物を撮っているふりをしながら声を録音しようとしている誰かさんを何とかして言葉を改竄または捏造もしくはそれに連なることをしないんだったら答えてあげないこともないですけど？」

実はなにも無しで答えを返しても一向に構わないんだが、一応言っておく。

「……何でわかるの織斑君？　織斑君ってもしかしてエスパー？」

「まさか。やりそうなことを列挙して気配を読んでみたら集音マイクがこっちに向いたまま別方向をそしらぬ顔で撮っている誰かさんがいるのがわかったから、カマかけてみただけ」

まさか本当に当たるとは、ちょっとしか思ってなかったよ。

「ちなみにかんちゃんの事は好きだよ？　友愛って意味だったら愛してるって言ってもいいくらいには」

なんでか、五月蝿いはずの整備室の音が完全に消え去った。ガシャガシャと五月蝿かった機械の音から話し声まで、一切合切が消えて

しまった。

「あ……え……？　織斑……くん……？　あい、してる……？　愛……して……」

かんちゃんが顔を真っ赤にして煙を出してしまった。いったい何があったんだ？

今の言葉を聞いたくらいでこんなんなるって言うのは無いだろうし、熱も無かったはずなんだけど。

「え……いいの？　まだ切ってないんだよ？」

「改竄したり捏造したり煽りの材料にしたりしなければ別にいい」

したらアイアンクローからの振り回し→叩き付け→投げる→空中コンボ→フィニッシュ→追い打ち→とどめまでのフルコースを食らわせる予定。おかわりは自由だから足りなかったらいくらでも持ってけ。

「それは遠慮したいかな～……あはははは……」

特に意味はないけれど、怒れるちーねえさん笑いと呼ばれた愛想笑いを浮かべてみた。そしたら泣かれた。なんでかね？

「織斑くん？　……すっごい怖いよ……？」

「ああ、やっぱり」

だよな。まあ、怒ったちー姉さんは怖いよな。いろんな意味で。いや、一番怖いのは無邪気に殺意を向ける束姉さんか、炎のような憎悪と氷の殺意と機械のような繊細な技術を使うちー姉さん……あれ、ちー姉さんだ。

……とにかく、ちー姉さんは怒ると怖いし容赦がなくなる、と。

結論が出たところで、俺は寝ようかね。かんちゃんはまだ真っ赤だけど、しばらくすれば戻ってくるだろ。

かんちゃんの膝を借りて、俺は久し振りに整備室で眠る。実は五月蝿かろうが起きないことはできるんだが、やっぱり静かな方がいい。

……すか～……。

ｓｉｄｅ　更識　簪

織斑君がいきなり私のことを愛してるって言って、なんにも考えられなくなって、頭が真っ白になって、膝の上の織斑君の頭を撫でて、私の口から言葉にならない声の羅列が溢れて、お姉ちゃんに助けを求めて、もぞもぞと動く織斑君が動きを止めるまで待って、先輩がにやにやと笑ってて、携帯で織斑君の写真を撮って、打鉄弐式を腕だけ展開して黛先輩にでこぴんをして、あうあうとわからない言葉を発して、顔が真っ赤になってることを自覚して、頬を片手でおさえて、メールで本部長に写真を送って、打鉄弐式を戻して、織斑君の頭を撫でて、シロに目をやって、コンソールを叩いてロックオン・システムを作って、織斑君のほっぺをぷにぷにして、指を舐められて、その指を織斑君の口から抜き取って、織斑君の唾液をぺろりと舐めて、何をしたかに気付いてせっかく冷めていた頭がまた沸騰して……とりあえず私は気絶することにした。

……きゅう。

## 全校集会、これ夢で見たな

「やあみんな。おはよう」

そんな声がスピーカー越しに響いて、なんだか凄まじく嫌な予感がする声が俺の鼓膜を震わせる。

壇上で挨拶をしている生徒会長の挨拶のはずだが……やっぱりやられるのかね？　俺は一応部活に入ってるんだけど。

……愛好会は部活にカウントされないとか？　だとすると少し困るな。俺の睡眠時間が減るし。

まあ、原作的に考えると外せない出来事だろうし、一応顔見知りではないにしろ会ったことはある訳だし、予想通りの事になったとしてもキレすぎないようにしないとな。

努力はするが、確定ではない。キレる時はキレるだろうし、怒るときは怒るだろう。頑張れ俺の理性。そこそこ期待してる。そこそこ止まりだが。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

……なんだかあんまりよろしくしたくない感じの、悪戯好きで嗜虐心満載の猫のような声だな。あんまりよろしくしたくない。よろしくしたくない。よろしくしたくない。よろしくしたくない。よろしｋ

「一夏。何回言ってるのさ？」

「重要なことだから、つい」

「……つい、って……」

シャルに突っ込まれている間も……名前なんだっけ？　……猫座の生徒会長でいいか。面倒だし。……猫座の生徒会長の話は続く。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは――名付けて、『各部対抗織斑一夏争奪戦』！」

……夢で予想してたのより、ムカつくな。自分の事が勝手に決められるのも、睡眠時間が減らされるのも……。

シャルが隣で俺の事を驚愕の眼差しで見つめている。どうやら夢の話が本当に起こったから驚いているらしい。

……それにしても、ほんっとにムカつくな。多分エクスカリバーでもここまでムカつかない。あいつは話をするだけで、叩き起こしたり睡眠時間を削ってきたりはしないだろうから。

「……い……一夏、落ち着いて？　ね？」

シャルがだらだらと冷や汗を流しながら俺を見上げて小声で説得しようとしている。どうやら俺がこの後に夢の中と同じような事をしないかと思っているらしいが、まあ、関係ないな。

あと、流石に人前であれは無い。やらないから安心してくれていい。

そう思いながら顔を上げて猫座の生徒会長を見やると、笑顔と一緒にウインクを返されたので、こちらからは百万ドルの笑顔（ちー姉さんレートでは価値億倍らしい）を返す。

なぜか、俺の半径二メートル以内から人がいなくなった。
なんでだろうねぇ？

……とりあえず、後で怒られるのを覚悟してから猫座の生徒会長を苛めよう。逃げられそうになったらシロの三つめの特殊装備を使えば逃げられないはずだし。
ＩＳ？　使われたときにシロを使う予定だから、まあ、平気じゃない？

……さぁてと。行くか。

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

Ｂｅｌｌ&ａｍｐ;Ｂｕｌｌｅｔの、悔しいけど一夏のために物理法則を越えられない方、鈴よ。ちなみにＢｕｌｌｅｔは弾ね。わかってると思うけど。
こうして妙な自己紹介をしているのにはわけがあるのだけど、今は省かせてもらうわね。

あたし達は今、全校集会で生徒会長の話を聞いているんだけど……一夏ってエスパーだったりするのかしら？　なんでここまで正確にわかるのかしらね。
一夏の夢では、この後一夏がキレて生徒会長を地面に沈み込ませて発狂するまでエクスキャリバ～～～～を聞かせるはずなんだけど……流石にやらないわよね？
例えばラウラやシャルロットの時みたいに、どこかしら変わるはずよね？　ね？

『……変わるといいがな』
『……そんな絶望的に確率の低い奇跡に期待する兵士みたいな口調はやめてよ。こっちに移るじゃない』
確かに絶望的だけど。
……千冬さんがいなければ、ここから逃げるとかサボるとか、そんな選択肢も取れたのに……。
……ああ、まだ死にたくなかったなぁ……。
『……ISを使って逃げるわけにはいかないか？』
『あの千冬さんから逃げられるって本気で思ってるんだったら、試してみたら？　無理だと思うけど』
だって千冬さんって、大魔王より大魔王でしょ？　大魔王からも逃げられないのに、千冬さんから逃げられるわけが無いじゃない。
……どうしよ……。
『……私は気合いで貧血に似た症状を起こして保健室に行くが、どうする？』
ず、狡い！そんなことができるなんてっ！！
『鈴も愛らしすぎる一夏を想像すればよかろう』
それだっ！！
すぐさま可愛い一夏を想像する。いつもは我慢するところを我慢しないでいると、すぐに鼻から愛情が溢れて……

って、駄目じゃない。私に一夏への愛がある限り、愛情が溢れて貧血になるわけがないわ。

「ちょっ！？　凰さん！？　すごい量の血が出てるんだけど！？」

「ほ、保健室っ！救護室っ！！衛生兵ーっ！！！」

……あら、意外と抜けられたわね。

……じゃあ、シャルロットとラウラとセシリアは……頑張って生き残ってね？

## 夢とは違う、この現実（前書き）

一夏が拍子抜けするほど優しいです。

## 夢とは違う、この現実

周りから人がいなくなったせいで目立ってしまっているが、そのくらいならなんとでもなる。
シルバーカーテンを使って姿を消し、それからすぐに猫座の生徒会長の後ろに回り込む。
いきなり俺が消えたせいでざわざわとしているクラスメイト達をスルーして、猫座の生徒会長の後ろでシルバーカーテンを解除する。
そして、猫座の生徒会長の肩を、あくまでも優しく叩く。

「え？」
「……」

にっこり、と笑いかけると、冷や汗を滝のように垂れ流しながらも笑顔を返してくれる。少しは手加減してやるか。あくまで少し。
まあ、元々本気で殺す気は欠片も無いわけだけど。

にっこりと笑いながら猫座の生徒会長の頭に右手を置いて、一言。

「なにか言い残すことは？」
「……えへ☆」

冷や汗を流しながらとは思えない、悪戯っぽい笑顔を頂きました。

ギュヂィィィッ！！

ｓｉｄｅ　ラウラ・ボーデヴィッヒ

その音が聞こえると同時に、私は自分の頭に鈍痛を覚えた。今、一夏が生徒会長の頭を使って奏でているこの音は、少し前に教官にされた仕置きの時に頭の内部で響いた音と瓜二つだったからだ。

まるで、鳴いている蝉を踏み潰したときの断末魔や、首をへし折られて死んだ瞬間の豚の鳴き声を思わせるその音は、教官によく似た笑顔を浮かべる一夏と、生徒会長の口から溢れ出る悲鳴が混じるおかげでさらに恐ろしい。

明らかに致命的な音を立てていると言うのに、一夏は欠片も容赦する気はないらしく、全く手の力を緩めていないようだ。

生徒会長の口から溢れていた悲鳴も、今では悲鳴と言うよりも呻き声と言うべきものに変わってしまっている。

じたばたと暴れさせていた手足もだらりと垂れ下がり、時折痙攣するように跳ねる以外に動いている様子は無い。

「……そう言えば、昔から言ってみたかった言葉がある」

生徒会長の胸元についていたと思われるピンマイクを通して、一夏の声がホール中に響いた。

一夏はいまだに笑顔を浮かべたままだったが、その手にはすでに相当の力が込められているらしく、見えている手首から先には血管が浮き上がっているのが視認できる。

「……『私の握力は、５３万です』」

それはどう贔屓目に見ても、人間の握力ではない。

と言うか、もはやそれは地球上の生命体が上空からの自由落下以外の方法で出していい威力ではない。

「ただし単位は普通にグラム」

隣で、なんだグラムかー、びっくりしたー。等と言う言葉が囁かれているが、よく考えろ。

５３万グラムだぞ？　５３００００グラムだぞ？　キログラムに直しても５３０キログラムだぞ？　十分人間の出せる握力ではない。

……まあ、冗談なのだろうがな。

「……一夏だったらありえる気がするのは僕だけかなぁ？」

「シャルロット。頼むからそんな恐ろしい予想をたてるのはやめてくれ。洒落になっていない」

言われて見れば、ありえる話だ。一夏だしな。

「……一夏だもんねぇ……」

「……一夏様ですからね……」

「……一夏だからな……」

私達は視線を合わせ、溜め息をついた。

ｓｉｄｅ　織斑　一夏

しばらくギリギリギリギシギシギチギチギチギヂギヂギヂギヂと猫座の生徒会長の頭を掴んでいると、ちー姉さんに怒られた。
確かに猫座の生徒会長はなんかヤバイ感じに痙攣してはいたが、もう少しやっても大丈夫だと思ったんだけど。
人間ってのは意外と頑丈にできてるからな。

けれど怒られちゃったものは仕方ないから、猫座の生徒会長の頭から多少めり込んでいる指をはがす。

「やりすぎだ、馬鹿者」
「許可も取らずに勝手なことを言いたい放題いってくれやがりましたので、つい。後悔はしていませんが反省はしています。闇討ちすればよかっ」

出席簿でひっぱたかれた。枕ガードを発動したらその隙に頭を捕まれた。

「……ちー姉さんの握力って、いくつ？」
「織斑先生、だ。……それと、私の握力は精々２５０キログラムに届くか届かないか、と言ったところだ」

十分化物の域ですねわかります。

そう思うと同時に、ちー姉さんの握力が一気に強くなってきた。気で強化なんてしないで甘んじて受けることにした。
元々、大して痛くもないし。

後で鈴やラルちゃん達にその事を言ってみたら、凄まじく驚かれた。
そう言えばこの二人はちー姉さんの握撃を受けたことがあったな。
半死半生になってたり、モザイクなしで公共の電波にのせたらアウ

トになりそうなほどダメージ食らってたけど。

……よく平気だったよな。色々と。

「一応生徒が相手だからな。加減した」

十分アウトです。ちー姉さん。

## クラスの出し物、サボろうか

色々あった全校集会の放課後。クラスの出し物を決めるための話し合いの時間を設けられたわけなんだが――

『織斑一夏のホストクラブ』
『織斑一夏とツイスター』
『織斑一夏とポッキー遊び』
『織斑一夏と王様ゲーム』

……。

「セシリー。俺はもしかしてまたアイアンクローを望まれてるのか？」
「わたくしにですかっ！？　でしたら喜んでお受けいたしますわっ！」
「違う違う。わざわざ俺の睡眠時間を減らそうとしたらどうなるかを簡単に教えてあげたのに、まだこんな馬鹿なことを考える人は、もしかして今度こそ頭を握り潰されたいのかね？　ってこと」

そう聞いてみると、セシリーはあからさまにかつ心底残念そうな顔を浮かべてから言う。

「恐らくですが、そういったことは考えていないのではありませんか？　わたくし達はそんなことは恐ろしくてとてもできそうにありませんが、知らなければ魅力的に見えるのでしょう」

あっそう。まあ、仕返しはするけど。

シルバーカーテンを使い、消える。するとさっきの案を出した数人が慌てて自分の後ろをきょろきょろと見回す。始めに自分のところにくるんじゃないかと思って俺を探しているようだ。

……はっはっは、そんな誰か一人だけを狙うわけがないのにな。

とりあえず、でこぴん一発で許してあげることにした。経験者（鈴）曰く、首から上が吹き飛んだんじゃないかって思ったのはあれが初めて、と言われる程度には痛いらしいが、たいしたことはないはず。

ぱっ、ととある一人の目の前で透明化を解除し、にっこりと笑いながら手を振ってみる。なぜかひきつった笑顔を返された。

……つい最近に似たような顔を見たな。具体的にはあの猫座の生徒会長の頭に手を置いたときに、猫座の生徒会長が浮かべた笑顔がこんなんだったはず。

「……もしかして私……頭ぷちっ☆てやられたり……？」

「しないしない。でこぴんするだけだから」

まあ、そのでこぴんは効果音をつけると『キュボッ！』とか『ドズムッ！』とか、そんな音になるようなでこぴんだけど。

とりあえず加減をして優しくでこぴん。教室中に響くような音をたてて額に直撃したでこぴんに、そいつは悶絶する。

「……あ〝……あ〝あ〝……い……ったぁ……」

「はーいそれじゃあまともな案を出してねー」

また変なのが出たらでこぴん百列拳（拳じゃないけど）を食らわせ

てやる。

結局原作と同じようにメイドやら執事やらが接待する『ご奉仕喫茶』になった。

やっぱりこの世界にも原作の修正力ってのがあったりするのかね？

ちなみに俺は執事だが、途中で抜ける。睡眠愛好会のほうの出し物も決めなくっちゃいけないし。

……さてと。楽しい楽しい学園祭のために、少しだけ働くとしようか。

……面倒臭いけど。

ｓｉｄｅ　凰　鈴音

真っ暗な部屋の中で、私達は円形のテーブルに輪になって座っている。全員が真剣な顔をしていて、ピリピリとした空気が伝わってくる。

「……それではこれより、ＩＩＩの月例会及び、睡眠愛好会の学園祭の出し物についての会議を始めるわ」

「それではまず、参加している人達のクラスの出し物の詳細を要求します」

「許可するわ。あたし達二組は中華喫茶の予定よ。シフトの時間は午前の１０時から１１時半まで。それ以降は空いてるわ」

「一組はご奉仕喫茶ということで、一夏様やわたくし達が使用人に扮して接待をする喫茶店ですわ。一夏様はずっといれっぱなしになっていますが、十中八九途中で抜け出すでしょう」

「そうでしょうね。一夏はそうやって働くのはあまり好きじゃないもの」

うんうん、とあたし達は頷きあい、それからまた話し合いを始める。

「最近一夏の食事量が増えてきているわ。昔の一日二食が当然だった頃に比べれば、かなり健康的ね」

「だが、一夏の肥満は大丈夫なのだろうか？　もしそんなことになったら私は泣くぞ？　そして脂肪を燃焼させるぞ？」

「その件は、昔に一夏から直接解決策が出ているわ。……一夏って、ある一定以上は太らないんですって」

正直、凄く羨ましい。いくら食べても太らないとか、世界中の女が羨むことよね。

一夏が女だったら、きっとあたしは嫉妬で一夏の乳を揉みしだいてたと思うわ。千冬さんの弟だし、妹だったらかなり大きそうだしね。

ちょっと想像してみる。女になった一夏……

いつものように寝ていて、とても可愛いけど怒ると怖い一夏（女）。身長の伸び縮みはデフォルトで、弾に優しく撫でられている一夏。弾に恋をして、相談に来ている一夏。腕に挟まれて強調された乳を、あたしがからかいと嫉妬を込めて揉んでいる。

『あんっ！や、鈴っ、ダメぇっ！』

ズゴギンッ！！

ド派手な音を立ててあたしの頭がテーブルを頭の形に叩き割り、額

から少し血が出てしまった。

「り、鈴っ！？」

「……気にしないで。ちょっと頭を冷やしただけだから」

……やばいやばい。あたしにそっちのケは無いっての。

確かに可愛いとは思ったけどさぁ……。

……もしかして、弾も似たような感じなのかしら？

だとしたら、弾も大変ね。

……なんの話だったかしら？　確か、文化祭の話だったと思うけど

……？

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2808u/

IS～ほんとはただ寝たいだけ～

2011年10月9日23時59分発行